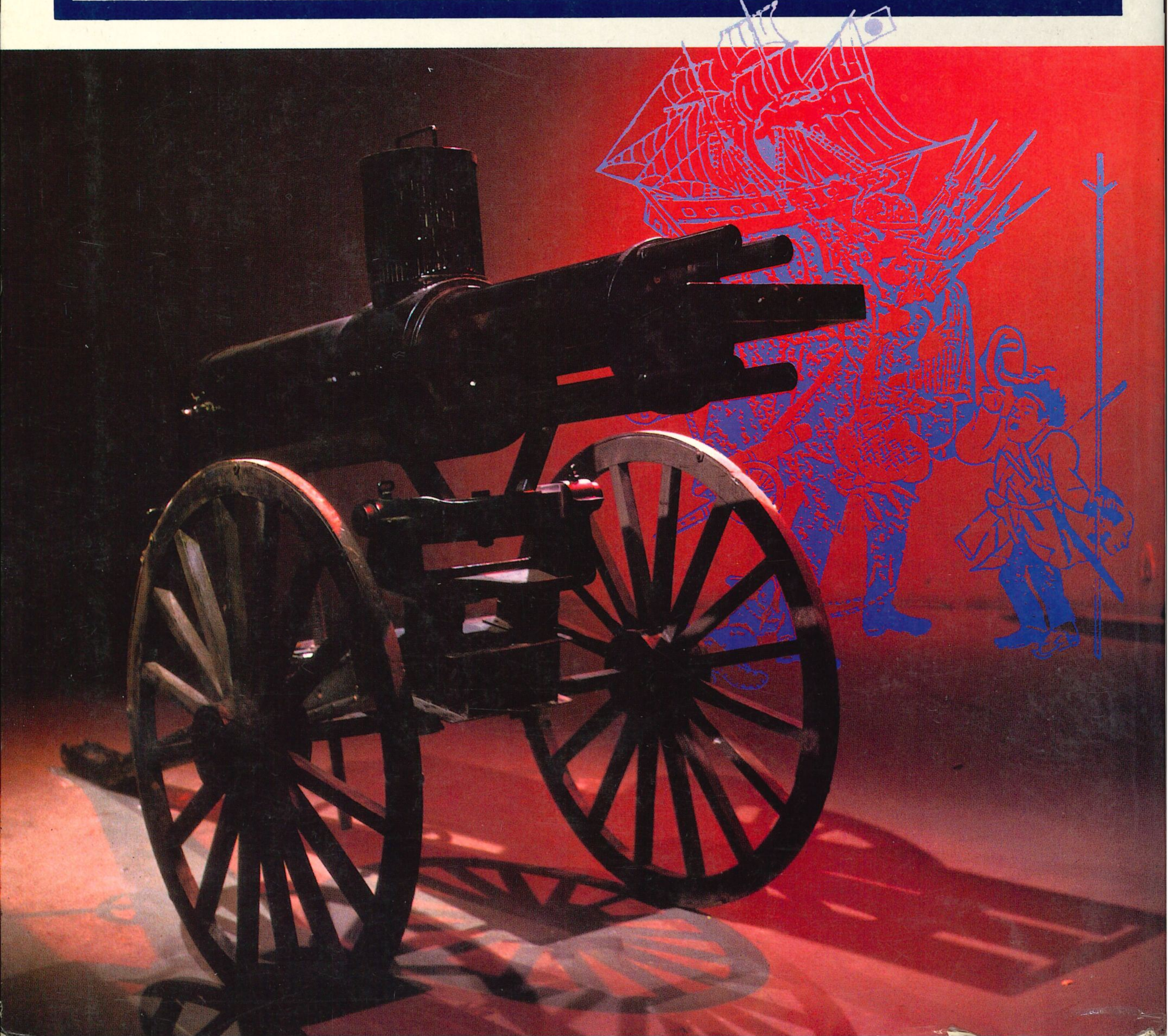
NHK **14**

鈴木健二

歴史への招待



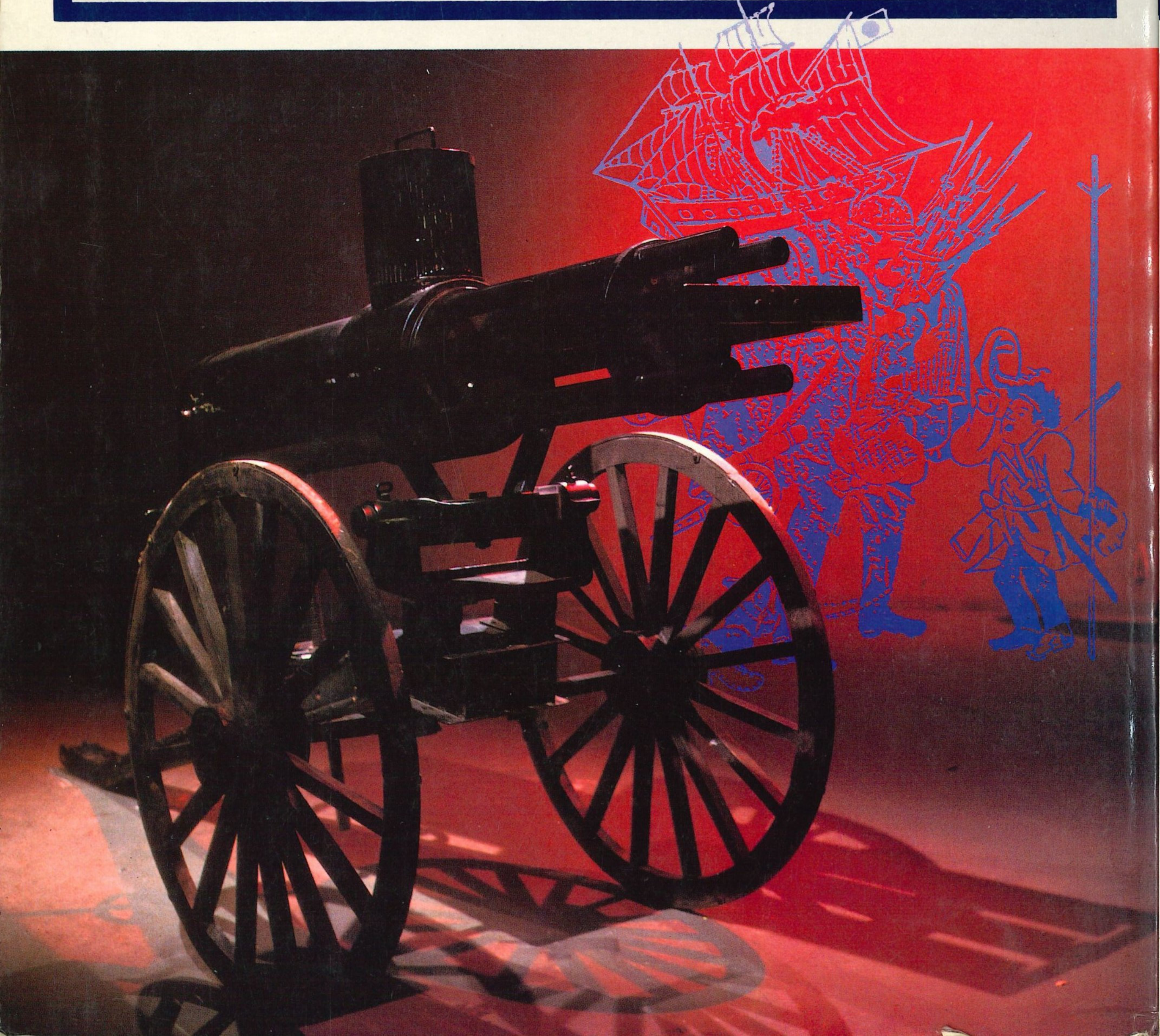
NHK

14

鈴木健二

歴史への招待

火を吹くガトリング砲　大藪春彦　所荘吉
榎本艦隊北へ　安部公房　福井静夫
外人部隊戊辰をゆく　渡部昇一　C・ポラック
嵐の列藩同盟　安岡章太郎　高橋富雄
真説・忍びの者　邦光史郎　名和弓雄



NHK
歴史への招待
14
●火を吹くガトリング砲 ●榎本艦隊北へ ●外人部隊戊辰をゆく
●嵐の列藩同盟 ●真説・忍びの者

日本放送出版協会

日本放送出版協会



歴史への招待

定価＝1300円　雑誌コード69691-14

歴史への招待

日本放送出版協会

目次

この本は、ＮＨＫテレビの「歴史への招待」の出版化です。一本のテレビ番組が作られる裏では、表に現われない大量の取材が行われます。
その結果は、一定の時間の中に凝縮され、刈り込まれ、カットされることで出来上がります。この本では、その大量の素材をたんねんに追跡し、補足し、編集し、一冊の書物に編み上げることにしました。
多くの協力者や資料提供者の協力、アイディア提供等々をまって、映像化された番組を、すべてにわたって再現し、出版の世界に定着させることは、苦難の連続といって過言ではありませんでしたが、ここにささやかなその結果をお届けすることが出来ました。映像と出版とのこよなき結合が、読者の皆様のご賛同を得られればこれにすぎることはありません。

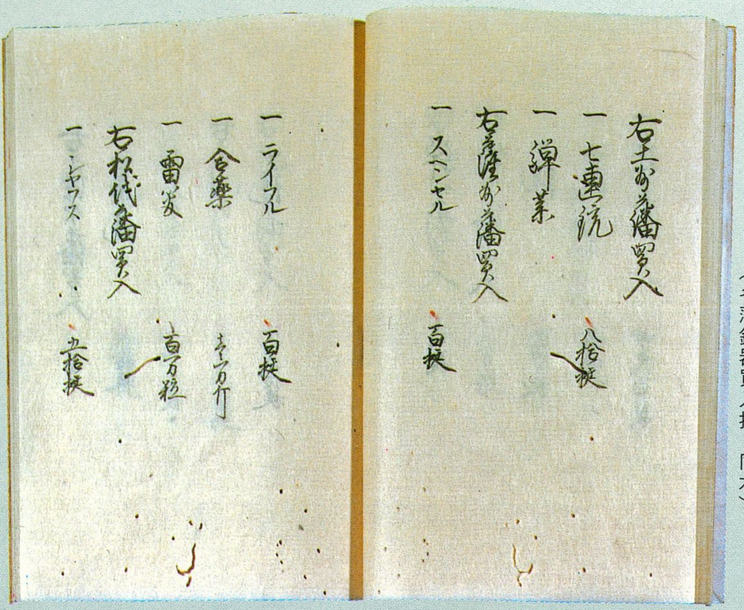


一分間に百五十発から二百発もの弾を撃てたという当時の最新兵器・ガトリング砲（模型）

恐るべき新兵器

慶応四年（一八六八）、戊辰の年が明けた。一月、幕府軍は、薩長を中心とした新政府軍に敗れ、四月、慶喜は水戸に退き、江戸城は開かれた。敗色濃い幕府軍のなかで、東北・越後の諸藩は、奥羽越列藩同盟を結成して、最後の抵抗を試みた。

なかでも、河井継之助率いる長岡藩の抵抗はめざましかった。六月、戊辰戦争中最大の激戦地といわれた長岡城攻防戦が、七万四千石の城下町を舞台に切って落とされた。数において圧倒的な幕府軍に対し、劣勢の長岡藩がほぼ互角に戦うことができたのは、その所有する火力によると言われた。その上、城のなかにはまだだれも見たことのない秘密兵器「ガトリング砲」が隠されていた。



各藩は銃の買入れにやっきになった（各藩銃器買入控　同右）



主に幕府軍が使用したゲベール銃
時代遅れの銃であった（所荘吉氏蔵）



新政府軍が多く使ったミニエー銃　ライフリングがされ、弾も椎の実型となり命中率は高くなった（同上）

銃の性能が勝敗を決めた

この戦争には死の商人たちの暗躍で、さまざまな種類の銃が大量に輸入され、その種類は六十種以上におよび、さながら銃の国際見本市であった。

なかでも代表的なのは、幕府軍が使ったドイツのゲベール銃。当時西洋では時代遅れだったこの銃を、幕府が押しつけられたのである。

一方、新政府軍が使用したのは、フランスのミニエー大尉によって発明されたミニエー銃で、性能はゲベール銃を大幅に上まわった。長岡藩だけは多数この銃を所有していたから、互角の戦いができたとも言える。

そして、新政府軍が使用したスペンサー銃は、世界で初めての連発銃である。戊辰戦争はほとんどが銃撃戦であり、鉄砲のよしあしが勝負に直結したのである。



ガトリング砲を発明したアメリカ人医師のリチャード・J・ガトリング



レヴァー操作で弾を薬室に入れるウィンチェスター銃（所荘吉氏蔵）



戊辰戦争の中ごろに登場した７連発のスペンサー銃（所荘吉氏蔵）



南北戦争でざんごうに倒れた南部連合軍兵士



河井・岩村の談判は決裂　長岡戦争の始まりであった（河井総督・岩村軍監会見之間　小千谷市慈眼寺）

長岡藩家老・河井継之助（慈眼寺蔵）



維新戦争画　鳥羽・伏見の戦いから銃器の差は歴然としていた（都立中央図書館蔵）

理想を生きようとした河井継之助

長岡藩の家老河井継之助の理想は、藩を討幕、佐幕のどちらにも組みしない中立の立場に置くことであった。

そのためには強力な軍備が必要だと考え、一門五千両もするガトリング砲二門のほかにも大量の大砲や、小銃をそろえ、藩士にはミニエー銃を持たせて、フランス式の調練を行い、武装中立国を目指した。

だが、継之助の理想は実現せず、「中立」は夢と消えた。

継之助は、自ら横浜へ出向いて手に入れた秘密兵器ガトリング砲を駆使して、戦場を駆けめぐったと記録にある。だが、継之助自身がこの銃を撃ったかどうかは、定かでない。



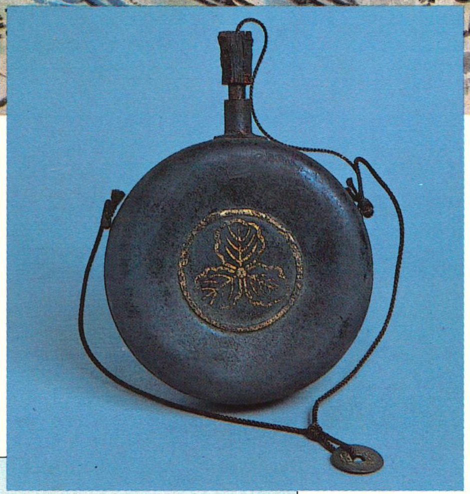
戊辰戦争中最大の激戦といわれた長岡戦争　戦火は小千谷から長岡城へと広がってゆく（長岡城攻防図　長岡市立互尊文庫蔵）

河井のもっとも長かった日

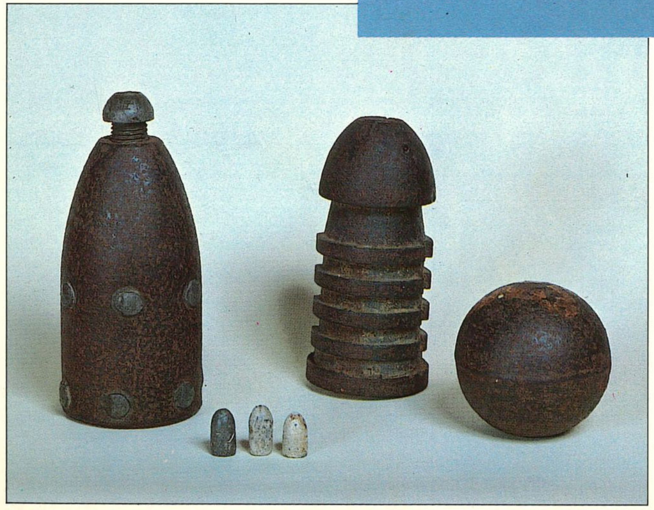
慶応四年五月二日、新政府軍と会談するため、継之助は新政府軍本陣へ駕籠を乗りつけた。会談は場所を小千谷慈眼寺に移して行われた。新政府軍の軍監は岩村精一郎であった。継之助は岩村に、「しばらく時日をかしてほしい」と訴えたが、岩村はとりあわず三十分ほどで終わったという。談判決裂である。小千谷に陣取る新政府軍が、長岡城攻撃を決意した十日、長岡藩も開戦。以後百五十日にわたる日々、戊辰でもっとも激烈な戦闘が繰り返されることになった。



激戦のあった朝日山



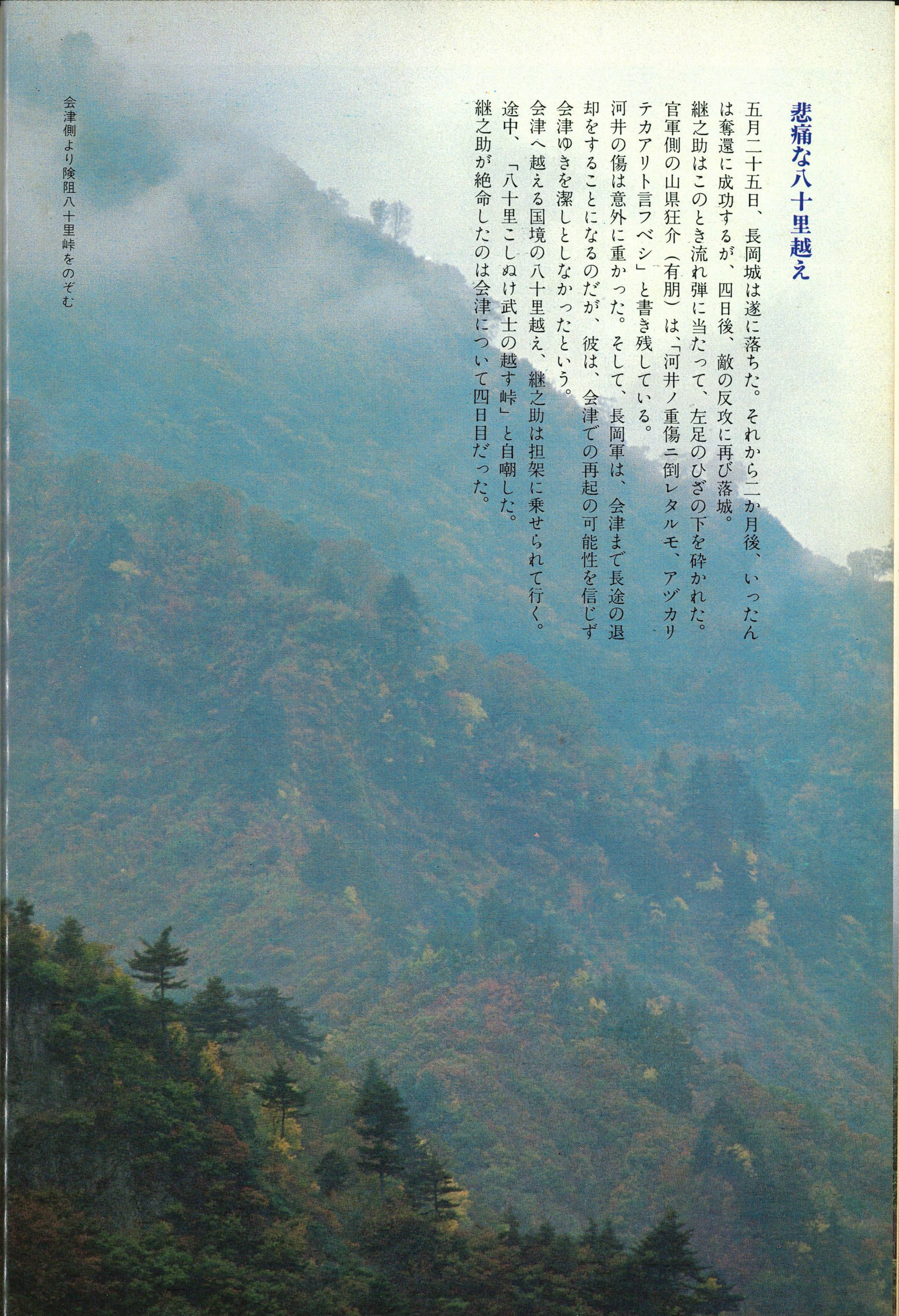
長岡藩の火薬入れ（河井記念館蔵）



長岡戦争に使用された弾（慈眼寺蔵）

悲痛な八十里越え

五月二十五日、長岡城は遂に落ちた。それから二か月後、いったんは奪還に成功するが、四日後、敵の反攻に再び落城。継之助はこのとき流れ弾に当たって、左足のひざの下を砕かれた。官軍側の山県狂介（有朋）は、「河井ノ重傷ニ倒レタルモ、アヅカリテカアリト言フベシ」と書き残している。河井の傷は意外に重かった。そして、長岡軍は、会津まで長途の退却をすることになるのだが、彼は、会津での再起の可能性を信じず会津ゆきを潔しとしなかったという。会津へ越える国境の八十里越え、継之助は担架に乗せられて行く。途中、「八十里こしぬけ武士の越す峠」と自嘲した。継之助が絶命したのは会津について四日目だった。



会津側より険阻八十里峠をのぞむ

火を吹くガトリング砲

大藪春彦
所　荘吉

▩おおやぶはるひこ
作家　昭和10年京城生まれ　推理作家協会会員　『野獣死すべし』でデビュー　日本のハードボイルド小説を確立　著書『蘇える金狼』『謀略空路』『骨肉の掟』

▩ところそうきち
昭和4年東京都生まれ　銃砲史学会理事長　著書『火縄銃』『古銃事典』(以上雄山閣)『高野長英全集』(共編)

NHK 原口卓也



長岡城をめぐる攻防でガトリング砲ははじめて姿を見せた（長岡戦争図　長岡市立互尊文庫蔵）

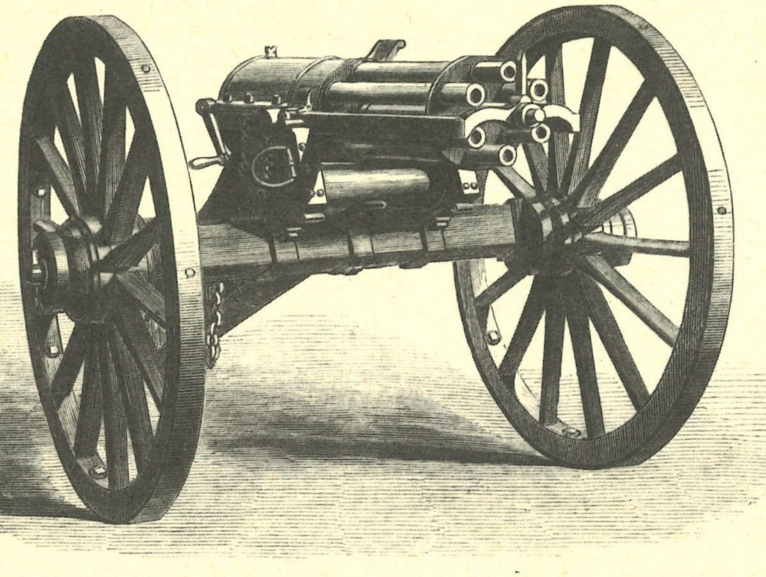
薄命だった画期的な連発銃・ガトリング砲

慶応四年（一八六八）、越後長岡藩七万四千石の城下町を舞台に激しい戦いが繰り広げられた。戊辰戦争中最大の激戦と言われた長岡城攻防戦である。城を攻める薩摩・長州を中心とする新政府軍二万、これに対するのは、長岡・会津を中心とする奥羽越列藩同盟軍五千。兵の数では圧倒的に新政府軍が有利であった。だが、長岡の城中にはまだだれも見たことのない、恐るべき新兵器が隠されていた。ガトリング砲である。

一八六二年アメリカ人リチャード・J・ガトリングによって発明されたこの砲は、一八八三年、マキシムという人が、今日私たちが見るような機関銃をロンドンで試作し特許を得るまで、少なくとも十五年間、これは最強の武器であった。

口径が大きいため、砲と言っているが、基本的には連発銃を六本集めた銃と言っていい。銃身に付いているハンドルを回すと六本の銃身が回転し、その間に弾込めから発射までを自動的に行うという、正に画期的な銃であった。ハンドルの回転を早くすると、一分間に百五十発から二百発もの弾を撃てたという。

では、当時国産の銃はどうであったか。天文十二年（一五四三）に種子島に銃砲が伝来して以来、幕末まで弾を筒先から入れる先込め、そして火縄というままであった。ところが、西洋ではその間、火縄から火打ち石、そして雷管と発火装置が変わり、弾の込め方も先込めから元込め、さらに銃身の内側に溝を刻む、いわゆるライフルと言われるものになってきている。



GATLING'S BATTERY-GUN, ADOPTED BY THE UNITED STATES ARMY.

描かれたガトリング砲（イラストレイテッド・ロンドン・ニュースより　雄松堂書店提供）

弾も丸玉から先の尖った椎の実型、そして連発銃という具合に発達していたのであった。

勝負を決めた火力の差

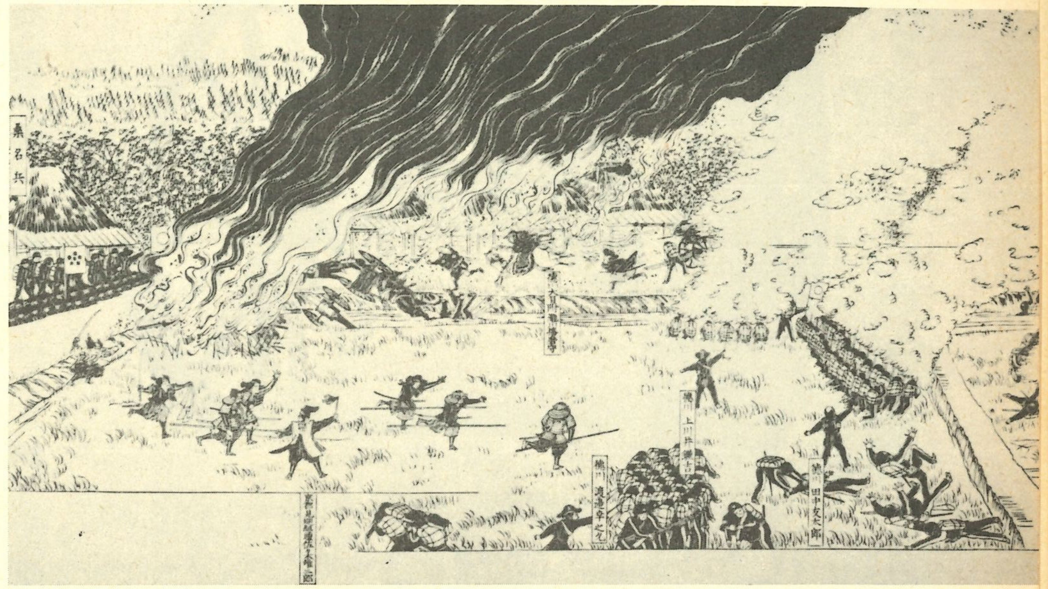
戊辰戦争は一部での白兵戦を除いては銃撃戦であった。銃砲の良し悪しが勝負を決めた。事実、慶応四年正月三日、戊辰戦争の緒戦となった鳥羽・伏見の戦いでは、京を守る五千の薩長を中心とする連合軍が、二万五千の幕府軍を破っている。この時両軍が使用した銃を比べてみると、連合軍の銃は最新式の西洋銃を多く使用しているのに対して、幕府軍は火縄銃と西洋銃があっても連合軍のそれより一時代古い銃を使用している。

戊辰戦争中は、さまざまな種類の銃が大量に輸入された。最初のうちは、一部、西洋銃を真似て国産化もされたが、次から次へと新しい銃が入って来るのでとても国産化していたのでは間に合わない。そこで両軍とも輸入に頼らざるをえなかったということである。当時輸入された銃は六十種類以上にも及び、正に銃の国際見本市の観があり、地球上に存在する銃でこの戦争に登場しなかった銃はないと言われるほどさまざまな銃が使用された。その中でも代表的な銃はゲベール銃、ミニエー銃（エンピール銃）、そしてスペンサー銃である。

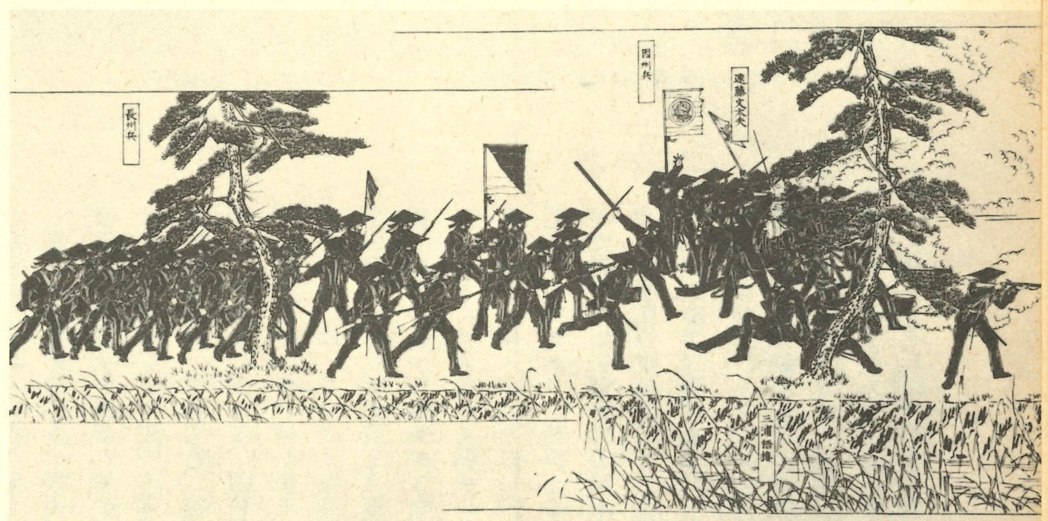
大薮　ゲベール銃というのは主に幕府軍が使用した銃ですね。もともとゲベールはドイツ語で銃砲という意味でして、さまざまなメーカーや形式がありましたが、幕府側は、当時でも西洋では時代遅れになったのを売りつけられたものです。弾の装填方法は火縄銃と同じで先

込めですが、発火装置に火縄を使わずにフリント・ロックと言いまして、火打ち石を使用したものが多かったようです。銃身にライフリングという旋条が付いていませんので、遠くまで飛ばない上に命中率が悪く、狙って撃つというより、とにかく攪乱射撃と言いますか、見当を付けて撃つといった感じの銃ですね。現に、ゲベールなど照門も付いていません。

―― 狙っても当たらない銃となると、実戦ではあまり効果があがらない……。



鳥羽の戦いは圧倒的に新政府軍の勝利におわる（戊辰戦記絵巻より　都立中央図書館蔵）



淀付近を進む新政府軍　幕府兵士に比べ新式の銃を装備していた（同上）

大薮　この銃が盛んに使用されたのは、ヨーロッパではナポレオンのころなんですね。当時の戦争というのは、映画でもよく見るのですが、軍楽隊の音楽に合わせて横隊を組んで集団で迫撃する。ですから、一人を狙って撃つというより、その集団を狙うといった感じですので、この銃でも効果があったわけです。

―― なるほど。一人を狙うというより、集団の中にたくさんの弾を撃ち込むという目的で作らせたわけですね。

大薮　そうですね。このゲベール銃の次に登場したのが、ミニエー銃です。発火装置には雷管キャップを使い、銃身にはライフリングがされていますし、弾も今までの丸玉と違い椎の実型を使用しますので、命中率は高いものとなっています。この銃は主に政府軍が使っております。ミニエー銃には先込め方式のものと元込め方式のものとがあり、当時元込めのものが人気があったのですが、その理由はたくさん弾が撃てるということではなくて、当時の水準からすると、撃つ弾の数から言えば先込めの方がたくさん撃てるわけです。元込めと言っても今みたいに弾頭と金属薬莢（やっきょう）と火薬と雷管が一体となったカートリッジを使うわけではありませんから。なぜ、元込めの銃がいいかと言いますと、伏せたままで撃てるからです。先込めですと膝を立てないと弾を込めることができないのです。その分、標的として狙われる面積が大きくなるということになるわけです。

そして、戊辰戦争の中ごろに登場したのが、世界で最も早く成功した連発銃、スペンサー銃です。銃尻にチューブ弾倉が挿入されていまして、ウィンチェスターM七三やM九四と同じように、レヴァー操作で弾を薬室に入れるわけです。ただし、レヴァー操作で自動的に撃鉄が起きることはないので、親指で撃鉄を起こしてやる必要があります。この銃は金属薬莢の尻の内側のまわりに爆粉を塗ったリム・ファイア

火を吹くガトリング砲〈年表〉

天文12(1543)	種子島に、火縄銃渡来
弘化 3(1846)	フランスのミニエー大尉、ミニエー銃を発明　ゲベール銃より優秀
文久 1(1861)	アメリカ、南北戦争始まる　～65年まで（リンカーン、スペンサー銃を採用）
文久 2(1862)	アメリカ人、リチャード・J．ガトリング、最強武器ガトリング砲を発明、公開実験を行う
慶応 3(1867)	ガトリング、砲をパリ万国博に出品　この年、ガトリング砲２門、横浜に陸揚げされる　河井継之助１門5000両で２門買う 12月、継之助、長岡城下の各戸にミニエー銃をあずけ、藩士にフランス式調練を行う
慶応 4(1868) 明治 1	１月３日、鳥羽・伏見の戦い　5000の薩長連合軍、２万5000人の幕府軍（旧式西洋銃・ゲベール銃）を破る ５月２日河井継之助と鎮撫軍参謀岩村精一郎の小千谷会談決裂 ５月３日、奥羽列藩同盟成立　６日北越６藩同盟に加入、奥羽越列藩同盟となる　10日、長岡城攻防戦始まる　長岡城中に秘密新兵器ガトリング砲待機 新政府軍２万の兵力に対し、同盟軍5000　戦死者政府軍1048人、同盟軍380人　ほぼ互角の戦い ５月19日、継之助、ガトリング砲をひいて奮戦　８月16日、戦い甲斐なく、継之助戦死
明治 2(1869)	宮古湾海戦で、新政府軍の船に搭載されたガトリング砲活躍
明治13(1880)	３月３日、「射撃の神様」といわれた村田経芳、小銃を発明「村田銃」と名づけられる　村田、このとき43歳　日本陸軍はそれまでの洋式銃を廃止し、村田銃で統一
明治19(1886)	村田銃で装備された日本陸軍誕生　それまで陸軍で使用されていた旧式銃、中国へ輸出される
明治27(1894)	日清戦争起こる　日本兵と戦った清国兵、旧式銃を使う者多かったという

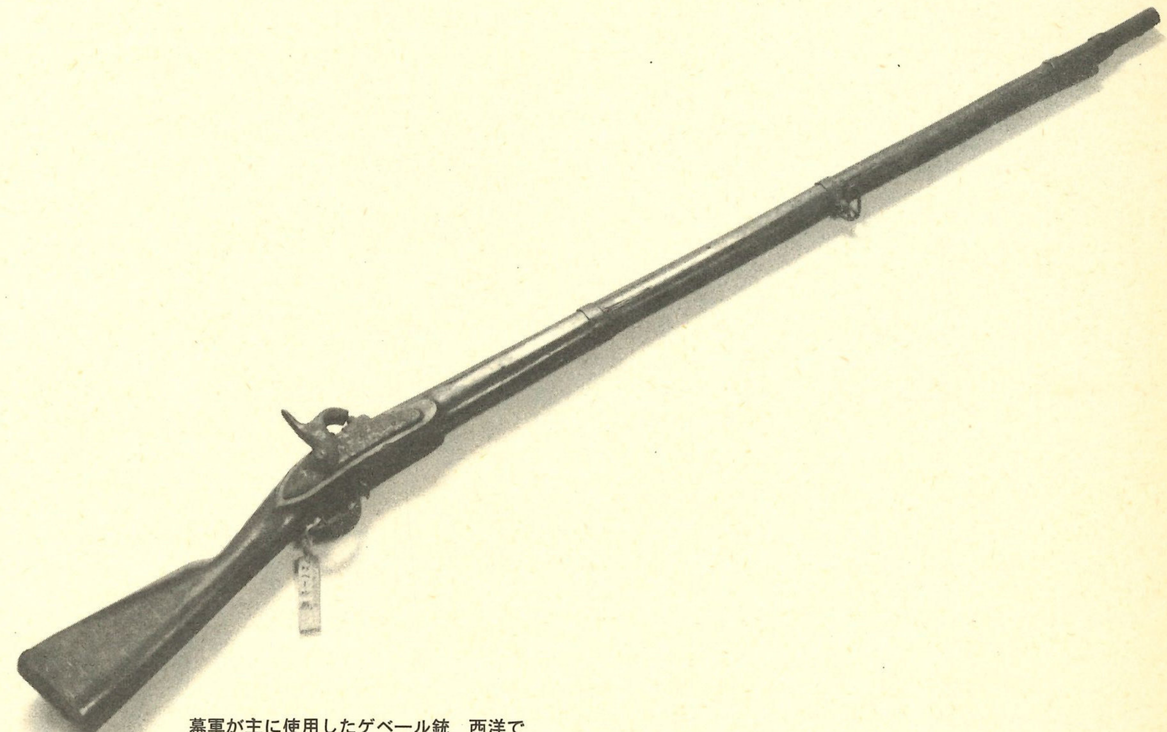
のカートリッジを使います。七連発になっていますので、七発撃つと、今のようなボックス・マガジン、つまり箱型弾倉ですと、マガジンごと変えればいいわけですが、この銃は一発一発改めて装填しなければなりません。

——その間に敵の弾に当たることもあるわけですね（笑）。このように改良されて行きますが、主な銃の改良点というのはどこにあったのでしょうか。

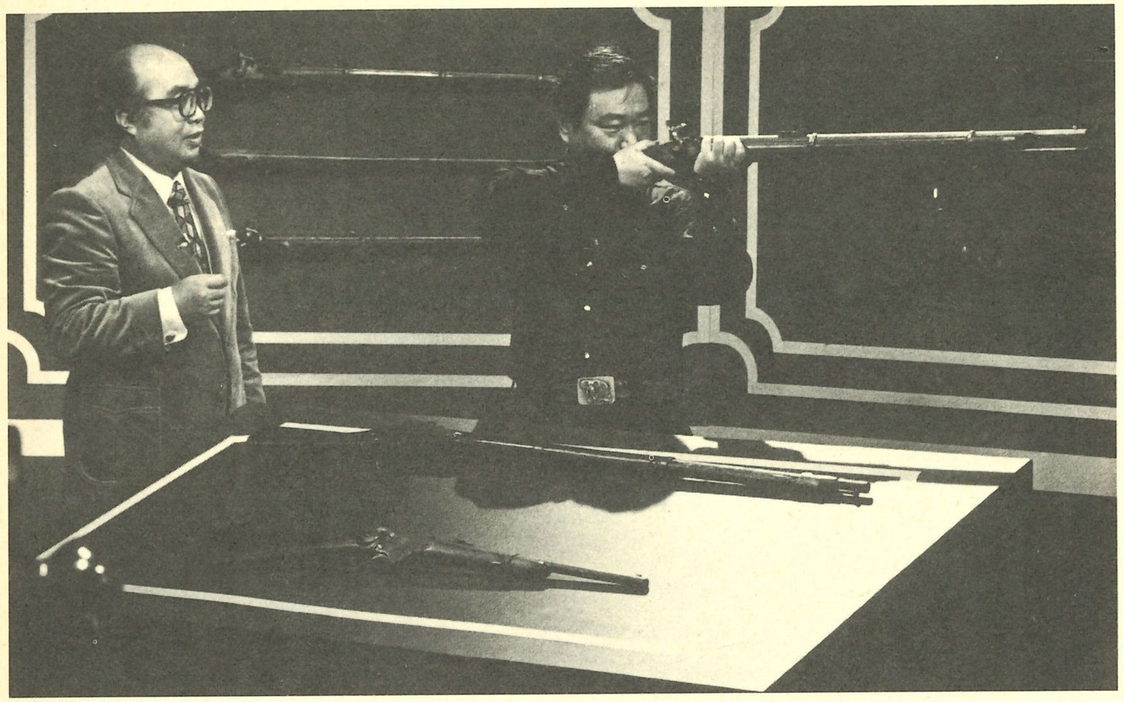
大藪　特に軍用銃の場合は早くたくさんの弾を撃ちたいということですね。それから弾を遠くまで飛ばしたい。命中率も期待したい。もっとも、最近は長距離の敵は火砲やミサイルや狙撃兵にまかせて、歩兵は四百ヤード（約三百六十メートル）以内の敵を相手にすればいいということで、突撃自動ライフルが大半を占めていますが……。それと軍用銃の場合に重要なのは、確実に作動するということですね。そうでないと、敵が目の前に来たとき弾が出なかったというと一巻の終わりですからね。

——そうすると、このガトリング砲というのは、いろいろな面にかなっている点があるわけですね。

大藪　そうですね。当時は黒色火薬を使いますから、火薬のカスですとか有害物質による錆ですとか、そういうもので回転不良が起きまして作動が不確実になります。雷管も現在のと違って錆を大量に発生させる成分を含んでました。これがガトリング砲の場合は銃身が六本ありますので、それだけ回転不良になる確率が少なくなってくるわけです。また、一本や二本銃身が壊われても、残ったものが使えるわけです。それに命中率が非常に高かったのも、後になってプロシアでテストされてわかっています。百人の狙撃兵が、ドライゼ・ライフルと



幕軍が主に使用したゲベール銃　西洋では時代遅れのものだった（靖国神社蔵）



銃を構えながら当時の銃について語る大藪春彦氏

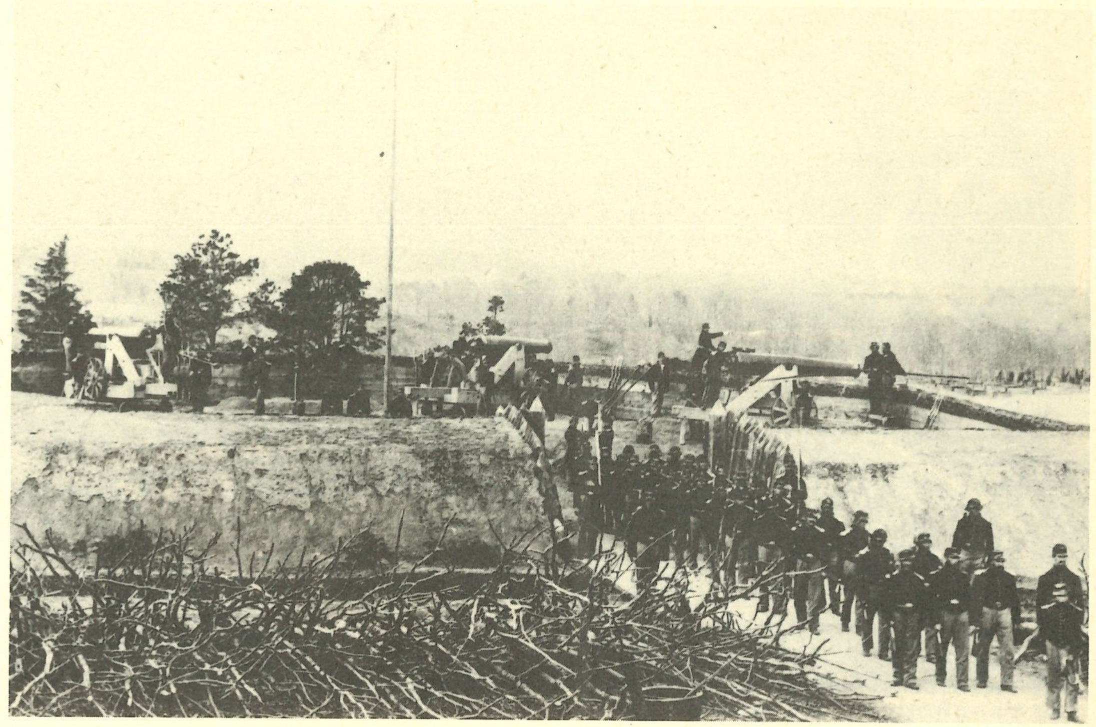
いうボルト・アクションの前身のニードル・ファイア式のものですが、八百メートル離れて標的を狙いました。対するガトリングは一丁で。命中率はガトリングが八十八パーセントあったのに、ドライゼで撃った方は二十七パーセントしかなかったといいます。戊辰戦争当時、理論的には最高の武器だったと思いますね。

殺人マシン発明の思想は、〝機械に戦争をさせたい〟

大量殺人マシーン、ガトリング砲を発明したリチャード・J・ガトリングの職業は医者である。彼は発明の動機をこう語っている。

「私が、私の名で呼ばれることになったこの銃の発明を何で決心したかということに興味を持たれることと思う。一八六一年、南北戦争が開始されるや、私は毎日のように兵士らが戦場に向かって出発して行き、そして傷つき倒れて送り返されて来るのを目撃しなくてはならなかった。それら送り返されて来た負傷兵の大部分は生命を失い、あるいは不具となったのだ。この悲劇を目の前にして、私はある考えに達したのである。それは、もし私がマシンで働く銃を発明したなら、もしそれが百丁のライフルに匹敵するような性能のもので、それを一人の兵士で操作することができたら。百人の兵士を戦場に送る代わりに一人の兵士で済み、九十九人は危険な目に合わなくてもよいことになる。人間の代わりに機械に戦争をさせたらよい」と。

一八六二年、インディアナポリスでガトリング砲の公開実験が行われた。この公開実験には、当時のインディアナ州モートン知事が、火器の専門家からなる委員会に命じてどんな性能の銃なのか

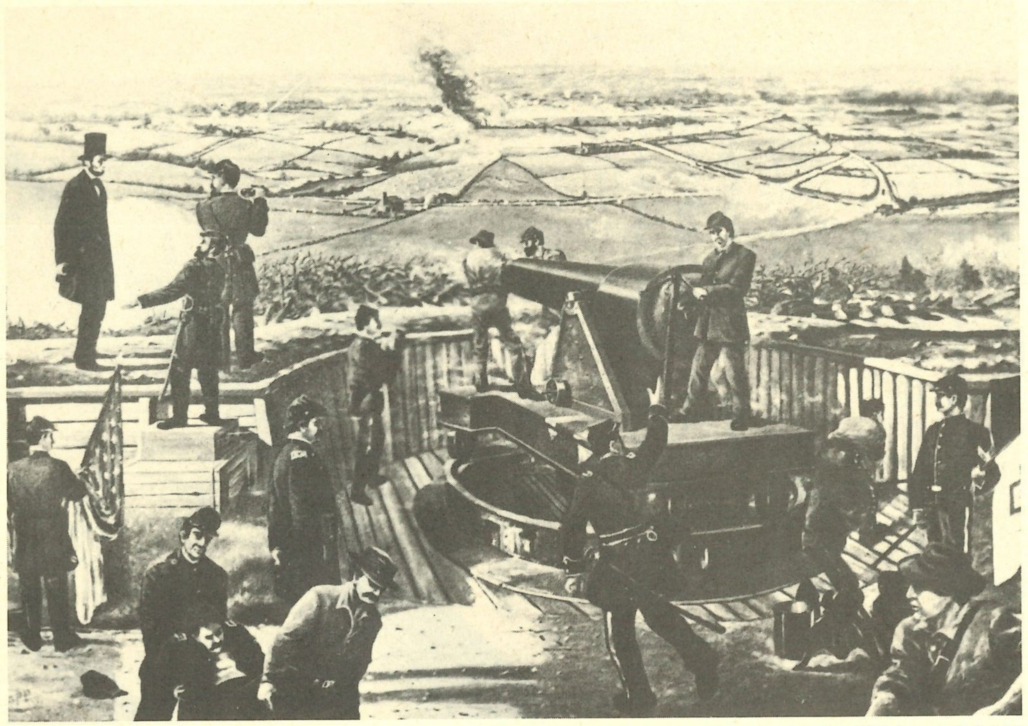


南北戦争の北軍兵士（ワイド・ワールド・フォトズ提供）

詳しく報告するように求めている。その報告書を見ると、

「この銃は、これまでに使用されて来た銃器に比べ、あらゆる場合において勝るとも劣らない性能である、との結果を得ました。構造も簡単で、特に複雑な部品もなく、取り扱いも一般兵士が歩兵銃を扱うのと同様に簡単であります。発射速度は一分間に百五十発ぐらいであり、おそらくは一時間でも、支障なく撃ち続けることが可能でありましょう。操作は十名の兵士で足り、運搬には二頭の馬でじゅうぶんと思われます。銃は非常に安い価格でありますので、われわれ実戦で試用しうるだけの量を早急に購入することが望ましい、と考えます」

と、素晴しい性能であることを述べている。時あたかもアメリカ国内をふたつに割った南北戦争の最中、軍は大量にそれを購入して戦場に送り、リチャード・J・ガトリングは巨富を手にする、というストーリーが浮かぶところだが、現実にはそうはならなかった。ガトリング砲が北軍あるいは南軍のいずれも軍に正式に購入された記録はなく、正式な装備として配付されたこともない。唯一の例外として、北軍のベン・バトラー将軍が自費で十門、ガトリングから直接購入し、一八六四年五月、リッチモンド攻防戦で姿を見せたことが記録に残っているだけである。しかし、この記録も公式なものではなく、当時北軍に、通信将校として従軍していたダナ大尉がその日記に、「今日、バトラー将軍がガトリングガンという新しい兵器をテストしているのを見た」と記しているだけで、詳細は不明である。しかも、テストを見たとあるだけで実戦に使用したかどうかということには触れていない。ガトリング砲をアメリカの軍隊が採用したのは、南北戦争が終わった翌



北軍の陣地を訪門したリンカーンが左に描かれている（同右）

年、一八六六年のことであった。

アメリカで失敗したガトリングは、ヨーロッパでの売り込みをはかり、一八六七年、パリの万国博覧会へガトリング砲を出品した。当時のフランスの皇帝、ナポレオン三世は、これに非常に興味をおぼえ、会場では子供のようにクランクを回して喜んだという。

ところが同じ年、すでに横浜の港に二門のガトリング砲が陸揚げされていたのである。

―― 南北戦争が始まりまして、その翌年にはガトリング砲が出来たわけですね。両軍とも喉から手の出るほどこの砲が欲しいのではないかと思いますのに、なぜ使用されなかったのでしょうか。

所　これにはいつも新兵器に対しての宿命みたいなものがありましてね。新しいものに対しての保守派の抵抗というのは、どこの国でもあることです。それからもうひとつは、後の時代で非常に有効だということが知られたとしても、発明された当時においてはまったく白紙の状態である。というのは、長所もあるかも知れないけれども、それより大きい欠点もあるかも知れないということにあるのだと思うんですね。だから新兵器が軍隊で採用されるまでのあいだは、単に効力だけではなく、コストとかアフターメンテナンスの難易度などのテストを重ねた結果でないとなかなか採用できないということがあったと思いますね。

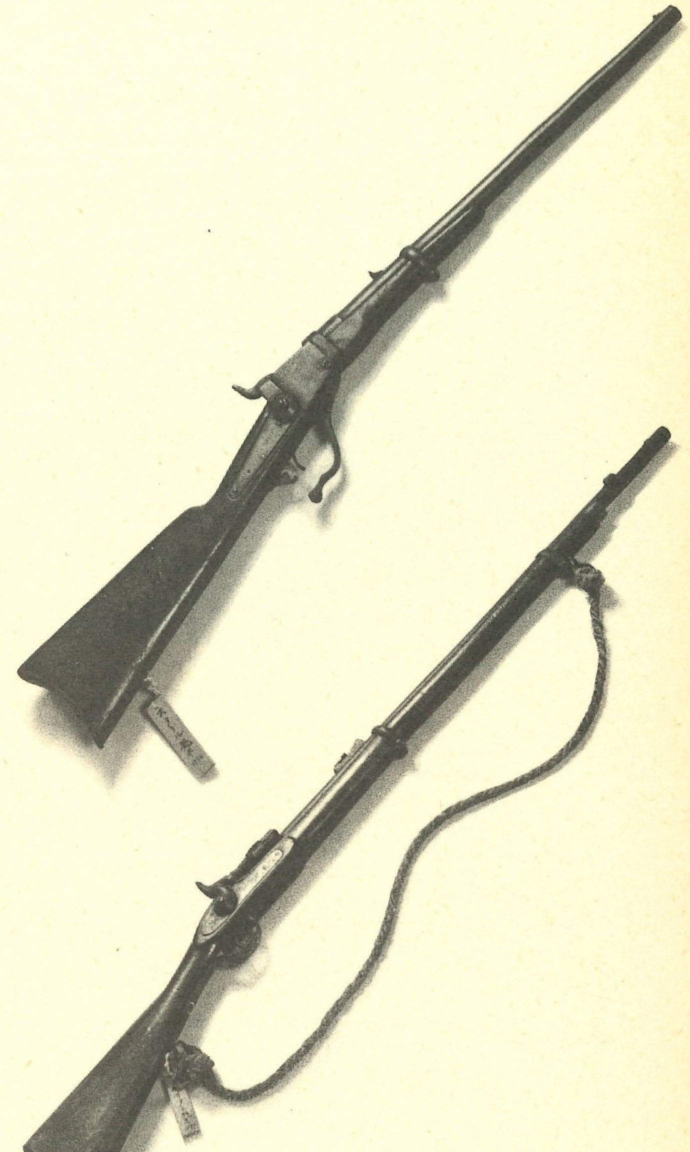
さらにいまひとつには、確かにガトリングのような連発機構を持ったものは、すばらしい着想ではありますけれども、どこの政府でも同じでしょうが、驚異的な弾薬の消耗という点にいちばん頭を痛めるので

はないかと思うんです。その当時の歩兵がひとつの会戦の場面で準備する弾薬量は約二百発と言われています。ところが、ガトリング砲は一分間で二百発射てるということになりますと、これはかつてないぼう大な弾薬の消耗である。それに対しての補給をどうするかという点が解決できないと、新しい兵器だといっても容易に採用できなかったのではないでしょうか。

まあ、こういうことは新しい兵器を採り入れる場合ではいつも起こることで、マキシム機関銃にしても発明されてから日露戦争の結果が出るまでは、やはり弾薬の消費を恐れてなかなか世界各国とも採用しなかったという説があります。

―― 戦術的に見ても、確かにそれまでの戦術の中に組み入れていないものですからね。新しく組み入れるというのもたいへんでしょうし。また私、ガトリング砲を見ておかしいなと思いましたのは、真っ直ぐには撃てるのですが、横には向きませんね。ですから、広い所ではずいぶん不便ではないかという気がしたのですが……。

所　ええ、大砲の砲架と同じで、射撃をしながらでは砲身を左右に転回ができません。これは十九世紀前半までの野戦においては、歩兵が固まって銃剣を着けたまま密集突撃をするというのが三兵戦術における歩兵の戦法でありますから、その突撃路に向かってガトリングのようなものを備えれば効果が出たでしょう。しかし、ライフルのある



上はスタール銃　下はスナイダー銃（スナイドル）
長州はこの銃を多数もっていた（靖国神社蔵）

ミニエー銃が出まして、射程が非常に伸びたということと、命中精度がたいへん良くなったということで、十九世紀後半には兵隊が散兵して疎開戦法をとるようになると、一方向だけしか撃てない機関銃ではそれほどの効果が期待できない。そういうことがガトリングの採用を渋った原因なのではないかと思います。

最新兵器の実験場となった戊辰戦争

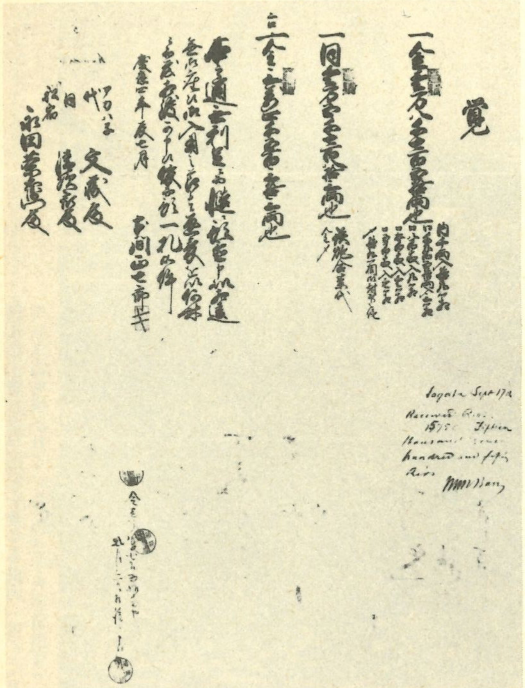
―― これをまたセールスしなければならないわけですが、当時ガトリングは自分で作って、自分でセールスに行くというような立場ですね。そういう商才というのはあったのでしょうか。

所　どうでしょうね。通常はセールスマンに営業の方は任せるというわけですが、ガトリング自身はお医者さんですから、どこまで商才があったかわかりませんね。まあお医者さんが鉄砲の研究までするのですからなかなかおもしろい人だと思いますが、なおかつセールスマンの才能があったらすばらしい人だと思いますが……。なかなかガトリングも期待するほど売れなかったようです。

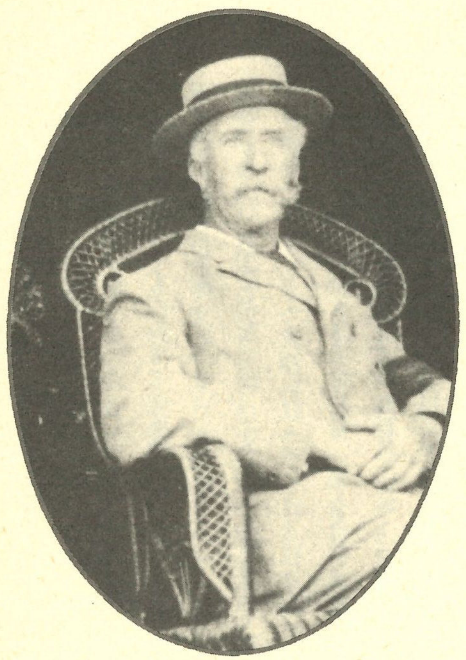
―― それなのに、なぜ日本にこのように早く来たのでしょうか。

所　南北戦争はご承知のように一八六五年に終了しまして、アメリカは一応採用したけれども大量に買うということでもないし、普墺戦争は一八六六年に終わってしまって、一八六七年というと地球上どこも戦争をやっていないわけです。日本しかかっこうのマーケットはないということで持ち込んで来た、ということだと思うんですね。

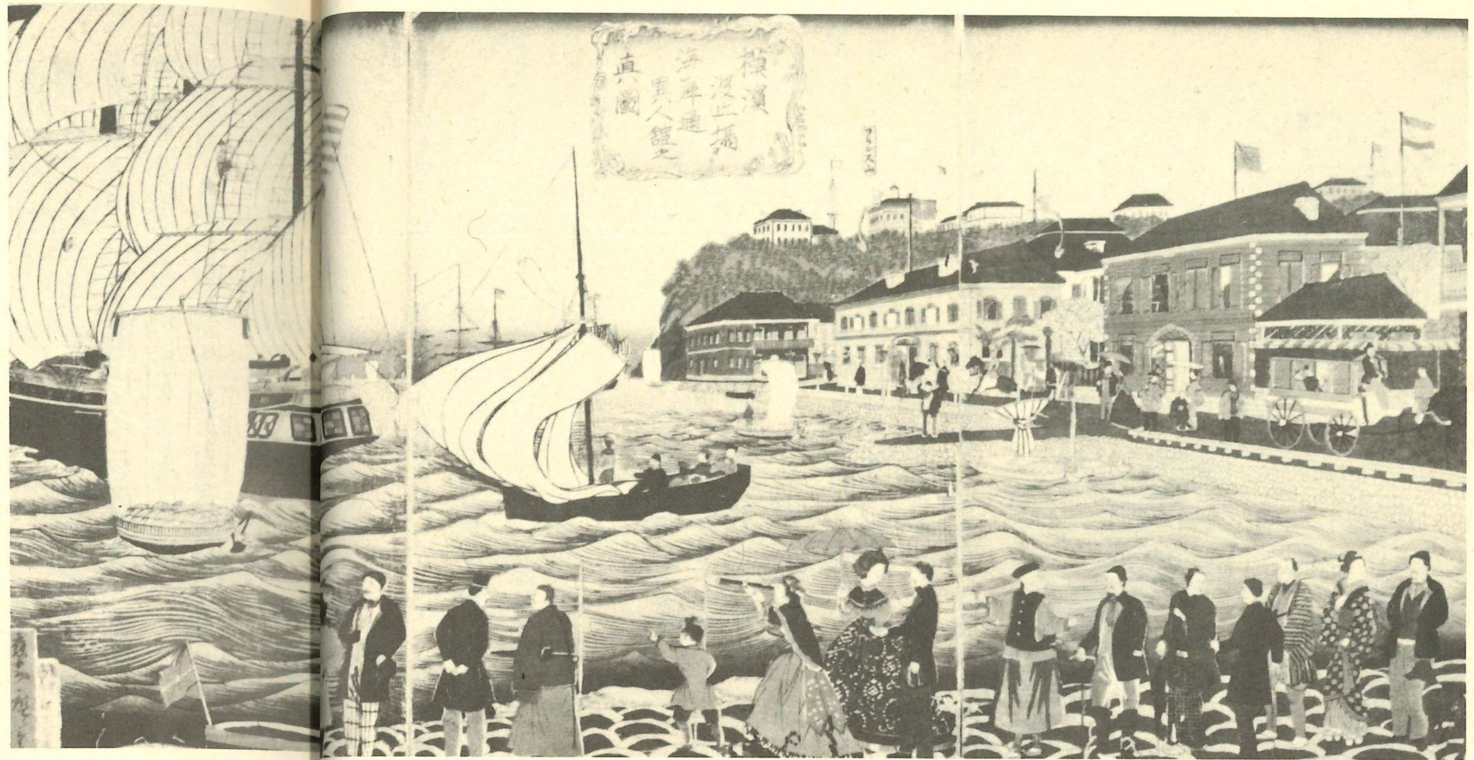
―― いわゆる私どもが言うところの「死の商人」にとっては、当時の日本は世界最大の市場でしたからね。そしてとにかく売り手の言い値で買うという状態でしたから、こんなにいい市場はなかったでしょうね。


覚

鉄砲買入文書（本間美術館蔵）



武器を売っていた商人の１人・グラバー（長崎県立図書館蔵）



異人館が建ち並び活況を呈する横浜　遠くにフランス山も描かれている（都立中央図書館蔵）

所　そうだろうと思います。安政の開国以来たくさんの商人がやって来ましたけれども、物情騒然たる日本においては、武器以外に売るものは少ない、目ぼしいものはそれ以外にないということで武器を持ち込む。もちろんヨーロッパ、アメリカとも、産業革命の後をうけてマス・プロダクションということが盛大に行われまして、工業生産品として大量の銃器が出て来る。それを消化するマーケットというものはなかなかない。日本というものはかっこうのところだったというよりも、アジア、アフリカで武器を買ってくれる独立国といったら日本か中国ぐらいしかない。たまたま日本の場合は、戊辰の騒乱を迎えるという時期だった。においをかぎつけたというよりも、これは商売人なんですから、売れるものなら何でもということで持ち込んで来たのでしょう。ただ一般によく言われますように、アメリカやヨーロッパでの使い古しの廃銃をだまされて押し付けられたということはありませんですね。その時の列強ですら装備していない最新兵器が入っています。戊辰の戦争が一八六八年で、一八六六年式のスナイドルとかシャスポーとかいう物がみんな入って来ているのですから。言いかえれば、アメリカ、ヨーロッパの当時の最新兵器の実験場みたいになってしまった。まあ、非常に悲しいことなんですけれども……。

それが日本の場合は国内戦と言っても反政府だ、あるいは政府党だとそれぞれが統一された軍隊ではなくて各藩がバラバラですから、それぞれの藩がそれぞれの商人を通していろいろ銃器を輸入した。そのようなことが、日本にあらゆる種類の鉄砲が入った理由だと思います。古い銃を売ることは、むしろ日本の商人の方があくどかった。薩摩や長州が新しいミニエー銃を輸入する。そうすると、古いゲベール銃を持って東北諸藩へ売りに行ったのは日本の商人ですよ。だから外国の



長岡藩家老河井継之助（長岡市立互尊文庫蔵）

商人ばかり責めることはできないですね。

――　日本人は非常に優秀であるから、この国の者に対してはうかつなことはしてはいけないと、当時の公使や領事が、あるいは向こうから来た商人が本国へ書き送っていますから、そういうことも多少は影響ありましょうね。

所　それと、当時のヨーロッパ列強の考え方というのは、世界の地図をヨーロッパ色に塗り変えようということに狂奔しており、東南アジアで角逐を演じつつ日本にやって来たが、そのころにはアメリカとかイギリス、フランスまたはロシアの勢力バランスがとれたところで日本へやって来た。どこも手が出せない状態だった。非常に幸運だったと思いますね。

ガトリング砲、一門なんと五千両

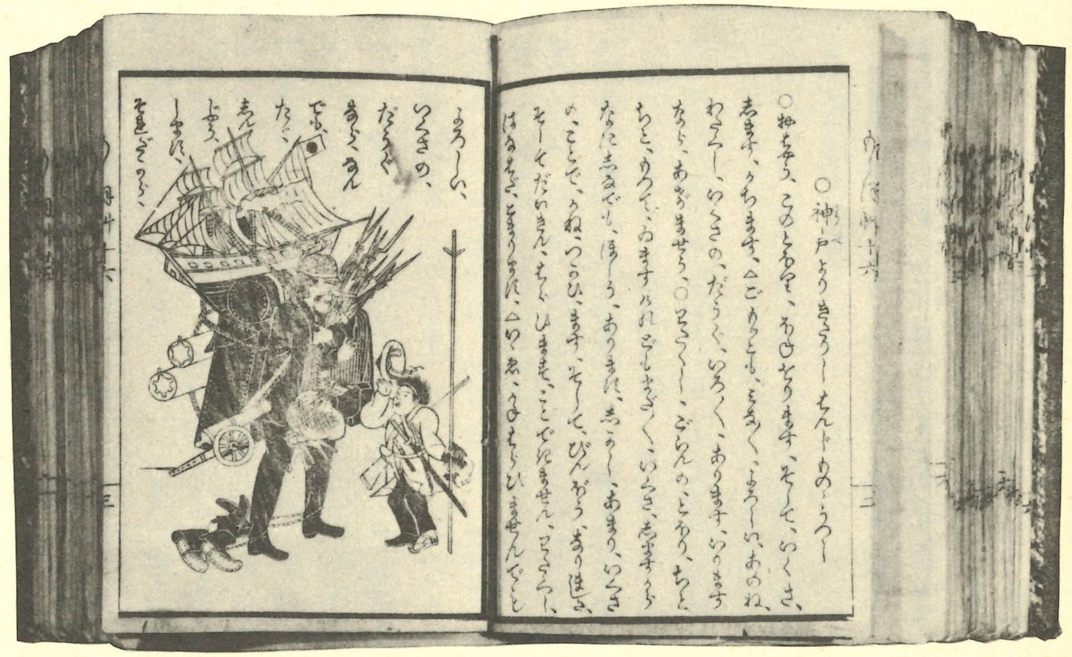
慶応三年（一八六七）、横浜の港は異常な活気を見せていた。外国船から陸揚げされる積荷の大半は、銃と弾薬であった。戦乱の近いことを予期した国内の諸藩が、銃と弾薬を一斉に買い求めたのである。西洋銃と名が付けば、どんな銃でも飛ぶように売れたという。

記録によれば、この年銃を購入した藩の大部分は、戊辰戦争の時新政府軍となって戦っている。

この横浜の港に一人の男がやって来た。越後長岡藩七万四千石の家老、河井継之助である。彼もまた大量の銃を買い求めに来たのである。

ここで彼は奇妙な機械を見た。それは日本に来てまだ間もないガトリング砲であった。

鳥羽・伏見に戦端が開かれると、各藩は前にも増して武器の購入に力を入れた。慶応四年六月五日付けの新聞「もしほ草」に、そのことを風刺した記事が掲載されている。
この風刺画には、日本人と武器を売る商人との会話も載っている。どんな会話か簡単に紹介すると、
日本人「私はこんなに戦ってきました。これからも必ず勝ちます。」
商人「日本人は北の人も南の人もひとりもいなくなるまで何年も何年も戦って下さい。欲しいものはなんでもあげます。」
日本人「お金がありません。」
商人「いや、お金はいりません。全部あげます。ただ、最後に富士山と島を二つ三つ私に下さい。」
当時、日本人がいかに多くの武器を買いあさっていたかがわかる。そして、その恐しいつけがくるぞということを警告している。
ではどのくらいの銃が売れたかというと、これは軍事機密に関する部分もあるので、実数はなかなかつかめない。イギリス公使パークスが本国に送ったコマーシャル・リポートの中には、「今、日本では武器が売り手の言い値で売れている。……輸入額の五分の一は武器弾薬である」と報告している。これを見ても相当に売れていたことは確かである。
鳥羽・伏見の戦後、新政府軍が購入した銃の記録である「各藩銃器買入控」や、その他の資料をもとに石橋五郎博士が試算したのでは、次ページの表のようになっている。
明治元年、この一年だけでも十五万六千八百三十五挺、二百三十



「横浜新報もしほ草」(神奈川県立博物館蔵)

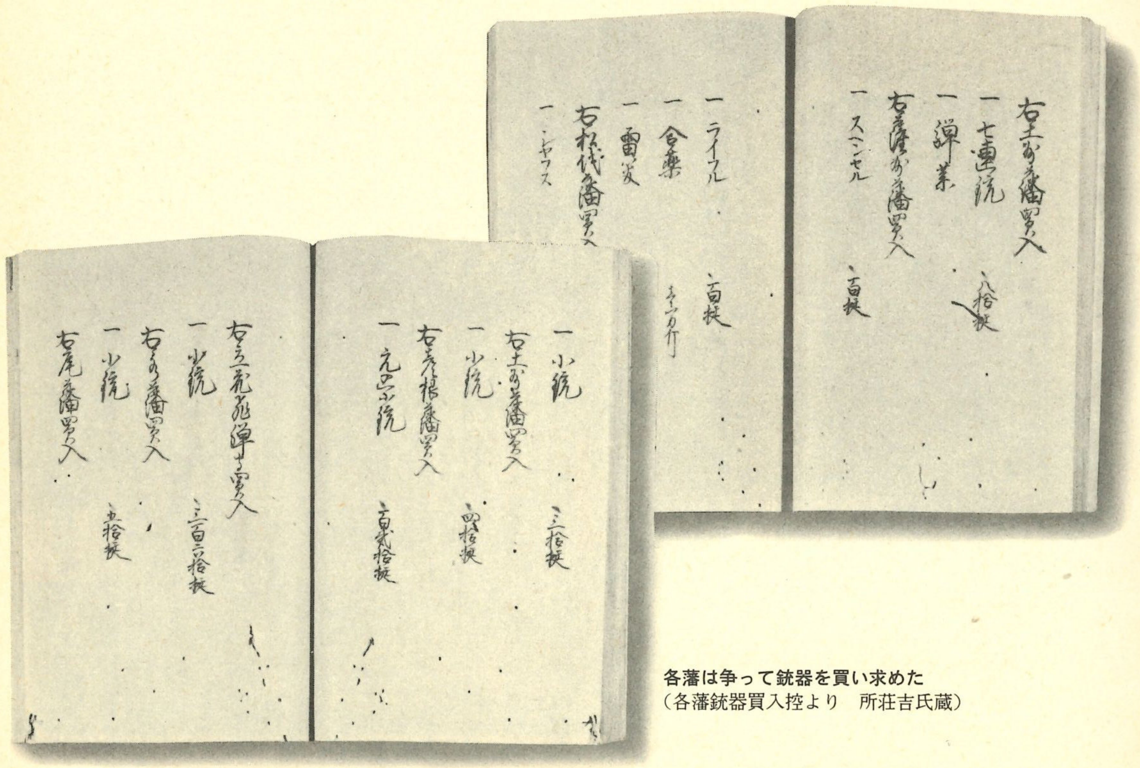
三万四千四十四ドルもの金が支払われている。記録にある分だけでこの数量である。ちなみに、あのガトリング砲は一門、五千両したと言われている。

幕末鉄砲の輸入量

年　代	輸入場所	鉄砲数	金額(ドル)
慶応元年(1865)	長　崎	25,850	197,076
慶応2年(1866)	長　崎	21,620	288,267
慶応3年(1867)	長　崎	65,367	980,505
〃	横　浜	102,333	1,330,329
明治元年(1868)	長　崎	36,514	620,738
〃	横　浜	106,036	1,590,540
〃	函　館	?	51,700
〃	兵庫・神戸	14,285	122,766
明治2年(1869)	長　崎	19,167	287,455
〃	横　浜	58,613	644,743
〃	兵庫・大阪	30,000	495,143
合　計		約50万挺	約660万ドル

戊辰最大の激戦・長岡城攻防

河井継之助、彼の理想は長岡藩を討幕、佐幕のどちらにも組みしない中立の立場に置くことであった。
そのためには強力な軍備を必要とする。
彼はガトリング砲のほか、大量の大砲、小銃をそろえ、藩士にはフランス式調練を行い、長岡藩を武装中立国に築き上げていった。



各藩は争って銃器を買い求めた
(各藩銃器買入控より　所荘吉氏蔵)



激戦のあった朝日山より長岡方面を望む

しかし、彼の願いは新政府に聞き入れられなかった。

慶応四年五月十日、長岡の兵が朝日山の新政府軍に対し発砲した。それは戊辰戦争中最大の激戦と言われた、長岡城攻防戦の始まりであった。

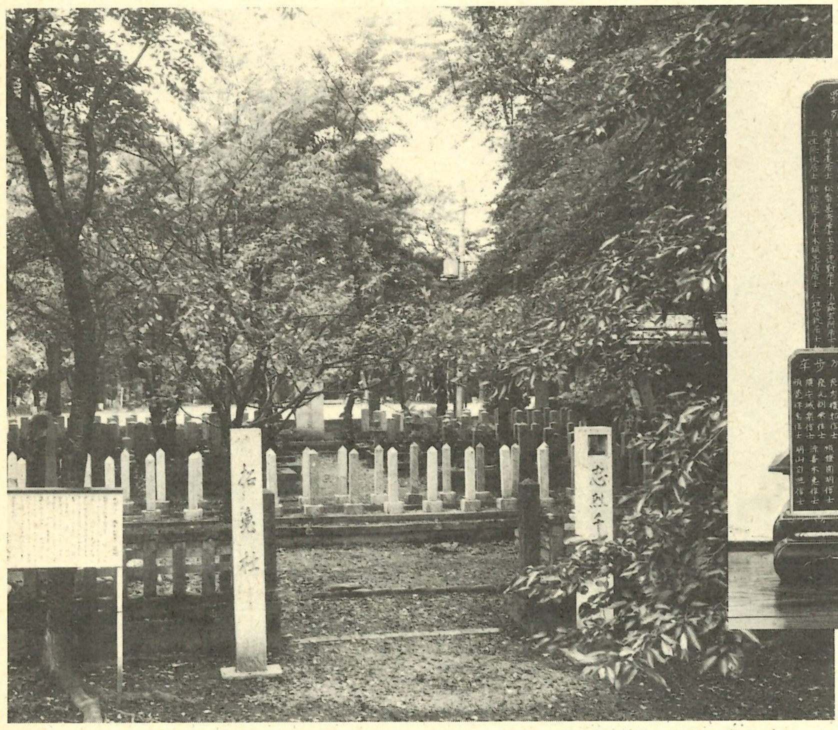
慶応四年の五月三日、仙台に東北の二十五の藩が集まり攻守同盟を結成、そこに会津藩と庄内藩が参加し、さらに越後の新発田藩と長岡藩が加盟して、ここに奥羽越列藩同盟が出来たのである。その中でも、庄内藩と長岡藩が最優秀の軍隊を持っていた。いかに優秀であったか、ほかの戦闘と比較して見るとよくわかる。例えば、白河城の攻防があった白河口の戦い。これは閏四月から八月まで続いた戦いであるが、そのうち、いちばんの激戦であった五月一日の戦闘を見てみると、押し寄せた新政府軍の兵力は六百、同盟軍が二千六百。しかるに戦死者は同盟軍が七百に対して、新政府軍はわずか十人、負傷者が三十八人であった。というのも、同盟軍の方は旧式の鉄砲しか持っておらず射程距離が短く、敵の弾は届くが味方の弾は届かない。最後には白刃をかざして突撃するほか、手段がなかったからだと言われている。

では、いったい両軍の間でどのくらいの火力の差があったのかと言うと、九月二十二日、会津落城の記録を見ると、会津藩には二千九百八十一挺の鉄砲しかなく、一方、新政府軍の方は、薩摩藩だけでも二万五百三十二挺もの鉄砲があり、これに長・土・肥を合わせると五万一千挺にものぼっている。火力の差は歴然としている。

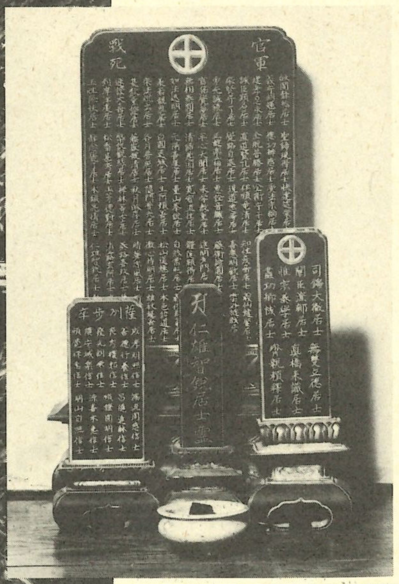
では長岡藩はどうであったか。北越戦争と言われるこの戦いには、長岡藩の千人に加えて、会津、米沢、庄内、仙台、水戸の残党を合わせて約五千人。これに対して政府軍は二万人もの兵力で押し寄せて来たという。火力はというと、かのガトリング砲、当時は「三百六十発元込六ツ穴機関砲」と称していたが、これが二門。大砲三十門。そして、河井継之助は前年の慶応三年十二月、長岡城下の一戸一戸にミニエー銃をあずけて、しかも藩士を三個大隊に編成し、フランス式調練を施していた。この結果、戦死者の数は政府軍が千四十八人に対して、同盟軍が三百八十人。ほぼ互角の戦いをしている。いかに長岡藩の火力がすぐれていたか、いい証拠である。

この長岡藩の活躍の裏に、一人の怪商がいた。エドワルド・シュネルである。ガトリング砲をはじめ長岡藩の火器はすべてこのシュネルから購入したのである。シュネルとはいったい何者なのか。

シュネルは一種伝奇的な秘密性を持っている。第一どこの国の人物なのかもわかっていない。「私は氏も素性もないプロシアの一市民です」と言ったこともあるし、「私はトルコ人の血が入っていてトルコ人だ」とも、時には「オランダ人」だとも言っている。ドイツ語をしゃべり、フランス人とはフランス語で話し、オランダ語、日本語も使う。「最初、香港や上海に行って見たが英国に歯がたたず、止むをえず日本に向かった。フランスが幕府に接近し、外交、軍制、経済上の顧問然としているのに対抗して英国は長崎を基地として、薩長を後援している。その鼻をあかしてやるというのが私の情熱の何パーセントかの要素です。」「英国の押す薩長は嫌いだ。徳川大名のために働きたい。」こうした反英



小千谷官軍墓地　長岡藩の猛攻に新政府軍兵士も数多く倒れた



薩摩藩兵士位牌
（小千谷市慈眼寺）


河井継之助にガトリング砲を売ったというエドワルド・シュネル

国感情が、長岡藩をはじめとする同盟軍諸藩に対する武器の援助となっていたのである。シュネルは武器の援助だけではなく、同盟軍の宣伝にもつとめ、北越において京都軍は負けている。河井継之助がおるかぎり、京都政府は北方に手を付けられないであろうと言っている。この宣伝は功を奏して横浜の外交筋は大きく動き、各国とも新潟港に領事館を置くことを決めた。さらに、同盟軍政総督府との貿易の取り決めをすべて新潟港にし、そこに米国、英国、プロシアの領事が赴いたこともあった。だが、新潟港陥落とともに、シュネルの活躍は終わった。以後、同盟軍は銃、弾薬の補給ルートを失い、敗戦への道を進むのである。

河井継之助、秘密兵器（ガトリング）を引いて走る！

五月十九日、長岡城を攻めあぐんだ政府軍は思い切った策に出た。信濃川の渡河である。この年は異常なほどの長梅雨で、信濃


長岡藩士井上貞蔵（長岡市立互尊文庫蔵）



長岡城があったところには今は長岡城趾の碑が建つのみ

川は増水しており、この作戦は無謀なものと思えた。だが、無謀と思えただけにこの作戦は当たった。思わぬところから攻められ、長岡城下は大混乱に陥ったのである。奇襲の知らせを受けた河井継之助は秘密兵器、ガトリング砲を引いて走った。

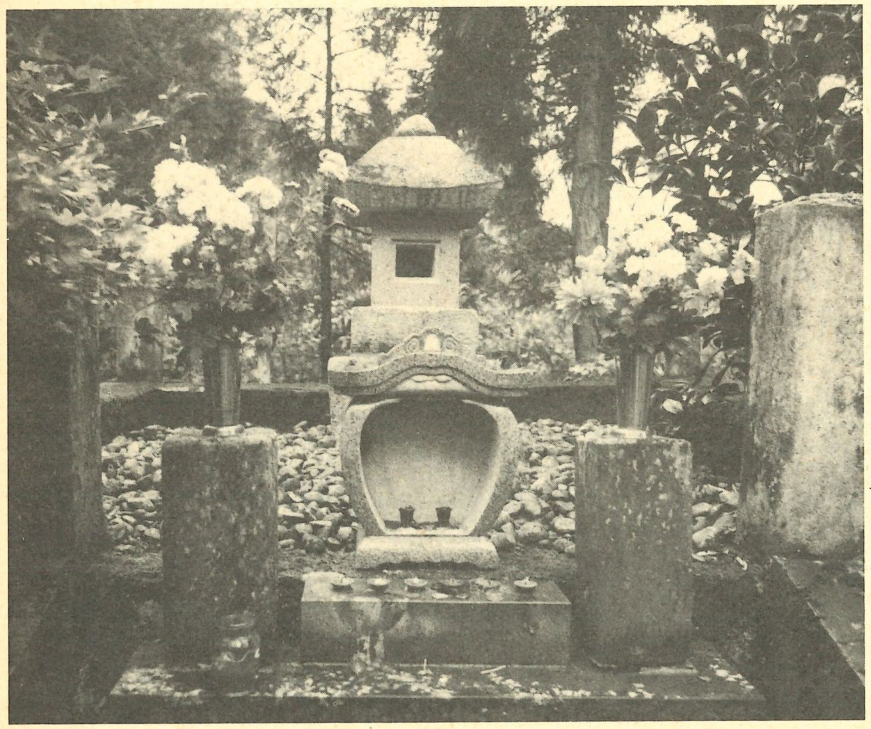
この後、河井継之助は信濃川の近く、大手門前の土堤を楯にして、ガトリング砲を敵に向かって猛射、乱射した。だが、彼自身左肩を負傷、そして長岡城も落城、その二か月後の七月二十五日、いったんは長岡城の奪還に成功するが、その四日後、敵の反攻にあい再び落城。その時、彼は左の膝を負傷し、会津に落ちのびて行く途中、落命してしまう。その間にもガトリング砲は火を吹いたはずである。そして彼、河井継之助は日本最初の機関銃の射手として名を歴史に残すことになったはずだが、その記録は皆無と言ってよいほど残っていない。

――このような鉄砲とか大砲というものは、一つの非情な運命みたいなものをいつも持っているような感じがいたしますね。

大薮　そうですね。

――このガトリング砲のそうした一つの運命みたいなものは、どのようにお感じになりますか。

大薮　そうですね、やはりアンラッキーと言いましょうか、不運の銃の一つですね。リチャード・ガトリングは南軍のシンパであると疑われて、南北戦争にも結局北軍に採用されないだけでなく、保守的な南軍にも相手にされなかったわけでしょう。日本に来たときには長岡藩ですね。しかも、それが城のちゃんと所定の位置に据えつけたところから発射できたら、もっと効果が出たのですが、奇襲攻撃の時に使

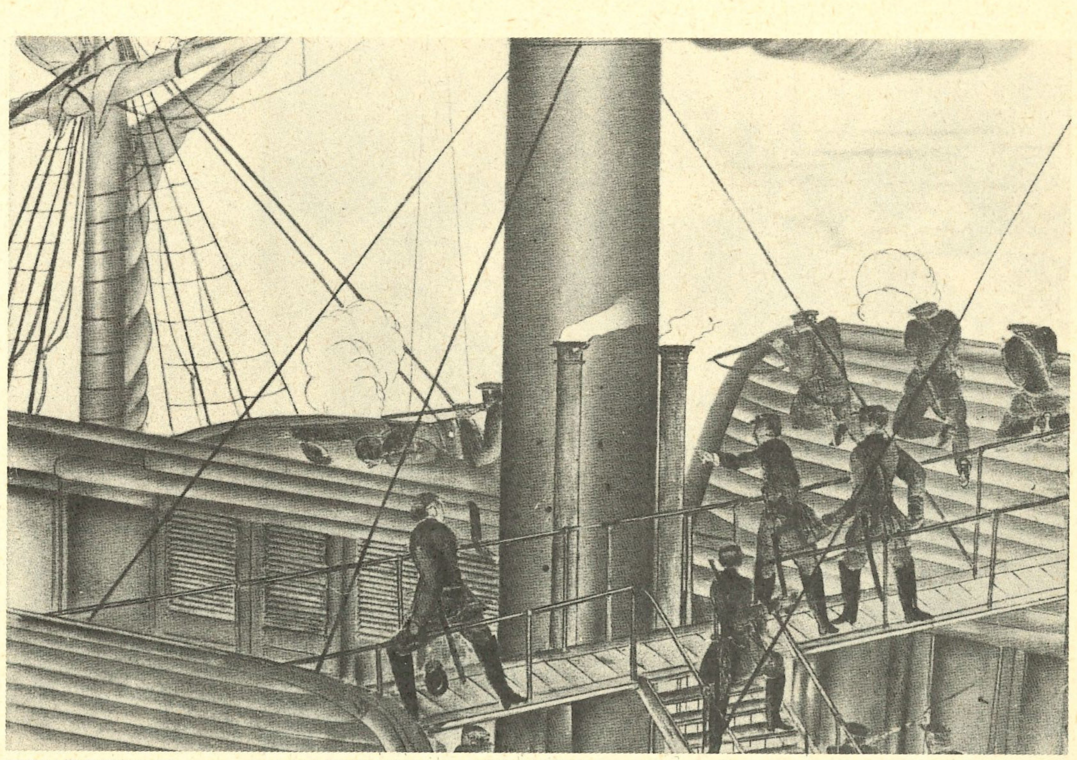

只見町塩沢の医王寺にある河井継之助の墓

ったもので、まあそれほどの働きも見せず……。

——ガトリング砲の記録がないということなのですが、これをどうお考えになりますか。

所　やはり戊辰の役の中で、それほど華々しい働きをしていなかったということですね。いちばんの問題は、長岡でもそうなんですが、一種の固定砲架で、攻めて来る官軍が特に薩摩とか長州というのは英国式の調練を受けており、ライフル銃であるために散兵戦法でやって来ますので、そこに戦術的に言いますと一時代前の戦争なら使えたガトリング機関銃を持って来ても効果はない。ですから河井継之助自身が使ったというのは、それはロマンとしてはおもしろいでしょうが、横浜で買い込んでだれにも見せないで内緒で隠しておいた。それを戦場で河井がだれにもさわらせないで自分で撃った。これも一つ問題があると思うんですね。やはり、長岡藩兵にガトリングというものを実際に見せて、それの操作法というものの中から、それを中心にした戦術というものを考えればいいのですけれど、ゲベール銃を中心としてきたなかにいきなり新兵器を持ち込んで来たって、混乱するだけで効果はなかったと思いますね。そういう点もあって記録に残らなかったのだろうと思います。

あとは明治二年なのですが、宮古湾の海戦で、ガトリングはたいへんな効果を果たすわけです。これは幕府の回天という船が中心になりまして、新政府がアメリカから買い、後に東（あずま）という名まえに変わりましたストーンウォール号をぶん取ろうということで宮古湾に突入したのですが、たまたま舷側の高さが回天の方が二メートルほど高いとこから、接舷できない。さらに回天が外輪船であったことから、水車が邪魔になって一部分だけしか近寄れず、接舷した一か所から二メートル下へ飛び降りるしかない。そこへガトリングの照準を合わせれば、非常な効果が出るわけです。そういうことで、せっかく新選組の土方歳三をはじめ勇敢な幕軍が回天には乗っていたのですが、目的を果たせず、敗走しなければならなかった。ただそういう効果をあげたにもかかわらず、もともと船に積んでるガトリング砲はあくまでも補助兵器であって、水雷艇とかそういうものを防御するためのもので、海戦というのは船と船の戦いですから、船対人間の戦いというのはあまり重視されないし、ただガトリング砲で追っ払ったという一言で済んでしまっているのではないか。そのように思われます。



回天の艦長甲賀源吾、ニコールらが宮古湾海戦で指揮する様子が描かれている



宮古湾海戦には新選組土方歳三も参加した

——河井継之助にしても、江戸から逃げるとき、ガトリング砲をあわててシュネルの商船に乗せまして、新潟に上った。そして長岡に持って来てすぐ戦争というわけですから、ガトリングの訓練をしているひまというのはほとんどなかったのでしょうね。

所　そうですね。兵隊に撃たせて自分は指揮しなければならないのに、自分が機関銃手になっているようでは、これではちょっと勝利はおぼつかないと思いますね。

連発銃の登場で変わる戦争の仕方

河井継之助が死んだ後も長岡藩の戦いは続いた。長岡藩が降伏したのは、会津落城の三日後、九月二十五日のことである。この時没収された長岡藩の武器の中には、ガトリング砲はなかったという。ガトリング砲は、五月十九日の政府軍、長岡城攻めの折、忽然と現れ、そして消えてしまったわけである。

長岡城の攻防戦に参加した政府軍兵士の中に村田経芳がいた。彼は戊辰戦争後、外国から渡って来た種々の銃の長所を取り入れた小銃を作り上げた。村田銃である。明治十三年、日本陸軍はそれ

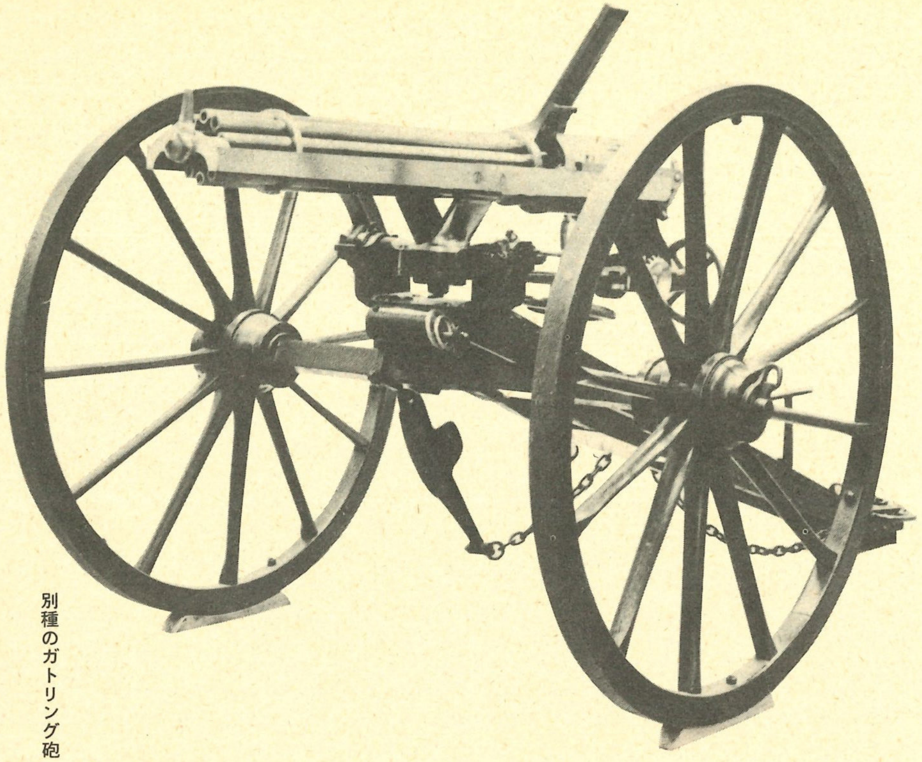


銃を製作するだけではなく射撃の名手でもあった村田経芳

まで戊辰戦争時に輸入された洋式銃を廃止、村田銃で統一することに決定した。そして明治十九年村田銃で装備された近代陸軍が誕生したのである。

―― このガトリング砲というのは、極めて短期間に終わってしまった銃なのでしょうか。あるいは、世界的に見て、ある程度の効果をあげた銃なのでしょうか。

所 世界的に見てというと、これだけガトリングの名声が残ったということは、造兵家の長い夢であった連発機構が実現されたということでしょう。しかし、十九世紀後半というのは戦闘様式がどんどん変わりつつありますから、やはりガトリングでは重量があり過ぎて歩兵の携帯兵器には適さず、かといって砲兵としては口径が小さくて破壊力はなく、射手位置が高いため狙撃されやすい欠点を持ち、敵砲兵の餌食となることから、マキシムとかホッチキスといった単銃身機関銃が生まれたのだと思います。しかし、このガトリングのような多銃身回転式というのは高速の連発が可能ですから、現在の自衛隊機に積ま



別種のガトリング砲

れているバルカン砲はこのガトリング式で、銃身ローターを電動機で回転させて超高速の連発をするように、その構想は決して悪いものではなかったと言えます。

―― その発想はずっと残っている。しかし回した感触ですが、おもちゃみたいな弾が出て来るのではないかという感じがするのですが、たいへんな弾の量でしょうね。

大薮 そうですね。やはり戦闘の場合は、興奮状態と自分の命が怖いので相当の量がいるわけでね。米軍の記録によりますと、第一次大戦で相手――ドイツ側ですが、それを死傷させるのにだいたい七千発くらい必要としまして……。

―― 七千発で一発当たる……。

大薮 一発当たるというわけですね。それが第二次大戦になりますと二万五千発に一発、朝鮮戦争で五万発に一発、ベトナムになりますと、これはひどいもので三十万発に一発などと言われております。

―― そんなに弾というものはいるのですか。

大薮 補給がたいへんなものですね。しかし、ベトナム戦での米軍は、パラシュートを付けた弾薬箱をヘリコプターから投下します。何しろ動くものがジャングルの中でチラッとでも見えたり物音がしたら、銃身が焼けるほどフル・オートで撃ちまくってますからね。相手は野犬だったりして……。それに、三十万発という裏には、横流しされたり、荷抜きをされたり、退却時に放棄したのも含まれていると思いますが……。いずれにせよ、一万発も射てば当然ながらそのあいだに銃そのものの方もボロボロになりますからね。そういうメーカーは大もうけをしますね（笑）。

所 ナポレオン時代の戦争では、先ほどのゲベール銃のような鉄砲



ベトナム戦争のアメリカ軍兵士（ワイド・ワールド・フォトス提供）

ですが、八十発に一発だそうです。

——ほう。では、前の方がいいですね。

所　それはいいわけですね。丸玉を発射する滑腔銃の命中精度はせいぜい数十メートルと短いものですから、できるだけ近づいて撃たなければならなかった。近くなればなるほど命中の精度はよくなるということですね。必中の方法は、銃剣が敵の体に接したときに撃つことだといいます。ですからライフル銃以降というのは、直接射撃でも三百メートル、最大射程は千メートル以上にも射程が伸びますから遠くの方から撃てるわけです。敵の姿が全然見えなくても撃ってます。

大薮　弾幕ですね。

所　射程距離が伸びる、連発でたくさん弾が出るようになる。となれば、有効な弾幕を張っておればいいのだ。そのなかに飛び込んだ人間が怪我をする。

大薮　運が悪いわけですね。

——そうですか。私ども鉄砲というのは、あくまでもひとりの人間をパッと倒すことに主力が置かれていると思っていたのですが、戦術的にはやはり違うのですか。

所　よく鉄砲の有効射程と言いますね。例えば向こうの橋を敵が渡って攻めてこようとしている。すると弾の威力のない場合でもバラバラとあられのように弾丸が落ちて来ますと、気持が悪いから敵の兵隊は渡らない……となればじゅうぶんに有効であったと言えますから、必ずしも人馬を殺傷するのが有効というわけではないわけです。目的を果たせればいいという考え方もできます。

——なるほど。するとその銃の発達のいろいろな目的はあくまでも一丁の銃に限ってそうであって、戦術的にたくさんの銃になれば別のことになってくるわけですね。やはり命中率とかのほかに。

大薮　そうですね。ですから、今全部軍用は自動式になりましたね。ほとんどの国は。正確に言うと半自動のセミ・オートとフル・オートの全自動の切り替えスウィッチが付いているやつですが、狙撃兵が使う場合には、やはりスコープ付きのボルト・アクションで、遠距離から姿を見せずに正確に敵を殺すという……まあ、それが二つの流れと言いましょうかね。

銃から見た戊辰戦争

——このガトリングというのは、結局日本では長岡藩で終わってしまったのでしょうか。

所　重量があっても軍艦に搭載するにはだいじょうぶですから、アメリカから購入した船には、水雷艇を駆逐するためにガトリング砲が積んであったように、明治初年の日本海軍ではこれを装備していました。

——明治初期の日本陸軍はこれを使ったということはないですか。

所　使ってないですね、明治初期は。日清戦争で清国軍隊は使っておりますけど、日本では使っておりません。誕生間もない日本の軍隊というと、弾薬も何もかも全部輸入しなければならないから、当時の財政では追いつかないでしょう。弾丸の消耗の量の大きさというのは想像以上のものでしてね。だいたい戦いの始まる前の想定の弾薬量というのは、作戦の十分の一くらいの段階で足りなくなってしまうのです。

——そういうもんですか。

大薮　ですから、日本軍なんか第二次大戦にしろまだ自動ではなく

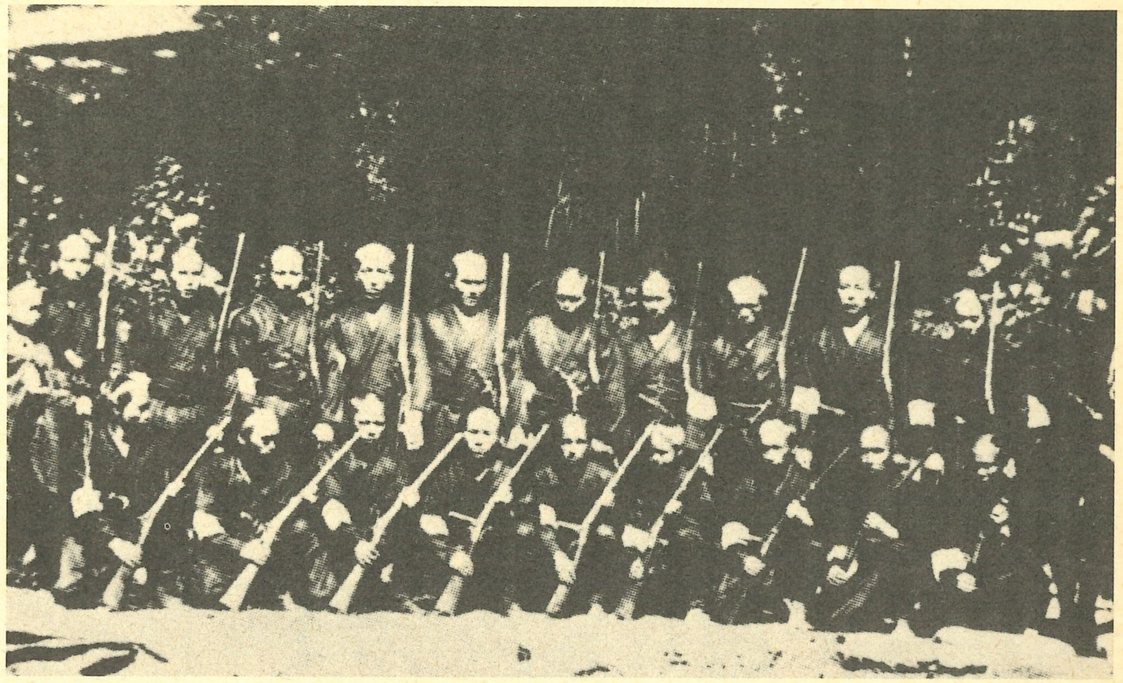
継之助の従者松蔵の秘話

ガトリング砲のわが国初の射手であった河井継之助。継之助は、信長や秀吉、龍馬など、大衆が誰でも知っている歴史上の英雄ではない、いわばクロウト好みの人物だったが、彼の名を一躍世にひろめる役割を果たしたのが、司馬遼太郎『峠』である。『峠』の河井継之助は、侍の典型、人間の芸術品として見事に描かれているが、司馬遼太郎は、『峠』以前に、河井を主人公とした『英雄児』という作品を書き、「何の得るところもない戦さに、かれは長岡藩士のすべてを投入し」、長岡藩士から河井の死後「墓碑が出来たとき、墓石に鞭を加えにくる者が絶えなかった」、「墓碑はその後、何者かの手で打ちくだかれた」と、河井のべつの面を語っている。

『峠』のあとがきで、司馬は、「かれは死に、その死体は、かれの下僕松蔵の手で焼かれた（略）。松蔵は灰のなかからたんねんに骨をひろいあげた。松蔵はそのとき泣きながらいった。『あのような旦那さままでございますもの、もじ骨のひろい方が足りないで、これ松蔵や、貴様のそこつのためにおれの骨が一本足りぬ、などとあの世に行ってから叱られては松蔵は立つ瀬がございませぬ』といったという」と印象的にしめくくっているが、七十九年の十一月に、長岡郷土史研究会が発行した『長岡郷土史』のなかで、郷土史家石川徳男氏が、大正期に長岡の僧侶が、松蔵の死の床のなかで聞き書きをとった直話を、興味深く紹介している。

——旦那さま我れを強く熟視して曰く、「汝、我れを刺し得るや、否や」と。我れは驚き「否」と答えるや、旦那さま我れを一喝せり。我れ意を決し「急あらば敢て刺さん」と答えれば旦那さま微笑し、即陣刀を我れに授け、「急あらばここを」と咽喉の急所を示さるる。

のちに我れ看護怠らざるも、数日を経て旦那さま遂に没す。我れ涙を拭い、沐浴し、髪を切り、茶毗に付す。この時敵早大挙襲来す。我れ黙々と骨を拾い、これを大風呂敷に包み、背負いて走る。白骨の火気なお去らず、背が燃えんとするを覚えると、鬼気迫る松蔵の様子を描いている。このとき松蔵、十歳。のちに松蔵は中風に倒れ長い間病床にあったが、大正八年一月十一日に波乱の生涯を閉じたという。八十一歳だった。



東北諸藩に比べ新式銃で装備されていた薩摩藩鉄砲隊

て手動のボルト・アクション、つまり三八式や九九式を使ったわけですね。やっぱり弾薬の補給の問題があったと思います。それに対して米軍の主力は、セミ・オート、つまり機関銃のように引き金を絞りっ放しにすると次々にタマが吐き出される全自動のフル・オートではなく、一発ごとに引き金を引き直す半自動のＭ１（ワン）ライフルとＭ１カービン、それにセミとフルの切り替えが出来るＭ２（ツー）カービンでした。

所　ですから戦争というものは、食糧・弾薬が尽きて落城し、あるいは敗軍するんであって、鉄砲がなくなってというケースはないんですよ。西郷軍がどうして西南の役で負けたか――これも弾薬の補給。東北軍も弾薬の補給。肝心の弾薬がなくなってしまった。これはもう消耗して行くものですから、供給がつかなければ戦争は続けられない。第二次大戦で日本が負けたというのもそれと同じことで、基本的には経済力の問題ということになりましょう。

――　鉄砲だけ進歩してもダメなんですね。河井継之助なんか最初に長岡城の所で撃つわけですが、まわりで弾を運んでくれる人が六、七人パタパタと倒れてしまいますね。それで手が上がってしまったということが記録に残っていますね。

大薮　ですから、現在はだんだん軍用銃の弾薬の口径が小さくなって来ています。というのは、ひとりで運べる量を多くするには口径を小さくし、薬莢も小さくしまして、火薬量を減らして、その代わり一発ごとの重量が軽い上にかさ張らないから、ひとりが何百発も携帯して自由に行動できるようになって来ましたね。

――　銃から見た戊辰戦争というのは、どうごらんになりますか。

所　日本に多種類の鉄砲が入ったということのなかに、いわゆる産業革命以後のヨーロッパの科学技術の進み方というのですか、そういうもののサンプルという形でひとつは見れるというのです。それからもうひとつは、日本の近代化というもののなかで、ヨーロッパの最新技術のいろんな種類の作品が日本に入って来たことによって、別の意味で刺激を与えられたのだろうと思うんですけどね。ちょうどそれより少し前になりますけれども、黒船がやって来た前後くらいから反射炉が作られたり、旋盤だとか、フライス盤だとか、ボール盤だとかいうような工作機械が入れられ、それを運転する動力に水車を利用するように、それまでの日本の手工業的な作品というものから、マニュファクチュアの形を示すようになってきている。それがちょうど戊辰戦争の時代ですね。幕末から明治にかけての日本の工業というのは、小銃あるいは大砲を製作するためにヨーロッパからいろいろな工作機械を入れたり火薬製造設備を導入したのが、今日の日本の工業の始まりということになるのです。そういう意味で見て鉄砲が日本の近代化を



長岡藩士松井策之進と銃を持つ兵士（長岡市立互尊文庫蔵）

村田経芳のこと

なぜ幕府軍が戊辰戦争で勝てなかったのかという問いに、林羅山の朱子学が邪魔したのだというのがある。徳川家康以下、四代まで将軍に仕えた御用学者林羅山が、武士道に反する飛道具など使用すべきではないと説いて回り、時代の先端をゆく武器に対する諸大名の関心をそらせたのだという。それは徳川幕府の政策そのものだったのだが、それに忠実に従った東北諸藩が戊辰の戦で敗北したとは笑えない話である。

この戊辰戦争に勝利した官軍・新政府軍の武器も、当時の死の商人を通しての寄せ集め的な武器が多く貧弱であった。また輸入小銃そのものが、西洋人の体型に合わせて作られていたから、少々重すぎた。

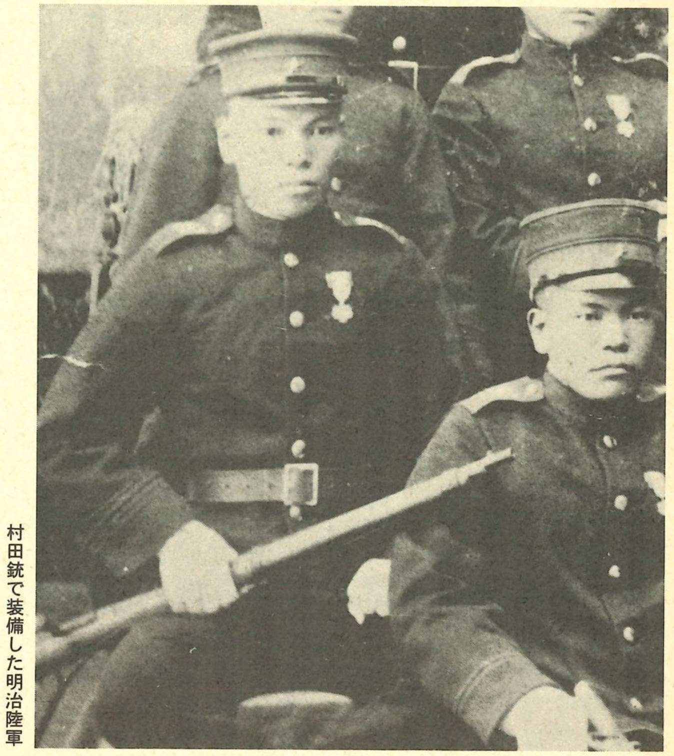
明治四年に日本陸軍ができ、西南戦争に勝って武力の全国征覇を成しとげたあとに早急にしなければならぬことは、兵器の統一であった。ここに登場するのが、日本近代兵器の改革者・村田経芳である。

彼は天保九年（一八三八）、鹿児島に藩士の子として生まれる。のち戊辰戦争に従軍。明治政府成立以来、武器の国産・統一を考えていた大山巌が砲術家村田経芳に小銃の開発を示唆、明治八年にヨーロッパ視察に出かける。

帰国後、西南戦争に従軍、それ以後研究を重ね、ついに十三年式村田銃を製作する。村田銃はその後も改良を重ねたが、日清戦争では十八年式村田銃で武装した日本軍が清国軍を破ったのであった。

村田はまた射撃の名手でもあった。ヨーロッパ視察の途路も各地で射撃競技会に出、射撃王・村田の名をほしいままにしたが、明治十一年六月三日に行われた村田の天覧射的練習の新聞記事には、「有名なる村田少佐は、銃を把て射場に臨まれしが、九発までは皆中せしが、十発目にいたりて撃外されたり、其とき少佐は銃をさしおきて御前に候ひし侍補の一人に向ひ、某は昨年九州の乱に、右の肩口へ銃創を負ひしが、其弾今に抜けずして、此ごろ腋下に止まり、発射の際誤って台尻のこれにふるるなれば、肉を断る如き痛みを発して手元の狂ひ、唯今の如き意外の不覚を取ることの候、されば近ごろ恐れ多き次第ながら、聖上のおん方へ背面を向け奉りて、膝台にて打放し度く存ずるは如何」として、今度は十発十中であったと、村田の妙技をたたえている。

神様のごとき村田は、明治二十九年、陸軍中将に昇進、男爵を授けられ、大正十年八十三歳で死んだ。



村田銃で装備した明治陸軍

推進させたところに興味がある時代だと思うんですけれどね。

―― 人間にとっては残念なことですが、武器が文明を発達させたということは……。

大薮　それは事実ですね。戊辰戦争の時なども、いろいろな外国銃で日本人同士が戦わされてしまった。洋式銃の実験場になってしまった。悲しいことですが、そういうところがありますね。

村田銃で装備された明治陸軍が誕生した明治十九年、横浜の港を出航した貨物船があった。積荷はそれまで日本陸軍が使用していた旧式銃である。この船の行き先は、諸外国の侵略に悩み戦争間近と見られていた中国の港であった。

そして明治二十八年の日清戦争の折、日本兵と戦った清国兵士のなかに、これら日本の廃銃を持った兵士の姿が見うけられたという。

歴史をつくった兵器

所　荘吉

兵器は攻撃兵器と防御兵器に分けられ、さらに攻撃兵器は白兵と投擲兵器に区別される。そして兵器の進歩というのは、この攻撃兵器と防御兵器との戦いの過程にほかならないといえる。攻撃兵器が強力になれば防御兵器が堅牢になり、それを打ち破るために攻撃兵器は一段と強いものが求められ、当然のことながら防御兵器は改良が重ねられる。この繰り返しが兵器の発達と称されるものである。

白兵といわれるものは石斧・剣・矛・槍といった人間の筋力の働きによるエネルギーによって扱われるもので、原始時代から現代に至るまで長い歴史をもった一般的な兵器であったが、軽量自動火器の進歩によってその役割を失う日は遠くない。

また弓とか弩のような火器以前の投擲兵器も、人間のエネルギーを蓄積して一挙にこれを放出させるもので、兵士のもつ自己固有の動力を有するに過ぎず、したがって兵器の威力も有効範囲と同様にきわめて限られたものであった。これは中世以前の巨大破壊兵器であった投石機や弩砲とて、同じ作用を利用したものである以上、文学的表現は別としてもそれほど大きな威力のあるものではなかった。

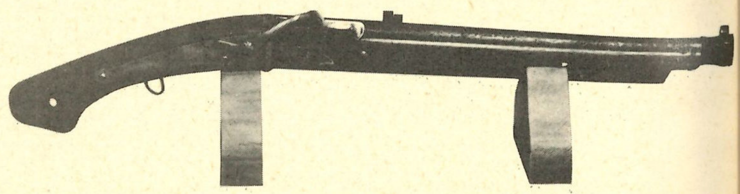
このため、これらの兵器による衝撃力から身を護るのは僅かなことで足り、木の楯や皮とか金属で作られた甲冑が充分その役を果たしてきた。

それでも金属の発見は、木や石に代わって鋭利な刃をもつ実効的な兵器を生み、さらに兵士を保護する甲冑が作られるようになると、この二つの兵器によって投槍や投石を防ぎながら敵に肉薄して戦うことができるようになった。楯を腕にし甲冑をまとい短剣を手にしたギリシャの重歩兵は、紀元前における攻防両兵器で装備された戦闘員の代表的な姿である。

しかしギリシャ兵のもつ青銅製の剣は、未開民族が用いていた石や尖を火であぶって硬くした木製の槍に比べて格段に秀れたものであったものの、金属の抗力が弱いため短くて重いものにならざるを得なかった。

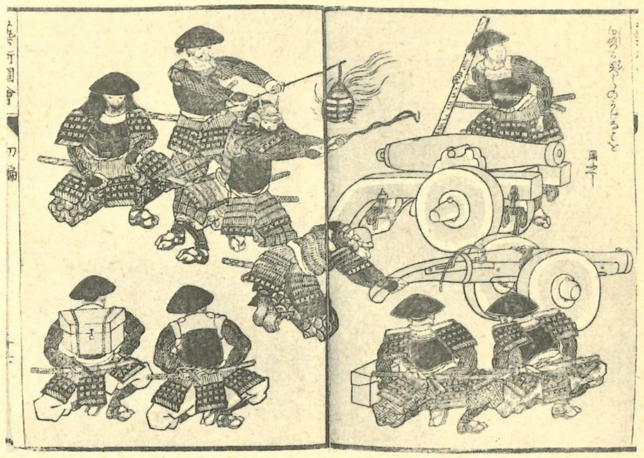
これに続く鉄の発見は文字通り画期的なもので、とくに製鋼技術の進歩と当時の社会形態より生まれた戦術思想の発達はすさまじく、紀元前一二〇〇年から一〇〇〇年の間に鉄製武器を携えた中央アジアの遊牧民によるギリシャ諸都市の攻撃は、青銅時代の終わりを告げる重大な出来事であった。

マケドニアのアレキサンドロス（紀元前三五六〜三二三）はサリサスと呼ばれる十八フィートの長槍を備えた兵士をもってギリシャ式の方陣を編成し、この針鼠のような密集槍隊の突撃



火縄銃（河井記念館蔵）

砲術を伝える『芸術図絵』



によってダリウス三世のペルシャ帝国を征服し、ヘレニズム化された世界帝国を建設せんとした。

彼の版図は、東は遠くロシアから南はインドの奥部にまで及んだが、その死によって帝国は分解した。

このマケドニアやカルタゴと戦いを交えてきたローマは、軍の編成をギリシャにとっていたが、やがてカルタゴの名将ハンニバルによる用兵の妙と騎兵の戦法を知るに及んで、騎兵の育成に力を入れ、紀元前二〇二年、ザマの戦いでスキピオ・アフリカヌスが率いたローマ軍は、ついにハンニバルを破ることができた。

ローマの軍隊はとくに新しい兵器を開発したというわけでもないが、歩兵・騎兵ともに秀れた機動力をもち、統一された指揮の下で連携のとれた作戦行動をとることができ、しかもローマ軍の防御陣地の構築は整然とした矩形様式の優秀な設計で、攻城兵器としては砲城つち、移動櫓・投石機などをもち、攻城・防御ともに見事な技術を完成させることによって、アレキサンドロスも果たし得なかった神たる王の支配による平和を実現させることができた。

一方甲冑の発達は、これを打ち破る新しい兵器を生むことになった。ゲルマンが使用したフランシスクという両刃の斧や、長い柄の先に小斧を付けたスイスのハルバルドのような武器、あるいは騎馬兵士を馬から引き落とす熊手や幅の広い両手用の剣とか戦斧がこれである。

さらに投擲器についても、力の弱い短弓から射手が全身の重さをかけて弦をためる鋼製弩が作られ、矢の貫徹力が強くなるに従って甲冑は重さを増し、百キロ近いものまで現れるようになった。

このような目方になると騎乗者しか甲冑の着用はできなくなり、その乗馬にも馬鎧を着けて援護しなければならなくなったが、火砲が戦場に現れるまで、装甲した重騎兵は兵士として最高のものとされ、騎士が幅をきかす時代が続いた。

アジアにおいては、早くから中国人は戦争の技術である戦術や用兵を形式的な科学とみなし、高度に知的精密なものにまで発展せしめ、兵器の開発とともに強い関心をもっていたが、万里の長城の建設にみられるように本質的には好戦的な民族ではなく、それらの軍事技術はモンゴルの軍隊に移され、恐るべき威力を発揮することになった。

その最大のものが七世紀頃から知られ、紀元一〇〇〇年頃には兵器として登場した火薬である。それは現代においても核分裂によるものを除く最も強力なエネルギーで、この火薬兵器の出現によって世界の地図は大きく塗り変えられることになった。

中国人によって発明された当初の軍用火薬は、炭素源を植物油によったためペースト状で、焼夷剤として用いられたり、密閉した容器に入れて点火し投擲される兵器であったが、モンゴル軍の遠征によって開かれた東西の交通路を経てヨーロッパに伝えられる途中で粉状となり、筒形火器が生まれた。

このかつてなかった大規模な組織的破壊力をもつ火器が、ヨーロッパに紹介せられた年次は明らかでないが、少なくとも一二四九年以前であったことはイギリス人ロジャー・ベーコンの記録によって知られる。そして一三二六年には箭を発射する「火壺」の絵が英国の写本に載っており、一三四六年のクレシーの戦いにおけるカレーの攻防戦で大砲が使用されたといわれるように、この新しい兵器を有効なものにするのにヨーロッパ人はあまり時間をかけなかった。

事実、一四〇〇年代の末には、粗末ではあるが後装砲を含めて今日知られる殆んどの火器が製作されるか考案されている。さらにこの時代に最も特筆されるべきものに「火縄銃」の発明があった。

ヨーロッパに伝えられた最初の火砲は、恐らく中国人が手把銅銃と呼び、アラビア人によってマドファと称された棒の先に筒形火器がつけられたものであろう。この初期の小銃は、照準器も点火機構もなく、発射時にはこれを腋にかかえ、手に持った火縄を直接火門に押しつけなければならないので、命中は粗雑なものとなった。

これが十五世紀の末になると、簡単な銃床とサーペンタインロックと呼ばれるS字形の火挟が考案され、やがてスプリングを利用した火縄式撃発装置となった。この装置によって射手は好機に乗じていつでも発射することができるようになった。

しかし、アルケブスと呼ばれた初期の火縄銃は銃身が長くて重量があるため、支銃杖に依託して発射しなければならず、装填速度はおおむね二分間を要し、しかも雨による影響を受けやすいことから熟練した弓に劣るとされ、イギリスのヘンリー三世は火縄銃の携帯を制限し、弓矢による装備を継続させようとさえした。

大航海時代の主役を演じたスペインでは、この火縄銃の銃身を短くして支銃杖を廃した歩兵銃ムスケットが開発され、アルケブスの初速百メートル、最大射程二百メートルに対して殆んど三倍もの性能がだせるようになった。

一五一五年のマリニャーノの戦いは過去と未来の出会いである。ローマ皇帝と法皇側についたスイス兵はマケドニアの方陣を想起させる矛槍や矛斧兵の密集方陣をもって数世紀に亘りヨーロッパに恐怖を与えてきたが、フランソワ一世のフランス砲兵による連続射撃の前には、三十回にも及ぶ騎士達の勇敢な突撃も空しく、いたずらに屍をさらすことになった。かくて、旧式兵器をもっては、大兵力による密集突撃も連続射撃のまえには脆いものであることが証明されたのである。

これはやや時代が下がるが、天正三年（一五七五）の長篠の役において、織田信長に指揮された大量の鉄砲隊が打ち出す連続射撃は、戦国最強といわれた甲州の騎馬兵を殲滅させ、火器の威力を認識させたことと軌を一にするものである。

誇り高い騎馬武士も彼らが軽侮してきた足軽達が打ち出す鉄砲を前にしては日頃の修練も無力なものとなってしまった。

銃砲が登場してからの最も大きな社会的変化は人間が平等になれたことである。というのは、火器以前の兵器というものが人間固有のエネルギーによって取り扱われるものである以上、生まれついての個人差は如何ともしがたく、勇者は支配者となり、非力のものは隷属せざるを得ない社会であったが、火薬のもつエネルギーはその個人間の差を埋めたのである。それはフランス革命を生み、アメリカの独立を成功させ、ロシアのツァー政府を倒したのみか、戦場の華であった英雄豪傑のロマンを永久に奪うものであった。

しかしこれらのことは科学技術を理解し、工業がマニファクチュアの段階にあったヨーロッパ諸国の間だけのことで、その段階に達していないアフリカ・南北アメリカのみならず人口稠密なアジアの文明国家ですら、僅かなヨーロッパ人が携えてきた銃砲——その起源はアジアにあった——のまえに屈せざるを得なかった。もし彼等の保有する武器が中世以前の矛槍や剣に過ぎないものであったならば、恐らく世界の地図は十五世紀当時と大きな違いはなかったと思われる。これによって世界は、植民地国家であるヨーロッパと被植民地である自余の国々に塗り変えられることになった。そしてその関係に終止符が打たれるのには四百年を要したのである。

今日、世界がかかえる最も重要な問題である南北の対立、この先進国と後進国の断層は、かつての植民地国家と被植民地との間につくられたギャップであり、今なおその溝は埋められず国際緊張の発火点となっている。

このような世界の現状を形成し、人類に未解決の難問を与えたものは、はるか七世紀の昔、不老長生の妙薬を得ようとした道士の失敗による処方例、「硝石と硫黄を蜜で練ったものは火に近づけると怪我をし、家屋まで焼くこともあるから注意せよ」が作り出したものである。

（銃砲史研究家）

村田銃から三八式歩兵銃まで

岩堂憲人

明治維新で日本は近代的統一国家として再出発したのだが、その国策は富国強兵であった。なによりも近代化された陸海軍が求められたのである。

建軍当時、陸軍の主要戦力は歩兵であり、その中枢兵器は小銃、つまり歩兵銃と考えられていた。歩砲騎のいわゆる三兵戦術はナポレオンによって完成の域に達してはいたが、しかもなお陸戦の主力は歩兵とする考え方は不動であった。したがって、戦力となる歩兵銃は、その陸軍の、ひいてはその国の軍備のシンボル的存在でもあったことになる。

このような兵器のいわば心理的な意義が、旧軍独持の精神主義と結合し、例の「三八式歩兵銃は陛下の銃」的な意識が育ち、兵士の兵器に対する感覚は、他に例を見ないようなものとなっていたのだろうと考える。

それはともかくとして、明治建軍当時の新生陸軍の小銃（歩兵銃という言葉も生まれていなかった）装備の実体は、よく知られているように輸入外国銃の寄せ集めであった。幕末に各藩が思い思いに輸入したのだから、これは当然である。

そこで新旧、無慮数十種に及ぶ輸入銃の中から質と数を考慮して、シャスポー（仏）、スナイドル（英）、ドライゼ（独）、エンフィールド（英）、アルビニー（ベルギー）の各銃が選ばれて各部隊に配付された（カッコ内は原開発国）。それでも五種が混用され、当然弾薬の互換性もないので使用する側は大変だ。そしてこの欠陥は西南の役でじっくりと味わうことになる。

ところで幕末もすえ、倒幕の戦雲が日本をおおいかけるころ、九州鹿児島で一人の薩摩藩士が洋銃を参考に新式銃の研究をしていた。その名を村田経芳（つねよし）という。

経芳の研究は、彼が戊辰戦役に従軍したことで中断されたが、維新後の明治八年一月、射撃術、小銃製造技術などの視察にヨーロッパに派遣されることとなった。

これより以前、陸軍中佐となった経芳は造兵司（砲兵工廠）でシャスポー銃の改造と新銃の研究を担当していて欧州出張を命ぜられたのである。これは明治陸軍が自国開発の小銃を取得するためへの公式な始動であった。そして同年、政府は小銃採用委員会を設けている。

村田中佐は同年十一月各国を巡って帰朝し、ついで西南の役で各国の銃を実戦で使用して設計の参考とし、シャスポーに似た後装（元ごめ）単発の新型銃を開発、これが明治陸軍の国産第一号銃として採用されたのだった。明治十三年のことであり、十三年式村田銃と命名された。その後十六年に銃身の短いモデルがつくられ十六年式村田騎兵銃となり、さらに十八年、十三年式を多少銃床を短くしたり、長すぎた銃剣を短くし、木金部の接合部を強化するなど改良が加えられた。これが十八年式で、このモデルから村田歩兵銃と命名されている。小銃は歩兵銃（ライフル）と騎銃（カービン）の二種装備となったわけだ。なおかなりの数のシャスポーが村田式に改造され部隊に配付されてもいるが、設計にあたって村田はこの点も考慮に入れたことと思われる。

ところでこの間、世界の軍用銃は連発式に移行する動きを急にしていた。露土戦争など各地での戦いで、連発の単発に対する圧倒的な優勢が実証されていったからだ。当然な話だが、事実を突きつけられぬと保守的な軍関係者の頭は切り替えられなかったようだ。



18年式村田騎銃（靖国神社蔵）

13年式村田騎銃（靖国神社蔵）

この動きに遅れまいと、村田も連発式モデルを開発し二十二年に採用となる。二十二年式村田銃で、やはり短銃身の騎銃が二十七年に制定されている。連発になった村田銃は、銃身の下側に並行して筒状の弾倉をつけた、いわゆるチューブ・マガジン型で八発の弾薬がたて一列にこめられる。銃剣も十八年式までは銃身の右横に向けてつけられていたが、下側にたて向きに着剣されるようになった。



村田経芳

注目したいのは口径で、十八年式まではシャスポーと同じ十一ミリだったのを、二十二年式から一挙に八ミリにしたことである。これはそれまでの黒色火薬から無煙火薬に発射薬をかえ、細長い弾を高速で発射し、より延伸した弾道性能をえるためである。当時欧米先進国でも黒色火薬を主用していたことを知れば、これは画期的なことであった。

しかし、ドイツのモーゼルに範をとった銃の方は軍用として成功作とはいい難い。そもそもが一発ずつ弾薬を装填しなくてはならないチューブ・マガジンは軍用に不向きであり、価格も高く原型のモーゼルでも過渡的なものとして短期間で消え去っている。それ故二十二年式の生産数は多くなく、日清戦争は十三および十八年式を主に戦われたのだった。

ところでモーゼルだが、村田がチューブ式の弾倉で新モデルを完成した頃、モーゼルは軍用の連発小銃として決定的なモデルをつくりだしていた。これはモーゼルM（モデル）一八八八と呼ばれる銃で明治二十一年にあたる。

M一八八八はそれまでと同様ボルト式だが、弾倉をボルトの下に置き、ボルトを引いて機関部を開放した状態から、クリップ（旧軍では挿弾子と呼んでいた）でまとめられた弾薬五発を、一挙動で装填が可能になった機構であった。つまり三八式に至り、現在でも狩猟用ライフルとして主用されているボルト・アクション連発銃を高度な実用性で完成させたのである。

モーゼルの新モデルは、以後の各国軍用小銃にきわめて大きな影響を与えることとなった。日本を含めて各国の銃器設計者らは、競ってモーゼルの設計を母体に、独自なものの開発に取り組んでゆくことになる。

日本の場合、モーゼル・タイプの新小銃開発は、明治三十年に完成した。この年に採用された三十年式歩兵銃がそれである。開発には東京砲兵工廠長の有坂成章大佐があたったので、以後の日本の小銃は外国で〝アリサカ・ライフル〟と呼ばれることとなった。

三十年式歩兵銃・同騎銃は、日本陸軍最初のモーゼル型連発小銃で口径が六・五ミリ、弾倉は五発であった。当時欧米では口径が、三十（〇・三吋（インチ）＝七・六二ミリ）ないし八ミリが主

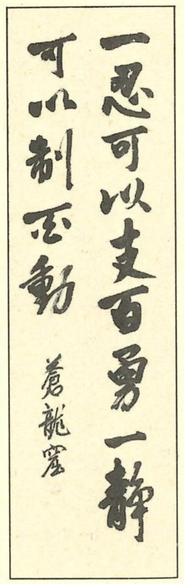
流になりつつあり、これはいかにも小口径だが、はたしてこの小口径は威力不足として将来に禍根をのこしてしまう誤った選択であった。
　が、口径はともかくとして、三十年式で日露戦争に突入してみると、致命的ではないにしろさまざまな欠点があらわれ、それへの対応に苦心しなくてはならなかった。要するに故障が多いのである。この結果として三八式が登場するのだが、それ以前、海軍が村田式にかわる小銃を求め三十年式の改良型を三十五年式海軍銃として取得している。これから見れば三十年式は日露戦争以前に、すでに故障多発の傾向が分かっていたことになる。なお三十五年式への改良は東京造兵廠小銃製造所の南部麒次郎大尉が担当している。
　日露戦争における三十年式の不評で急遽対策がこうじられて設計されたのが第二次大戦末まで使用されることになる三八式歩兵銃であった。基本的な機構には大きな変化はないが、これで日本の小銃も兵器として十分に信頼のできるものとなったといってよいだろう。ただし、口径をそのまま六・五ミリにしたことは別である。
　すでに日露戦争当時より「六・五ミリは口径小にして威力過少なり」と批判がおこっていたのを「敵兵をいたずらに死に至らしめず、戦場を去らしめるのみの人道的」なものと奇妙な理屈で無視した当局は、ここで口径変更のチャンスを逸してしまったのであった。
　一国の軍隊が装備している巨大な数の小銃（機関銃も）の弾薬変更をともなう口径変更は、なまはんかのことで実行できるものではない。そして当時の日本はかなりなレベルの陸軍国となっていたのだった。ここでもし将来戦の様相を見通していたら、口径変更を成功させる唯一のチャンスだったのだが、それを無視、あるいは理解できなかったため、ツケは第二次大戦にまわってくる。それでなくても工業力のとぼしい日本が、大戦中に口径アップに踏み切らざるを得ないという、たとえ米国でも二の足を踏むようなことを決行してしまったのだ。
　その銃が九九式である。国際的なレベルの口径へ、という動きは昭和十二、三年ごろからはじまっており、試作が完成したのは昭和十四年（紀元二五九九年）であった。機構としては全く三八式と同様で、口径を七・七ミリにアップしたものが採用された。
　これで口径も国際レベルに達し、威力も十分と性能面ではなったのだが、実際の用兵（使用）面ではコトはそう簡単ではなかった。
　まず九九式の生産が遅れ、実際の量産体勢に入ったのは昭和十六年の中頃であった。太平洋戦争突入直前のことである。
　このころすでに陸軍は大陸で日中戦の泥沼に陥り、動員につぐ動員で巨大な兵員数にふくれあがっていた。早い話が十万の歩兵を動員すれば十万丁の銃を持たせなくてはならない。当時の日本の工業力で、すでに百万を超えていた兵員の小銃を交換し、弾薬を補給するなどは不可能もいいところである。
　むろんこれは当時の関係者もよく分かっていたので、精鋭師団に持たせるとか、重要作戦に従事する部隊に配付する、など用兵上の考慮はされていた。
　しかし小銃機関銃を二種の口径にすることは、とくに戦時中の場合大きなリスクをともなうことなのである。いうまでもなく、それは補給つまり兵站面での困難と混乱を招く恐れがあるということに尽きる。もしそのような事態を生じるなら、まだしも威力不足を耐え在来口径のみの方が良策となってしまう。
　戦場が大陸から東南アジアへ、そして太平洋へと拡大してゆくにつれ、この恐れが現実になっていった。南方重要作戦地域に、九九式歩兵銃を持ち勇躍派遣されていった師団が、弾薬輸送船を撃沈されて現地集積の三八式用の弾薬を使うことができない、などの例が少なからずおこったのである。また弾薬の種類が間違って補給された、などの例もこれまた少なくない。また内地での生産力の拡散も大きな不利になる。
　こうして考えてみれば、九九式歩兵銃は第二次大戦で生まれてはならぬ小銃であった、と結論するのはそれほど極論とは思えない。小銃にかぎらず旧軍の兵器体系は、目先の性能向上を求めて、いたずらに複雑になり、総合的な性能ダウンに陥っていることが目立つ。九九式歩兵銃もその一例であった。したがって戦前の旧陸軍の小銃の発展は、三八式歩兵銃によってしめくくられてしかるべきであったろう。

（日本ライフル射撃協会理事）

河井継之助—はじめに志あり

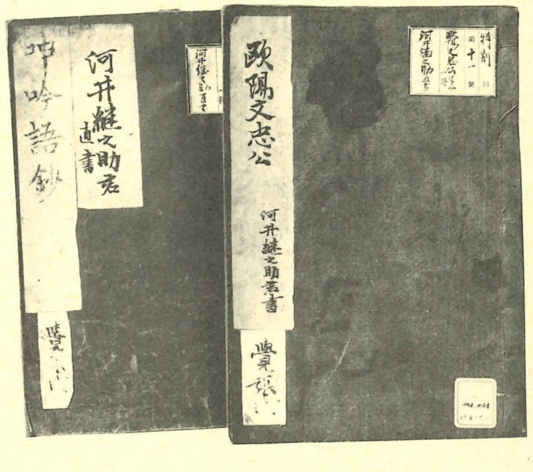
安藤英男

河井継之助といえば、ガトリング・ガンと呼ばれる機関銃のことが、よく話題に上るけれど、いかに最新式の火器とはいえ、二台の機関砲で戦局を左右できるものではない。それよりも、継之助のとった兵制改革で、最も注目すべきことの一は、全隊士にミニエール銃を持たせたということであろう。当時は、奥羽一の大藩会津でも、時代遅れのゲベール銃しかなかった。
　ゲベール銃は、先込めで装塡に手数がかかるばかりか、弾道も不揃いで照準もつけにくい。これに対しミニエール銃は元込めで、照準もついており、弾が旋回して飛んでいくので、破壊力も大きい。それに、飛距離も大きいので、その優秀さは比較にならない。ミニエール銃は、長岡藩のほかに東軍にはなく、西軍でも一部雄藩に少数のものが入っていただけである。
　長岡軍が強かったのは、軍略とか、旺盛な志気もさることながら、このような近代的装備にも大きな素因がある。そして継之助には、このような近代的装備を、全藩士に施すだけの見識と、経済の才と、そして自分が執政となった短時日の間に、これを調達するだけの人脈を備えていたということになる。
　ここで人脈といったが、当時に於て新兵器の買い付けをするのには、横浜・神奈川あたりの外国商館と、特殊な関係を持っていなければならない。さもなければ、日本の仲買人を通すほかはないが、それでは時代遅れのガラクタを、むやみに買わされるのがおちである。事実、各藩は、そのガラクタを買わされたのである。ところが、外国商館と直接取り引きができれば、商品の吟味をすることもでき、経済的でもあり、納期も早くなる。
　つまり継之助は、すでにスネル兄弟や、ファブル・ブラントなどと親交があった。これが、継之助が執政となるや、その軍装の一新を、電光石火成就し得た一因である。また継之助は、戊辰の年の春四月、江戸を引き払うにあたり、藩邸の書画什物一切を、いさぎよく外国商館に売り払い、その資金を以て米穀相場に充て、これまた大利を博して長岡へ帰っているが、この急場に、みごとに什物の処分をなし得たのも、外国人との人脈が、一通りのものでなかったからである。



河井継之助書（長岡市立互尊文庫蔵）

　継之助には、書生時代が長かったが、彼は少しもあせらない。いわゆる詞章暗記の学問ではなく、生きた学問をしていたのだ。たとえば、その不遇時代、鉄砲を片手に山野を跋渉し、遂に射撃の名手になっている。つまり、これによって鉄砲の威力を充分に識り、また鉄砲の良否をも判定する能力を備えたと見られる。これが後年、鉄砲の吟味に直ちに役立ったことはいうまでもない。
　また継之助は、三十四歳の壮年まで、しばしば遊学しているが、おりを見ては横浜・神奈川の外国商会に出入りし、いつのまにか外国人と親しくなって、遂に商館に住むようになってしまった。何もしないで徒食しているのは気がすまないというので、夜警を買って出て、夜中に拍子木を叩いて、商館の内外を見て回ったものだという。世は尊王攘夷が喧ましい時であるが、継之助にとっては攘夷などは愚の骨頂であった。彼には遠く時勢を見透す見識があったから、海外の新知識を吸収するのは、人一倍旺盛であった。スネル兄弟や、ファブル・ブラント



継之助が書き写した書物（長岡市立互尊文庫蔵）

との交誼も、その頃から生じたものである。大事に処して、物をいう人脈は、決して一朝一夕にできるものではない。

世の中のことは、とかく瓢箪から駒で、思いがけない具合に発展することがある。そこで、巧みな遊泳術を駆使して、最高エリートにまで昇進する人が往々にしてあるが、彼らはエリートになることが望みであって、エリートになって何をするかが望みではない。こういう手あいに、国政を委ねた場合、人民の立場はなくなってしまう。およそ、経世家なるものは、エリートになって何をするかを、先ず最初に考えておかねばならない。次に、どうしたらエリートたりうるか、権勢の地位に立ち得るかを考え、これがため最も枢要と思われることを、着々として実行しなければならない。

継之助の場合は、はじめに経世家たらんとする目標があり、国家のため何を施設するかを、片時も念頭から離さない。そして、どうしたら権勢の地位に立てるかを考え、遊学もこれがための遊学であった。「封建の時代には、名君に恵まれなければ、どうにも仕方のないものだ」とは、継之助の恩師・山田方谷が、継之助にもらした述懐であるが、それは太平の現代にも当てはまる真理である。それでは、どうすれば名君に自分を認めさせ、枢要の地位に据えてもらえるか。

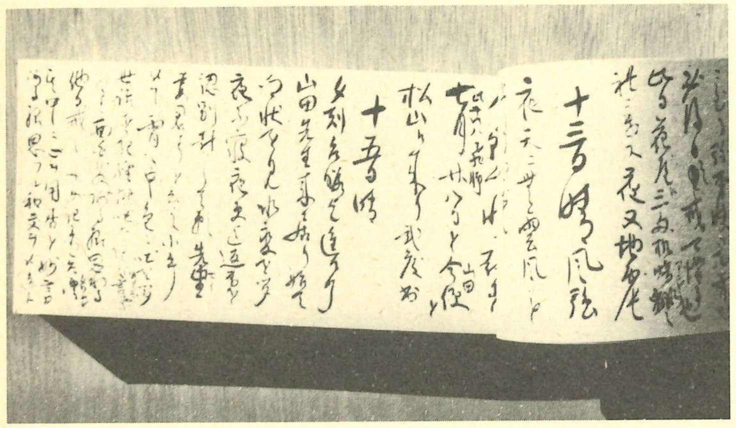
それには、思いきって建白書を認め、自己の見識を主君に売りこむのが正道である。かりに名君ならば、すぐれた建白書は、直ちに見分ける力がある。西郷隆盛なども、はじめは単に郡役所の書記に過ぎなかった。それが、思いきって農政に関する建白書をかいた。相手は名君の島津斉彬で、これが西郷が起用されるきっかけになっている。相手が斉彬でなかったら、西郷は生涯、埋もれたままであったかも知れない。相手が名君なら、すぐれた建白書は、必ずや神通力を発揮する。

継之助は、はやくから、ここに着眼するところがあった。彼が二十六歳の嘉永五年（一八五二）、はじめて江戸に遊学し、古賀塾に入った時、師の書庫から『李忠定公集』を発見し、これを丹念に写しにかかった。そして、講会には全く出席せず、同書を写しおわると、さっと長岡へ帰っていった。塾生はあきれて、何という人だといっていたが、李忠定は、名を綱といい、宋の高宗に仕立てた名臣で、富国強兵について、しばしば上奏したもの。その上奏文は、大胆率直、非壮淋漓、情理かね備わった名文である。『李忠定公集』は、その上奏文が主体を占めている。継之助が学んだのも、その上奏文――奏議――の類であったことは間違いなかろう。

また、これより六年後の安政六年（一八五九）、すでに三十三歳になっていた継之助が、なおも遊学を願い出て、備中松山（岡山県高梁市）まで出かけ、山田方谷に師事したが、これも通常の学問とは違っていた。山田方谷は、その尊敬する王陽明のように、文武兼倶の逸材であった。もとは百姓であるが、その英邁の資は、夙に光沢をあらわし、遂には名君・勝静の信任を得て、松山藩政をとるに及び、治績大いに見るべきものがあり、その善政は遠近に聞こえていた。継之助が方谷を慕ったのは、その施政のあとを学びとるためであって、経書の講釈を聞いたり、文章の作法を教わるためではなかった。

松山藩の規則では、藩士が勝手に他藩の人を門生にとることは禁じていた。しかし方谷は、継之助から本心を打ちあけられて、その志を大いに異とし、藩方に願って敢て門生たることを容認した。継之助は、この方谷のもとで、方谷門下の逸材、三島中洲、進鴻渓などと刎頸の交わりを結ぶに至った。継之助の没後、三島中洲は継之助のために、碑文（故長岡藩総督河井君碑）を草しているが、そのなかで、次のように述べている。

「ある日、山田先生が、我らを召して、時事を議せしめた。このとき君（継之助）は、『この秋義（継之助の諱）が、藩政の要路につけば、必ずや藩費を調整して大艦を購い、裏日本の防衛に任ずるでありましょう』と。執政になった時、はたして着々と、これに備えるところがあったという。いったい長岡は、取るに足らない小藩である。しかし君は、自から任ずること、かくのごとく大であった。いかに君が、志をいだくこと大きく、国を思うのに情が深いかを知ることができる」と。



継之助の旅行日記『塵壺』（長岡・駒形宇太郎氏蔵　筆者提供）

この一節によっても、継之助が用意周到、まさに来るべき日に備えて、修業を積んでいたかがわかる。

山田方谷は、人も知る陽明学派である。方谷の愛蔵するものに、王陽明（諡は文成）の文集『王文成公全集』があった。継之助は、松山での業を了えて帰国するにあたり、方谷に請うて、これを譲りうけた。同書も、王陽明の上奏文や公用文を多く収めたもので、継之助が喜び用いようとしたのは、おそらくそれらであろう。また、継之助が方谷のもとで、読破した書物の大半は、やはり上奏文の類である。

当時の継之助の旅行日記『塵壺』には、これらの書物がメモしてあるが、『蕈諠新書』『名臣奏議』『陽明文録』『隔鞾論』『経世文編抄』『聴訟彙安』などが目立つ。継之助が、力を傾けて学んだものは、これら建白書とか、経世の論策であった。継之助が方谷のかたわらに在って、日夜見聞したところも、経世の実学であった。

後年、方谷が江戸に出たとき、継之助の義兄・梛野嘉兵衛が、一夕、方谷を旗亭に招待した。このとき同席した継之助が、話のついでに、方谷が秘して語らなかった藩政上のポイントを、それとなく語ったので、方谷は聞くたびに驚いて、

「それも知っていたか、あれも知っていたか。河井の才ですね。河井の才ですね」

と、感歎したという。

継之助は、方谷との初対面のとき、方谷の事功を学びたいと宣言したが、その言葉のとおり継之助は、方谷が松山藩政に施設した事功の数々を、確かりと学びとっている。この故に、継之助が藩政の衡に当たるや、方谷が十年かかって仕遂げたようなことを、わずか一年かそこらで仕遂げている。先人エキスを頂戴して、一瀉千里に成し遂げている。

継之助の旅行日記『塵壺』を見ても、各地の藩政に対し、さりげなく意見が認めてあるが、彼が藩政の衡につくや、直ちにそれらの意見が実地になって流れ出ている。彼は青年の頃、祭壇を設けて王陽明を祀り、神国の名臣たることを誓ったが、その後の行動はすべて、この本来の目的からはずれていない。

継之助にとるべきものは、第一にこの遠大な志ではあるまいか。長いあいだの部屋住み、そして幾度か不遇の立場におかれたが、少しもあせったり、方向を見失ったりはしていない。時には天衣無縫、常軌を逸した大胆な行動に出ながら、しかも大局から見る時は、少しも経世済民の素志に悖っていない。経世の途こそ、天職と心得、私利・私曲を去って、堂々と人生を濶歩した。はじめに志あり、次に実学ありで、その用意周倒には感歎させられる。実に継之助は、練心の人であった。その伝記を翻く度に、その感を深くし、教えられる所が大きい。

（歴史家）

幕末の技術開発

吉田光邦

一八四〇年のアヘン戦争は、中国に深刻な衝撃を与えた。独自の文明のシステムを誇っていた中国は、異質の西洋の文明に敗れたのである。そのとき中国の知識人たちが注目したのは、西洋の軍事力であった。その中心は蒸気船と大砲にある。ならばこれを中国が採用すれば、中国もまた西洋と十分に対抗できよう。そこで中国のリーダーだった李鴻章、左宗棠らは、直ちに造船、造兵事業を計画した。華南の福州には馬尾船政廠が設立され、華中の上海には江南製造局が設けられた。前者は洋式造船、後者は兵器、機械類を製作し、同時に西洋の科学、技術のテキストを翻訳し、語学を教える。指導者はいずれも西洋から招かれた。

アヘン戦争に象徴されるような、西洋の東方への進出ぶりは、日本でも十九世紀にはよく知られるようになっていた。蘭学にはじまった洋学者たちは、たえず海外事情を研究して西洋の進出を警告していた。そして彼らがひとしく注意したのは、中国と同様に西洋の軍事力であった。そしてこれを現実にしたのが、嘉永六年（一八五三）、江戸湾に出現したペリー艦隊である。ペリー艦隊の備える強力な火砲、また蒸気船は、アヘン戦争の場合と同じく、日本に対する大きなショックであった。

この強大な西洋の圧力に対して、幕府や諸藩のしめしたレスポンスは、ふたつの方向をとった。第一は軍事力の整備である。そのためには洋式の軍制を採用し、軍制を改革することである。安政二年（一八五五）、長崎に海軍伝習所が設立され、オランダ派遣の教官団による洋式海軍の建設がはじまる。一方、陸軍も歩騎砲の三兵方式に改編され、慶応三年（一八六七）、フランス教官団による洋式陸軍の訓練がはじめられた。

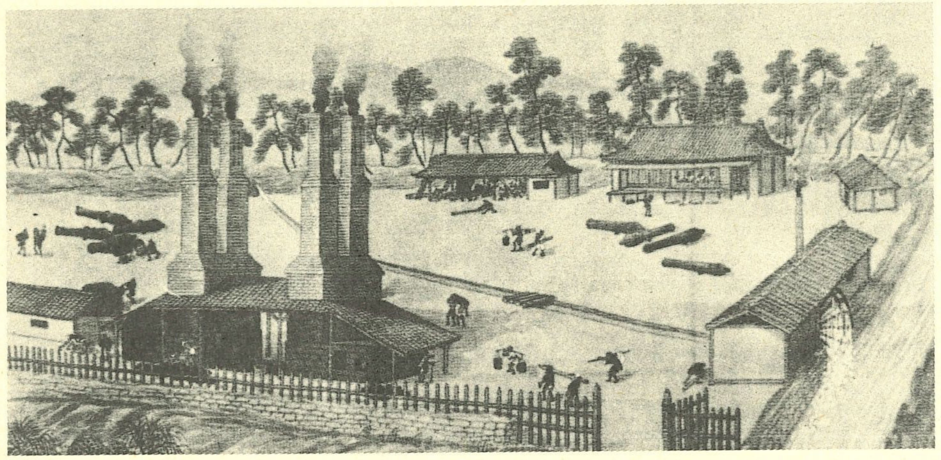
その第二は洋式の兵器、軍艦を製造して、現実の西洋の威力に対抗することである。幕府や諸藩がまず行動を起こしたのは、この方向であった。中国のそれとまったく同じ反応である。

その最初は九州の佐賀藩であった。佐賀藩は早くから軍備の洋式化に熱心で、洋式火砲を天保年間（一八四〇年ごろ）に製作したが、これはまだ旧式の青銅砲であった。しかし西洋の火砲は、鉄製砲の時代である。そこで藩では、西洋の鉄製砲に追いつこうと、反射炉を建設しそれで鉄製火砲を製作することを計画した。

このときテキストとされたのは、オランダのヒューギェニンの著書『火砲鋳造法』であった。これを杉谷雍介らが訳し、それによって鉄製火砲の製造を計画したのである。嘉永三年（一八五〇）、第一炉が完成し、のち第三炉までが建設された。原料は山陰産の銑鉄・燃料は木炭。しかし海外ではすでに燃料には石炭を利用する時代であった。

しかも指導者はなく、テキストのみによる火砲の製造は、試行錯誤の連続である。実用になる火砲が生産できたのは一年半ほどのちのことであった。元治元年（一八六四）からは、砲尾から弾丸をつめる後装砲の製作がはじまった。それまでは砲口から弾丸をつめる、前装砲といわれる旧式のものだったのである。こうして佐賀藩では慶応三年（一八六七）までに、三百四十六門の洋式火砲を製作したが、うち鉄製砲は八十門であった。鉄製砲の製作はやはりむつかしかったのである。

水戸藩は安政六年（一八五九）、九州の薩摩藩は嘉永四年（一八五一）、それぞれ反射炉を建設して、鉄製砲の製作を開始した。テキストは同じヒューギェニンの著作である。水戸は大島高任がリーダーとなり、彼は釜石鉄山を開発し、洋式の製錬法によって原料の鉄鉱を供給することを実行した。安政四年（一八五七）、最初の大橋高炉が建設された。高炉は花崗岩と耐火煉瓦で作られ、水車フイゴで送風した。こうして幕末までに十個の高炉が建設されて、洋式製鉄が行われたのである。この設備は明治になって官営釜石製鉄所となった。



佐賀藩大砲製造所（公議御石火矢鋳立方図　鍋島報效会蔵）

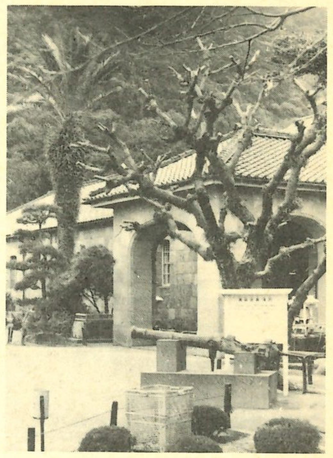
しかし水戸の製砲事業は大島の尽力で好成績だったが、元治元年の天狗党の乱で、反射炉や作業場は破壊されて事業は中絶した。また薩摩もヒューギェニンのテキストを用いて、三炉を建設した。しかし文久三年（一八六三）の、薩摩とイギリスの戦争で、反射炉を中心とする工業地帯は、すべて破壊されたのである。

名高い伊豆の韮山の江川太郎左衛門英龍による反射炉は、幕府の直轄事業で、ここも同じテキストを使用して建設された。しかし英龍は完成をみずに没し、安政二年（一八五五）、最初のテストを行った。けれども成績はよくなく、佐賀の杉谷雍介の一行を招いて指導を受け、ようやくに成功した。しかし以後の製砲事業も不成功が多く、ついに幕府はこれを廃止して、江戸の関口や滝野川に新しい製砲場を設けることにし、指導者には武田斐三郎を任命した。彼は英学者、新進の洋学者である。蘭学の時代は終わりつつあった。だがこの新設工事は実行されぬままに、幕府は崩壊したのである。

幕府の洋式海軍の訓練と、蒸気船の建造の方針はまずオランダの協力によって始まった。日本に勢力を張ろうとする海外諸国に先んじて、オランダは蒸気船スンビン（観光丸）を幕府に贈り、さらに長崎の造船所が、オランダ輸入の機械類によって建設が開始された。指導はオランダ海軍である。そして四年後の文久元年（一八六一）に、鍛冶、工作、熔鉄の三工場から成り、二十八人馬力の蒸気機関を備えた艦船修理工場が完成した。計画はさらに拡大され、七十馬力の軍艦を建造する工場も工事を開始した。けれどもこの計画は完成せず、これをひきついだ明治政府によって、十二年にはじめてドックが完工した。このときのリーダーはフランス人である。これはのちに三菱会社に払い下げられ、三菱長崎造船所となる。

フランスも熱心に幕府に肩入れして、横須賀の造船所建設を勧め、幕府もこれを容れて、フランス人技師ベルニーを指導者とし、慶応二年（一八六六）から工事を開始した。これはフランスの技術者四十三名を招き、ツーロン造船所をモデルとする本格的のものであった。しかし工事の半ば、明治維新の政変によって、建設は新政府にひきつがれた。第一号ドックの完成は明治四年である。

そのほかフランスは、幕府にシャスポー銃二連隊分、野山砲二十四門を寄贈した。この二十四門は四キロ重の弾丸を発射し、射程は四千メートルもあった。この火砲をモデルとして、佐賀藩なども山砲を製作している。このように幕府も軍事力の強化のために、海外技術を導入して近代化を進めていた。お雇い外人技師によ



尚古集成館

り、海外技術を導入する方式は、すでに幕府も実行していたのである。

こうした幕府の動きに対し、諸藩のなかでいちはやく工業化を進めようとしたのは、薩摩藩・佐賀藩である。薩摩の島津斉彬は、窮理（物理）と舎密（化学）は経済の根本であるとし、開物館、集成館と呼ぶ実験所と生産工場を設けた。反射炉もこの事業のひとつである。彼は船用蒸気機関に関する洋書を翻訳させ、さらに蒸気船雲行丸を試作させた。しかしこれはとても実用になるものではなかった。あるいはガラス製造を試みさせ、これは今も薩摩ガラスとして知られる、美しいガラス器の製作に成功した。

斉彬は水車動力による織布場を設置させ、また綿紡績業を起こすために、イギリス人技師とイギリスの紡績機を導入して、洋式紡績をも開始した。しかしこのころ斉彬は死去し、次代の忠義があとをついでいた。集成館は千二百人の工員をもつ工場群となっていた。忠義はさらに規模を拡大し、工員は四千人に及んだという。しかしこの工場群は、薩英戦争で亡んだ。しかしイギリスとの和議が成立したのち、イギリス風に工場は再建された。これが今日も残る尚古集成館の建物である。

佐賀藩をリードしたのは、藩主鍋島直正である。彼は船舶修理工場の建設を計画し、安政四年（一八五七）には大規模な工作機械各種を輸入した。けれども工場の建設と経営は、一藩でまかないきれるものではない。そこで佐賀藩はこの機械一式を幕府に献納してしまった。しかし幕府もこれを使うだけの余裕もなく、ようやく明治四年、新政府の赤羽工作分局で利用された。のちの赤羽海軍造兵廠である。直正はさらに精錬方を置いて、蒸気船や蒸気車を研究させた。ここには蘭学系の技術者が数人集められたが、小型モデルを製作するにとどまった。

こうした状況のなかで、幕府対西南雄藩との間の、政治的、経済的な対立は切迫してゆく。そして両者はともに新鋭の軍事力を具えようと努力しはじめる。けれどもわずかなテキストによって進められる自力開発の製品は、とっくに産業革命を経過したヨーロッパやアメリカの製品には及ばない。しかもインフレーションは進行し、製造費は上昇の一途をたどる。薩摩では、百ポンドの鋳鉄砲を自力で開発し生産した場合と、アメリカからの輸入品とでは、国産品は五百両も高価になるという計算がなされた。また薩摩の必要とする約九十門の火砲の完成は、国産では七〜八年を要するとみられた。

これではとうてい急速に変化してゆく、政局に対応できるものではない。そこで幕府も諸藩もいっせいに自力開発を中止し、完成品の輸入主義に切りかえてしまった。そこで世界の死の商人は日本に殺到した。多くの旧式銃が、海外からどっと流入したのである。

薩摩も長州もエンフィールド銃を買い入れたが、弾丸を銃口からつめる先込め銃であった。しかしイギリスではすでに元込めに改製して使用されていた。ベルギーのミニエー銃、アメリカのスタール銃、スペンサー銃、ヘンリー銃、ウインチェスター銃、レミントン銃なども大量に売りこまれた。南北戦争の終わったアメリカでは、廃銃があふれていたのである。明治の廃藩置県後、諸藩は銃器を政府に返還したが、その数は十八万挺に及び、そのうち以後も使用可能のものは三万数千挺であった。

こうなるとあとはいかにして新式の兵器を見い出し、それを輸入して活用するかの競争となる。この点で戊辰戦争の東北諸藩は不利であった。西南諸藩は長崎、また上海を通じて、貿易商人たちからつぎつぎと新式武器を輸入したが、東北諸藩はこのルートをもたなかった。元込め銃、アームストロング砲、さてはクルップ砲までが、西南諸藩の装備となっていたが、東北諸藩は先込めの旧式銃であった。ことは蒸気船についても同じであった。そしてできる限り新式の技術を輸入するという姿勢は、明治期にもそのまま継続されたのである。

（京都大学教授）

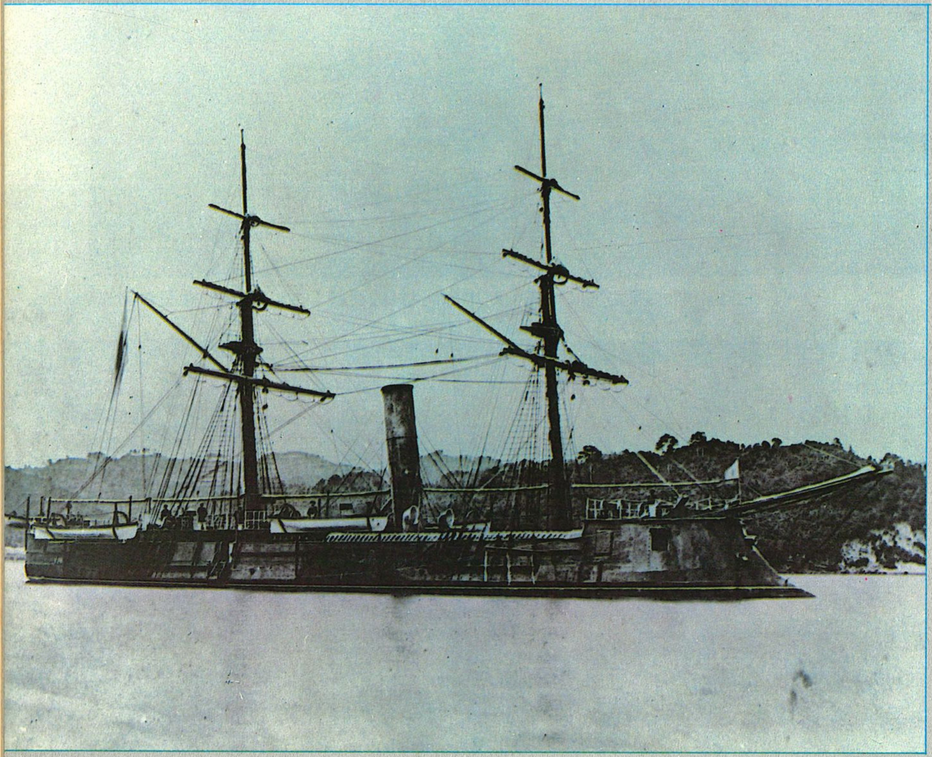


開陽丸の艦船将官のテーブル
（江差町教育委員会蔵）

六角形のテーブルを前に……

江差追分で有名な北海道江差町。
この町は、古来、蝦夷地西海岸の良港として栄えた。
ある時、その港に、唐草模様をあしらった
六角形のテーブルがぷかぷかと浮かんで来たという。
実は、このテーブルこそ
幕府海軍副総裁・榎本武揚が乗った
脱走軍艦開陽丸に積み込まれていたものだった。
戊辰戦争の終幕となった函館・五稜郭。
この決戦を前に、
榎本軍の首脳たちはオランダ製のテーブルを前に
いかなる密議をこらしたのだろうか。

数奇な運命をたどり，やがて新政府軍の主力艦となった甲鉄(同右)



主力艦開陽丸、日本へ

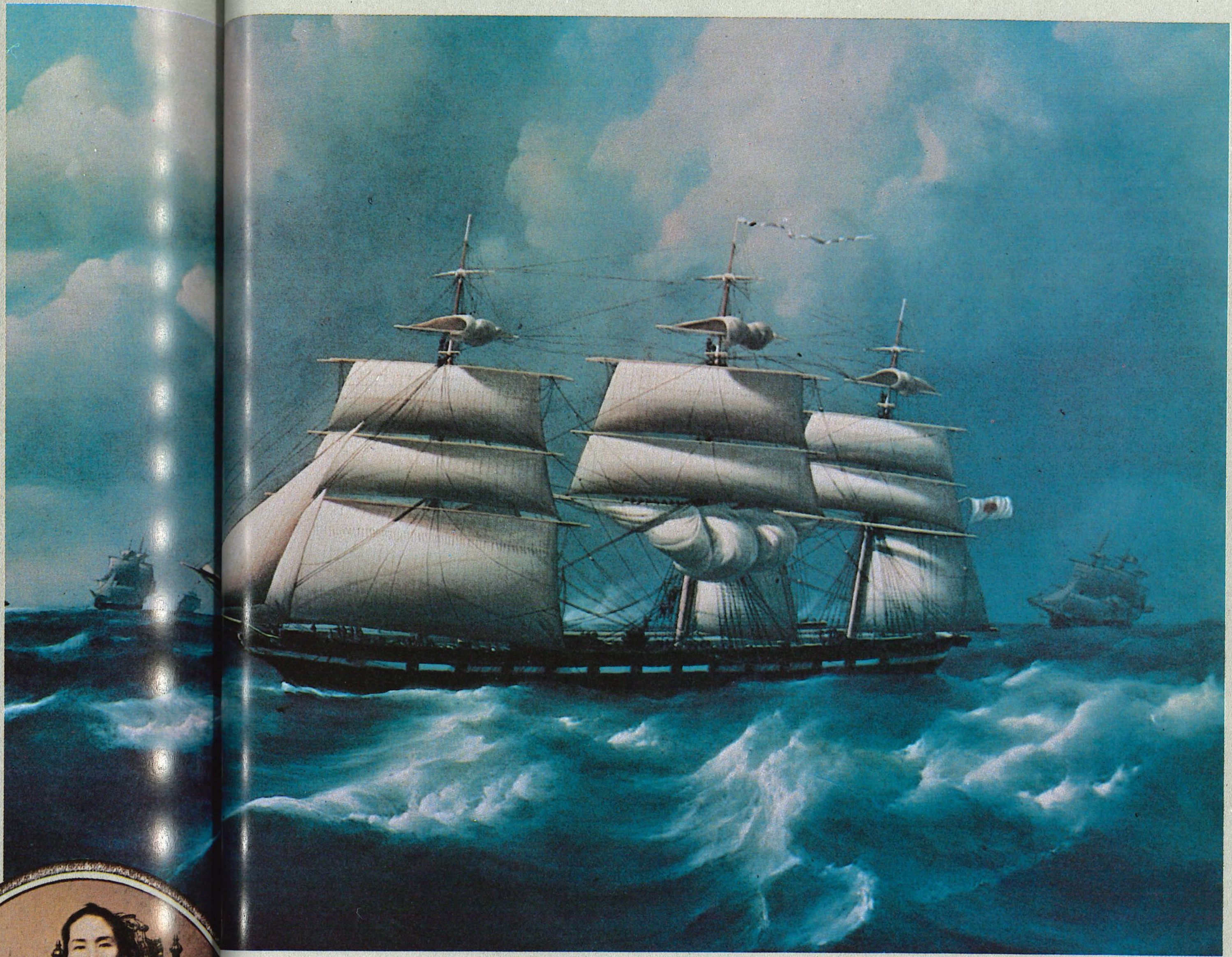
開陽丸は、風雲急を告げる幕末、幕府がオランダに発注した船だった。ドルトレヒト市ヒップス造船所で造られた開陽を、日本に回航してくる使命を帯びていたのが、幕府派遣留学生の榎本らである。開陽こそ、幕府の主力艦となるものと見られていた。

開陽が日本に回航されたのは一八六七年。これと相前後して、フランスで造られ、その後各国をたらい回しされるという数奇な運命を持った甲鉄艦も、日本にやって来た。

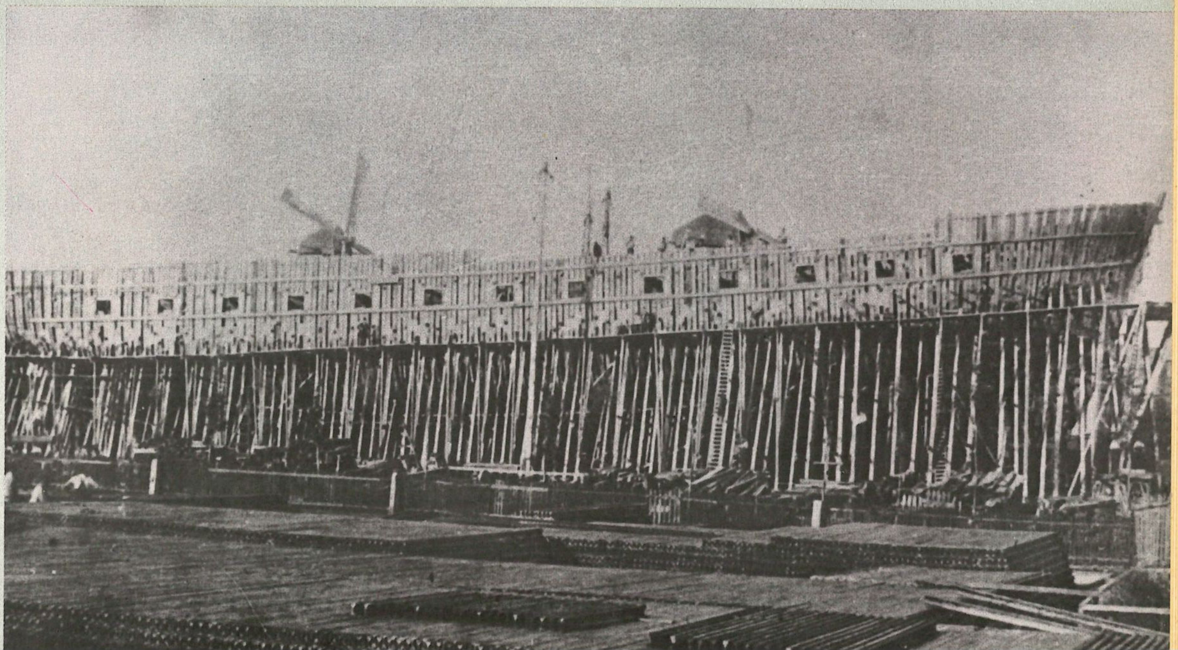
だが、開陽に乗り組んだ榎本らが帰国したとき、幕末の情勢はめまぐるしく変転していた。



オランダ派遣留学生・榎本釜次郎(国会図書館蔵)



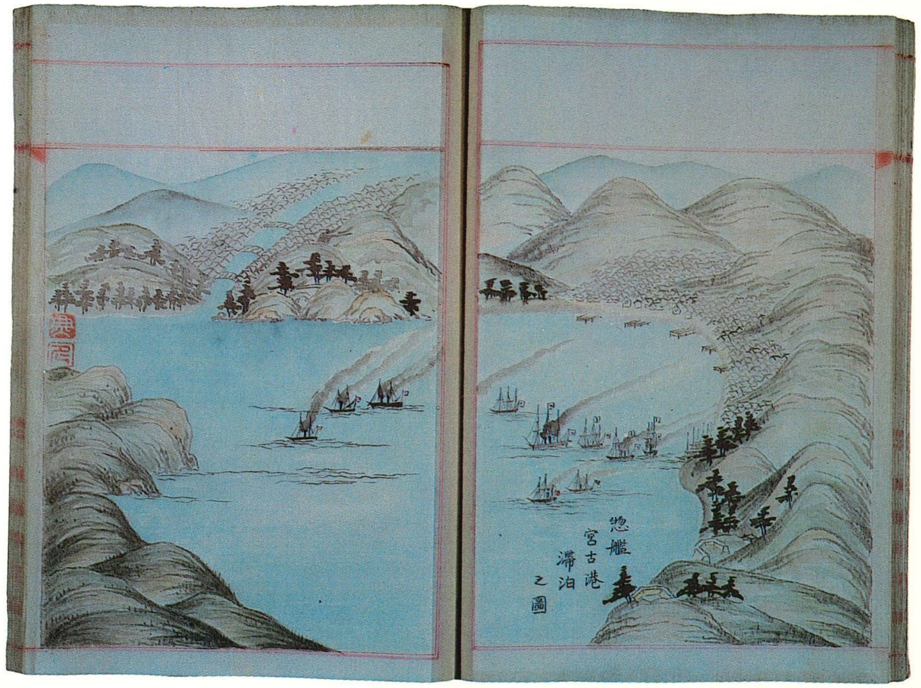
航行中の開陽(江差町教育委員会提供)



オランダ・ドルトレヒト市で建造中の開陽(同上)

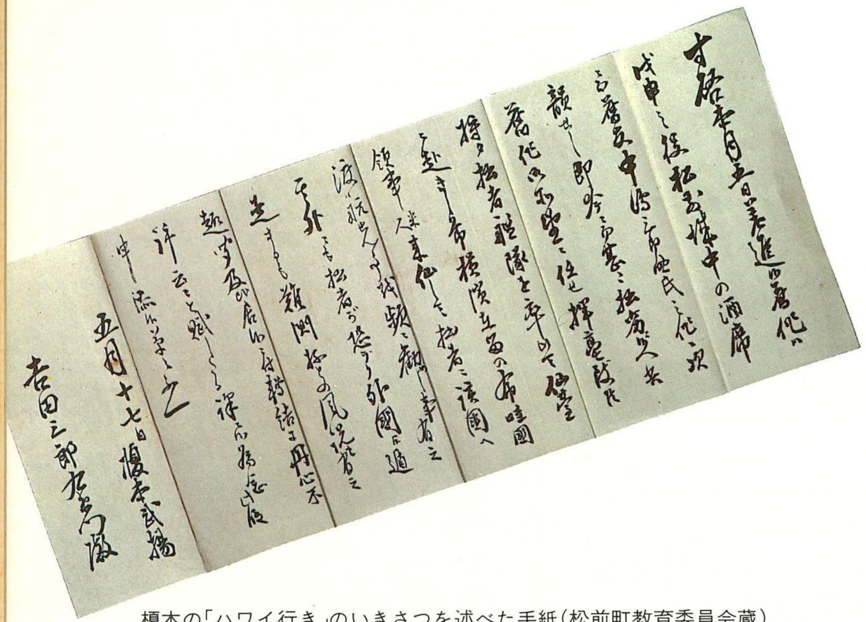
北へ向かった榎本艦隊

大政奉還、鳥羽・伏見の戦い勃発、そして江戸城開城——旧幕臣たちの逃げる道はどこにもなかった。

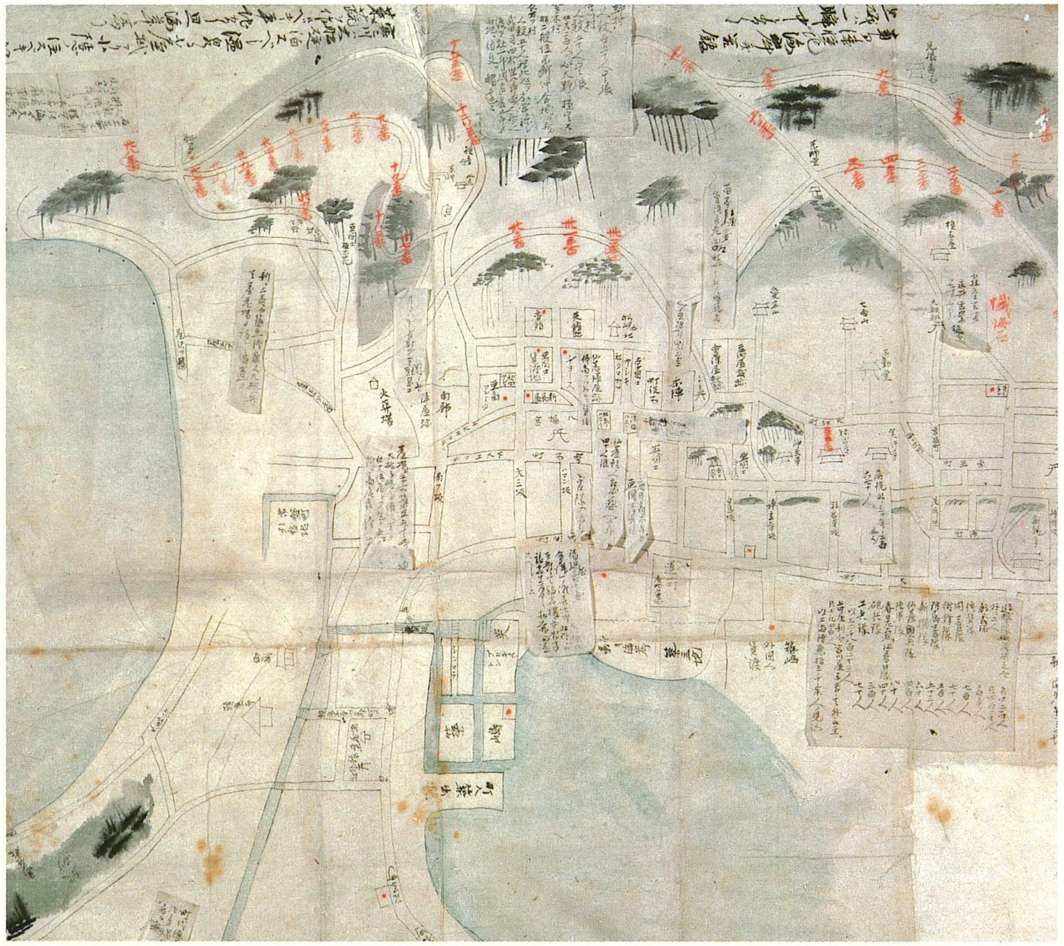


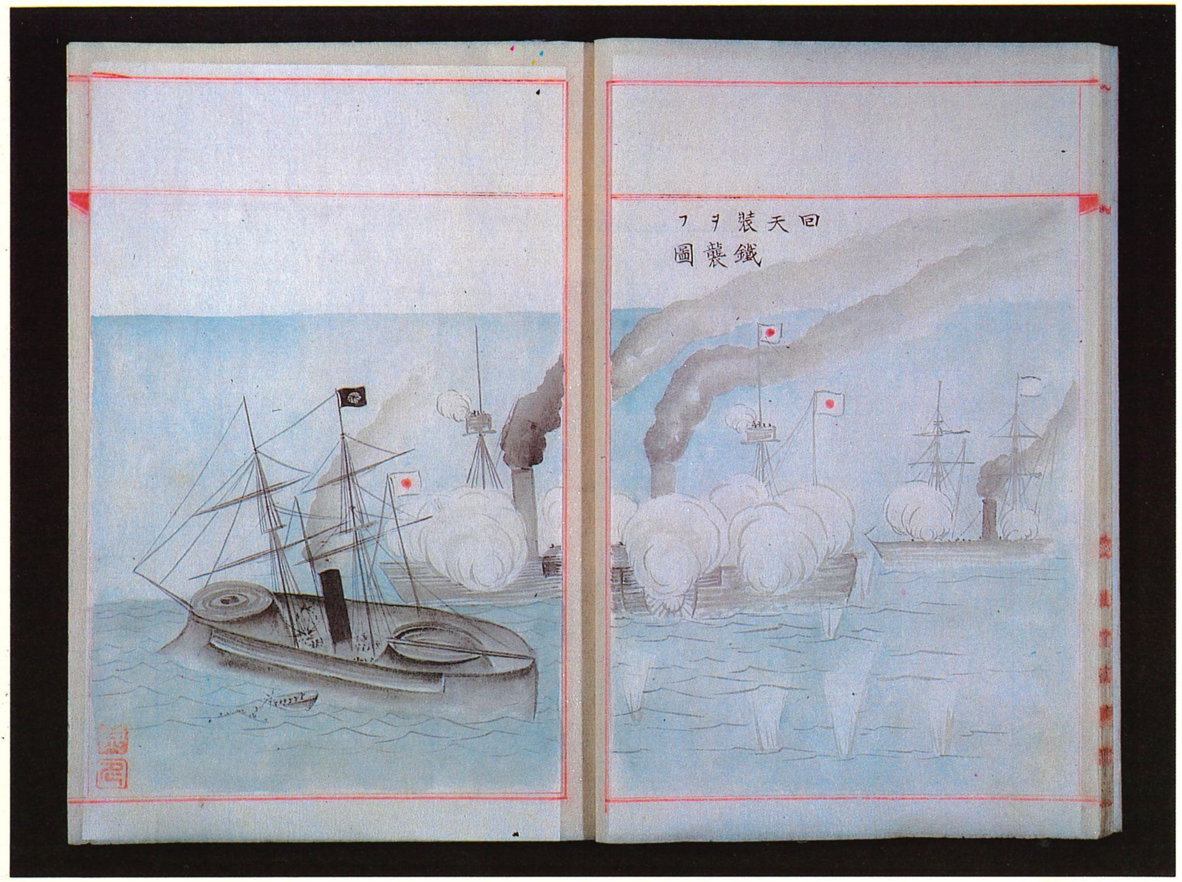
宮古湾に結集した榎本艦隊(蝦夷錦より　函館市立図書館蔵)

慶応四年八月十九日夜、榎本ら二十名余りは八隻の軍艦に乗って、品川沖から脱走！この時すでに東北諸藩も新政府軍に敗れ、榎本らに残されている地は蝦夷のみであった。そのころ、榎本らハワイ国に招待との珍事も舞い込むが、榎本軍は一路北へ向かい、蝦夷鷲ノ木に上陸し五稜郭に入城。新天地で希望に燃えた独立政権を誕生させ、榎本が総裁となった。しかしその間にも、新政府軍は一斉攻撃に移るための工作を進めていた。


榎本の「ハワイ行き」のいきさつを述べた手紙(松前町教育委員会蔵)


榎本軍は冬の鷲ノ木に上陸し、函館に向かった(森町)

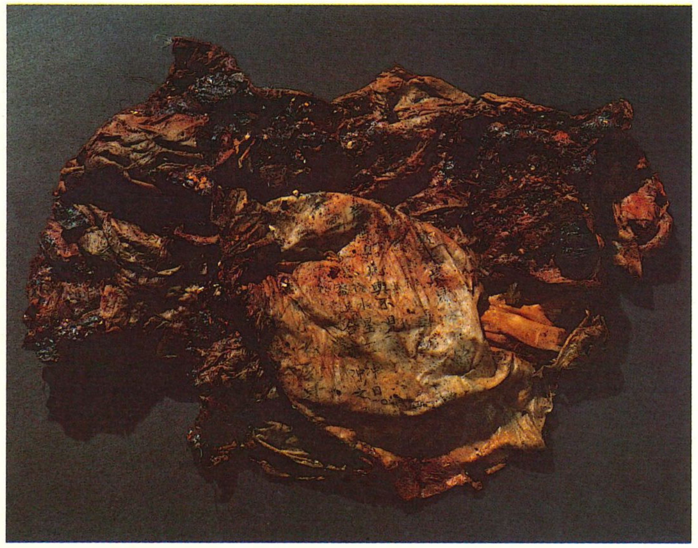

函館攻撃を前に新政府軍のスパイが描いた函館の地図(函館博物館五稜郭分館蔵)



宮古湾海戦で回天、装鉄（甲鉄）を襲う図（蝦夷錦より　函館市立図書館蔵）

開陽沈没で制海権失う

榎本政権が最後の拠り所とした五稜郭は、星形をしたオランダ式平城である。これは函館奉行が企画し、蘭学者武田斐三郎が設計、元治元年に完成したものだった。今、榎本軍はここを本拠として、戦闘に備えて意気盛んであった。しかし、この時重大事件が発生する。主力艦開陽が江差で座礁・沈没してしまったのだ。幕府が買った甲鉄は新政府軍の手中にある。函館海戦は開陽対甲鉄の決戦になるかと思われていた矢先である。制海権を失った榎本軍は哀れであった。五稜郭決戦に入ったとき、新政府軍側に投降、あるいは脱走する者の数はかなりにのぼった。五月十八日、五稜郭開城。榎本らは捕らえられ、東京に護送された。



江差で沈没した開陽から引き揚げられた文書は何を説き明かすだろうか（江差町教育委員会蔵）



榎本軍は五稜郭を最後の拠点とした

榎本艦隊北へ

安部公房
福井静夫

※あべこうぼう
作家　大正13年東京都生まれ　『壁』で芥川賞受賞　『砂の女』で読売文学賞受賞　著書『他人の顔』『燃えつきた地図』『箱男』『榎本武揚』(中央公論社)『都市への回路』

※ふくいしずお
大正２年神奈川県生まれ　海軍造船中尉任官　終戦時技術少佐　復員局勤務を経て、現在は史料調査会理事　著書『日本の軍艦』『戦艦・巡洋戦艦』

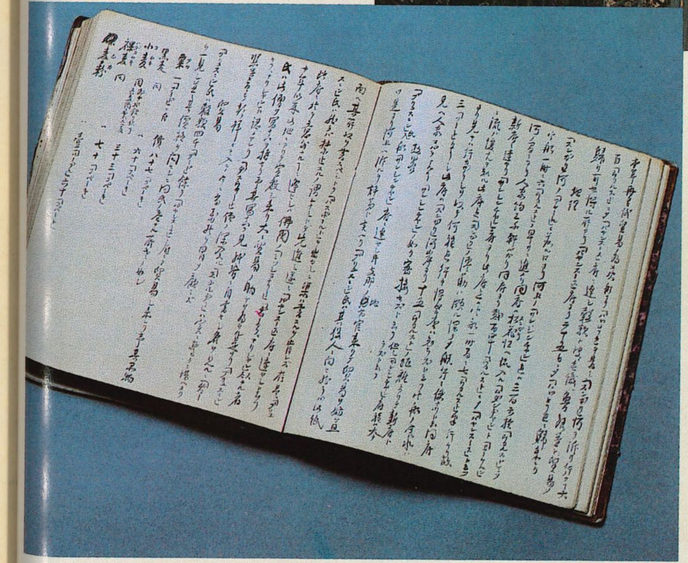
NHK 菊池正浩



高層団地建築のため鉄柵で囲まれ土埃りを浴びる一代の熱血漢・榎本武揚銅像
つねに時代の動きに流されるのか

わかりにくかった男

戊辰の戦闘で死んでいった者が多い中で、こう然と新政府に反旗を翻し、独立政権まで樹立した榎本がぬくぬくと生きている。世評は厳しかった。いや、勝海舟との合意で、旧幕臣の不満分子を率いて形だけ、最後の戦いを行っただけだとも言われる。事実、榎本自身は蝦夷を開拓し自由な国を作ることを熱く語りながら、戦いに徹してはいなかった。獄につながれること三年。やがて彼は薩長閥政府の中で出世してゆく。わかりにくかった男・榎本の生きた軌跡もまた謎めいている。



ロシア駐在公使時代に書いた榎本の紀行文(シベリア日記　国会図書館蔵)

榎本艦隊、品川沖から脱走！

慶応四年（一八六八）八月十九日夜、月明かりの江戸品川沖を八隻の船が密かに出て行った。

乗っているのは幕府海軍副総裁榎本武揚以下二千人余り。

これより先、榎本は勝海舟あてに次のような書状を送っていた。

「一寸の虫にも五分の魂とやらなれば、何れ近日の中管見申し上げ奉るべく候。」

その結論がこの夜の行動であった。



榎本武揚　慶応3年、開陽とともに帰国した

この年の四月江戸は開城し、時代は大きく変わろうとしていた。

そのなかで、脱走した榎本艦隊は一路北を目指す。

以後九か月にわたる長い闘いの始まりであった。

北海道南部の江差町。追分で知られるこの町に、唐草模様をあしらった六角形のテーブルが残っている。これは、榎本武揚の乗り組んだ幕府の脱走軍艦「開陽丸」に積み込まれていたもので、オランダ製の艦船将官のテーブルと伝えられている。

このテーブルの前で、榎本武揚たちはいったいいかなる密議をこ

らしたのだろうか。

古来、榎本艦隊の動きについては、その動機、狙いについて不審なところが多く、榎本武揚裏切り説まで出ているほどである。

いったい榎本武揚はなぜ、蝦夷地を目指したのか。

榎本艦隊の航跡を追いながら、この謎に迫ってみることにしよう。

ところで、榎本武揚と並んで戊辰戦争の中で重要な役割を演ずる軍艦開陽について、まずふれておかねばなるまい。

開陽とは排水量二千八百トン、船体の全長七十二・八メートル、最大幅十三・〇四メートル。大砲三十五門を備え、乗員数およそ四百人、蒸気機関で走るときの速力は十ノットに達したという。

フリゲートといって、後の巡洋艦に相当する。三檣のシップ帆装の木造船で、当時、日本最大の軍艦であった。

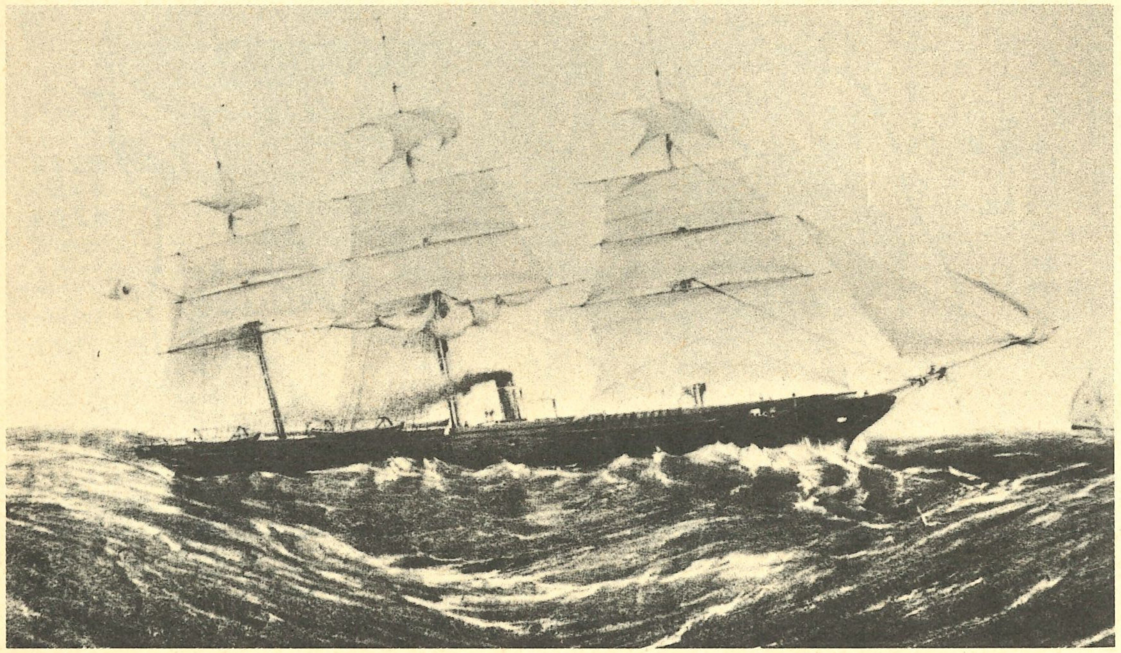
しかも、慶応四年の段階では、幕府の海軍にかなう海軍はほかに存在しなかった。朝廷直属および新政府軍諸藩の軍艦を集めても、幕府海軍にははるかに及ばなかったのである。

とりわけ幕府艦隊は優秀艦開陽あるがゆえに、榎本艦隊は制海権を握っていた。しかも、慶応四年の夏には、幕府海軍は、無傷のままで、榎本武揚の指揮下にあったのである。

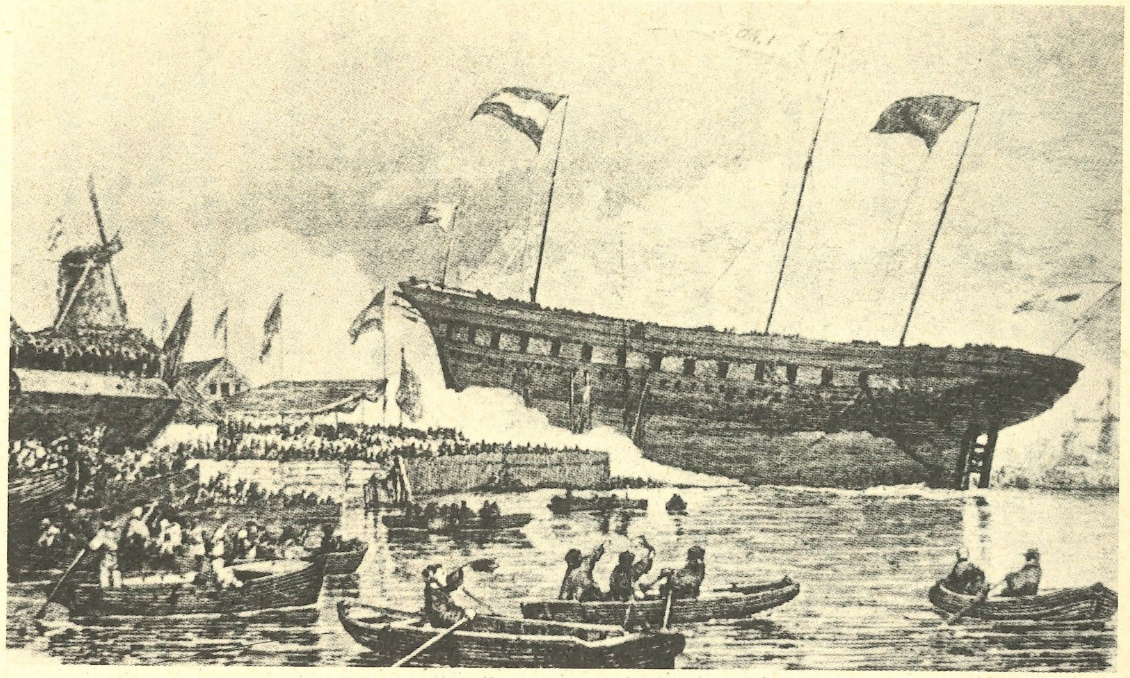
ところで、榎本武揚と開陽との運命的な出会いは、これより三年前にさかのぼる。

時は、一八六五年十一月二日。場所は、オランダのドルトレヒト市C・ヒップス・エン・ゾーネン造船所。ここで盛大な命名式が行われて進水した。軍艦開陽の誕生である。

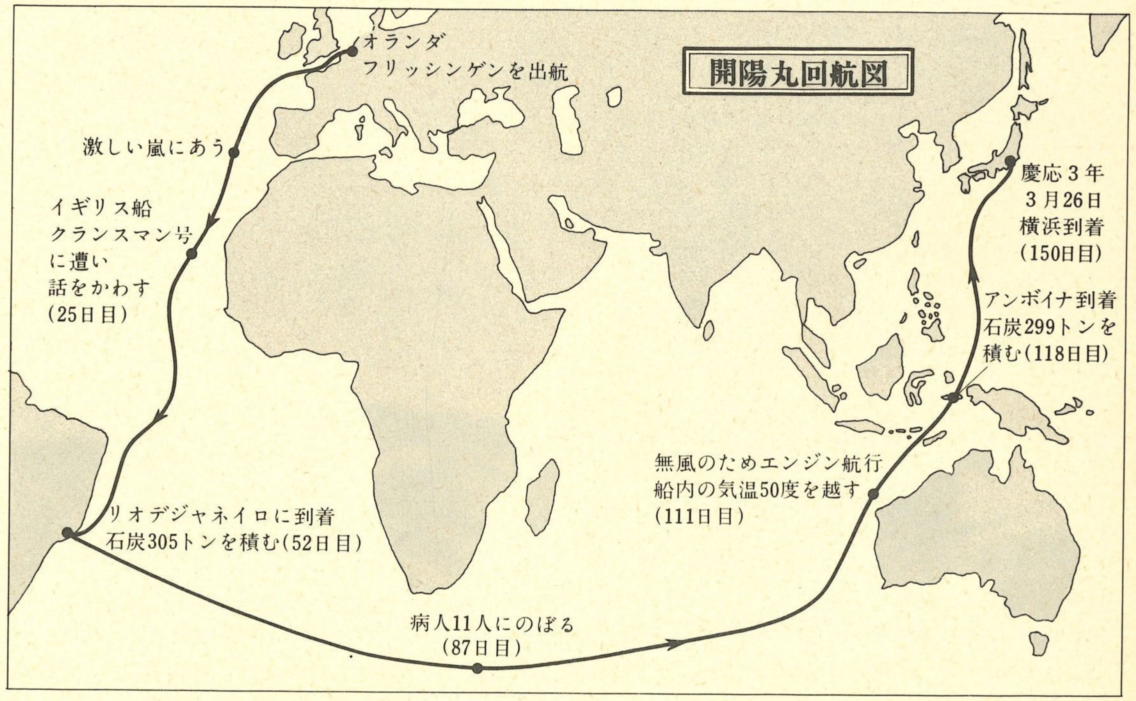
この夜の晩餐会には、オランダ側から海軍大臣カッテンディーケ



原画は開陽丸建造の中心人物ホイヘンスによって描かれ、フレィベが石版に彫ったもの（開陽丸石版画　江差町教育委員会提供）



オランダの雑誌に載った開陽丸進水式(木版　江差町教育委員会提供)



以下、官民の名士多数と、日本側から十五人の留学生が出席していた。

そのなかに榎本釜次郎こと武揚の顔もあった。彼らは幕府の注文した新しい軍艦を受け取る役目を命じられていたのである。

翌一八六六年、榎本ら日本人留学生は開陽に乗り組み、大西洋から南米、インド洋を経て横浜に向かった。

航海の途中、榎本はオランダの恩師ホイヘンスに次のような手紙を送っている。

「『開陽』がいかに素晴しい軍艦であり、船としての長所をすべて備えたものであるか、この艦はわが幕府の狙いに対する完璧な答えとなるでしょう。」(一八六七年一月二十一日付「リオデジャネイロからホイヘンスへ」)

この文面からは、当時わが国最大の軍艦開陽に乗り組んで祖国日本に向かいつつある、青年榎本武揚のはずむような気持が伝わってくるようである。

開陽とは、榎本にとって単に一隻の軍艦にとどまらず、彼が西洋で学んだ「近代化」をそのまま体現したものであったとも言えよう。

開陽の艦上で、榎本が日本に帰ってからの将来に具体的にどんな思いをはせていたかは、今となっては知るよしもない。

しかし、少なくとも帰国してわずか一年半のうちに、開陽と共に脱走するはめになるとは夢にも思わなかっただろう。

慶応四年八月十九日の榎本艦隊の脱走にいたるまで、新政府軍もこの圧倒的な海軍力を手をこまねいて見ていたわけではなかった。西郷隆盛・勝海舟の江戸開城談判でも、西郷から幕府軍艦引き渡しについて申し入れがあったという。しかし、実際に艦隊を指揮している榎本海軍副総裁(艦隊指揮官)が承知しなかったた

榎本艦隊北へ〈年表〉

天保7(1836)	榎本武揚、江戸に生まれる
安政3(1856)	榎本、長崎海軍伝習所に入る
文久2(1862)	榎本、オランダ留学のため出発
元治1(1864)	フランスで、のちに新政府軍のものとなる「甲鉄」完成
慶応1(1865)	幕府発注の「開陽」完成し、その命名式に榎本ら15人の留学生出席
慶応2(1866)	榎本ら開陽に乗り組み横浜に向けて出港　翌年3月、横浜着
慶応3(1867)	10月、徳川慶喜、大政を奉還
慶応4(1868) **明治1**	1月、榎本ら開陽に乗り組み、大坂湾の警備にあたる 1月3日、鳥羽・伏見の戦い始まる　6日、慶喜大坂を脱出 4月、甲鉄が横浜に到着　11日、江戸城明け渡し 5月3日、奥羽越列藩同盟なる 8月19日、幕府海軍副総裁榎本武揚以下2000人、8隻の船で品川沖から脱出　22日、榎本艦隊、暴風にあい「美加保」沈没「咸臨丸」も流される　24日、艦隊、松島湾に到着 9月22日、会津若松城おちる 10月13日、明治天皇が江戸城入り　20日、榎本軍が蝦夷鷲ノ木上陸　26日、五稜郭入城 11月8日、諸外国より榎本政権認められる　15日、榎本艦隊の主力艦開陽、江差沖で座礁・沈没 12月15日、榎本は新政権の成立を宣し、自ら総裁となる
明治2(1869)	旧幕府が注文した甲鉄は、新政府が代金未払い分を負担、手にする 3月、新政府軍、蝦夷地に上陸 5月18日、榎本軍、五稜郭で降伏　函館戦争終わる
明治5(1872)	3月、榎本は罪をゆるされ、開拓使四等出仕となる
明治7(1874)	榎本、海軍中将となる　樺太問題処理のため特命全権公使を拝命
明治21(1888)	農商務大臣となる
明治41(1908)	榎本死去　享年71
昭和51(1976)	江差沖で沈没した開陽の発掘調査引き揚げ始まる



勝海舟（国会図書館蔵）

め、引き渡しは実現しなかった。

江戸城明け渡しの四月十一日から、品川沖を脱走する八月十九日まで、榎本の動きは、実に複雑であった。江戸城明け渡しの四月十一日、一度艦隊を率いて房州館山にいったん避泊し、呼び返され、品川沖で戦局を静観している。その間、上野の彰義隊も壊滅してしまった。この四か月余りのうちに、榎本武揚の腹の中で榎本艦隊脱走のシナリオが着々と練られていったと見て間違いあるまい。ではそのシナリオはどのように作られたのか。そのシナリオ作りに、幕府海軍総裁勝海舟がどのようなかたちで参画していたのだろうか。

少なくとも、絶対的な海軍力を背景にすれば、戦術的には、新政府軍と真っ向から戦うことも可能であった。さまざまな選択の中で、なぜ榎本艦隊は北を目指したのだろうか。

北を目指した榎本の真意は……

―― まず伺いたいのは、なぜ榎本艦隊は北へ行ったのかということなのですが。

安部　とにかく厚いヴェールに閉ざされていて、はっきりしたことはわからない。ただ当時の新聞「もしほ草」に、ちょっとおもしろい指摘がありますね。当時はだれもが榎本軍は逆に南下するだろうと想像していたらしい。箱根は非常に険しい場所だから、官軍がその突破に大軍を注ぎ込むはずだ。その結果大坂あたりは手薄になる。そこへ攻め込んで官軍の補給線を断つ狙いではないか、という推測はずいぶんあったようです。ただし、これは江戸の戦場化を前提にした考え方ですね。戦場化、つまり幕府軍の抗戦がなければ成り立たないことでしょう。

ところが、ここで勝海舟が非常に微妙な動き方をした。ちょっとキッシンジャー流の隠密行動だったので、具体的な記録はほとんど残されていない。ただ、はっきりしているのは、とにかく内戦に持ち込まないこと。もし内戦になったりしたら、隙をうかがっている諸外国の思う壺だ、なんとしてもそれだけは避けなければならない、というのが勝の一貫した主張だった。そう考えてみると、沖合いから榎本艦隊でにらみをきかせ、しかも無血入城を許すという戦術的バランスは、じつに巧妙な防止策だったと、思う。榎本なら当然その戦術に応じていたはずだ。もっとも勝自身は榎本と通じていたのではないかという疑惑に対して、終始否定していますが。そのほか甲州鎮撫隊とかなんか名目つけて新選組などの主戦派を江戸の外に追い出しているのも、やはり勝の裏工作だったような気がする。現にフランスなんかは、薩摩屋敷の焼き打ちなどを裏でせっせと画策してたわけですから、外国勢ははっきり戦場化を望んでいたのです。とにかく当時の勝は、内戦防止に身を挺してますね。

―― 榎本と勝の間にどういう話し合いがあったかという記録は、じじつありませんよね。

安部　僕が調べた限りではありません。

―― だけれども、勝が、今おっしゃったとおり江戸を戦場にしないために、その尖鋭化した兵隊たちを軍艦に乗せて外へ出してしまうということも考えられる。

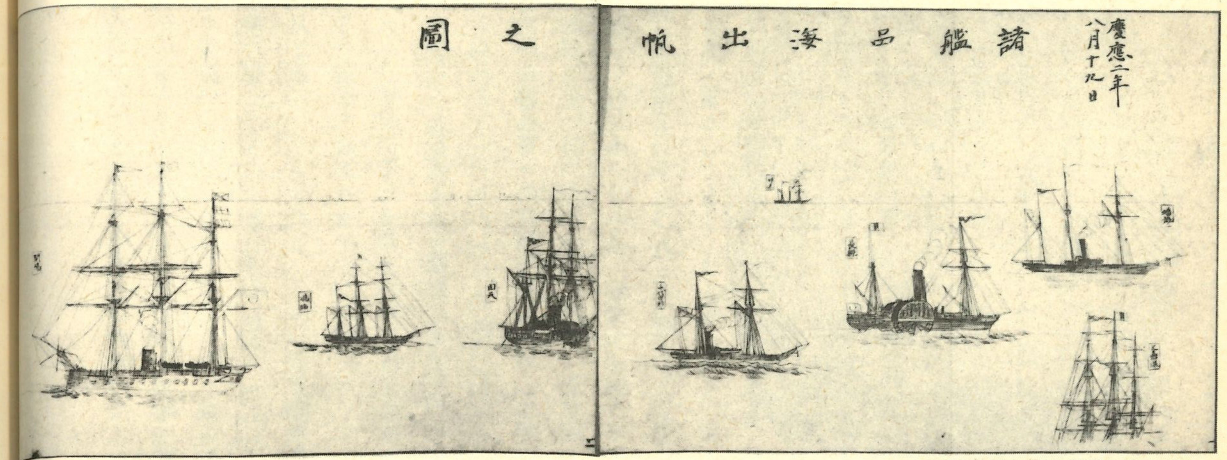
安部　それと同時に薩長軍への牽制でしょう。

―― そうすると、北へ行ったということは、北で戦おうと思ったのでしょうか。

安部　その辺が微妙なんですね。なんで読んだのか忘れましたけど、品川を出るとき、唐がらしをたくさん買い込んでいたらしい。唐がらしというのは凍傷の予防になるでしょう。どうも、北海道は最初からの計画だったようでもある。唐がらしはともかく、出発の時期なんかも、ちょっと出来すぎのような気がする。船の速度が違うとか、嵐にあったとかいろいろな事情が重なって、あの時期になったわけだが、仙台到着のタイミング、ちょうど会津の落城と相前後しているでしょう。それから陸路北上した大鳥圭介の軍隊の仙台に着くまでのもたもたした足どりも奇妙だ。会津に入って奥州同盟を作るのが狙いだったはずだのに、逆に会津の方から拒否されている。そして意味もなく日光のあたりに立てこもりますね。そのうち二本松が落ちて会津も身動きがとれなくなる。なんとも変な作戦だ。大鳥がよほどの愚将だったのか、それともわざと負けるようにだれかが糸をひいていたの



新選組隊士らで組織された甲州鎮撫隊も板垣たち新政府軍にあっけなく敗北（本間美術館蔵）



品川沖を進む榎本艦隊８隻（函館戦争図絵より　函館市立図書館蔵）

か。ひいていたとしたら、やはり勝くらいしか考えられない。こうして奥州同盟がばらばらになっていく過程を、榎本はじっと品川沖合いから見守っていて、頃合いよしと仙台に向かった、と考えれば目的地は最初から奥州ではなくさらに北の北海道だったということになりますね。

慶応四年八月十九日、品川沖を脱走した榎本艦隊は、次の八隻だった。

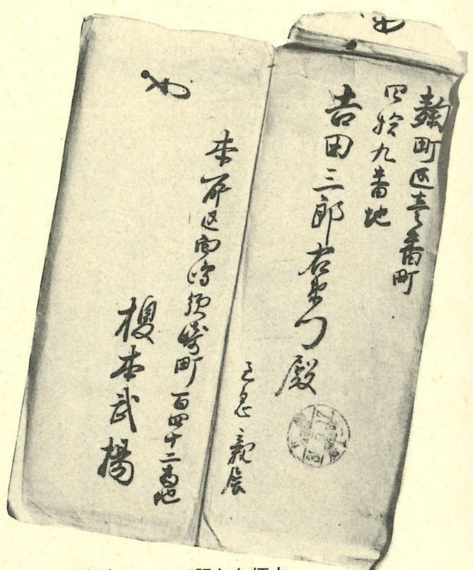
軍艦　開陽
同　回天
同　蟠竜
同　千代田形
咸臨
長鯨
美加保
神速

この八隻は、出発間もなく最初の悲劇に見舞われた。品川を出て三日目の八月二十二日夕刻、銚子沖で暴風にあい「美加保」は沈没、「咸臨丸」は大破して駿河湾まで流されてしまった。その後咸臨は九月十八日に新政府軍の手に捕らえられる。さらに開陽自身も舵を壊され、最初の目的地である仙台の松島湾に到着したのが八月二十四日のことであった。その後残りの船も入港して修理を加えた。

新たに汽船「大江丸」と帆船「鳳凰丸」などを仙台藩から徴用して、全艦船が勢ぞろいしたのが九月十八日のことであった。



榎本武揚一行　前列右が榎本、左が海軍奉行となる荒井郁之助



ハワイ行きについて記した榎本武揚書簡（松前町教育委員会蔵）

榎本艦隊、ハワイ招待の一件

ところで榎本艦隊が仙台湾に碇泊中、ハワイへの誘いが舞い込むという珍事があった。これは後年、榎本武揚が北海道松前出身の吉田三郎右衛門にあてた書簡（明治三十九年五月十七日付）で、そのことについてふれている。

つまり、

「拙者艦隊を率ひて仙台ニ赴きし節、横浜在留の布哇（ハワイ）国領事来仙して拙者ニ該国へ渡航せん事を頻ニ勧めし事有之意外にも拙者が恐ラク外国ニ遁走するも難測様との風説も有之趣聞及び居候ニ付転結し丹心不許云々と賦したる訳ニ候……。」

つまり、ハワイ国領事からハワイへ来ないかと勧められたという。

当時ハワイは独立国で、それより五十八年前にカメハメハ大王が四つの島を統一し、カメハメハ二世は日本へ領事を送っていた。もしこれが実現すると、榎本艦隊はハワイへ行って椰子の木陰でフラダンスということにでもなるのだが……。

安部　そのハワイ国領事、実はさっき引用した「もしほ草」という当時の新聞の発行者でもあるんです。ファン・リードという男なんだが、ハワイ国領事というのはどうも自称で、本業は武器の売買と、奴隷売買だったらしい。

「もしほ草」は文章もなかなかユーモアがあるし、着眼もいいので、『榎本武揚』という小説を書くときずいぶん参考になりました。きっと人物はおもしろい男だったにちがいない。しかし反面、かなりの悪

だったようだ。例の高橋是清、あの人も本人は留学のつもりだったらしいけど、最初はやはり奴隷として売られているんです。このファン・リードさん、ついでに、榎本武揚一行もまとめて奴隷として売るつもりがあったみたいだ。

―― ハワイへですか。

安部　そう、だから行っても、フラダンスというわけにはいかなかった。ハワイという国は、それまでは捕鯨基地として栄えていたわけです。ところがアメリカで石油が出始めて、捕鯨がすたれて、サトウキビの栽培が盛んに奨励されていた時期です。人手が非常に不足していた。最初は中国からの労働者が多かったらしい。そのうち日本人の方がおとなしいし、よく働くというので、目をつけられた。現地の新聞にも記事が出ていますよ。日本人はふんどし一枚で裸足で歩いていて、見掛けは悪いけど、非常におとなしい人種で、決して悪さしないから安心しろ……もっとも榎本は船を持っていましたから、特別扱いで、ほかの連中を売った代金の歩合くらいもらえていたかも知れない。

それともうひとつ、額兵隊を率いて榎本艦隊に合流する星恂太郎という剣客がいましたね。あの星というのが、実は二足のワラジで、ファン・リードの手先というか、情報の担当、今で言えば新聞記者だった。一種の特派員として榎本にくっついて函館へ行ったわけです。そのせいでしょう、「もしほ草」には函館関係の情報がわりに詳しく載っている。それにしてもこのリードという男、なかなかおもしろい人物です。さんざん悪いことしてたくせに、言ってることにはかなりの見識があった。例えば、今、日本での利権をめぐってイギリスが薩長側を、フランスが幕府を後押ししている。内戦に乗じて一気に勝負に出て、武器の売り込みと権益の拡張をもくろんでいるんだ。その手に乗ってはいけないと。わざわざ新聞を出して、なぜそういうことを言う必要があったのか。自分の個人的な商売に比べて、国家を背景に軍艦を売ったりする大商売に腹が立ったのかも知れない。ちょっと魅力のあるインテリ悪党だったようですね。

〝本土に訣別し、蝦夷に母国をつくらん〟

仙台沖の榎本艦隊に戻ろう。

慶応四年九月二十七日、開陽の艦上で秘密会議が開かれている。出席したメンバーを見ると、榎本のほかに唐津藩世子小笠原長行、桑名藩主松平定敬、元幕府陸軍奉行の大鳥圭介、新選組の土方歳三らが仙台から新しく加わったことがわかる。すでに九月二十二日、会津が落城し、奥州の情勢はすっかり変わってしまっていた。会議の内容はわからないが、「大同団結して本土に訣別し、蝦夷の未開を開き、不毛を耕して母国をつくらん」というスローガンが残っている（『慶應戊辰奥羽蝦夷戦乱史』大正六年刊）。

―― 品川を出たとき二千人の兵を乗せていますが、それは戦わないわけですね。

安部　戦う気配も見せていません。

―― 戦わせるつもりもなかったのでしょうか。

安部　燃料の補給をしたり、上陸して休んだりしていますね。なんとなく馴れ合いの感じさえある。そして、敗走してきた主戦派をそっくり乗っけて出発していく。

―― なんかこうできてる話ですなあ。



唐津藩世子・小笠原長行（大日本名家肖像集より）

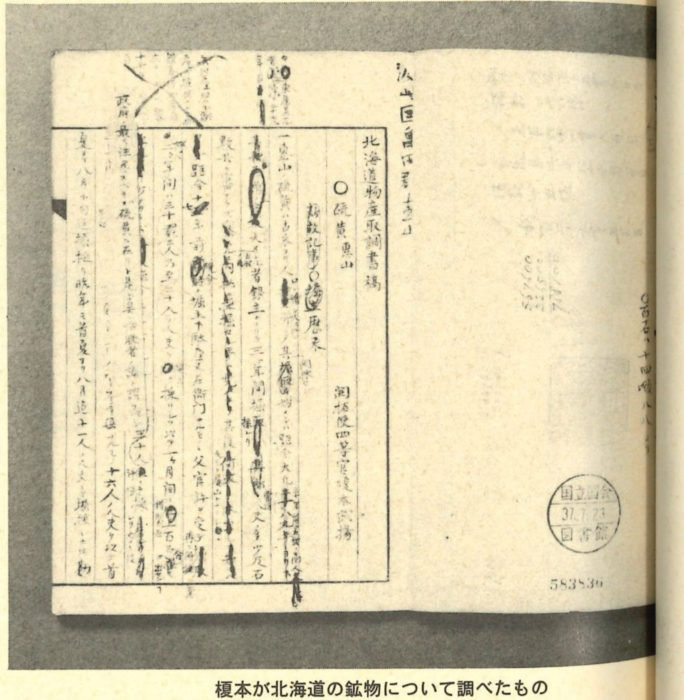
安部　そう、つじつまが合い過ぎている、偶然にしては。

―― なるほど。榎本の頭の中にあった蝦夷というものは、どういうものだったのでしょうか。

安部　そうはっきりしたイメージはなかったような気もする。結局は内戦防止の手段ですからね。ただ彼には開拓事業に強い関心があった。リードの誘いははねのけたけど、後に自分で開拓団を組織してメキシコに送っている。日本最初の海外移民団で、今でも榎本村という名で残っているそうですよ。北海道についてもそういう好奇心が作用していたことは否定できない。

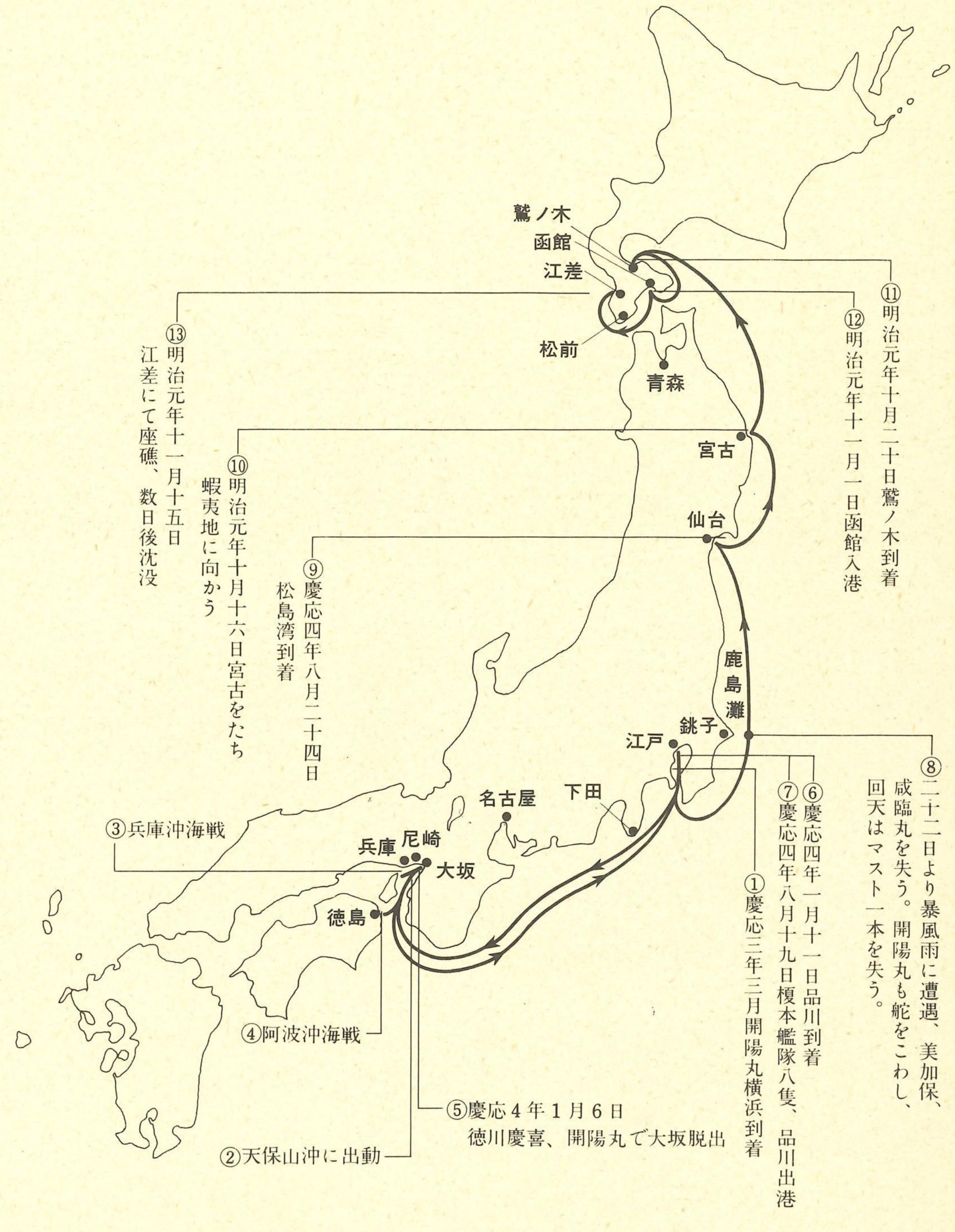
とにかく好奇心が強くて、鉱物の採掘であるとか、開拓事業であるとか、新しい技術を生かせる新天地に歴史の可能性を見たということはあるでしょう。もう一つは政治的側面ですね。手薄な北海道なら海軍力だけで一定期間、勢力を保持することができるはずだ。そこで旧幕臣の勢力を既成事実にして、有利な講和条約を結び、彼らの将来を保証しようという心づもりがあったのかも知れない。おもしろいのは共和国を作って独立宣言をしたことです。あの函館共和国は、ちゃんと国際法にのっとった手続きをふみ、諸外国からも承認されているんです。日本人としては珍しく奔放な発想ですね。半分は本気、半分は好奇心による実験だったのかも知れない。とにかく主戦派封じ込めと、彼らに将来への希望を与え、生活のめどをつけるという、一石二鳥の効果を狙っていたことは確かでしょう。

―― そうしますと、この品川を出るまでにすでに二か月くらいかかるのですが、榎本は船の中で、今おっしゃったようなことを兵士たちに、彼は非常に弁舌のたつ人ですから、諄々と説得していたという



榎本が北海道の鉱物について調べたもの
（北海道物産取調書稿　国会図書館蔵）

開陽丸の国内航路





宮古湾　榎本艦隊は北上途中に立ち寄った　翌年3月、ここで海戦が行われる

ことはどうでしょうか。

安部　そう、いわゆる雄弁というよりは、ユーモラスで、冗談が上手な、話術にたけた人だったらしい。当時としては珍しいタイプでしょう。とくに女性にもてたという逸話が残っているくらいだ。だから演説はしなくても、巧みにカッカッしている主戦派を操縦していったということはあるでしょうね。とにかく多士済々と言うか、不満で焼け石みたいになっている一匹狼の群が相手だから、コントロールもたいへんだったと思う。ただそのコントロールのしかたにトリックが多すぎて、晩年、榎本という人を非常に謎めいた、しかもあまり評判のよくない人間にしたてた理由だったかも知れない。昔の日本人はとかく英雄崇拝、それも竹を割ったようなタイプを好む傾向がありますからね。彼のような実務型の、今の中国で言えば、四人組に対する近代化派みたいなタイプは、後世どうしても偶像化されにくい。そして明治の思潮のなかでは、しぜん影が薄くならざるをえなかった。

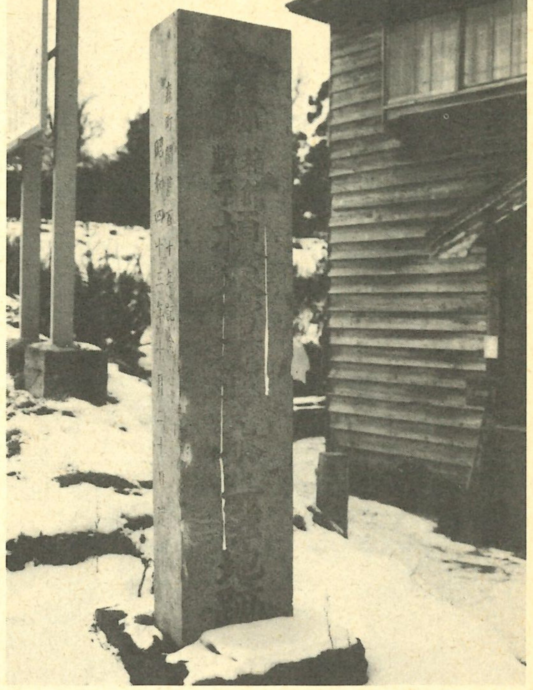
十月十二日、榎本艦隊は、松島湾を出発した。翌十三日、宮古湾へ入ったが、この日明治天皇は江戸城へ入城した。

もう、南へは帰れない。宮古湾で石炭の代わりに薪を積み込み、榎本艦隊は一路北を目指した。

艦隊の目指す蝦夷地は、正に厳しい冬の季節を迎えようとしていた。

作家子母沢寛の祖父、斎藤鉄太郎は彰義隊の生き残りで、仙台から艦隊に乗り込んでいた。彼は後に次のように語っている。

「仙台が駄目なら会津で戦う決心だったが、こう何処も此処も陥ちて終ったんじゃあ行きどころがない。みんな否でも応でも榎本



榎本軍上陸地に建つ碑

さんについて蝦夷へ行くより法が無くなっていたんだ。榎本さんの説では蝦夷へ行って、天下無禄となったわれわれは、新しい一国を作って楽しく意義ある生涯を送ろう。諸士の希望があれば将軍家を御迎えして、その手足となる諸役は悉く諸士の選択によって定めるのだ。和蘭陀はこうだ、フランスはこうだ、イギリスではこうだ、メリケンではこうだと外国のくわしい話をしてな。……あの人はなかなか弁舌もうまい。みんな魅いられて終うんだ。蝦夷は、もう雪で、その下に埋もれて五月までは冬籠りをする。涙をたらすとそれがそのまま凍るなんてこともきいているんだが、榎本さんの話をきいていると、何かこう、ぼうーっと暖かい明るいところへ行くような気持がしたもんだ。」（子母沢寛『蝦夷物語』より）

明治元年（一八六八）十月二十日、激しい吹雪をついて榎本軍は蝦夷地に上陸。圧倒的な海軍力を持ち、歴戦のつわものぞろいの榎本軍の前に、新政府側の守備隊は敵ではなかった。

蝦夷上陸の六日後、榎本は五稜郭に入城し、ここを本拠地と定める。

新政府軍の切り札〝甲鉄〟の体当たり戦法

では、榎本艦隊を迎えた当時の函館に眼を転じてみよう。

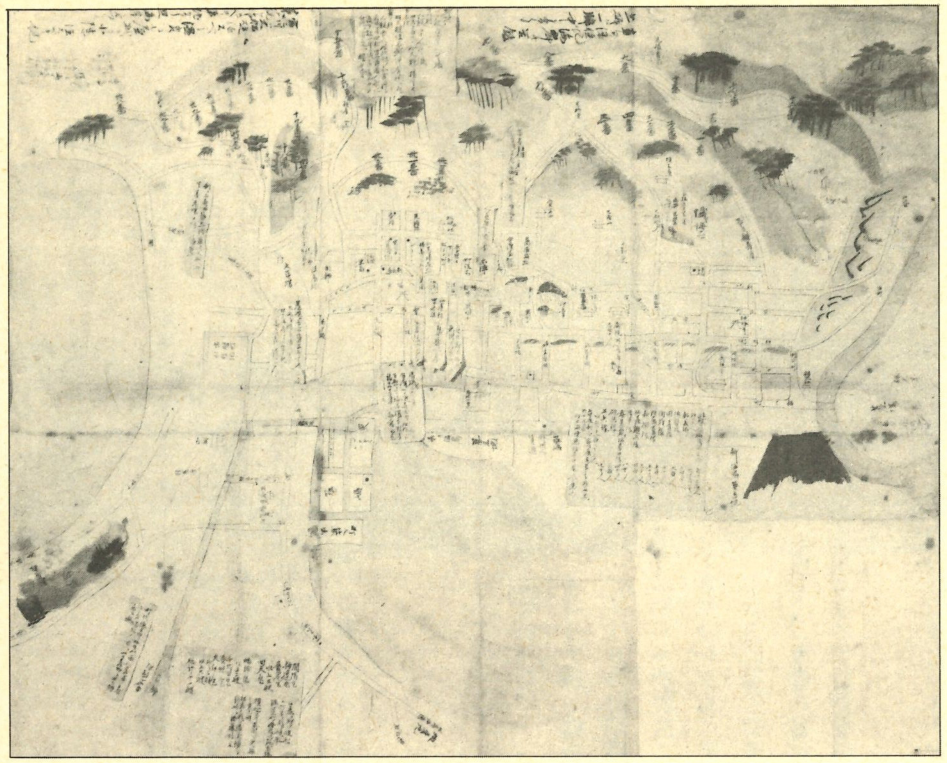
政府軍のスパイが書いた当時の函館の街の地図がある（函館博物館五稜郭分館蔵）。函館山を上部に、五稜郭は下の方に配置している。この地図から、興味深いいくつかの情報を読みとることができる。

①彰義隊・伝習隊・衝鋒隊など、榎本軍に加わった各隊の合計が二千八百二十三人にのぼること。

②地図上部の文章には、寒川（函館郊外）には軍艦が碇泊可能であり、温泉の出る小屋がけもあり、野菜も作られ海藻もじゅうぶんにあるという情報がことこまかに記されている。

③最も重要な情報として、外国人の住居地を赤い点で示している。ロシア領事館をはじめ、当時函館港に住んでいた外国人商人の名が読みとれる。このような開港地で戦いをすると、とかく外国人を巻き込み国際問題を起こしやすいので、注意を換起したものであろう。

④さらに、地図の右下に切り取られている部分には、いっそう重要な情報が書き込まれていたと推測されるが、今となっては知るすべもない。



新政府軍のスパイが描いた函館の地図　右下が切り取られている（市立函館博物館五稜郭分館蔵）

このような情報収集活動を通じて、新政府は着々と函館総攻撃の準備を進めて行く。

しかし、実際の攻撃には、翌明治二年の春を持たなければならなかった。その理由はひとつに、蝦夷地の厳しい冬の間の戦いを避けたことと、ほかのひとつは、榎本軍の開陽に対抗できる有力な切り札を確保することであった。

その切り札とは装甲砲艦の「甲鉄艦」である。

ではその甲鉄とはどんな船だったのだろうか。

その特徴は、木造でありながら、まわりに七十三ミリから百二十ミリほどの鉄板が貼りつけてあるため、砲弾に対してじゅうぶんな防備力を持っていることである。さらに、一見して前方に三・五メートルほど突き出ているラム（衝角）に気がつく。

甲鉄の艦首の水面下に大きく突き出した衝角については、いろいろな当時の文献にも書かれているし、明治初年、まだこの艦が品川沖を定繋場としていたころに、乗員がこのラムの上に出て、釣棹で魚を釣ったとか、おもしろいエピソードもあったようである。

十九世紀中ごろから後期にかけて、このように衝角を主武器とした軍艦は、ほかにも数か国で建造され、これをラム（衝突艦）と呼んだ。

甲鉄もそのひとつであって、艦首に大きい砲があり、敵にまず第一発を命中させてから衝突してこれを撃沈させるのが理想的な戦い方であった。しかし二発、三発と続いて砲を撃つだけの時間はなく、実戦ではせいぜい一発の弾丸を敵に命中させて大混乱を生じさせ、その直後に衝突すれば大成功ということになる。明治の

末ごろまで、各国の巡洋艦以上は補助的の装置としてこのラムを持っていたが、日本では日露戦争の初め、濃霧などのために味方の艦同士が、誤って衝突して相手を沈めるという事故が相次いだので、日露戦争中から建造した国産艦にはすべてラムを廃止した。

日露戦争ころまでは、海軍の号令に「衝突用意！」というのがあったという。この号令により上甲板上の砲員や斬り込み隊は上甲板上に伏し、衝突の衝撃で負傷しないようにし、各自は剣（スワード）を持ち、いつでも斬り込めるようにした。宮古の海戦では榎本軍の「回天」は甲鉄（衝角はない）に接艦して斬り込みを行ったのである。

世界をたらい回しされた甲鉄

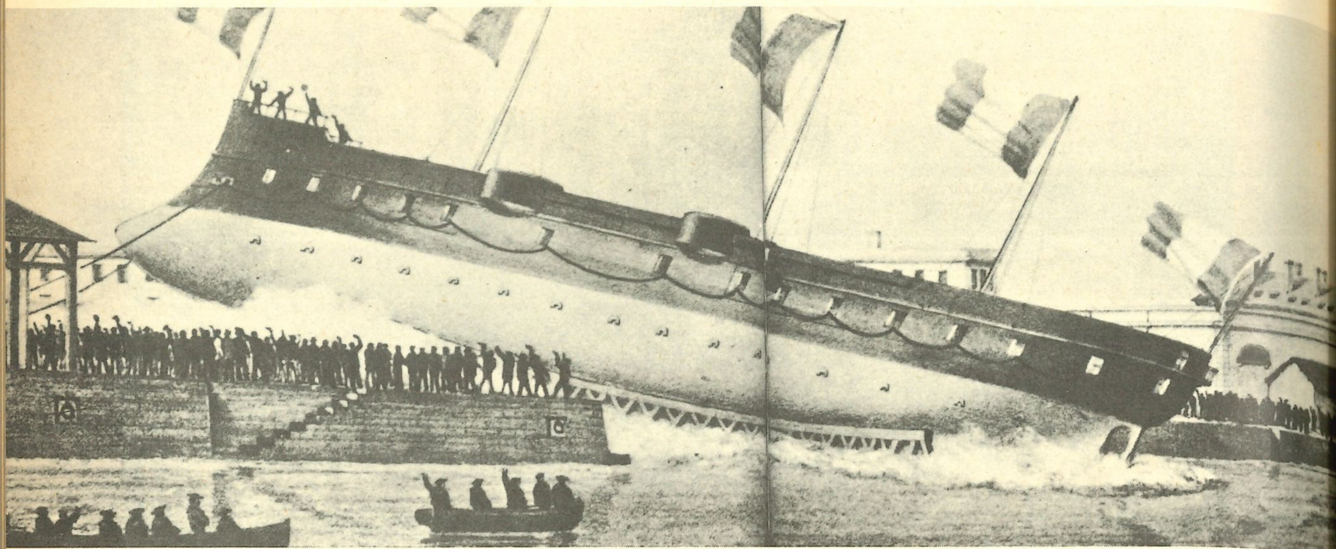
ところで、甲鉄ほど数奇な運命をたどったフネはなかった。

当時世界では南北戦争はじめ、クリミア戦争、イタリア統一戦争など多くの紛争が続いていた。南北戦争では、アメリカの沿岸用の船舶はもちろん、湖沼や河川用の大小雑多な船舶が多数改造されて砲艦などに用いられ、また北軍側はその工業施設をフルに活用して、兵器、艦艇などを作った。北軍に比べ工業力の劣る南軍海軍は、特務使節をイギリスとフランスに派遣して、軍艦の建造を発注することに懸命であり、南軍側を妨害しようとする北軍側使節の間に、激しい暗闘が行われた。

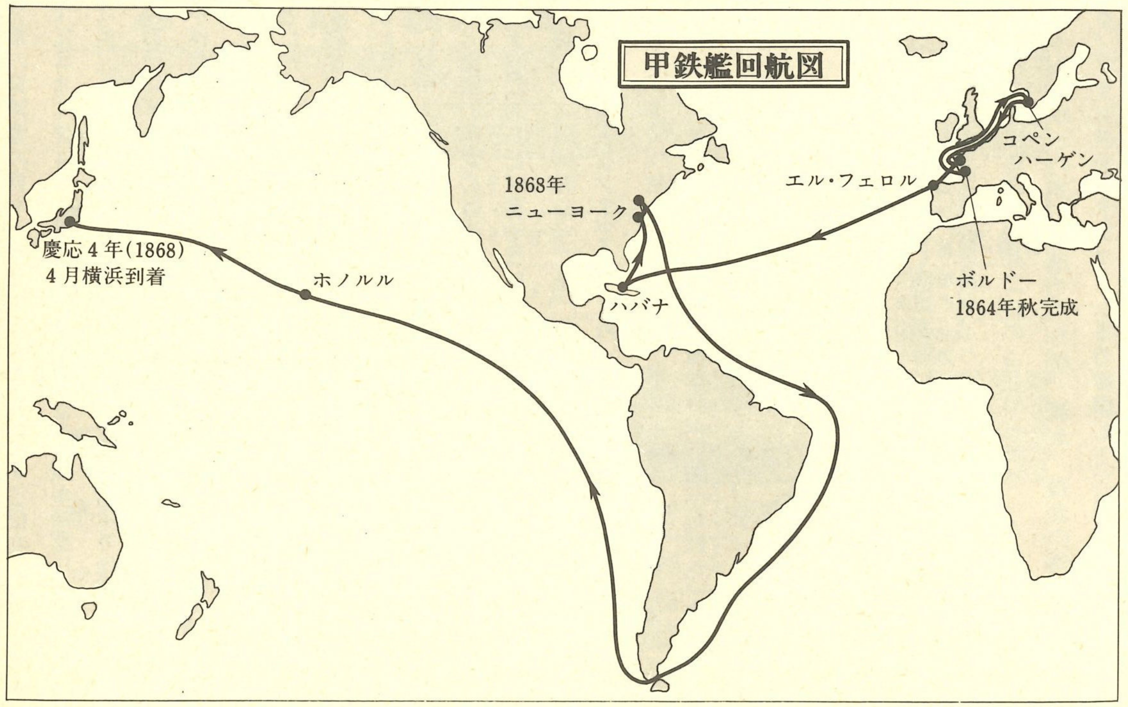
南軍はフランスに、沿岸用の木造甲鉄付きの砲艦二隻とコルベット艦四隻を発注したが、後者は完成せず、前者の中の第一艦だけが完成、ここに不思議な運命の甲鉄（後に東と改名）となったのである。ちなみに、その第二艦はプロシア海軍に売られて装甲砲艦プリンツ・アダルベルトとなった。ところで、この第一艦は南軍の猛将ジャクソン将軍のニックネームを採ってストーンウォールと命名された。この艦を南軍が手に入れたのはその特務使節のトーマス・ジェファーソン・ページ大佐の努力によるが、しかしその運命は奇であった。

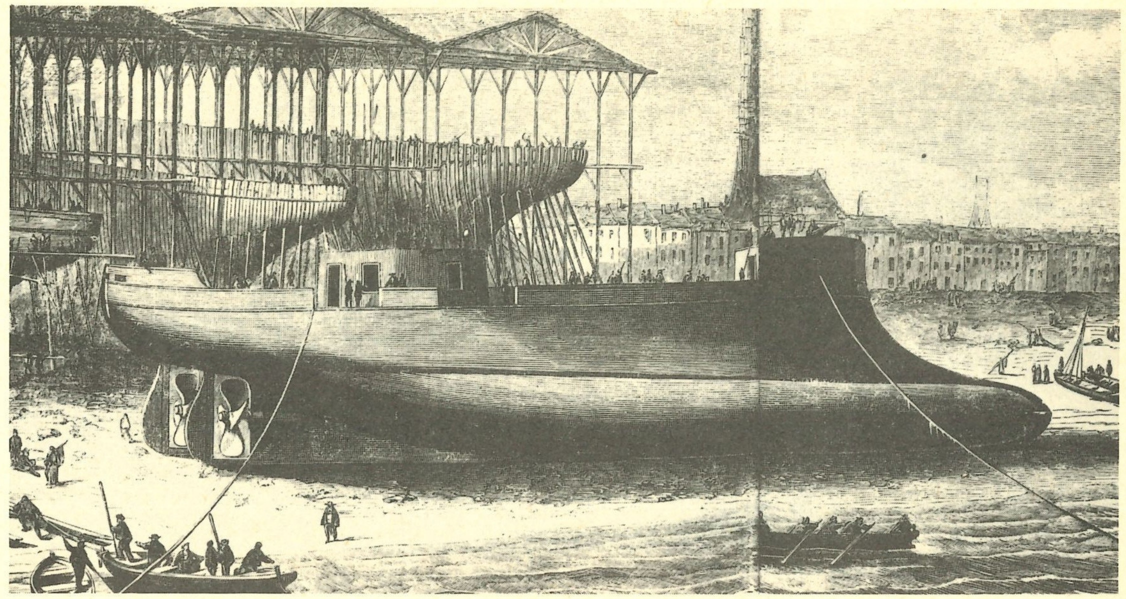
このフネはミシシッピー河の北軍封鎖を打開するため、フランスのボルドーの造船家アルメンに依頼された。アルメン氏はすぐれた技術者であり、ことに着想がすばらしく、彼はみずから設計し、みずからの造船所でストーンウォールを建造した。しかしフランス政府はメキシコ戦争などのために、南軍への引き渡しを許さなかった。このフネは完成しても、どうしてもそのまま南軍側の港へ行けない。そこで一計として、第三国に引き渡して、さらに南軍が受け取る方法を採ることとなり、名目的にスウェーデンに売ったこととした。かくして砲艦スフィンクス（建造時の南軍の仮名）は、まずスウェーデン軍艦ステールコッデルとなり、次いでデンマークが買って、艦名をオリンデと変えたが、この時すでにデンマーク対プロシア・オーストリア戦争は終わっており、コペンハーゲンでようやく南軍が入手しストーンウォールとなった。このために、わざわざボルドーからコペンハーゲンまで、無意味な航海をした上に、途中荒天にあって難航し、船体やマストなどを損傷している。

さて南軍の所有となったものの、どうしたら南部アメリカへ航海できるか。このためにスペインを利用したのである。スペインのエル・フェロル港にひそかに入港し、修理と航海準備を整えて、



ironclad ram すなわち「装甲のラム艦」の進水式





フランスの雑誌「モンド・イリュストレ」に載ったストーンウォール（当時の名はスフィンクス）

北軍の封鎖艦の目をかすめて、同港を脱出する機会を待った。すでにエル・フェロル港には北軍の有力な軍艦が厳重に監視していたが、とにかく脱出に成功した。これは北軍艦隊の指揮官が政府の指令により、わざと脱出の機会を与えたらしい。すでに南北戦争は最後の段階となっていたから、どうせ北軍（政府軍）が押収できると思ったからであろう。

とにかくストーンウォールはエル・フェロルを出港した。おそらく艦長以下は「シメタ」、「天佑ダ」と思ったことであろう。

長い難航の末、ストーンウォールはスペインの他の港であるハバナに無事入港したのである。当時キューバはスペイン領であるから、南軍の予定の計画としては妥当である。ところがこの艦がハバナ港に入ると、真っ先に聞いたのは南軍降伏、南北戦争はすでに終わったとの知らせであった。アメリカ海軍軍人たる南軍海軍大佐の指揮するフネであるため、当然アメリカ政府北軍に引き渡された。かくてこの艦はアメリカ海軍により、東海岸の軍港に回航され、入渠の上、技術上の特徴を詳細に調べられた。特殊なフネであり、急造の上に、航海時の損傷もあり、アメリカの新海軍としては不適当な性能のフネでもあった。ことに航洋性がまったく欠けている上に、備砲の大きさ、数、配置などが米海軍の用途に合わず、加えて機関部も故障している。

かくてこの艦は間もなく徳川幕府に売却されることになる。南米南端のマジェラン海峡を通り、ハワイへ寄って江戸（品川）へ入港したのは慶応四年四月二日のことであった。この大航海では、もちろんほかの多くの港でも石炭、真水、糧食の補給をしている。フランスからデンマークまで修復して大西洋を越えたとき、

すでに戦争は終わっており、さらにいっそうの大努力で江戸まで来航したときは、またも幕府は大政奉還後であって、間に合わなかった。いったん横浜へ入港したが、同年末までは星条旗（米国旗）を掲げていた。明治二年一月、新政府がこれを購入して甲鉄と命名した。わずか千四百トンながらも三百ポンドのアームストロング砲（十三インチ砲）一門を持ち、また木造船体の山伏部には厚さ五、六インチの甲鉄板を取り付けてある新政府軍の最強艦であった。

その後、甲鉄は、明治四年、艦種を三等艦と指定され、同年末、軍艦東と改名された。

「日清談判破裂して
品川乗り出す東艦……」

という歌は明治十七年の京城（現在のソウル）における清国とのトラブル（京城の変、または壬午事変）の時に作られたらしく、壮士節とか称されて、明治二十年ごろから全国的に歌われたものである。

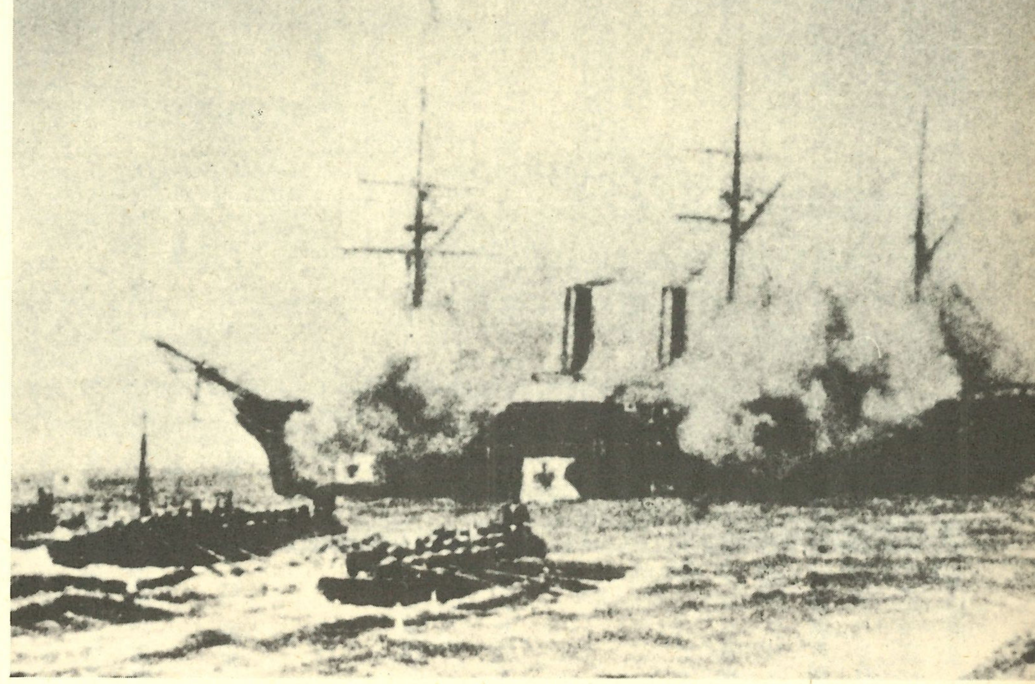
言い値で買い集めたフネ

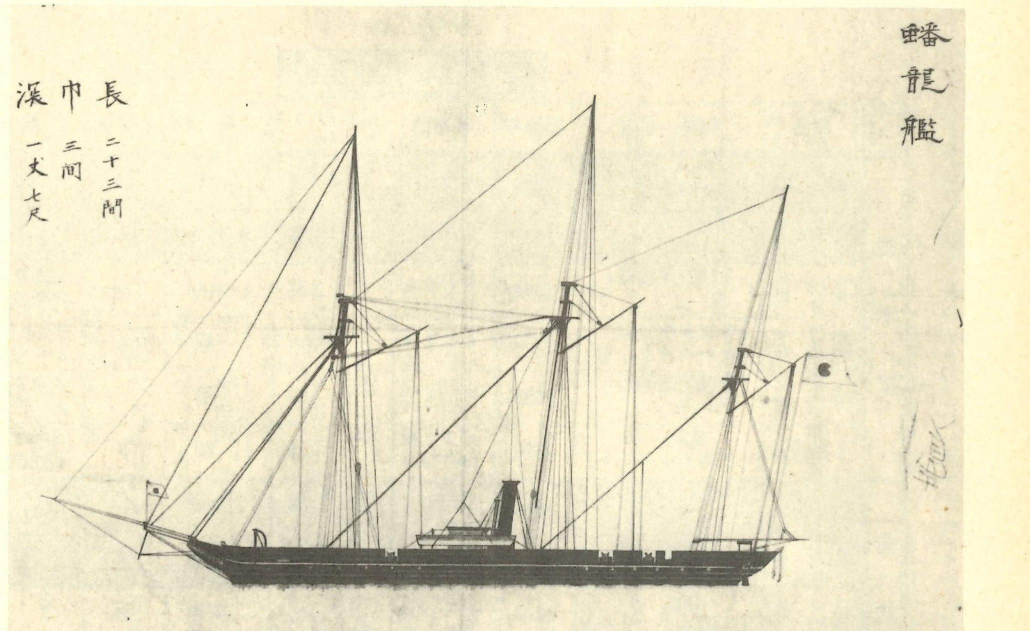
——どうして、このように各国のフネが集まったのでしょうか。

福井　確かにプロシア製・オランダ製・イギリス製・アメリカ製・フランス製いろいろなのがありますね。この十二、三年前にクリミア戦争が終わっています。イギリスがこの戦争で黒海で上陸援護と要塞砲撃に使った吃水の浅い砲艦が百隻位余ってしまったんです。それを売らなければいけない。しかも造船所で、ほとんど出来上がっている分で注文取り消しになったものもある。それが、幕府と新政府軍には

両軍艦隊戦力比較

	艦名	船型，船質	製造年	製造国	排水量(トン) ＊印は総トン数	推進器	備砲数	記事
榎本軍	開陽	フリゲート，木（3檣シップ）	1866	オランダ	2,800	螺	26	幕府発注
榎本軍	回天	砲艦，木（3檣バーク）	1853	プロシア	1,450	外車	11～12	設計と機関製造はイギリス
榎本軍	長鯨	汽船(運輸船) 鉄	1864	イギリス	＊ 996	外車	——	元南軍の武装汽船
榎本軍	蟠竜	ヨット改造のコルベット，木	1858	イギリス	＊ 370	螺	4	ヴィクトリア女王より幕府へ贈呈
榎本軍	神速	汽船(運輸船) 木	1858	アメリカ	＊ 250	螺	——	元南軍の武装汽船
榎本軍	千代田形	砲艦，木（2檣スクーナー）	1866	国産(石川島)	138	螺	3	国産初の小砲艦
新政府軍	甲鉄	砲艦(ラム型) 木，甲鉄帯	1864	フランス	1,358	双螺	6	特殊砲艦(南軍向け)
新政府軍	春日	通報艦，木（3檣スクーナー）	1863	イギリス	1,269	外車	7	元シナ航路用高速汽船
新政府軍	延年	砲艦，木（3檣スクーナー）	1868	香港	700	双螺	8	
新政府軍	陽春	砲艦，木	1864	アメリカ	530	螺	6	
新政府軍	朝陽	コルベット，木（3檣バーク）	1856	オランダ	約 700（＊ 250）	螺	12	咸臨の同型船
新政府軍	(第一)丁卯	砲艦，木（3檣スクーナー）	1867	イギリス	125	螺	8	


砲弾をはなつダンツィッヒ号（のちの回天　高橋邦太郎氏蔵）



『函館戦争図絵』に描かれている蟠竜はヴィクトリア女王から贈られた船であった（函館市立図書館蔵）

たくさん来てます。また一方ではアメリカの南北戦争が終わった。甲鉄のほかにもアメリカの沿岸警備隊、南軍の艦船、これも相当数を幕末から新政府軍は買っております。この中には、その来歴も調べないで外商の言い値で買ったものもあるし、何々藩主の特命で建造したと称して、余ったフネを売ったりしています。

―― 回航してまいりますと、かなり向こうはもうけたと言えます

ね。

福井　ええ、向こうというかブローカーですね。商人です。しかし短期間にこれだけそろえられたのだから、一方では絶好の機会とも言えたでしょう。商人は大もうけ、またわが方もフネが手に入ったわけですね。

―― 開陽と甲鉄の値段が四十万ドル、長鯨、春日、回天などが十五～二十万ドルですけれども、これは当時としては安いですか、高いですか。

福井　これは非常に高いお値段で、向こうの言い値で買っておるようです。逆に言うと、言い値で日本が買うから、どんどん日本に売りに来る。したがって短期間にこれだけのフネがそろったというわけです。その一方では、せっかく買ったが使いものにならなかったフネもある。天津近くの戦闘で沈んだものを上海で応急修理したのを買ったりして……。

―― 両軍をごらんになりまして、どういう印象をお持ちになりますか。

福井　ちょうどなかよく六隻ずつフネがありますが、ほんとう言うと榎本軍の長鯨と神速は軍艦ではないのです。当時運輸船と言っておりました。軍艦ではなしに、品物を運ぶ。しかし商船とは違うんです。藩とか幕府の兵隊や軍事用の物資なんです。小さな大砲は持っておりますが、戦力としては長鯨、神速は決戦用ではない。千代田形は小さすぎる。もともと品川のお台場用のフネなんです。この中では榎本軍の開陽と回天ぐらいが戦力ですね。それから政府軍の方は、甲鉄が断然有力で、あとはみな砲艦です。大砲はやや大きい六インチ砲ぐらいのを持っていますが、砲艦です。ただ甲鉄に至っては三百ポンドの砲を備えている。大砲の直径は、十三インチ半です。ただ、前しか

開陽丸発掘調査について

北海道江差町教育委員会は、明治元年十一月、函館戦争において江差港で座礁沈没した幕府海軍旗艦「開陽丸」の現状確認調査を昭和四十九年に行い、その結果、昭和五十年に分布調査、翌五十一年から本格的発掘調査を行い昭和五十五年度までの六年間に亘り調査を継続している。

海底よりの出土遺物は約三万点に達し、船体の一部をはじめ、大砲・砲弾・銃弾・日本刀の武器・兵器類、滑車・ロープ・測鉛などの船具類、古銭・陶磁・矢立てなどの生活用品、その他部品など当時を知る上で貴重な多くの遺物が引き揚げられた。

さらに未調査区域は十六メートル×十メートルの船体の一部をはじめ大砲などの大型遺物を含む多くの遺物が残されている。

発掘調査は使用する機材や環境は大きく異なるが、陸上の発掘調査と基本的には変わるところがない。

日本で最初の本格的海底調査として「開陽丸」発掘調査は多くの問題を抱えながらも、各機関の協力・指導を得て調査を続けてきたが、その問題の一つに出土遺物、特に金属質遺物の脱塩・保存処理がある。

海水の塩分が金属に悪影響を与えるのは周知の事実である。「開陽丸」の遺物も海水から海上に出た瞬間から急激な腐食がはじまり、遺物に悪影響を与えているのは明らかであった。このため、東京・奈良両国立文化財研究所の指導を得て、苛性ソーダ溶液（鉄処理）セスキ炭ソーダ（銅・真鍮処理）による脱塩処理システムが確立され、今日まで順調に作業が行われている。

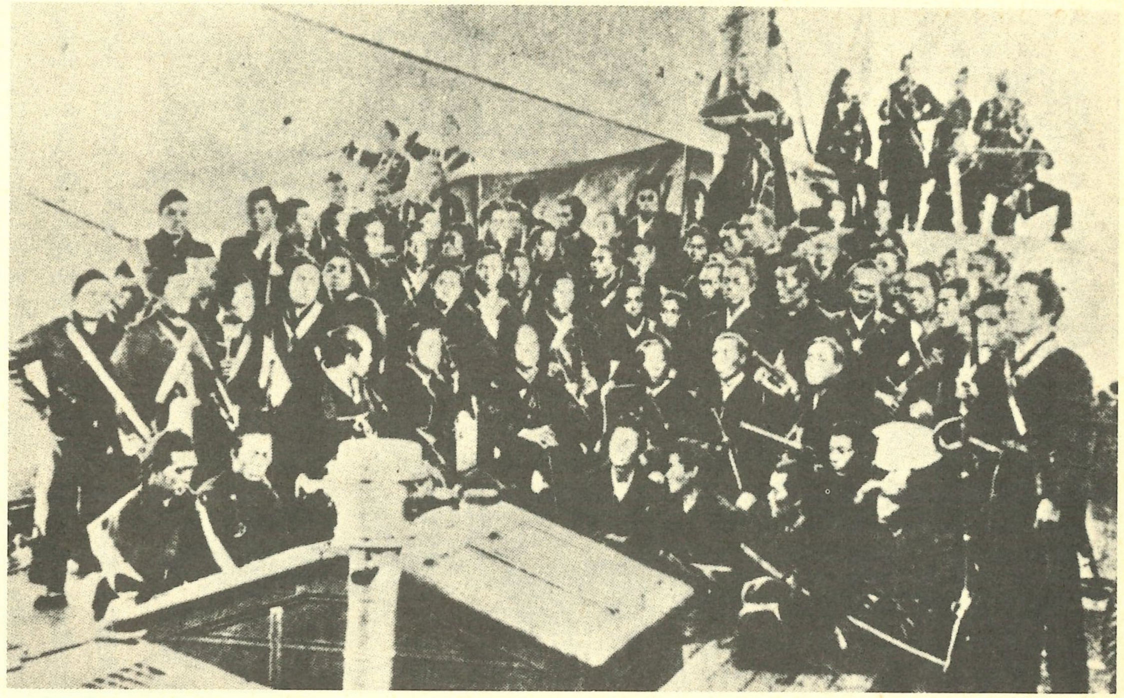
この他にも、木製品の脱塩・PEG処理など、金属質・有機質のあらゆる材質別の脱塩保存処理システムが行われている。

江差町教育委員会では発掘調査と併行して開陽丸に関するあらゆる資料の収集を試み、その結果、オランダ国内より開陽丸設計図四十五枚をはじめ、造船契約書・艤装日誌・航海日誌・積込リスト・進水式祝賀会メニュー及びワインリスト等の資料を収集し、日本国内からも榎本釜次郎の手紙などを収集した。

開陽丸発掘調査は今後も数々の問題点を抱えながらも「開陽丸」の全貌をより明らかにするため続けられ、当時の多くの分野に貴重な資料となるであろう。

また、今後各地で行われるであろう水中遺跡の発掘調査の先駆的役割を為すであろう。

（藤島一巳）



「延年」に乗り込んだ新政府軍兵士たち（江差町教育委員会提供）

撃てない。左右方向に少し撃てるのですが、そういう時は甲板の上のレールの上を多数の兵隊が引っ張って、舷側へ向けて舷側の扉を開いて撃つわけで、一発撃って十分や十五分かかるでしょう。ですから結局、ぶつかるのが任務です。したがっていろいろなフネがありますが、陣形運動をとって一つの戦力として行動する艦隊と言えるものではないのです。

結局、単に群ですな。グループですな。結局この両軍が戦闘をすると言えば、地形を利用して海軍の要塞の援護下に戦うのが有利である。それからもうひとつは、強いもの同士が結局ぶつかって、弱いものを見て撃ち合いをする。それしか戦闘は成立しないと思います。

―― 仮に、この榎本軍と新政府軍がこのままの形でぶつかったり両方正面衝突で海戦になったとしますと、どちらが強いでしょうか。

福井 そうすれば、隻数は少ないけれども、榎本側は堂々たる決戦をするだろうと思います。その戦闘海面は津軽海峡でも函館の沖でもどこでもいいんです。新政府側の甲鉄は案外そうなると使い道はないです。使いにくいフネです。そうすると春日はおそらく逃げるしかないでしょう。そういう状況ではないかと思います。このままでしますと、案外開陽一隻でもって暴れまくれると思います。

―― ほう。

福井 開陽は当時としてはとにかく巡洋艦ですね。しかし何分にも長い航海、そして江戸へ着いてからほとんど修理をしていない。実際には諸機関の状態や、備砲が整備されていたかどうか疑問ですが、要目どおりの性能ならば非常にりっぱな軍艦です。それから回天、これもかなりりっぱなフネです。しかし甲鉄は海岸では使えますが、外海では非常に不自由なフネです。春日はできた当時は、世界でいちばん

スピードの速い軍艦でした。十九ノットまでいっているんです。これはいい石炭のカーディフ炭を使ってですが、薪だったらそうはいきません。しかも、この時にはおそらくボイラー（かま）もかなり傷んでいたろうし、とてもそんなスピードは出ない。そのほかのフネは勢力としては、まことに微々たるものです。榎本軍の開陽・回天対政府軍の甲鉄・春日だとすると、開陽側の方が断然有利だと思います。

開陽沈没で逆転した制海権

新政府軍が甲鉄を手に入れ、着々と函館総攻撃を準備していたころ、榎本艦隊は致命的な悲劇に見舞われていた。艦隊の主力艦開陽が江差沖で座礁、沈没してしまったのである。

オランダで建造されて二年余り、戦いらしい戦いをせぬままに開陽は北の海に沈んだ。



宮古湾海戦で戦死した回天艦長・甲賀源吾（函館市立図書館蔵）

この時以来制海権は新政府側に移り、榎本軍は窮地に追い込まれた。

明治二年三月二十五日早朝、榎本軍の回天は宮古沖に碇泊している甲鉄を襲ったが、この捨て身の作戦も結局失敗に終わった。

明治二年五月十八日、新政府軍の総攻撃を受け、五稜郭の榎本軍は降伏した。

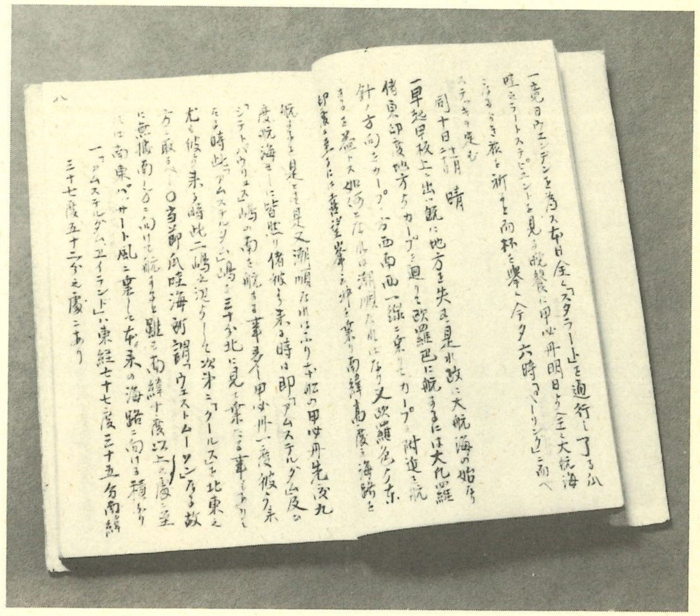
時に榎本武揚は三十四歳、この時彼はわが国初めての入札によって蝦夷島総裁を名のっていた。

落城した五稜郭の広間には、クリミア戦争の時、難攻不落で知られたセバストポール要塞の図がかけられていたという。

わかりにくかった男・榎本武揚

―― 榎本は結局蝦夷で何をしようと思ったのでしょうか。

安部　さっきも言ったように、一つは政治的な問題、一つは経済的な問題。彼がいまになって非常にわかりにくい男だったと言われるいちばんの理由は、その忠誠観のあいまいさのせいでしょう。彼はちょうど江戸の末期、いちばんの激動期をヨーロッパで過ごしてしまった。彼のヨーロッパ留学中に、幕府は末期的症状に突入してしまった。新選組ができたりしたのも、彼の留守中の出来事ですね。ところでその時期、ヨーロッパで榎本は何を見、どんな刺激を受けて過ごしたか。『渡蘭日記』というのがありますね。セントヘレナに行くまで毎日つけていたのが、なぜかセントヘレナでぷっつり切れるのです



榎本武揚の『渡蘭日記』(写本　国会図書館蔵)



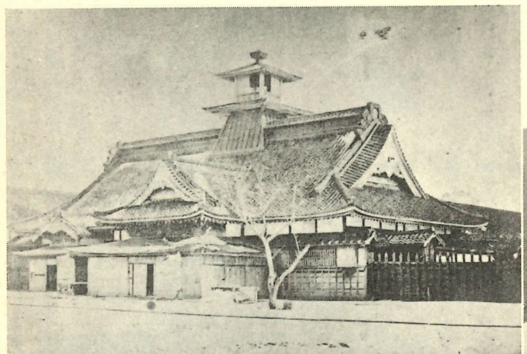
観戦旅行記念写真　榎本と赤松はプロイセンとデンマークの戦争をオランダ士官と見学した(江差町教育委員会提供)

よ。どうもナポレオンに関して何かすごい衝撃を受けたらしい。たぶん権力の栄光の虚しさを身にしみて感じたのではないか。

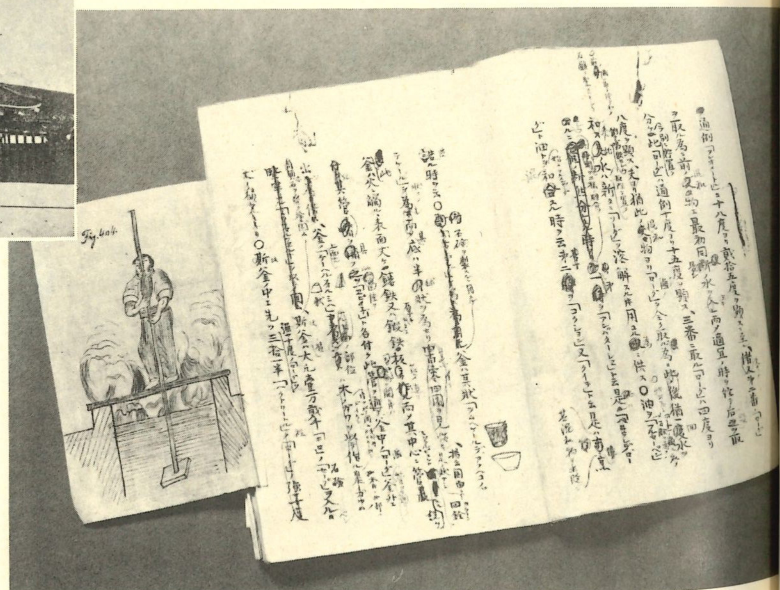
それから次に、さっきもちょっと話に出ていたプロイセンとデンマークの戦争。たまたま彼は見学参戦しているわけです。伝統あるデンマーク王国が、新興プロイセンに無残に敗けるところを目の当たりで体験した。その結果、もはや伝統なんかにこだわっている時代ではなく、産業立国というか、新しい技術の時代なんだという認識が育ち始めたと思うのです。プロシアが勝つ理由は、新しい兵器と新しい戦術の採用、なかでも電信機が榎本の関心を強くひいた。日本に帰ってからも、土産に持って帰った電信機を大事にしていますね。新しもの好きというのかな、電信機以外にも、石けんがひどく気に入ったらしい。函館でも石けんを作って、配って歩いたらしい。もっとも、だれにでもでなく、特に女性に配るのが趣味だったらしいけど。とにかくプロイセンとデンマークの戦争に参加して得た、新しい目をもって帰ってきてみたら、日本の旧体制はいよいよ最後の破局をめがけて突入しつつあった。その彼にとって、やれ幕府だ薩長だといった争いはしょせんコップの中の嵐としかうつらなかったのではないか。いま世界は変わりつつある――じっさいあの時代、ロシアではドストエフスキーの『罪と罰』が書かれていた。世界中が目をさましかけていたんです。『資本論』も出てくる。まさか榎本が『資本論』を読んだはずはないけど、とにかく世界の大転換期なんです。その渦の一端にでもふれて、日本に帰って来てみたら、やれ薩長だ、幕府だではね。

――なるほど。

安部　その榎本があたりを見まわして、内戦だけは避けようという勝海舟の思想に共鳴し、意気投合したのはむしろ当然でしょう。勝は

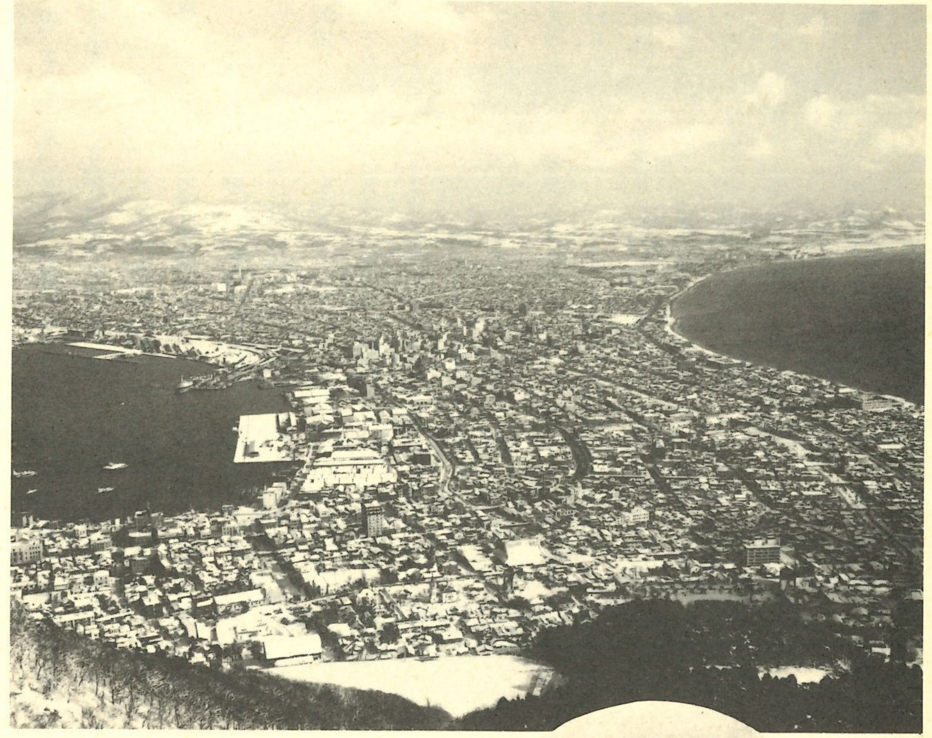


五稜郭庁舎(函館市立図書館蔵)



榎本は石けんが気に入り『石鹸製造法』を訳した(蘭書翻訳　国会図書館蔵)

内側からそれを見、榎本は外側からそれを見た。だから彼が函館へ行ってまずやったことは、万国法に基づいて独立国を作ることだった。反逆というより、実験だったような気がする。入札制で一応共和国を作ります。もちろんかなり反対もあったらしく、将来は徳川慶喜を迎えて大統領にするという、いささか妥協的な暫定政府になってしまった。しかし五稜郭の毎日は要塞生活というより、まるで職業大学みたいなものだったらしい。とくに彼は化学に関心が強かったから、初歩的な実験、その他語学の授業だとか新しい採鉱法だとかさらには産業化のためには利権を確立しなければいけないとか、つまり近代化のための教育ですね。戦争に勝つという希望はあまりなかったような気もする。日本で最初に赤十字を作ったのも彼ですね。勝敗よりも戦争のルール確立のほうに関心があったみたいだ。だから捕虜も殺さず、希望に応じて帰農したい者には土地を与え、帰りたい者はまとめて内地に送り返している。赤十字はともかく、フェアすぎる。戦争というよりゲームですね。しかも味方の軍隊の中からさえ帰農希望者をつのって、どんどん帰農させている。わざわざ戦力を減らしているようなものだ。どう見ても、本気で戦争する気があったとは思えない。むしろ機を見て合議で和解し、とにかく内戦を避け、外国にスキをあたえない。その間を無駄にしないため、彼はいろいろと近代化の実験を楽しんだのじゃないか。それにしても当時の人間にはわかりにくい人物だったでしょうね。今でもわかりやすい人物とは言えないけど。



函館山から函館市街をのぞむ



初代逓信大臣となった榎本武揚

——なにか認められるまでは異端者であるという道を歩いてしまうわけですね。

安部　晩年はけっこう明治政府の要職についています。その割に後世の評価はすこぶる低い。結局、「忠節」という概念の尺度をあてはめてみると、いささか具合の悪い人物だからでしょう。勝海舟のことを福沢諭吉が『瘠我慢の説』でずいぶんやっつけていますね。幕臣なら幕臣らしく節を通すべきだ、と。あの節という抽象的なイデオロギーからすれば、榎本武揚も勝と同様、まことに無節操な人物だったことになる。

——しかし、その頭の中では、当時の日本を超えた非常に近代的なものを持っていたわけですよね。

安部　現代のような複雑な時代には、特に榎本のような思考形式を理解し許容する必要があるでしょうね。

アルメンと二隻の甲鉄艦

フランスの天才的造船家アルメン（その独創力には敬意を表する）がボルドーのアルメン造船所で、アメリカ南北戦争の南軍用に二隻の同型船を設計・建造した。第一艦ストーンウォールは世界を回り回って後に日本が手に入れたことは本文に詳しいが、その第二艦は第一艦より後で建造されたため、出来上がったとき南北戦争が終わっていた。

この第二艦は一八六三年、ストーンウォールと同時に契約・起工、六五年完成したが、間もなくプロシア海軍に売却された。一時チェオップスと称し、プロシア海軍ではプリンツ・アダルベルトと名付け、プロシア甲鉄艦の第一艦となった。奇しくも、日独両海軍の装甲艦の最初は、フランス生まれの南軍向け姉妹艦であったわけである。

その後、プリンツ・アダルベルトは大改造されたが、わずか数か年の就役で船体の木材の腐蝕が早く、短い寿命で解体された。一方、わが国の甲鉄艦は「東艦」となってからも久しく用いられた。

東艦は、衝角を持つ多くの軍艦や専門の「ラム」（衝突船）と比して、その船尾の形状に特徴があった。船体が小さく、かつ短く、長さが三・五メートルもあるラムを艦首に持つから、風や潮流の影響でフネの針路を保持するのが容易でない。この「保針性」が悪いと、どうてい衝突は成功しない。そのためにアルメンが考えたのが、「ダブル・スケッグ」といわれる船尾の形状である。船尾の水線下の船体に踵(かかと)が二つついている。これで保針性を保つのである。プリンツ・アダルベルトはダブルとはなっていないようであるから、恐らくこれは世界で東艦一隻のみではなかったろうか。

明治七年、佐賀の乱に九州に出動中、八月の東艦は暴風で船底をこすって浸水し、港内に着座してしまった。翌月に、神戸経由、横須賀へ回航して再就役したが、すでに船体の腐蝕もあり、かつ性能も悪化して、いらい第一線には用いられず、横須賀港内で予備艦、さらに東海鎮守府の定繋旗艦となり、明治二十一年廃艦、翌二十二年、三百円（注、万が抜けているのではない）で払下げられ解体された。

アルメンの着想は正しく、この二鑑は舵効きが良すぎるくらいよい。しかし何分にも艦首の巨大な衝角は、外洋航行時の凌波性と耐波性を極めて低下させ、とにかく使いにくいフネであったらしい。（福井静夫）

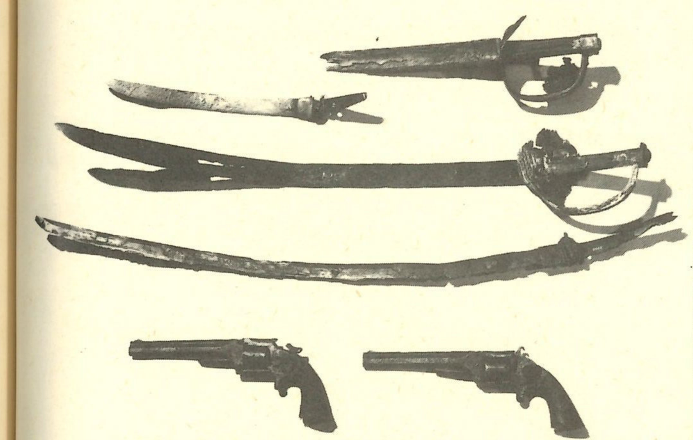
――当時の人にはなおさらわかりにくかったでしょうね、榎本の行動というのは。

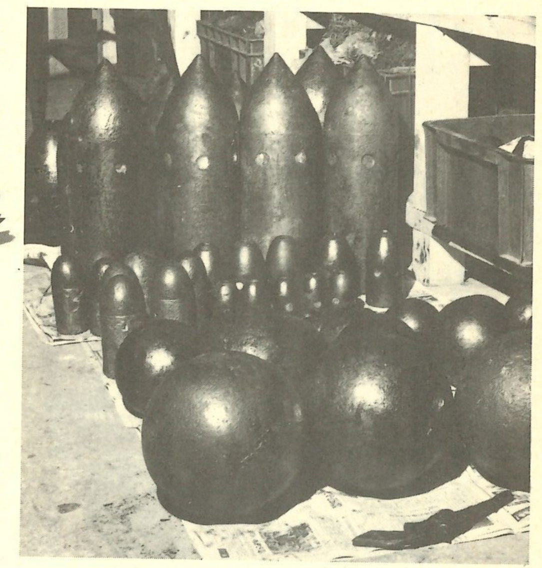
北海道江差港、この防波堤のところに榎本艦隊の主力艦開陽が沈んでいる。

五年前から、新たに船体の一部の引き揚げ作業が始まっている。おびただしい数の砲弾に混じって、海底の泥のなかから古文書のかたまりが発見された。

それは開陽の航海日誌とみられ、いま解読作業が進められようとしている。

榎本武揚をはじめ艦隊に乗り組んだ二千八百人の男たちは、なぜ、何のために北を目指したのであろうか。未だに残る謎をこの古文書は解き明かしてくれるかも知れない。

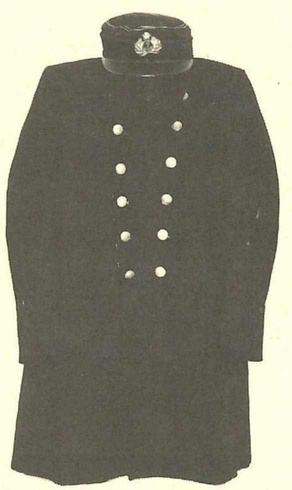




江差で沈没した開陽丸から引き揚げられた砲弾・銃・刀（江差町教育委員会蔵）

榎本武揚と「共和国」

榎本守恵



榎本武揚軍服と帽子（靖国神社蔵）

一

近年、明治維新について、幕府側の資料や人材の発掘が多くおこなわれた。なかには情緒的なものや興味本位のものも少なくないが、榎本武揚については、歴史上意味のあるものが多い。

わりと早い時期に、民主主義のうえで特筆したのは、木村毅著『文明開化』（昭和二十九年、至文堂）の第十五章「北海道共和国」である。氏は大正時代に、竹越与三郎著『新日本史』（明治二十四年、民友社）を読み、「函館を奪い、近傍を略し、北海道に共和国を立つると称して大統領を立て、海陸軍卿を定め、日章の旗を翻し、政府を立つるを各国公使に向って宣布す」に感動、函館にも来たことがある。

次には加茂儀一著『榎本武揚』（昭和三十五年、中央公論社）がある。榎本についての最初の本格的伝記で、明治期における技術官僚という範疇を設定したといってよい。明治国家をささえたのは、第一級の政治家よりもむしろ第二線の技術官僚陣であり、ここには『痩我慢の説』で批判する福沢諭吉に対して、榎本を弁護するカギがあった。政治家になるにはあまりに感情的であり、徳川家に対する忠義一途しか考えられなかったところに、主家の静岡移動直後における旧幕海軍を率いての脱走、蝦夷地占領、維新政府への最後の抵抗があったとみ、なかに「共和政府樹立」なる一項を設けている。また、榎本の多方面の才能を評価し、緊急のさいにピンチ・ヒッターとして起用されたとのべた。

先に『黒田清隆』の伝記を書いた井黒弥太郎氏は、黒田と榎本一体論の立場からみた『榎本武揚伝』（昭和四十三年、みやま書房）を出版したが、ここでは、榎本の蝦夷地占領を、主家とその家臣の困窮を救わんとする士族授産の暴動と断定、榎本共和国論は否定されている。なお本書では、従来の開拓使顧問ケプロンの無条件的評価に対し、開拓使時代の榎本の業績を、ケプロンとの関係・対比のうえで論じているのも出色である。井黒氏は、その後の新史料を加えて要約した『榎本武揚』（昭和五十一年、新人物往来社）、「歴史読本」には「幻の共和国と榎本武揚」（昭和五十四年九月）を書いている。

また、井黒氏も加茂氏も、榎本がオランダ留学中に海上国際法（『海律全書』）を修めてきたことが、とくに戊辰戦争における榎本の行動に活用されている、とする点は共通しているといってよい。

さて、榎本は天保七年（一八三六）八月、幕臣榎本円兵衛武規の二男に生まれ、昌平黌を経て長崎海軍伝習所に学び、築地海軍操練所教授になった。幕府がオランダに軍艦を発注するにおよび、文久二年（一八六二）六月オランダ留学に出発、足かけ六年ののち、完成した軍艦開陽丸に乗り組み、慶応三年（一八六七）三月帰国した。榎本が日本を離れていた間に、国内情勢は急転回しつつあった。帰国後、軍艦奉行・開陽丸船将になるが、いくばくもなく王政復古、戊辰戦争と発展、幕府は瓦解した。留学帰りの腕をふるったのは、わずかに兵庫沖の小海

戦だけであった。慶応四年一月、榎本は海軍副総裁になる。

同年八月、政府への旧幕府軍艦引き渡しを拒否した榎本は江戸湾を脱走、途中で東北戦争の残党をも乗せ、新政府の箱館府知事・松前藩を追いおとして蝦夷島を占領した。十月二十日内浦湾鷲の木に陸軍部隊上陸、二十六日箱館五稜郭に入城、十一月四日松前城攻略、十四日江差占領、暴風雪のため開陽丸座礁沈没、十五日館城陥落、十九日松前藩主津軽へ脱出、以上で脱走軍の蝦夷地占領は完了する。この間、十一月八日に榎本は英仏艦長に会ってデ・ファクトの政権と認められ、全島平定後は政権の承認を各国に求め、選挙によって総裁以下の役職をきめた。翌年三月、有名な宮古湾海戦が榎本軍によってひきおこされたが、政府軍は青森に集結、四月九日は乙部に上陸、戊辰戦争最大の抵抗ののち五月十八日榎本軍は降伏し、箱館戦争は終結した。

二

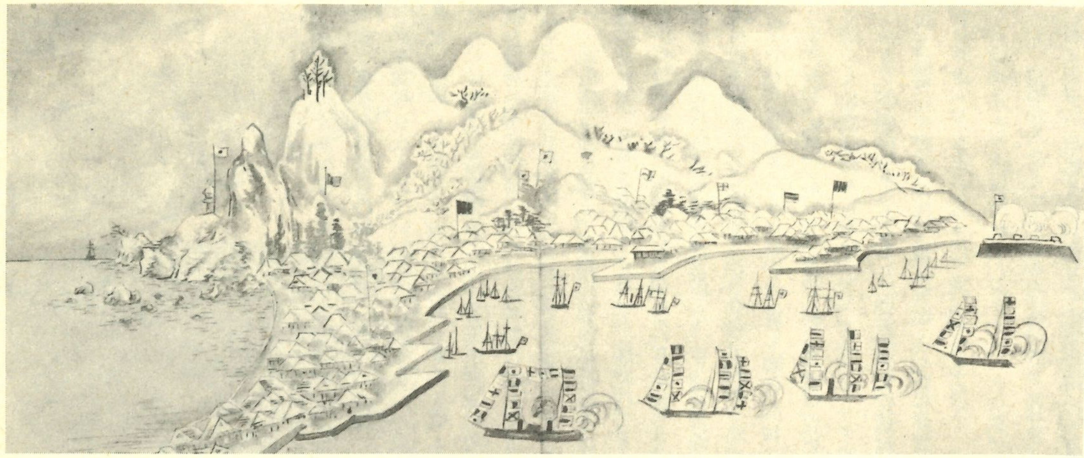
約半年蝦夷島に存在した榎本政権だが、みずからを共和国と称するわけはない。脱走以来いくたびも、朝廷のもとに徳川旧臣をもって蝦夷地を開拓したいと嘆願しているのである。それでは、話題の「共和国」なる名称は、いつ、だれが名づけたものだろうか。前述の竹越著『新日本史』よりかなりまえに外国の文献があった。明治七年（一八七四）ロンドンで発行された、アダムスの『日本史』(History of Japan) である。榎本の遠征目的は、まず松前の占領であり、次の仕事は蝦夷における一共和国設立の宣言だった、とのべている。アダムスについてはあとでものべるが、共和国設立の宣言だった、という点が注意される。次には、明治十六年ボストン出版のランマン著『日本の指導者』(Leading Men of Japan) に、信じられないのだが事実として、外国の領事と相談して、徳川の残党は函館に共和国をつくり、大統領に榎本、副大統領に松平太郎が任命されたとのべてある。このほか、時代は下がってグリフィスの著書（英、大正四）などがある。日本では、竹越以後蝦夷共和国の言葉が消えたのは、木村毅氏は「帝国的勢力の全盛をきわめてくると共に、一つのタブウとして」と解している（実際には竹越以前にもないが）。だから、戦後における蝦夷（榎本）共和国論は、天皇制タブーの解除、幕府側への関心とともに大きくとりあげられてきた事情があろう。戦後もまもなく『北海道独立論』を書いた河野広道氏は、著書ではないが、さかんに榎本共和国論、大統領選挙論をとなえていた。

ところで、榎本政権「共和国」論の理由は二つある。デ・ファクトの政権として外国より承認されたこと、総裁（首長）を選挙によってきめたことの二つである。まず、第一点からのべよう。

榎本が海上より松前を攻撃していた十一月四日、英仏公使の訓令をうけた英仏軍艦が箱館に入港した。急報に接して箱館にもどった榎本は、八日に英仏両艦長及び両国領事と面会、口頭で訓令の趣旨をきいたが、それを文書にしてもらった。その文書に、徳川家臣団については、⑴交戦団体の資格がなく、したがって函館港封鎖は許さないこと、⑵内政不干渉の原則から「事実上の政権」(Authorities de facto) として認めるが、それとの関係は英仏人民の生命財産、ならびに貿易保護に必要なものに限ること、という点があった。英公使パークスの訓令とはかなり表現がちがっており、石井孝氏は外交的ミスだという。榎本は、交戦団体未承認は伏せておき、「事実上の政権」を宣伝し、それをタテに外国船から港税を徴収した。これが共和国論の一。

右にみた「事実上の政権」は、きわめて範囲が限られているもので、「不干渉」は、井黒氏によれば、榎本軍への軍需品不供給の意味であった。のちには、政権の内容がさらに縮少されるが、じつは、英国艦長に同行したイギリス公使館書記官が、先の共和国論トップバッター『日本史』の著者アダムスである。

それはともかく、榎本は「デ・ファクトの政権」と認められたことを感謝し、十二月二日、維新政府への最後の嘆願書を英仏公使を通じて提出した。われわれは賊徒といわれる理由はない。いままでほったらかしていた日本肝要の地を、一は徳川窮臣を救い、二は日本北門の防衛を担当しようとするもので、願わくば徳川血胤のもの一人を頭首に選任してほしいと嘆願した。ついで十四日箱館在留各国領事に対し、蝦夷地平定、新政権樹立を宣言し、翌十五日に軍艦と砲台より百一発の祝砲を射ち、五色の旗をひるがえした。


函館の榎本艦隊（麦叢録より　函館市立図書館蔵）

次に選挙の問題に移ろう。右の宣言後、士官以上の入札（選挙）によって総裁以下の役職を決定した。蝦夷島総裁は榎本、以下副総裁松平太郎、海軍奉行荒井郁之助、陸軍奉行大鳥圭介、同並土方歳三、会計奉行榎本対馬、同並川村錬太郎、箱館奉行永井玄蕃、松前奉行人見勝太郎、江差奉行松岡四郎次郎、開拓奉行沢太郎左衛門であった。票数は資料によって異なるが、榎本総裁は百五十余票のようである。

この選挙を大統領選挙というのは、比喩ではあろうがいいすぎである。しかし、総裁を選挙によらざるをえない理由があった。旧幕海軍だけならば、榎本の指揮権ははっきりしている。しかし、脱走軍はほかに旧幕陸軍の大鳥らの伝習隊、土方ら新選組、彰義隊や、仙台藩脱走の額兵隊その他奥羽戦争の残党、さらに鳥羽・伏見以来逃走中の桑名藩主松平定敬・松山藩主板倉勝静、老中格唐津藩世子小笠原長行など大名も含む寄合世帯であった。おのずと明らかな最高権威はない。ここに選挙という方法によらざるをえない理由があり、きわめて合理的かつ政治的なものであった。嘆願書に徳川血胤者を要請し、各国領事へはやがて徳川血胤者が大総督になるとのべているが、実現すれば、役職公選は残るかもしれないが、総裁選挙は必要なくなり、むしろ徳川藩国の展望しかないといえよう。選挙は、いわば榎本の指揮権を陸軍へも諸大名へも確認させるものであった。同様のことは維新政府にもあった。この半年後、政府は寄合世帯の弱さと、成り上がり的実権者を正当化するために、三等官以上の官吏公選を一度だけ実施した。もっとも明治元年閏四月の政体書には四年交替の選挙が規定されていたが。

以上のべたように、「デ・ファクトの政権」と、総裁選挙も、実態としてはとくに強調できるものではない。しかし、客観的には、一時期中央政府の支配に入らない地方政権が、対外交渉権を独自に行使していたのである。また、榎本の名分では、新政府のもとに徳川旧臣困窮者を救って蝦夷地開拓の役に立ちたいというが、場合によっては武力も辞さないとのべているのは（仙台での榎本嘆願書や、奥羽越列藩への書翰）、新政府との対立政権を語っているともいえる。けれども、一時的な局地政権が事実として認められ、選挙という制度を採用したとしても、維新政権に賊とみなされ、外交的にも経済的にも独立国としての永続性ははじめからなかったのである。

『新北海道史』も榎本共和国論には疑問符であるが、共和国の事実を論ずるよりも、むしろ、戦後の民主化過程で思いかえされたこと、道内では、河野氏のように北海道独立論の立場から見直されたことに、その意味があるかもしれない。榎本政権を苦もなく押しつぶした明治政府が、北海道をどのようにとり扱ったかを、どう理解するかの問題であろう。

（北海道教育大学教授）

その後の榎本武揚

井黒弥太郎

箱館で降伏した榎本武揚は、明治二年六月三十日、東京の軍務官の獄に投ぜられた。さしたる取り調べもなく日はいたずらに流れた。木戸孝允が極刑を主張し、大久保利通が寛典を唱えたからである。箱館戦争における黒田清隆の功績を認める大久保は、彼の助命嘆願は決して看過すべきものではないとしたのである。

一枚の怪写真がある。憎形の黒田が数珠を爪繰りながら、「榎本を殺す位なら、黒田のごときは無用のもの。仏門に入ってこの英雄を弔うばかりだ」と陳情し回ったという。私は武揚の次男春之助翁にこれを質してみたことがある。「そういう話は聞いとらん。写真も知らんな」とすげない返事であった。怪写真の真偽については今も私にはわからない。

一方、榎本は牢名主よろしく、雑居中の強殺放火恐喝など市井の徒に文字を授け、己は俗歌をおそわって得意であった。

やがて好きな読書に熱中しだした。ふと気づいて、「俺がこうしているから家の者が貧乏しているのだ」と思うと、何とか生業の道でもあるまいかと思った。遠縁の福沢諭吉に化学書を借りて、庶物製造の工夫を凝らして、家に書き送った。だが、家族は彼のように器用ではなかったらしく、かえって親戚の者がそれを読んで石けんの製造に取り組み、今の資生堂の元祖となったというからおもしろい。

家業はみのらなかったが、彼の応用化学の力は倍増した。自慢の余り、「セーミ（化学）は未だ日本国中小生にならぶもの無之と乍高慢存居候」と書き送ったまではよいが、折角本を貸してくれた福沢を、「もそっと学問のある人物と思いしところ存外なりとて半ば嘆息」などとあるのは、江戸っ子気分の勇み足と言うところであろうか。

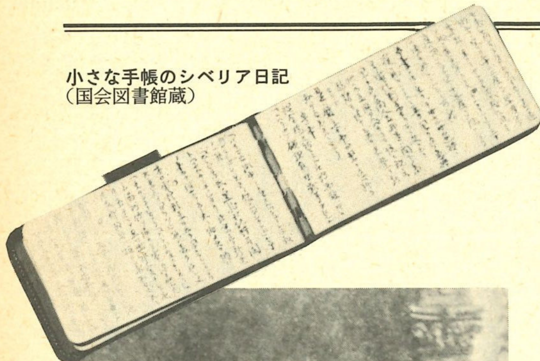
榎本に対する江戸っ子の同情は莫大である。また各地、ことに奥羽からの助命嘆願書も幾つか残っている。明治三年春、姉に出した手紙には、「箱館表にて私写真盛に売れ外国人争て買求候由近来箱館より参候人申聞一笑仕候」とあるから、意外にエノモットーなるヒーローの名は海を越えても高かったらしい。

明治四年十一月、その海を渡って岩倉右大臣の使節団が世界周遊の途にのぼることとなった。副使は硬論の木戸と軟論の大久保である。大久保は上書して、「皇国全力ヲ以テ海外ニ当リ候大規模ヲ以テ断然御決定候様」と、人材登用の必要性を強調した。むろん木戸はもはやノー・コメントであった。

あけて五年正月六日、新春のプレゼントさながらに、榎本以下の赦免が発表された。アメリカ南北戦争の折、南部大統領ジェファソン・ディヴィス釈放に匹敵する快挙という外人もあった。ただし榎本だけは首領らしく、形式上三月六日まで兄武与宅に謹慎を命ぜられた。

榎本は謹慎が解けて三日め、黒田開拓次官によって開拓使四等出仕に任命された。四等官は実に幾つかの有名県の知事格であり、その他の一般県は五等官であった。

榎本の担当は、北海道の資源調査とその開発である。牢中学習で腕のむずむずしていた彼はいち早く油井試掘機・砂鉄分離機・スチームエ



小さな手帳のシベリア日記
（国会図書館蔵）

ンジンその他多くの資材を海外に発注し、いっぽう稼行中の炭山、硫黄山を視察してその改良を指導した。

明治六年一月二十二日、開拓使仮学校で「三者会談」が持たれた。新年度の方針策定である。最高顧問ケプロンは、「開発の極め手は綿密なデータである。机上の理科実験のごとき学問では成功覚束ない」と言った。その底には巨額の外資を導入する下心があった。これに対して榎本は、自己資本による漸進的な開発を進めつつ、事業と人との育成を並行することを主張した。外資導入は国権の侵略に連なることを恐れたからである。彼はそうした外国の事例をよく知っていた。黒田は両全の策として、ひとまず榎本案を凍結すると共に、調査は進めるが巨大開発も急がぬことにした。

明治六年の夏、榎本は汪洋として流れる石狩川の岸辺に立っていた。彼はしきりに水運の国オランダのことを思っていた。アイヌの言をたよりに石狩川を漕ぎのぼり、首尾よく空知の大炭田を発見した。水路によってこの石炭を石狩河口におろす。そこに一大新港を造築して開発の根幹とする案をたてた。



ロシア時代の榎本武揚（国会図書館蔵）

彼はまた別の夢もみた。下野してこのビジョンに協力することを。彼は私財をなげうって、中流の要地、江別に近い対雁に土地を取得した。すぐさま農民を移して開墾にとりかからせた。大樹の伐採には、その根本に爆薬を仕掛けた。わが国における爆薬開墾の嚆矢である。

榎本の水運論は、折柄の鉄道ブームで抑えられたが、それでも北海道には河川利用の一時期があった。榎本農場あと地は、今は公園となり、土産馬に跨って石狩の広野を指呼する彼の銅像が立っている。

また目を雲煙の彼方に転ずれば、彼の宿願であった石狩湾新港は、既にその雄姿の半ばを現している。一世紀も待たされはしたが。ケプロンと争って敗北したかのようにみえた彼の官業主義は、明治政府の方針と合致した。そして、その新港の抱負の実現も間近いのだ。

もしもということが許されるならば、ケプロンによって外資誘致に踏み切った方がよかったか。それとも榎本を副長官にして、科学者としてその能力を発揮させたのがよかったか。それは古くして新しい問題でもあるだろう。

とかくしてその年も暮れた。北地は白雪の下に埋もれていく。榎本が複雑な思いを抱いて帰京したのは暮の二十二日であった。

明治六年は中央では征韓論争に火花を散らしていた年である。西郷は敗れて下野した。そのいきさつで樺太問題の早急解決が望まれた。この重大問題担当に榎本に白羽の矢が立った。むろん黒田の人材転用の妙である。

伊藤博文は言った。「ロシアは軍人ならではの国だ。ぜひとも箔をつけて。」明治七年一月十四日、海軍中将に任命、改めて駐露全権公使兼任にした。足もとの危ない四等官下が、二等官の上下に併任、両俸給を拝領である。旧幕府海軍の首領とはいえ、初の海軍中将であり、他はことごとく少将止まりであった。

早速、現今の二百万円相当の中将服をパリに注文し、伊藤の要望にこたえた。もともと美髯美男のダンディーな彼のこと、意気揚々、アレ

クサンドル二世陛下の前に進んでいった。まことに美事なヤポンスキーである。

二百万円を脱ぎ捨ててフロックコートに身を包んで、アジア局長スツレモーホフと第一回の会談に入る。大国を鼻にかけ老獪なる外交手腕を振わんとするに対して、榎本は科学書でも読むように資料を吟味、金を惜しまず情報を蒐集、旧師ポンペを招いてそれを分析する等々、決して劣るものではなかった。すべては『大日本外交文書』に詳しい。八年八月二十三日、千島樺太交換条約が調印された。国民感情からは議論もあろうが、外交史上からは日本の成功であるとするのが定説である。

榎本は派手好みであった。宮廷のダンスパーティーで、「ヒョコヒョコと踊っているのは何とも滑稽」と妻に書き送っているが、実は鮮やかにステップを踏んだろうことは、あとで鹿鳴館のお手並でわかる。酒は滅法に強い。これも例外的ヤポンスキーである。

こういうシャンデリアの下から公使館へ戻った彼は、再び科学者にかわる。亜麻の試作、印刷術、鍍金術の研究、そしてヒョコヒョコをかわいがる。黒田に、「野生本年一地を借り亜麻を植えたるに、其地砂混りにて宜しからざるに、随分良好の麻を得たり」として、種子、麻、製麻機などを送って作付を勧めた。これがわが国における亜麻業の起源である。養鶏はふ化中の子を取り出してアルコール漬標本にする凝りようである。鶏狂（とりきち）は黒田にも伝わり、彼が卵を誰彼にと配ったことは有名である。天皇献上のものには一々鉛筆で、生んだ日付が記入してあったという。

あとで榎本が日本家禽協会長に担がれたのも故なしとしない。彼の郡司大尉の北千島行には優秀な洋鶏をおくり、それが彼の地の唯一の飼育動物となった。最後の報效義会員別所次郎蔵の日記の中にも、榎本張りの人工ふ化器を試作利用していることがある。

任終えた榎本は、十一年七月、シベリアを経て帰途に就いた。シベリアの風土を観るとともに、一刻も早く「運命の地エゾ島」と心の友黒田にまみえようとしたのである。

榎本土産には、さまざまな標本、モデル、資材があった。それはアメリカ一辺倒の開拓にスラブ的文化を注入しようとしたのだが、心の奥にはケプロンに対する男の意気地もあった。北海道式馬車馬橇、冬蹄鉄、洋風建築、ペチカ、毛皮の利用、屯田兵制などは開拓に貢献した。日本に普及した鶏のふ化器は榎本のモデルを大谷木某が模作したものである。

明治十二年、彼は井上外相の次官となり、翌年、待望の海軍卿に進んだ。いささか天狗になったのか人事を弄ろうとして薩長の怒りを買った。「賊軍の癖に」とか、「マフラーを巻いた海相があるか」などと野次られた。派手好みが災いしたのだ。海相を棒に振った。

折から黒田も官有物払下事件で味噌をつけていたから、同病相憐れむのも奇縁である。しかし三条太政大臣が彼を皇居造営局副総裁に拾った。今も残る札幌の豊平館（ほうへいかん）に三条は掲額を贈り、天皇に供奉してそこへ行ったことを思い出したのだ。それは榎本の案によって建てられたものである。榎本はずばり皇居を洋式に一定し、工事は急ピッチで進んだ。

彼のハイライトは、二十二年二月十一日の憲法発布式であった。正殿の公式使用の初めであり、盟友黒田が首相として憲法を拝受するのである。思えば苦節十年の友であった。榎本はその儀典掛長として、この典礼を演出したのである。「何だ、それしきのこと」と言う罵声もあろう。しかし壮麗目を奪う正殿の中央に立つ二人としては会心の喜びであった。「榎本さま、榎本さま」と女官や貴婦人連が垣間見たがったというのはその頃の事か。

それからの榎本はとみに老い、幾多の勲章を吊し、名誉職を担って夕陽の中に立っていた。福沢は小憎らし気に『痩我慢の説』というものを突きつけた。勝海舟にも同趣旨のものが送られた。勝は「ご勝手に」と言い捨て、榎本は「返事は後程に」と官僚口上宜しくかわした。

彼は、五稜城頭に散華するのが本望であった。しかし建国を急ぐ日本国のために、また命を賭けた友のよしみのために、たえ忍んで生きなければならなかった。彼には、書生論以上の彼なりの哲学があったにちがいない。

明治四十一年十月二十六日、七十歳二か月で世を去った。「江戸っ子葬」といわれたように、市民の長い長い葬列が続いた。

（榎本・黒田研究家）

幕末軍艦の強さくらべ

茂在寅男

一、幕末時代の海の略年表

幕末から明治初年にかけての日本の軍艦について考える場合には、まず船に関する概略の年表を頭に入れておく必要があろうかと思われるので左に記して後話題に入りたい。

安政元年（一八五四）　日本開国。大船建造の禁を解く。幕府の鳳凰丸、薩摩の昌平丸など洋式帆船の建造始まる。

安政二年（一八五五）　オランダ、汽船スンビン号を幕府に贈る。わが国汽船所有の初め。国産蒸気船雲行丸建造。

安政五年（一八五八）　日米通商条約なる。

万延元年（一八六〇）　咸臨丸太平洋横断。

文久元年（一八六一）　庶民の大船建造・外国船購入を許可。

文久二年（一八六二）　榎本武揚等オランダへ留学。

元治元年（一八六四）　英仏米蘭四国連合艦隊、下関を砲撃。幕府、長州征伐。

慶応元年（一八六五）　長州藩再び幕府に反抗。幕府、長州再征。

明治元年（一八六八）　明治維新。彰義隊を上野に討伐。会津藩降伏。戊辰の役始む。

明治二年（一八六九）　榎本武揚ら函館五稜郭にて降伏、維新戦争（戊辰の役）終わる。

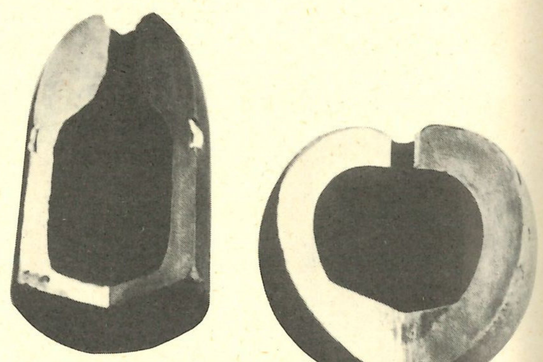
二、幕末の軍艦

明治維新前後のわが国の西洋型船は、商船と軍船との区別は余りなく、両用の船が大部分であった。それも鹿児島・水戸・佐賀などの諸藩が、西洋式造船法を知らぬまま非常な苦労をして、西洋型船建造の難事業に挑んで、ともかくも数隻の建造に成功したものの、大部分の船は外国から寄贈又は購入によって補充していったものであった。

安政二年（一八五五）の大地震による津波で、ロシアの軍艦ヂアナ号が遭難、艦長プチャーチンの指導によって、伊豆国君沢郡戸田（へた）港の木工・鍛工の手で、初めてスクーナー型洋式帆船が建造され、日本人は西洋型船の造船法を初めて学んだ。しかし当時外国では汽船の実用期に入ったために、日本は帆船の活躍時代を経験しないまま、汽船時代に直接突入。しかも木船西洋型船の経験を生かすいとまなく鉄船時代へと入ったというのが実情である。

一方幕府が海軍創設に踏み切った時点で、外国からの軍艦入手を計ったが、すぐには実現できず、とりあえず長崎来泊中のオランダ軍艦スンビン号に、黒田・佐賀の藩士ら約二百名を乗せ、汽船の取り扱いなどを習得させた。いわゆる海軍伝習の始めで、嘉永五年（一八五二）のことであった。オランダは一八五五年になってこの船をわが国に寄贈した。これをその翌年に「観光丸」と改名したが、これがわが国最初の蒸気軍艦となった。

同船は木造三本マストのバーク型帆装を有する外輪船で、長さ五十三メートル、幅九メートル、深さ七・三メートル、百五十馬力で備砲六



開陽から引き揚げられた砲弾の
内部　炸烈弾である（江差町教育委員会蔵　筆者提供）

門であった。

安政五年（一八五八）に、英ビクトリア女皇は徳川幕府にそのお召船エムペラー号を寄贈した。木造三本マストのスクリュー汽船で、長さ四十二メートル、六十馬力、備砲六門の汽走ヨットで、日本では「蟠竜丸」と改名された。この船は内容外観とも素晴らしい船であって、さすが英王室のお召船としての風格を備えていた。これが後に帝国軍艦「雷電」と改称される。

幕府はこのほか外国へ注文した新造艦も持つようになった。安政三年（一八五六）に、日本からの注文でオランダはヤッパン号の建造に取りかかり翌年完成させた。これが改名されて「咸臨丸」となった。長さ四十七メートル、百馬力の木造三本マスト・バーク型帆装付きスクリュー汽船で、備砲は十二門搭載していた。開国後最初に太平洋を横断したことで有名になった船である。

次に今回の話題の中心としての「開陽丸」がある。幕府はアメリカと契約して三隻の軍艦を注文したのであるが、手付金まで払ったにもかかわらず同国は南北戦争のため、この契約履行が困難となった。やむを得ず幕府はオランダに注文し直した。と同時に榎本釜次郎（武揚）や赤松大三郎ら十数名をオランダに留学させた。一八六二年のことである。

開陽丸は、オランダのロッテルダム西北に当たるドルトレヒトの造船所で一八六三年に着工され、一八六五年に進水した。一八六六年にオランダを出帆し、南米ケープホーンを回って南太平洋経由で日本の神奈川に慶応三年（一八六七）春に到着した。

この艦は木造三本マスト・シップ型帆装を有するフリゲート艦（快速軍艦、今なら駆逐艦に相当）で、長さは七十五メートル、排水トン二千八百十七、スクリュー艦で四百馬力の機関を持ち、速力九ノット。クルップ式前装十二センチ砲二十六門というもので、在来艦と比較して飛躍的に高性能を誇る軍艦であった。

このほか幕府からの注文で元治元年（一八六四）にニューヨークで建造された「富士山丸」がある。木造の三本マスト・シップ型帆装を持つスクリュー汽船で、排水量は千トン、百八十馬力で砲十二門を備えていた。慶応二年（一八六六）に受け取ったが、明治元年（一八六八）には官軍所属となった。その後明治二十九年まで帝国海軍の練習艦として使用された。

このほかに外国船をそのまま購入して日本の軍艦としたものが何隻かあった。その第一は英船ストルク号を、元治元年（一八六四）に薩摩藩が購入して「乾行丸」と改名したものである。木造のスクリュー汽船、百六十四トンで砲は六門備えていた。

同じく英国から薩摩藩が購入したキャンスー号は改名して「春日丸」となったが、木製の三本マスト外車汽船で、長さは六十四メートル、千十五トン、三百馬力、速力は十五ノット以上を出し得た。兵装としては百ポンド自在砲一門を後部に備え、四十ポンド砲を両舷に各二門、十二ポンド後装砲一門を艦首に備えていた。その後若干の装備変更はあったが、この艦は最初から官軍所属で、幕府軍艦を大いに悩ましている。

さらに幕府軍艦の花形としての存在「甲鉄」が、米国からの輸入艦ストーンウォール・ジャックソン号の改名として名を残している。その長さ四十六メートル、排水量千三百五十八トン、千二百馬力で、三百ポンド砲を一門、千七百ポンド砲二門を鉄の砲塔内に装備していた。建造はフランスで、艦首に独特の衝角がついていて、いかにも堅艦の様相をなしている。日本に到着したのは維新の動乱の最中であったが、明治二年（一八六九）に、実際には官軍に引きとられ、その主力として活躍した。本艦は後に「東（あづま）」と改名し、明治二十一年まで沿岸警備艦として使われた。

最後にもう一隻、ドイツで建造され、英艦となったダンチッヒ号を幕府が購入して、最後まで幕軍軍艦として活躍した改名後の艦名「回天丸」がある。木造三本マスト外輪船、長さ七十メートル、排水量千六百七十八トン、四百馬力、備砲十二門（主として五十六ポンド砲）というものであった。

三、どの軍艦が強かったか

今から見たら、余りにも幼稚な軍艦、と一応は考えられるが、これは対岸の火事を見る姿勢で見るからいえるに過ぎない。実際には大変な武力であった。その実力は期せずして明治戊辰の役によって証明されたのである。そこでは、

それまでに経験しなかった形の戦争が行われている。その一つはガトリング機砲という機関銃の掃射が迫兵戦において使われている。もう一つは実際には使われなかったものの、幕軍側の「開陽丸」の兵装は恐るべきものであった。当時の大砲は、丸い大きな鉄球がどーんと撃ち出されるものと考えるのが常識であった。しかし同艦の大砲には雷管付尖頭弾、すなわち、目的物に命中してから砲弾自身が爆発を起こす炸裂弾もあり、命中してから爆発して散弾となる葡萄（ぶどう）弾も搭載されていたのである。

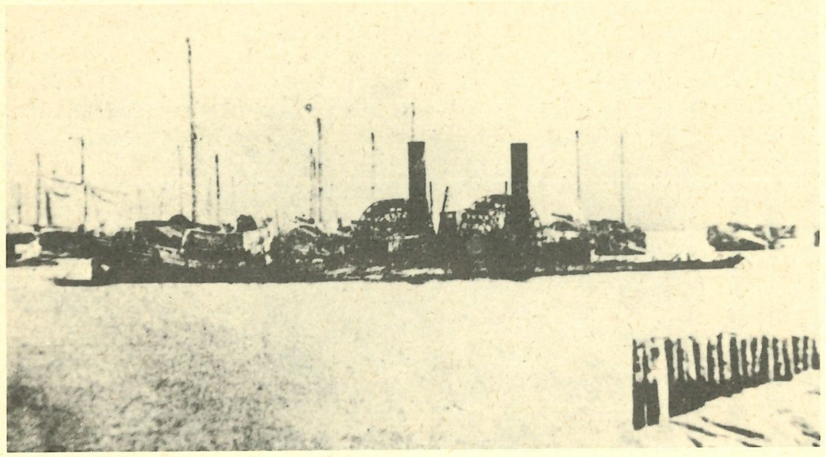
大政奉還後、徳川氏の処分決定は幕臣達を非常に憤慨させた。しかし倒幕側はあくまで旧幕側を挑発し、江戸に多数の浪人を集めて強盗暗殺などを働かせて不安をかき立て、江戸城二の丸に放火して取締りの営所に発砲さえした。この情報に今まで恭順を示していた幕府側は耐え切れず、挑発に乗せられて戦いを開始した。そして鳥羽・伏見で大敗をする。この機を利して倒幕軍は錦旗を拝領して名も輝かしい「官軍」となり、徳川勢を「朝敵」と呼んで江戸へ迫った。勝安房の降伏申し入れなどにもかかわらず、「勝てば官軍」の横暴に我慢ならず、血気の榎本武揚らは、一つにはこの大変革によって生ずる旧幕軍の失業浪人三十万の生計を、北海道開拓によって支えるため、あわせては北方よりのロシアの侵略を屯田兵によって食い止めるためとの理想をかかげ、上奏文の建言を続けつつ、軍艦八隻を率いて北海道へ向かった。明治元年（一八六八）八月二十日である。開陽丸を旗艦とし、回天丸、蟠竜丸、千代田形、咸臨丸、長鯨丸、美加保丸、神速丸であった。咸臨丸からは既に機関を取りはずして純帆船になっていたため千代田形や美加保と共に、この三隻は開陽、回天および長鯨によって曳航されての脱出行であった。ところが折り悪しく、房総沖で台風に襲われ美加保は沈没、咸臨丸は清水に流される。開陽丸は破損の被害をおして仙台沖に入港。幕軍二千五百人を収容して更に北上。榎本の建言は新政府大官から「徳川残党の陰謀」ときめつけられ、艦隊は戦う以外に方法を見い出せなくなった。

十一月一日函館入港、五稜郭を攻略、福山城を陥す。北上した開陽丸は十一月十五日江差沖に投錨した。ところがここで又大西風にあい錨鎖が切断し、蒸気が上がらないうちに江差海岸に座礁。結局はこの最強軍艦といわれた「開陽丸」は、戦闘のためには一発の砲弾も撃つことなく悲しい最後をとげたのであった。

官軍艦隊が脱走艦隊追討の途につくため品川を抜錨したのは明治二年（一八六九）六月九日のことである。甲鉄を中心として春日、陽春、丁卯、飛竜その他数隻であるが、その中心勢力は「甲鉄」であった。幕軍はこの「甲鉄」を捕獲すれば戦いは挽回できると考え、最後の冒険を試みる。宮古港における奇襲「甲鉄」への切り込みであった。しかしこれは一八六二年に完成したばかりのガトリング機砲が「甲鉄」につまれていたことで、幕軍は完全に敗退したのであった。そして最後に函館五稜郭によって戦った榎本武揚も降伏ということでこの維新戦争（戊辰の役）には終止符が打たれたのである。

戦いはこのようにして終わり、勝敗は判然とした結果をもたらした。しかし本当に強い軍艦は何であったのか。寧ろ読者に問いたい。

（東京商船大学名誉教授）



函館港で座礁した回天の残骸写真（函館市立図書館蔵）

五稜郭の防衛戦

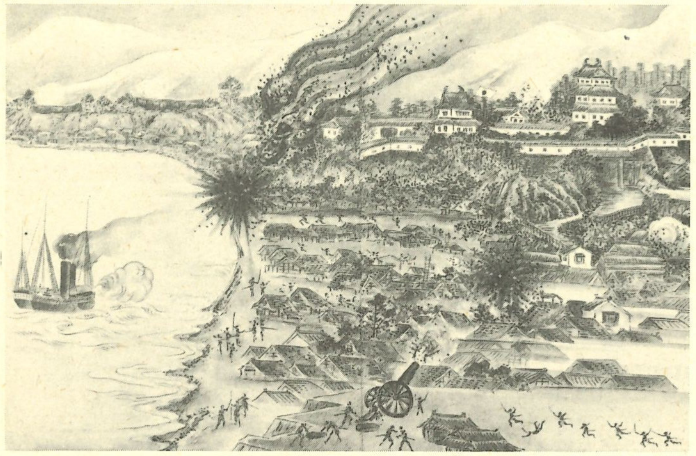
藤崎定久

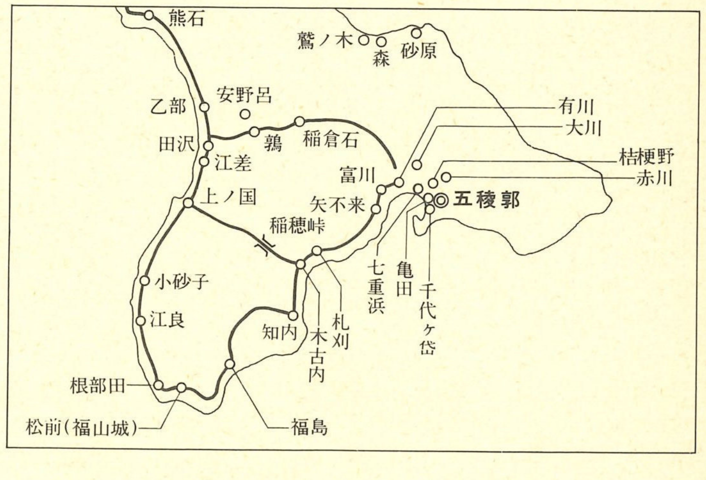
明治元年八月二十日（新暦十月五日）に軍艦五隻と運送船三隻で品川沖を脱出した榎本武揚らは、十月二十日（十二月三日）に噴火湾の鷲ノ木浜に上陸し尺余の積雪をふんで北より函館に向かった。スペンサーとかスナイドルとかいう最新式の後装施条銃を装備し、洋式訓練を受けた榎本軍は、和筒や旧式のゲベール銃で装備されていた函館府の官兵を簡単に圧倒して、二十五日に五稜郭を占領し此処を本拠とした。この日函館府知事の清水谷公考は秋田藩の陽春丸で脱出して青森へ奔った。

十月二十八日に土方歳三を長とする一隊は、松前の福山城を攻落する為に五稜郭を出発した。甲冑に身を固めて弓や槍を持ったものが大半を占めている松前藩の兵士らは簡単に土方隊に圧倒された。十一月五日、榎本軍の回天・蟠竜の二艦が海上より攻撃を加えるに及んで、松前の市街は火を発し城は落ちた。藩主の松前徳広は江差方面に逃亡した。十一日（十二月二十五日）に土方隊は江差に向かって前進した。十五日徳広は更に熊石に逃れた。この日榎本武揚をのせた軍艦開陽は江差に来たが、夜半に激しい風波に見舞われて江差港で座礁した。回天と神速が救援に来たが、神速も此処で座礁した。十九日の夜、松前徳広は漁船で津軽の平館に渡った。戦意を失った松前の藩兵は榎本軍に投降した。この日東京では清水谷公考を青森口総督に、黒田清隆・太田黒惟信を総督参謀に、山田顕義を陸軍兼海軍参謀に、曽我祐準・増田明道を海軍参謀に任命し明春を期して攻撃することにした。

十二月二十五日（二月六日）、榎本等は北海道政府を組織し、五稜郭を本拠として江差・松前に兵を置き、室蘭に二百五十名を移して開拓に当たらせることにした。

明治二年三月、官軍は榎本軍討伐の行動を起こした。九日（四月二十日）、甲鉄（増田明道乗艦）・陽春・春日・了卯・延年の五艦と、飛竜・豊安・戊辰・晨風の四輪送船が品川沖を発進して北上し三月十八日に宮古港に入港した。甲鉄艦（のちの東艦）は、南北戦争の当時南軍がフランスの造船所で造らせた装甲艦で、南北戦争が終わった後にアメリカ政府から日本に売却された軍艦である。排水量は千三百三屯であったが、最新型のアームストロング砲と十六連装のガトリング速射砲を装備した最新鋭の軍艦であった。榎本等はこの軍艦を奪取することを企て、三月二十日の夜、回天・蟠竜の二艦と秋田藩から奪った高雄を南下させた。回天には司令官の荒井郁之助の外に土方歳三と新選組が乗り込んでいた。蟠竜は濃霧と暴風の為に艦隊から離れてしまった。二十四日に回天と高雄は山田港に入港したが、甲鉄艦等が碇泊していないのを知って反転して宮古港に向かった。途中で高雄の機関が故障したので回天が単独で甲鉄艦を拿捕することにした。二十五日早朝、回天は米国旗を掲げて宮古港に進入して甲鉄艦に近づいた。此処で回天は急に星条旗をおろして日章旗を掲げた。回天の舷は甲鉄艦より高い。その回天が甲鉄艦に砲撃を加えながら艦首を甲鉄艦の右舷中央に直角に乗りかけた。新選組の野村理三郎ら数名が甲鉄艦に斬り込んで、甲板上で壮烈な白兵戦を演じた。しかし、一分間に百八十発も発射出来る甲鉄艦のガトリング速射砲に射すくめられてしまった。官軍の春日等七隻の軍艦が回天を包囲して弾丸を浴びせると、回天では死傷あいつぎ艦長の甲賀源吾も戦死した。司令官の荒井郁之助は回天に後進を命じ応戦しながら湾外に逃げ出して函館に向かった。途中で高雄と蟠竜に遭遇して共に北進したが、官軍の追撃が急な為高雄は逃れ切れずに九戸郡の海岸に座礁し火を放って焼き乗員は南部藩に投降した。回天・蟠竜は二十六日の夕刻函館に帰港した。





官軍の来攻が近日中にあると判断した榎本等は三月二十五日に、防衛の為に五稜郭に七百余人、函館に三百余人、福島に百五十人、松前に四百余人、江差に二百五十余人、室蘭に二百五十人、鷲ノ木に百余人、そのほかに森・砂原等の各地に少数の兵を配し、函館湾を回天・蟠竜・千代田形の三艦で警戒した。

三月二十六日までに官軍は青森に約七千の兵を集中した。四月六日（五月十七日）山田顕義は千五百余名の兵を率いて青森を出港した。途中平館に仮泊して九日の未明に乙部村の沖合に達した。漁夫の通報で榎本軍が撤退したことを知って上陸を開始した。山田顕義は軍を三分し、主力をもって海道を江差に、一隊を山道を鶉村から二股口へ、他の一隊を熊石に向かわせた。江差の松岡四郎次郎は三小隊を乙部に派遣したが途中田沢で官軍と遭遇して、海陸両面から攻撃をうけて江差に後退したが支えきれずに松前まで退却した。九日に官軍は、上ノ国村より木古内に向けて六小隊と砲二門を分進させた。木古内には大鳥圭介が居た。海道を進んだ官軍は、根部田村で伊庭八郎や松岡四郎次郎の率いる兵五百と砲二門を有する榎本軍と衝突して敗戦し、少砂村に退き更に上ノ国村に後退した。しかし、伊庭等は兵を攻めて松前に移った。十二日から十三日にかけて木古内に向かった官軍と二股口（土方歳三が守る）に向かった官軍は、榎本軍を攻撃したが敗退した。榎本軍の最新式の装備は海軍が参加しない此の方面の戦闘では大いに実力を発揮した。

十三日、官軍の第二陣が江差に到着した。上ノ国村に後退していた第一陣と合した官軍は、十四日より前進を開始した。十六日に黒田清隆等は第三陣の兵約三千名を率いて江差についた。黒田は兵を四隊に分けて木古内口、二股口、安野呂口、松前口に向かって前進させた。十七日、松前の江良付近で両軍は遭遇戦を演じたが、官軍の軍艦数隻が三厩港よりこの沖合に来航して陸軍に協力した為に榎本軍は松前城を放棄して知内、木古内に後退した。

木古内に向かった官軍は榎本軍の強烈な反撃にあい一時後退して稲穂峠を守ったが後援を得て、十九日前進を起こして木古内の榎本軍の陣地を占領した。木古内の榎本軍は札刈まで後退した。しかし、松前方面より後退した榎本軍が知内に居たので木古内の官軍は背後を突かれるおそれがあった。一方札刈まで後退した榎本軍が再び反撃に転じ、又榎本軍の回天・蟠竜が海上より砲撃を加えたので、官軍は再び稲穂峠付近に後退し、榎本軍は再び木古内の陣地を占領した。この戦闘で伊庭八郎以下数十人の死傷者

松前福山城の戦（麦叢録より　市立函館図書館蔵）

を出した。

二股方面の榎本軍は十六コの保塁を山上に構築し三百余名の兵を配置して官軍の攻撃を待っていた。四月九日約五百の官軍が二股口に向かった。十一日になると約百人が増援された。官軍は十二日に二股塁を攻撃したが道路が険阻な上に風雨に見舞われて苦戦した。しかも食糧の後送がとだえたので飢餓に苦しんだ将兵は遂に攻撃を断念し後退して稲倉石を守った。二十二日に更に総攻撃を加えたが再び敗退した。二十六日に官軍は三度二股の塁を攻撃した。二十四日にも激しく攻撃したが失敗した。この日榎本軍では一銃で千発位の弾丸を射撃した。この為に銃身は熱して握ることが出来ない。桶に入れた冷水で冷やしながら射撃した。官軍では軍監駒井忠仲以下百名程の死傷者を出したが、榎本軍の死傷者は三十人にも満たなかった。

榎本軍は木古内が防御に不適な為に此処を放棄して矢不来の峡によることにし、後退して二十一日矢不来を守備した。二十三日に官軍は海陸両面より矢不来・富川の榎本軍を攻撃したが成功しなかった。海上では両軍の艦隊が砲戦を行った。二十五日は大雨、二十六日も雨であった。二十九日官軍は海陸両軍相呼応して矢不来を攻撃した。官軍が陸戦隊を上陸せしめて榎本軍の背後に迫るに及んで、榎本軍は支えかねて後退して富川・有川の線を守った。五稜郭にいた榎本武揚が有川まで出陣して指揮したが頽勢を挽回することは出来なかった。榎本軍は七重浜に後退して態勢を整えた。矢不来の陣地が敗れたのを知った二股の土方歳三は自ら守備を撤して退却した。制海権を握られていた榎本軍は沿海地区から敗退を余儀なくされていった。

二十九日に矢不来を撤した榎本軍は赤川・七重浜の線に止まって官軍に対した。これに対して官軍は大川・有川の線に止まって総攻撃の準備をした。三日の夜大鳥圭介は小隊を率いて有川の官軍の営に夜襲をかけてこれを走らせた。五日夜榎本軍の古屋作左衛門と星恂太郎等は大川・七重浜の官軍を夜襲した。八日榎本・大鳥らは二大隊を率いて官軍の本営のある七重浜を奇襲しようとしたが官軍の知るところとなって、大川・赤川辺で要撃されて失敗した。この間に官軍では増援隊が続々輸送されて一万余名を算する程になった。之に対して榎本軍は二千余名にすぎなかった。官軍は陸軍を三つに分け、その中の二隊をもって有川・大川方面より山田顕義の指揮のもとに正面攻撃を、一隊をもって黒田清隆指揮のもとに海上より函館山にひそかに上陸して後方より榎本軍を奇襲することにした。海軍は甲鉄・春日の二艦をもって弁天崎砲台を砲撃し、朝陽・了卯の二艦をもって海岸より陸軍主力の攻撃を援助し、春陽艦をもって大森浜より奇襲部隊を援護することにした。榎本軍は二千余の兵を三つに分け、主力を持って大鳥圭介らの指揮のもとに赤川——桔梗野と亀田の線に展開し、一部をもって弁天崎砲台（永井尚志）を守った。官軍は十一日の未明より総攻撃を開始した。戦闘たけなわなる時函館山に潜入した奇襲隊が山をおりて亀田の榎本軍を攻撃した。この為に弁天崎砲台は五稜郭方面の主力から孤立した。官軍の主力が榎本軍の主力を北と西と南の三方から包囲するような態勢になって、勝敗の数は明らかになった。函館港内には蟠竜と座礁した回天だけが残っていた。蟠竜は函館港に進攻して来る官軍の五軍艦を相手に奮戦した。弁天崎砲台や先に座礁した回天もこれに協力した。蟠竜の放った一弾は朝陽の右舷を貫通して火薬庫に命中したので朝陽は轟沈した。一方蟠竜も座礁してしまったので乗員は上陸して弁天崎砲台に入った。回天の兵も艦を捨て、上陸して五稜郭に入った。夕刻になると榎本軍は五稜郭と弁天崎砲台及び千代ケ岱の塁を保つにすぎなくなってしまった。この日土方歳三が戦死した。十二日に甲鉄艦は五稜郭の物見櫓を測点として五稜郭に有効射を浴びせ、守兵に大打撃を与へた。榎本軍では逃亡兵が続出した。この日黒田清隆は榎本に降伏をすすめたが榎本は之を拒絶し、先にオランダで学んだ『海軍全書』を黒田におくった。十三日に官軍は弁天崎砲台の守兵に恭順をすすめた。十五日になると弁天崎砲台では砲弾・糧食共につきはてたので、守将の永井尚志は降伏した。十六日に千代ケ岱の塁も落ちて、守将中島三郎助父子は壮烈な最期を遂げた。官軍は五稜郭を包囲したままで様子を見ていた。孤立して包囲された五稜郭の兵は戦意を失って続々と五稜郭を脱出していった。十七日になって榎本は降伏を決意して、ついに官軍の軍門に降って戦闘は終結した。

（城郭研究家）



幕府、軍事改革に着手

黒船の来航が日本を大きく揺さぶったのは、嘉永六年（一八五三）のこと。長い間の眠りを突然覚まされた幕府は以来、開港、遣欧使節派遣と、いや応なく外交の矢おもてに立たされてゆく。一方では押し寄せる尊王攘夷の波、幕府にとって軍隊の近代化は急務であった。すでにヨーロッパ式に軍制を改めようと、洋式訓練は始めてはいたものの、慶応二年の長州征伐は、新型の鉄砲を装備した長州に大敗、またもや改編を迫られることになる。折りしも幕府のフランス接近策は実を結ぶ。極東進出をもくろむフランスからの七百万ドル借款、火器購入、そして軍事顧問団の招聘がそれであった。

元治元年幕府歩兵組の士官と下士官（靖国神社蔵）



ナポレオン三世より贈られた軍服を着た徳川慶喜（『徳川慶喜公伝』より）

軍事顧問団来日

フランス軍事顧問団は慶応二年（一八六六）十一月、万博の準備に沸くパリをあとに、マルセイユを出航、翌慶応三年正月、横浜に到着した。フランスの雑誌「モンド・イリュストレ」は十五人のスケッチ入りで、「興味ある東洋の大君の国はナポレオン三世と手を握った」と報じたのである。

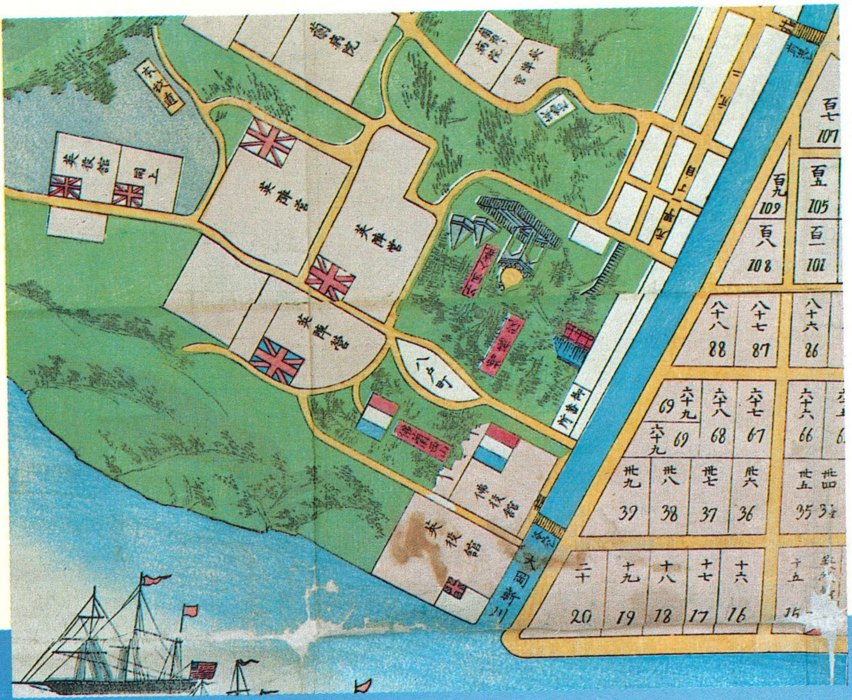
彼らはフランスの世界戦略の中で、メキシコ、仏領インドシナ、アフリカ、イタリアの各地で活躍したエリート軍人たち。イギリスに一歩立ち遅れた対日外交の地位を取り戻すために、ナポレオン三世により、送り込まれた精鋭たちであった。団長シャノワーヌの三千フランを筆頭に、大尉たちも二千フランというかなりの高給であったという。



「モンド・イリュストレ」に描かれたフランス軍事顧問団　前列左よりデュ・ブスケ、メッスロ、真ん中が団長のシャノワーヌ　そしてブリュネとデシャルム



極東進出をもくろむナポレオン三世（ヴェルサイユ美術館蔵）



フランス山付近の古地図（横浜市史編纂室蔵）



フランス人が居留したフランス山（手前左）

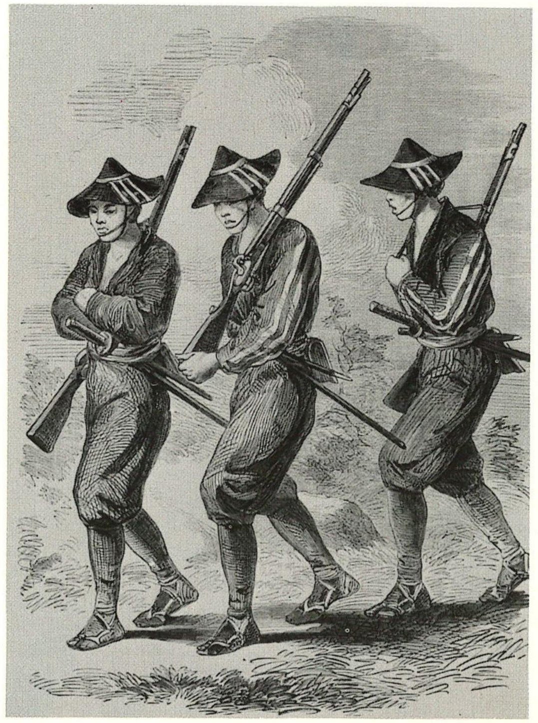


幕府騎兵調練図　フランス人教官の仏式騎兵伝習生の調練模様が描かれている（靖国神社蔵）

伝習開始

フランス人たちが居留していたことから、その名が残る「フランス山」。軍事顧問団はここに陣取り、太田陣屋に設営された練兵所に幕兵を集め、教練を開始した。当時、世界最強といわれた、ナポレオン三世率いるフランス陸軍の戦術・戦法の伝習が始まったのであるが……。

この時、通訳を兼ねて砲兵術を学んだ田嶋応親が、のちこの模様を記したものによると、各自勝手な服装で、大小を差し、小銃を担いで練兵し、身分が違う、禄高が違うと言って、整列するのにも一苦労。あるいは結髪が邪魔で帽子を被れないと、相当フランス人を悩ましたようである。



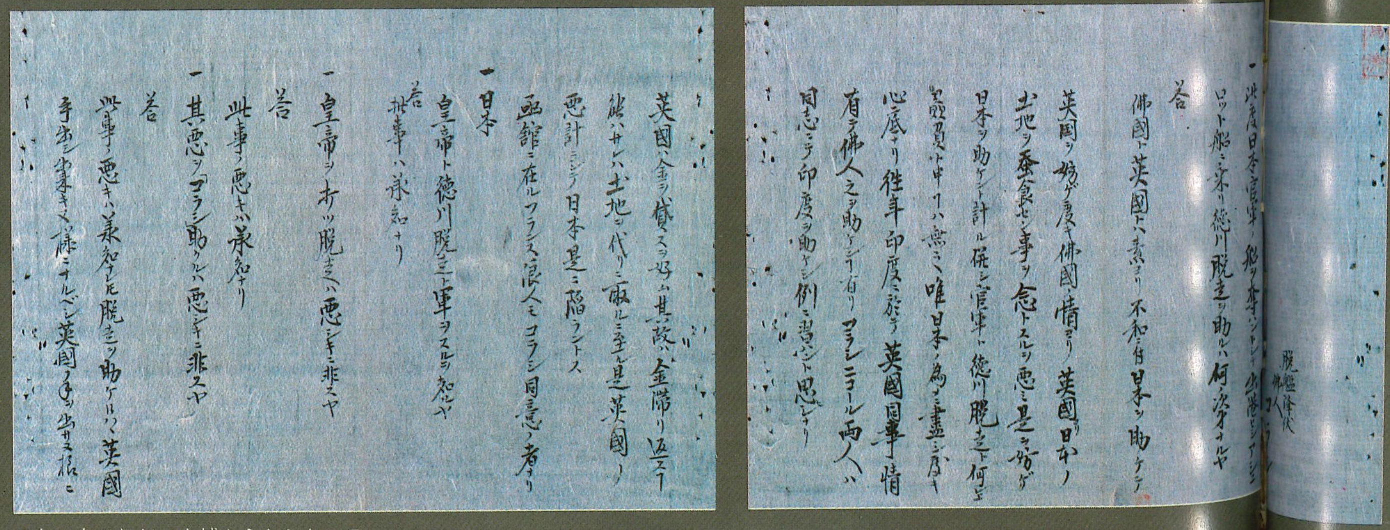
大小を差し小銃を担ぐ幕兵（イラストレイテッド・ロンドン・ニュースより　雄松堂書店提供）



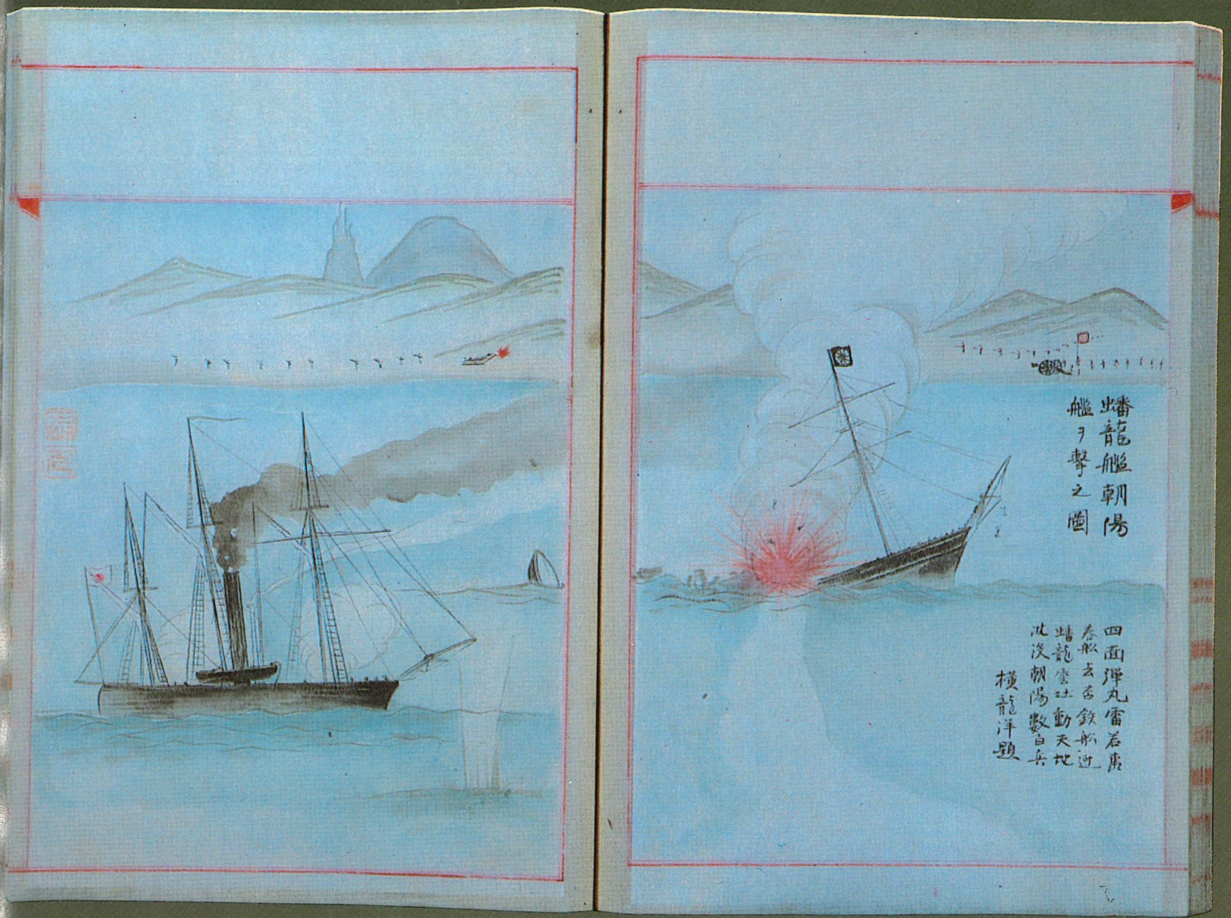
宮古湾海戦の碑　回天にはニコール、蟠竜にはクラトー、高尾にはコラシュが乗っていた

函館に向かったフランス人たち

外人部隊が練兵を開始して半年余り。戊辰は鳥羽・伏見で幕が開いた。しかし彼らが徹底的に鍛えた伝習隊も、敗走を重ねる幕府軍の支えとはならなかった。顧問団の"主戦論"も空回りし、慶喜は駿河に去る。東北の戦火も消えかかる慶応四年八月十九日、品川沖を脱出する榎本艦隊には二人のフランス人がいた。生徒と行動を共にするブリュネとカズヌーヴである。やがて函館で十人に増えたフランス人は、敗色濃い榎本軍の中で奮戦、傷つく。「……唯日本の為につくしたき心底なり」と唯一捕らえられたコラシュの口供書にはある。



10人の中でただ1人捕らえられたコラシュの口供書(外務省外交史料館蔵)



蟠竜の撃った砲弾は新政府軍の朝陽に命中　函館戦争の一齣である(蝦夷錦より　函館市立図書館蔵)



函館で発見された日仏四名ずつ写っている写真　前列左から二人目がブリュネ(函館市立図書館蔵)



青山墓地にあるデュ・ブスケの墓

残ったフランス精神

明治二年五月十八日五稜郭は開城。しかし、捕虜の中にフランス人はいなかった。彼らは開城直前フランス軍艦に救出され、横浜に送られたのである。華々しく来日した軍事顧問団は、幕末の動乱の中に消え、逆に函館の十人のフランス人は、日本政府に背いた者として、あとに外交問題を起こし、去って行った。しかしただ一人残った男、日本を愛し、日本人を妻としたデュ・ブスケは、顧問団の持って来たフランスの精神をもとに、日本陸軍の基礎作りに尽くすことになる。





日本語も達者、外交の才もあったデュ・ブスケと彼と結婚した田中花子（林邦宏氏提供）

外人部隊 戊辰をゆく

渡部昇一
クリスチャン・ポラック

■わたなべしょういち
昭和５年山形県生まれ　上智大学教授　英語学　著書『英文法史』『文科の時代』『腐敗の時代』『知的生活の方法』『レトリックの時代』『日本史から見た日本人』

■クリスチャン・ポラック
昭和25年フランス生まれ　パリ第三大学東洋語学文化研究所を経て　一橋大学大学院で学ぶ　日仏会館研究員　中央大学講師　著書『ジャポニチュード』(共著)

NHK 田中泉哉

大君の国、ナポレオン三世と手を握る！

鳥羽・伏見の戦いに先立つこと一年半、すなわち、慶応二年（一八六六）六月、幕府は第二次長州征伐において、新式の銃砲を装備した長州軍に大敗を喫し、急いで軍隊の近代化に取り組んだ。いわゆる慶応軍事改革である。

その柱の一つが対仏七百万ドル借款、及びフランスの火器購入、軍事顧問団の招聘であった。これら一連のフランス接近策は幕臣小栗上野介らを中心に進められ、極東への進出をもくろんでいたフランスの膨張政策とも合致し、直ちに実行に移された。中でも幕府が期待をかけていたのは、軍事顧問団による幕軍の洋式訓練であった。



幕府歩兵元治元年編成歩兵隊一番組（靖国神社蔵）

招かれたフランス軍人たちは慶応二年十一月、万国博覧会の準備に沸くパリを後に、南フランス・マルセイユから海路二か月余、翌年（一八六七）正月十三日、横浜港に到着した。団長シャノワーヌ大尉以下一行十五名であった。

ちなみに、この軍事顧問団の派遣を取り決めた条約書によれば、派遣は「日本政府の懇請によって、仏帝殿下が大君殿下の望みをみたすために」決定されたものである。

軍事使節の日本への派遣は、フランス国内でも相当な反響を呼んだものらしく、雑誌「モンド・イリュストレ」は、十五人のスケッチ入りで、「興味ある東洋の大君の国は、ナポレオン三世と手を握った」と報じている。このスケッチが、今日、十五人を全員そろって目で確認できる唯一の史料である。

軍事顧問団のプロフィール

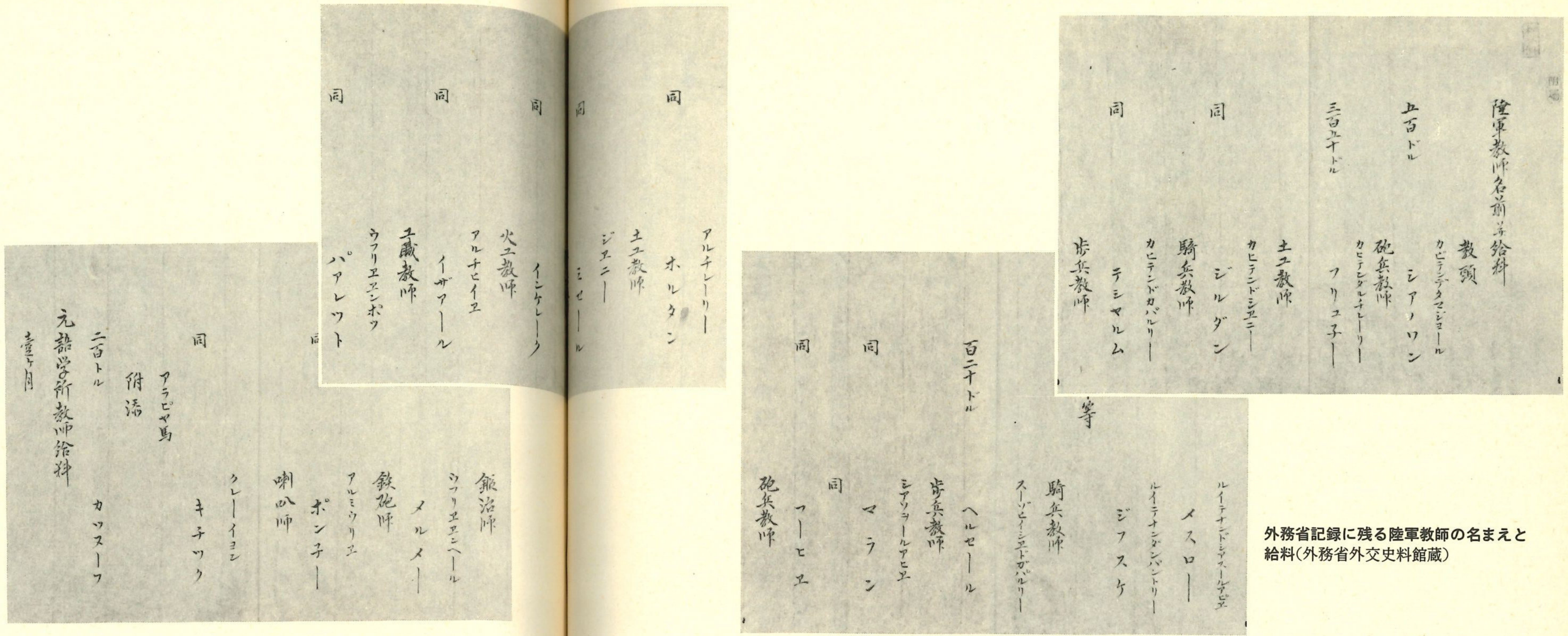
―― この人たちの名まえは史料にのっているのですが、だれがだれだかおわかりになりますか。

ポラック 残念ながらこのスケッチでは五人の兵士の名まえしかわかりません。前列左端がデュ・ブスケ（Du Bousquet）歩兵中尉です。そして次の方はメッスロ（Messelot）歩兵中尉です。真ん中が団長のシャノワーヌ（Chanoine）参謀大尉で、シャノワーヌの隣がブリュネ（Brunet）砲兵大尉、いちばん右端がデシャルム（Descharmes）騎兵大尉です。うしろの列の十人のうち名まえのはっきりしていたのはマルラン（Marlin）、ブッフィエ（Bouffier）、フォルタン（Fortant）、ペールセッル（Peyrussel）、イザール（Izard）の五人で、あとはミセール、ベルセール、インケレーク、バレット、メルメー、ボンネー、ギチックのうちの五人だろうと言われております。というのは、この顧問団の派遣が決まってから、人数やメンバーの変更がたびたびあり、最終的にだれとだれだったのか記録がまちまちで、これまで確認できなかったのです。

しかし、私がパリに行ったときに、フランス陸軍省資料館で調べたところ、十五人の名まえが明確になりました。ミセールという人は含ま



「モンド・イリュストレ」に載ったフランス軍事顧問団



外務省記録に残る陸軍教師の名まえと給料(外務省外交史料館蔵)

れていず、またベルセールではなく、ペルセルという名まえであり、インケレークではなくイグレック（Ygrec）であり、ギチックではなくグティック（Guttig）であることが判明し、バレット（Valette）、メルメー（Mermet）、ボンネー（Bonnet）という名の人物は確かに存在していたことが判明しました。また、カズヌーヴ（Cazeneuve）は軍人ではなくてナポレオン三世直属守備隊の調教師であり、前の十五名より三か月遅れて来日し、その時アルジェリアから連れて来た二十五頭の馬を将軍徳川慶喜に贈呈しました。ここでもう一人、カズヌーヴと一緒にアルジェリアから日本へ渡った人物があり、彼はフーリエ・デンクール（Fourier d'Hincourt）で、アフリカ軍隊の歩兵下士官として軍人であるため来日して、前述の十五名の軍事顧問団に入団したが、カズヌーヴは軍人ではないので、彼より少し遅れ、契約し直して、一八六七年十月に入団しました。そして、マルランは歩兵下士官、ブッフィエは同じく歩兵下士官、フォルタンは砲兵下士官、イザールも同じく砲兵下士官、ペールセッルは陸軍士官学校の調教師、イグレックは軍靴職人で陸軍下士官、グティックは歩兵下士官でラッパ吹き、バレットは砲兵下士官で大工職人、メルメーは歩兵下士官で鉄工職人、ボンネーは砲兵下士官で鉄砲職人であるということも併せて判明しました。

また、シャノワーヌ団長の給料は月三千フランで、大尉たちは二千フラン、下士官たちは七百フランであり、十五名一行がマルセイユを出発したのは、一八六六年十一月十九日。その時、団長は六千フラン、大尉たちは四千フラン、下士官たちは二千フラン、それぞれ日本の幕府から特別手当として支給され往復の船賃も幕府から支給されたのでした。一八六七年十一月七日付フランス陸軍省の指令でジョルダン（Jourdan）工兵大尉とミッシェル（Michel）工兵下士官の両名が十二月末ごろ来日し、結局合計十九名になったのでした。

—— 当時、フランスはいろいろな国と戦いをしておりましたね。

ポラック 特にこの軍人たちは全世界で活躍し、メキシコや仏領インドシナ、またアフリカ、イタリアでも活躍しました。

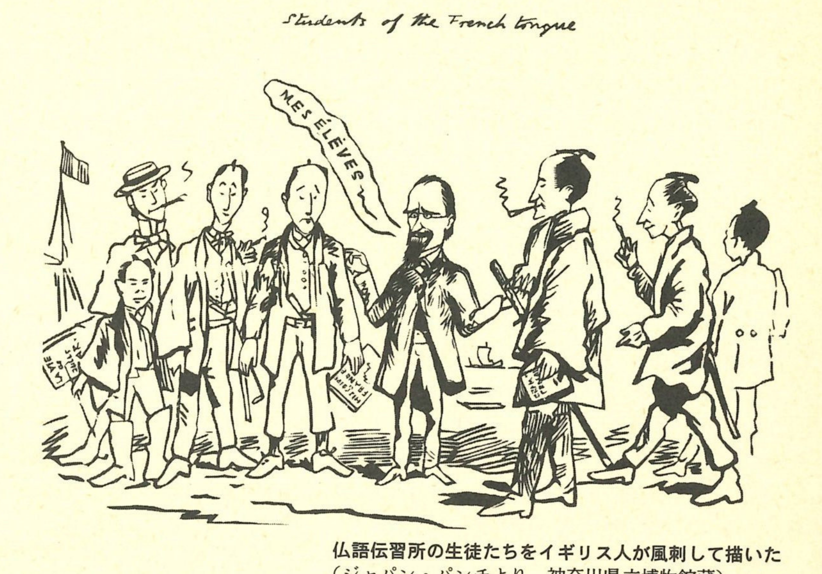
—— ブリュネ、メスローはメキシコ、シャノワーヌ、デュ・ブスケはインドシナ、シャノワーヌはアフリカの方まで行っているんですね。カズヌーヴはイタリア独立戦争に参加しました。

ポラック そうです。

—— 当時、日本は幕末の混乱の時代で、第十四代将軍家茂、そして孝明天皇が相ついで亡くなるちょうどそのころに当たるわけですが、フランスはこういう時にどのようなつもりでこの人たちを送って来たのでしょうか。

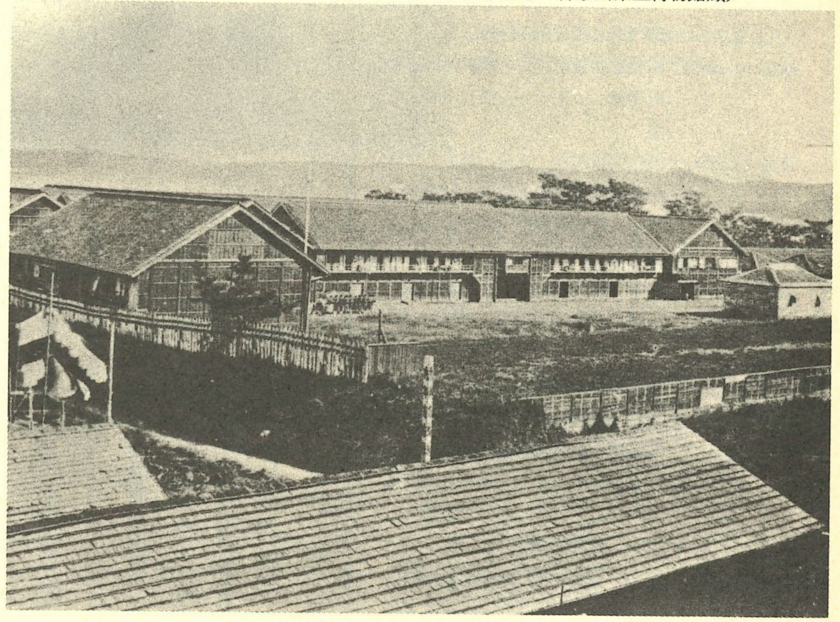
外人部隊戊辰をゆく<年表>

嘉永5(1852)	ルイ・ナポレオン、皇帝となり第2帝政始まる
安政2(1855)	フランス艦隊下田来航
安政5(1858)	フランスと修好通商条約に調印
安政6(1859)	フランス軍、サイゴンを占領　イタリア統一戦争でフランス軍、オーストリアを破る　イギリス総領事オールコック着任
万延1(1860)	英仏連合軍北京占領
文久1(1861)	第1回遣欧使節派遣
文久2(1862)	フランス、メキシコと開戦
文久3(1863)	長州藩、下関で米・仏・蘭の船を砲撃　7月薩英戦争　12月池田筑後守ら欧州に出発
元治1(1864)	3月、フランス公使ロッシュ着任　8月、英・仏・米・蘭、下関を砲撃　第1次長州征伐始まる
慶応1(1865)	横須賀製鉄所起工　横浜仏語伝習所開設　イギリス公使パークス着任
慶応2(1866)	薩長同盟成立　8月、幕府、フランスと借款契約を結ぶ　11月、フランス軍事顧問団マルセイユを出帆
慶応3(1867)	1月、徳川昭武、パリ万博出席のためフランスに出発　同月13日、シャノワーヌ以下フランス軍事顧問団横浜に到着　フランス軍、メキシコ撤退　4月、ロッシュ公使、徳川慶喜に謁見　昭武、ナポレオン3世と会見　5月、シャノワーヌ以下江戸に移り伝習開始　12月、薩摩屋敷襲撃
慶応4(1868) **明治1**	1月、鳥羽・伏見の戦い　5月、ロッシュ公使、ウットレーと交代し帰国　8月、ブリュネら榎本軍に参加
明治2(1869)	3月、ニコール、コラシュ、クラトー宮古湾海戦に加わる　5月、榎本武揚ら降伏　ブリュネら「コエトロゴン」号で函館脱出。「デュプレックス」号でサイゴンへ
明治3(1870)	普仏戦争起こる
明治4(1871)	パリ・コミューン　ナポレオン3世捕虜となる
明治6(1873)	ナポレオン3世死す



仏語伝習所の生徒たちをイギリス人が風刺して描いた
（ジャパン・パンチより　神奈川県立博物館蔵）

ポラック　軍人を送った理由はいろいろあります。まずご承知のように、幕末時代においてはフランスとイギリスの対抗関係があります。全世界でイギリスとフランスが対抗しています。日本においては、イギリスはフランスよりも前から活動していました。そこでフランスとしては何とかその遅れを取り戻さなければならない、日本と緊密な関係を結ばなければならないということで、横須賀に造船所を作ったり、また横浜にフランス語学校を開いたりします。そして、世界の情勢がしだいに詳しく日本に伝わるにつれて、フランスの陸軍の評判がだんだん高くなってきます。とうとうフランスの陸軍は全世界でいちばん強いという話になりまして、ぜひフランスの軍事制度を日本に取り入れようということになったときに、すぐ使節を派遣することに決めたのです。イギリスは薩摩・長州を応援し、フランスは幕府を


太田陣屋　現在の日の出町駅前付近にあたる（ファー・イーストより）


大小を差し銃を担いでの行進（イラストレイテッド・ロンドン・ニュースより　雄松堂書店提供）

応援したことはみなさんよくご存知のことです。

大小差して小銃かついだフランス式軍事教練

今日、「港の見える丘公園」として横浜市民に親しまれている丘陵地帯は、通称「フランス山」と呼ばれている。当時、フランス人たちが居留したことからその名が残ったものである。軍事顧問団はここに陣どり、現在の京浜急行・日の出町駅辺りにあった太田陣屋に設営された訓練所に幕府兵士たちを集め、特訓を開始した。教練は、歩兵・騎兵・砲兵のいわゆる三兵伝習が中心で、六時起床、六時十二分点呼、六時半朝食、以後夜十二時まで演習という分刻みのハードワークであった。

その内容はもちろん、ナポレオン三世率いるフランス軍の戦術戦法である。日本人たちは、耳慣れないフランス語や目新しい武器に驚き、特に鉄砲を中心とする歩兵訓練は、刀に慣れ親しんだ侍たちを当惑させた。

教練の日本側係員田嶋応親が、後にその模様を事細かに語ったのが『史談会速記録』に残されており、いくつかのエピソードは当時の様子を彷彿させる。

「横浜で初めて伝習をする時分の服装なども大小差して、今のような西洋流の着物ではございませぬ。其頃色々工夫をしまして袴を膝の辺で括ってしまっても不便だといって、形は丁度軍鶏脚（しゃも）のようで余程変でありました、士官などは一定の服装がないので、銘々勝手な服装をしているのです。陣羽織のようにそろえて筒袖のようなものを付けております。大小を差しておりまして小銃をかついで練兵をするのです。ずい分厄介なもので砲兵などが砲を



大坂城で行われた幕府軍の仏式歩兵訓練(横浜市立図書館提供)

引きますのにも矢張り大小を差しながらやっておりますから、なかなか砲車に引掛って邪魔になってしまいますがやめる訳にもいかぬ……仏蘭西人はそんな物を差して居っては本当の練兵は出来ないということで、その時分の隊長からの指図で横浜では練兵の時には大小共に脱してしまったのです。

……仏蘭西教師の其の時分の砲兵士官でブリュネーという人は大変器用な人で多芸な人でありまして、此の人が一定の服装をしなければならぬというので諸兵の区別を付けて服装図を造って呉れた、そのブリュネー氏が造って呉れた各兵科将校の服というものは今日(明治四十年)の将校の正装と殆んど同じなのであります。

……その頃は未だ結髪でございますから是が前の陣笠を冠るのと異って帽子を冠るのに甚だ邪魔であるけれども切ってしまう訳にもいかぬ、切れば罰がある、なかなか其の当時やかましゅうございますから勝手に斬髪する訳にいかぬ、それで伝習する者は甚だ苦しがって、なるたけまず広く剃って髪を少なくして小さなまげをそろえて帽子を被ったものですが、段々終りになりましてぼつぼつ切り始めたのですが、是は速記には省いて置いてもらいたいですが(其の当時斬髪になりました為めに養家から離縁された者などがございます)、終に訓令して皆切るという騒ぎになりました。稀れに頑固な下士などなかなか切らぬのが幾らもありました。下士や兵卒の中には年令の長けた人がございまして、既に五十を越えた人もあり、一方には十六、七の人もある、稀れには親子同隊に居る者もあった、今日から見ると不思議な有様でありました、それを仏蘭西人などが来まして整列させたのを見ましたらさぞ可笑しかっただろうと考えるのであります。

……関口の水道町の先の処ですが其処へ大砲製造所というものをそろえました、ブリュネーという人が図面も何も造って呉れ、又、仏蘭西から取寄せて呉れて殊に現品はナポレオンの進物で来て居るのですからそれに依って造ることになりました。……然るに其の砲を送る上に付いて一つの秘密がある、是は其のブリュネー氏が特にナポレオン帝の許可を得なければ伝えることが出来ないと言うのです、ブリュネー氏も尽力して呉れましたけれどもどうしてもナポレオン帝から許可になりませぬのです。というのは其の当時は例の墺地利の方に向って伊太利と連合して、始めて其の砲を実戦に用いたのです。未だ列国に比類のない実に結構な砲であったのです。……で、其の砲の秘密がどうしても考え付かない、砲身の中に秘密がある、是も分ってみれば誠につまらない話で、なぜ是ばかりの事が考え付かないといって後に笑うことでございましたけれども其当時はこれを採り出すのに非常に苦心をしたのであります。大略を申しますと、中に太い筋があって其の筋がよれて居るのです。弾丸は今も同じ長い形です。これが旋回して打ちませぬと尖った方が先に往きませぬ。……そこで中へ合金属を鋳込みましてそれを引き抜いて型をとりまして、……弾丸が満足に止まるということをみつけました。」(「幕府以降軍制革遷の事実」より)



フランス公使ロッシュ

こうした逸話が枚挙にいとまがないほど記されている。整列するのにも、身分がどうの、禄高がどうの、ご先祖さまがどうのとフランス人たちはたいへん悩まされたそうである。

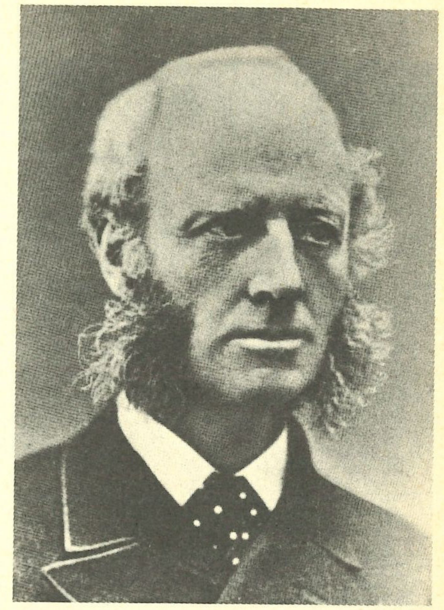
しかし、厳しい訓練と、大砲のライフルの螺旋を、金属を流し込んで解明するという日本人の驚くべき熱心さも手伝って、武士団でしかなかった幕府軍もようやく近代的軍隊へと少しずつ歩み始めたのである。

イギリスの好敵手・フランスの世界戦略

当時の日本に最も大きな影響力を持っていたのはイギリスとフラ



イギリス領事館跡


オールコックに代わって来日したイギリス公使パークス

ンスであった。駐日フランス公使はレオン・ロッシュ。ロッシュは多年アルジェリアで貿易に戦争に手腕を発揮した、いわば豪傑タイプの外交官で、元治元年来日した。彼は幕府との関係に力を注ぎ、イギリス公使オールコック、アメリカ公使プラインと権謀術数の駆け引きを展開しながら、ついに今回の軍事顧問団の招聘にこぎつけた。

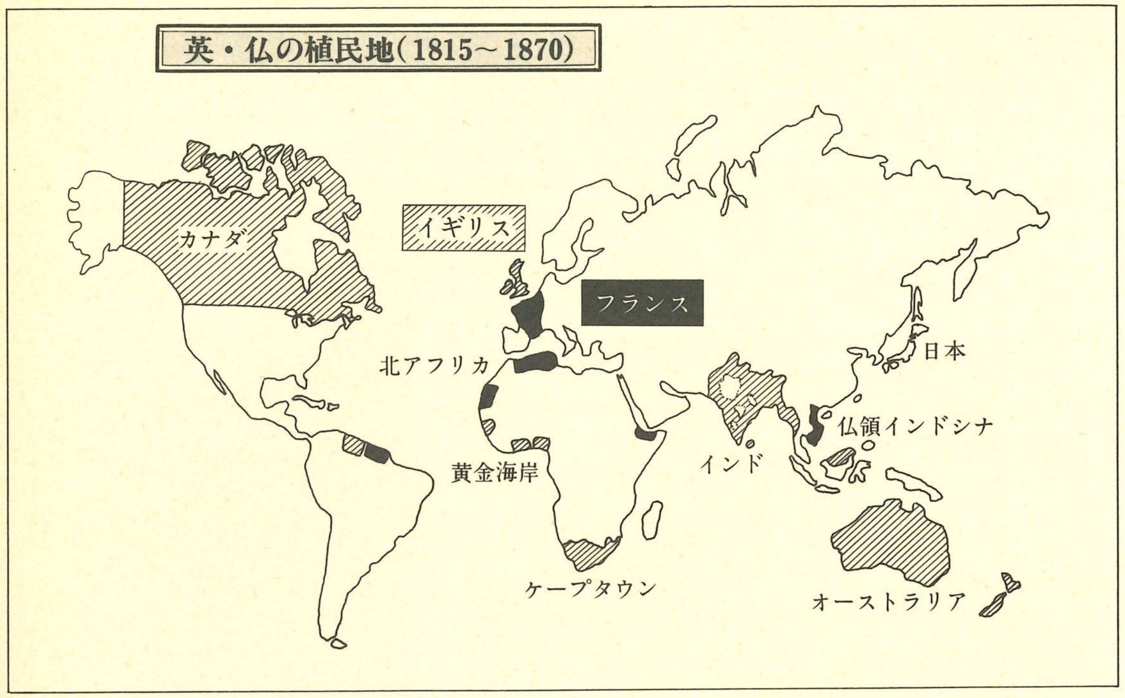
これに対抗したのがオールコックに代わったイギリス公使ハリー・パークスであった。幕末の日本を舞台に英仏の東洋政策が激突するのである。

―― このイギリスとフランスの対立というのは、当時世界的に見てどういうことだったのですか。

渡部 ナポレオン戦争のころにフランスはヨーロッパ大陸の戦争に注意し過ぎて、植民地獲得に遅れたという意識があったと思います。アメリカ大陸ではルイジアナを売ってみたりですね。それでナポレオン戦争が終わると、フランスはまた馬力をかけて世界に出ようという機運があったようです。もちろんイギリスは既得権がありますし、これはまた当然競争になるわけですね。

―― そういう時に、日本というのは彼らにとってどの程度の対象になっていたのでしょうか。

渡部 その辺がよくわからないのですけれども、彼らにとっては憧れの国ジパングというのが、根強くあったように思います。一般大衆のレベルにまで。そして日本では早くから、万延元年にアメリカ大陸に国交修復に行くわけです。その時にお目付役に行っていた小栗上野介が世界を見て、軍隊はフランスがいいという情報を得てくるんです



ね。そしてフランス式を入れる。それからついでに船の修復、いわゆる造船所までフランスのまねをしようとするのです。どうして小栗上野介のような明敏な人がフランスにそれだけひかれたかは、当人が殺されてしまったのでわかりませんが、恐らくは当時の状況を考えると、フランスはイタリアの独立を助けたり、それからウィーンがトルコに攻められたときにこれを助けたり、独立を助ける方にかなり働いたためしがある。イギリスなどはあまり助けたことがないというようなことを恐らく耳にして、フランスにひかれたのではないか。これは


英仏対抗戯画　日本を舞台に英仏が激しくぶつかり合った(神奈川県立博物館蔵)

当人に聞いてみなければわからないのですが、とにかく結果としてはフランスを入れたわけです。

――そうすると、当時のフランスの陸軍というのは、ナポレオン以来世界最強と考えられていたのでしょうか。

渡部　いちばんいいと思われていたのでしょう。それで当時のヨーロッパ中の陸軍教科書について言えば、これはナポレオンの参謀をして付いて回ったジョミニという人が、ナポレオンの全戦役を検討しまして、非常にわかりやすいテキスト・ブックに作ったのです。これは国を問わず当時のヨーロッパの陸軍軍人のスタンダードな教科書だったわけです。もちろん当時クラウゼヴィッツもいたわけですが、この人のはだいたいわかりにくいし、プロシアの陸軍参謀本部以外ではほとんど読まれなかったので、対外的な影響力はなかったのです。それで当時ヨーロッパの軍学といえばジョミニに限ったわけなのです。それがフランスのナポレオン戦争の非常に幾何学的分析なんですね。戦争術というわけです。なんでも専門家に言わせますと、ジョミニの本を読みますと、あしたからでもナポレオンと同じくらいに軍隊が使えそうな気になるのだそうです（笑）。

――そうですか。相当説得力のある本なんですね。

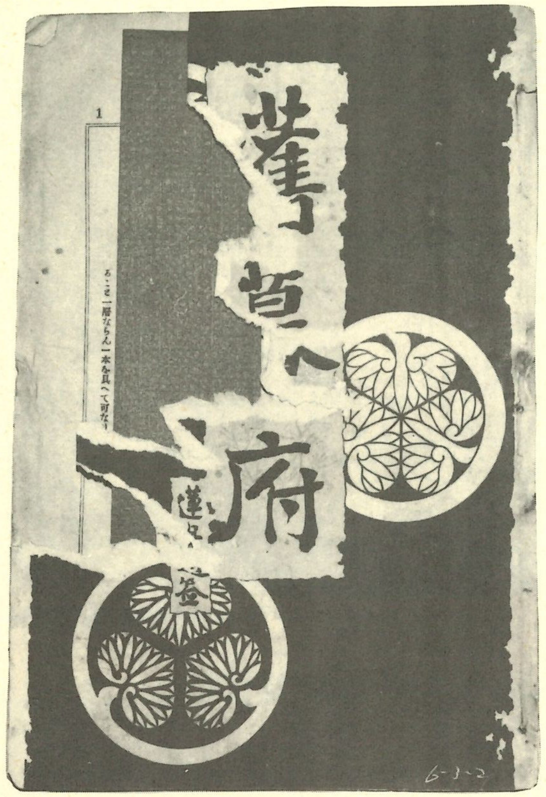
渡部　わかりやすいんですね。で、当時、軍隊を送るというのが文明国の印みたいなものです。今ですと、国交を回復するとすぐに工場を建ててやりますけれど、当時はすぐ軍隊を強くしてやろうということだったのでしょうね。工場を建てたり、産業を入れようという発想は、明治維新後日本が最初に世界に示したことであって、当時は先進国がよその国に工場まで入れてやろうなどという発想はどうもなかったようです。ですから、ヨーロッパの先進国にしてみれば、新しい国が門戸を開くと、さっそく軍隊を入れて強くしてやろうということだったと思います。

外人部隊、鳥羽・伏見に戦う

慶応四年正月、軍事顧問団の来日から一年後、鳥羽・伏見において戊辰戦争の火ぶたが切られた。幕府は頼みの綱のフランス軍人たちに大坂に上ることを命じ、シャノワーヌをはじめ、メッスロ、フォルタン、マルランの四人、そして彼らが一年間徹底的に鍛えた伝習第一大隊八百人と騎兵隊が出動した。しかし、案に相違して幕府軍は緒戦から敗走に次ぐ敗走。実力を発揮するいとまなく、怒濤のような薩長軍の進撃に圧倒されたのである。

慶喜が逃げるように海路江戸に帰った翌日、正月十三日、軍事顧問団は江戸城に登城し、軍事会議に参加した。『慶喜公御実記』には、「仏蘭西教師七ツ半時登城……」と形ばかりの記載があるが、デシャルム騎兵大尉が明治四十年、アルジェーで「日本とフランス軍事顧問団」という講演を行った際に、この軍事会議におけるフランス側の主張を述べている。すなわち、彼らは「箱根の東に官軍を誘い込み、海軍が駿河湾に上陸して退路を断つ」という強硬な主戦論を展開したのである。しかし、これは徳川慶喜のうなずくところとならなかった。だが、シャノワーヌはなお主戦論をあきらめず、正月二十三日、勝海舟が陸軍総裁に任ぜられるや直ちに訪問し、以下のように上申したことが勝海舟『陸軍歴史』に記されている。

「我輩是迄伝習して其業既に成る。君が士官兵隊数百名皆所謂熟練兵なる者なり。今や君是が総裁たり、実に戦へば必可レ勝士官兵卒皆鼓レ勇其勢大に盛なり。意を定めて決せよ。我輩も又指揮に入り、一分を尽さむ。」



薩摩藩邸焼き打ち事件を報じる「旧幕府」(東大明治新聞雑誌文庫蔵)

実にフランス武人の面目躍如たる進言である。

こうしたフランス側の主戦論はこの時急に出て来たものではなかった。そのおよそ一か月前、慶応三年十二月に起こった江戸薩摩藩邸の焼き打ち事件にもフランス人が一枚かんでいたのである。雑誌「旧幕府」がそれを報じている。焼き打ちの主謀者は庄内藩の若手であったが、決行前にブリュネ大尉に相談を持ちかけ、以下のような実施要領をブリュネから授けられたという。

一、榴弾で扉窓を破壊する。

二、門、窓の破れたところに散弾を撃ち込む。

三、仰射角は五百ミリ以上とする。

四、地図をもって距離を測り、なお、一歩一メートルとして歩いて実測する。

五、散弾は一門百発、榴弾は一門二百発を用意する。

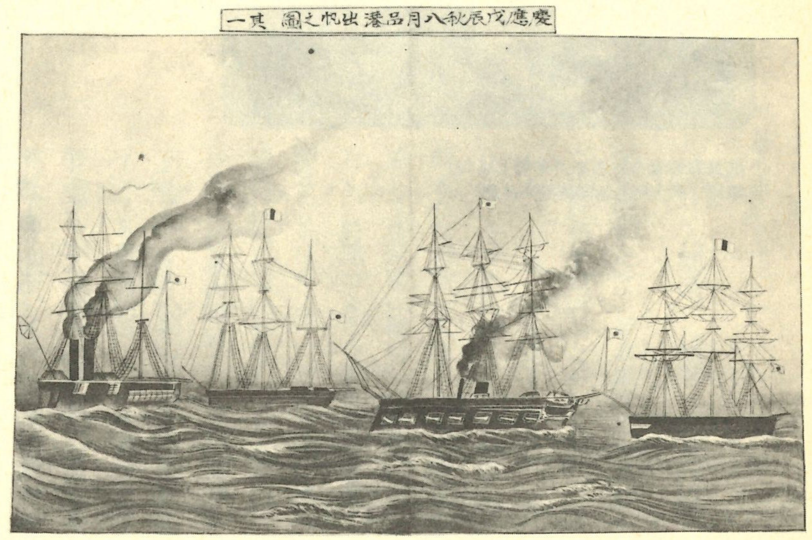
しかも、ブリュネは、文章も絵もたいへん巧みで、メキシコ戦争に参加したときには、彼のスケッチがフランスの新聞・雑誌を飾っているが、庄内藩士たちにも、焼き打ちの想定スケッチを書いて渡している。むろん、ブリュネ自身は実際にはこの焼き打ちに手を下していない。素知らぬ顔をして様子を見ていたに違いない。

しかし、結局、フランス人たちの主戦論はことごとく慶喜に退け

られ、幕軍は四月、ほとんど戦わずして江戸開城を迎える。大鳥圭介、榎本武揚ら、これにがまんならない主戦論者は陸に海に散り、これから一年余りの内乱が続くのである。

旧幕府軍に身を投じた軍事顧問団の先鋭分子たち


ブリュネが描いた薩摩藩邸焼き打ち想定スケッチ



品川を出港する榎本艦隊(麦叢録より　函館市立図書館蔵)

東北の戊辰戦争が本格化して三か月余、一進一退を繰り返しながら、次第に新政府軍の勝勢がはっきりしてきた慶応四年八月、顧問団の中で意外な出来事が起こった。八月十七日夜、横浜のイタリア公使館では折りしも仮装舞踏会が開かれていたが、シャンデリアのきらめきと人々のざわめきの中

から、外の暗闇に紛れるように逃れ出た二人のフランス人がいた。軍事教官ブリュネとカズヌーヴである。二人は幕府軍艦神速丸に乗り込み品川沖に向かった。そこには榎本武揚の率いる幕府海軍が待っていた。ブリュネとカズヌーヴは東北に成立した奥羽越列藩同盟の招きに応じ、軍事顧問団という公式の立場をかなぐり捨てて、新政府軍に抵抗する旧幕府軍に身を投じたのである。数時間後、榎本艦隊は新政府に恭順する徳川慶喜のもとを離れ、はるか北の地を目指して出航した。

――このブリュネという人は、教官団の中でもいちばん日本人に心を寄せていた人らしいのですが、この時はどういう気持だったのでしょうか。

ポラック　やはり一年間以上日本の人たちを教えて、よく日本の軍人の心がわかり、一所懸命やっているとか勉強しているということを非常にほめているわけです。ですから、そこから非常に深い同情が生まれたのではないでしょうか。

――何か文献が残っていますか。

ポラック　それは十月の四日にブリュネがシャノワーヌあてに手紙を送っています。その手紙の中で、「北の大君が私のことを呼んでいる。やはり私も一所懸命彼たちと生活したし、一所懸命みんな勉強をよくしたし、私は幕府が簡単に戦争に負けることは考えられないので、彼たちを応援しに行く。だからフランスの軍隊から抜けることをお許し願いたい」と書いています。

フランス陸軍省の資料によると、ブリュネは一八六八年十月四日付、シャノワーヌ団長を通じてナポレオン三世あてに軍事顧問団の辞任書


函館戦争参加の日仏八名の写真　前列左から二人目がブリュネ(石黒敬章氏蔵)

を書き送りました。その中で彼は、自分に信頼を寄せている幕府の武士たちにこたえるために、幕府軍と行動を共にすることを決意し、シャノワーヌ団長、ウットレー公使、そしてフランス政府の立場を崩さないようにするために、軍事団をやめなければならないと書いています。そして、ブリュネは民間人として戦ったけれども、心の中ではフランスの代表として戦ったのではないかと思われます。

―― ほう。それに対して団長のシャノワーヌは、どう考えていたのでしょうか。

ポラック シャノワーヌは、フランスの新しい駐日公使ウットレーに、このブリュネの行動、ブリュネの気持、そして自分の気持を伝えるわけです。それは十一月の四日の日付の文献の中で出ています。その手紙の中でまずブリュネの行動を報告しまして、その行動は同情すべきであるということを書いています。つまり、シャノワーヌ団長もやはりブリュネの行動に賛成しているということです。

―― ただ、ブリュネは幕府のためにタダ働きしたのではなさそうですね。榎本武揚の記録を見ますと、彼は開陽丸の艦上で二年契約で八万両出せと言い、結局半分に値切られたらしいのですが、榎本は「高いこと吹っかけやがって」と彼一流の言葉で申しておりますが……。そういう彼の個人的な生活の条件と、もう一つ、基本的には彼はフランスの軍人ですよね。そうすると、彼が参加するということはフランスの国の立場というものがありますね。

ポラック 国の立場は確かにあります。しかし、元公使のレオン・ロッシュがこれまでいろいろ非公式的に発言してきたことに、例えばぜひ幕府の軍隊を軍事的に応援したい、援助したい、また援助金を出したいということを言ってきました。ですからブリュネもそれを非公式的に聞いて、自分でも幕府を応援しようという気持になったのだと思います。しかし、やはりフランスの政府の立場もあります。シャノワーヌの手紙をもらってからウットレー公使はフランスの新しい外相ムスティエに手紙を送りますが、ウットレー公使の考え方は、まったくシャノワーヌやブリュネの考えと違っています。ウットレー公使はブリュネの行動を許すことができない、それどころか厳しい罪であるとも言っています。また、シャノワーヌのブリュネに対する同情も許すべきことではないと書いていますが、それは単に公式的な発言で、真意はブリュネの立場に同情的であったものと思われます。そこには、フランスの政府の立場がはっきり出ているわけです。新しい公使は、明治維新の日本の内乱においては、中立の立場をとらなければいけないという考えだったのです。つまり、ブリュネの日記を読んでみますと、彼は彼と行動を共にしたフランス軍人の同志たちに、フランス政府の立場を傷つけないようにするために、フランスの軍服を着て戦うことを禁じたという主旨のことが書かれているのです。

フランス人の受け止めた日本的心情

榎本に従ったフランス人は、ブリュネとカズヌーヴの二人だけではなかった。軍事顧問団から後三人、マルラン、フォルタン、ブッフィエが仙台で合流、そして上海にいた五人の商人たち、ニコル、コラシュ、クラトー、ブジェ、トリブが函館に集結し、合計十人となった。彼らは榎本武揚や大鳥圭介を助け、翌年春まで江差に、松前に活躍する。その模様は大鳥圭介著『幕末実戦史』に詳しいが、特に明治二年四月、榎本軍の命運をかけた宮古湾海戦では、ニコルが「回天」に、コラシュが「高尾」に、クラトーは「蟠竜」に乗り、土方歳三などと一緒に奮戦した。しかし、戦いはことごとく榎本軍に利あらず、五月には、圧倒的物量を誇る新政府軍の攻撃の前についに五稜郭を残すのみとなった。



宮古港海戦記念碑

―― やはり教えておりますうちに、国境を越えた師弟愛というようなものも芽生えてきていたのでしょうか。

渡部 私はそれが大いにあったと思うんですね。日本人は先生に対する敬愛の念が、それは先生が外人の場合でもとてもこまやかなんです。そういうことは案外外人の方は経験がないものですから、日本の弟子を持つと感激する人が今でもたくさんいるわけです。例えば、日本に英語を教えに来て帰ったある先生の徳を慕う人たちがファンドを作ったりして、その先生が亡くなると未亡人をわざわざ日本に呼んで、弟子が集まって慰めてあげたり……。

―― その基金でね。

渡部 ええ。そういうことをする弟子たちというのは、ちょっと外国にはないと思うんですね。当時も、新しいことを教えてくれる先生というので、ちょうど日本人が自分たちの先生に対するごとく、あるいはもっと親密に愛情を示したのではないでしょうか。それは向こうにも通じますからね。ローマ帝国以来西洋では、元来、先生というのは奴隷だったし(笑)、金を出すから教えてもらうとか、そういう色彩がどこか残っていると思うのです。ところが日本は報酬をやるからというような関係を超えて、師弟の情愛というものがある国民ですね。

―― しかし、やはり先生の質の問題もございましょうしね。



徳川幕府脱走之士　彼らもまたブリュネの弟子たちだったのだろうか（函館市立図書館蔵）

渡部　もちろんあったでしょう。それに、教える方も一所懸命だったと思いますね。そしてまた先生の方は断然勝つ自信はあったのでしょう。この弟子を使っておれの戦略でやれば、必ず十中十まで勝てるというのが主戦論の根本にあったと思いますね。

——　また、このブリュネという人は絵も描けますからね。言葉で通じなければ絵でということであったかも知れませんし……。

渡部　あったと思いますね。その当時の日本人がどのくらい吸収したかわかりませんが、私は日本人の民族性から考えまして驚くべき早



ブリュネが慶応3年に描いたスケッチ

さで習得したと思うのです。彼らはほかのインドシナとかメキシコとか見ていますが、そこで訓練した兵隊さんたちとは違ってたと思いますよ。初めこそ滑稽なことが、例えばちょんまげとかいろいろあったと思いますが、西洋式の術がわかれば、これは徹底的にやったと思うんですね。

——　確かに、顧問団の人たちの手紙を見ますと、日本人は非常に優秀だからよその国と同じようにやってはいけないということを盛んに本国へ書き送ってますね。

渡部　それは十六世紀のキリシタンの時からそうなんですね。キリシタンの宣教団も日本人は特別だということを書き送ってますね。日本では、大学を作らなければだめだとすぐ言うんですね。ですから、日本人の弟子の質の良さは常に外人教師たちの驚きだったと思います。それはもちろん、明治になってもそうだったです。もっとも、例の七十年の学生騒動以後はわかりませんが……（笑）。

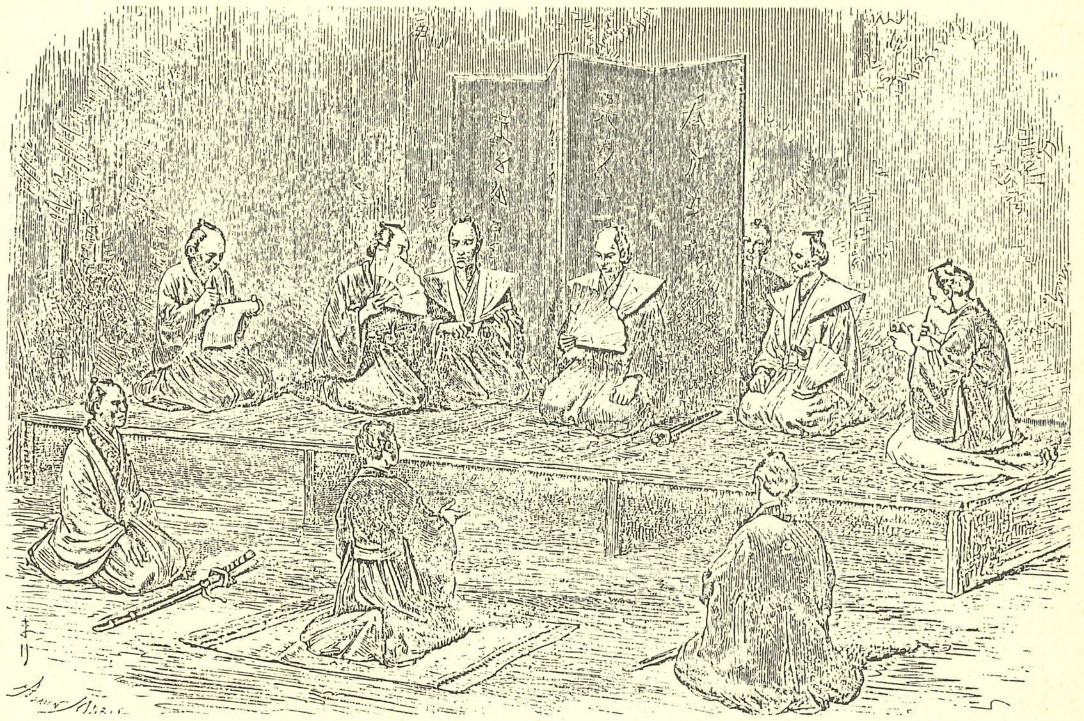
——　そのように、いろいろなことを絵に描いたりして外国で弟子たちに教えている。そういう親密度というのは外国ではないのでしょうか。

渡部　ええ、ないというか、教えられてもこちらは謝礼を払って習っているのだという気がすぐでると思うんですよ。日本の場合ですと、例えば戦後でも自衛隊の人がアメリカへ習いに行くと、ものすごく成績がいいんですね。何でもいちばんになってしまう。すると、アメリカ人も感激して、理屈を超えた親愛の情が生じるということがある。どこの国でもプロ同士通じるものがある。しかも日本はプロとして先生を尊ぶ精神がとてもこまやかにあったと考えられると思います。

——　で、その絵というのがおもしろいのですが、当時の軍人はブリュネに



フランス語教師の一人、アンリ・ヴーヴの墓



軍法会議にかけられるコラシュ　フランスの雑誌に掲載されたものである(柳井乃武夫氏提供)

限らず絵がうまいのです。少なくとも参謀とかそういう人たちは……。ドイツ参謀本部をほんとうに作り上げたモルトケという人もとても絵がうまくて、彼がトルコにいたころの絵入り書簡というのは、十九世紀のトルコに関する第一級の史料と言われているくらいですね。

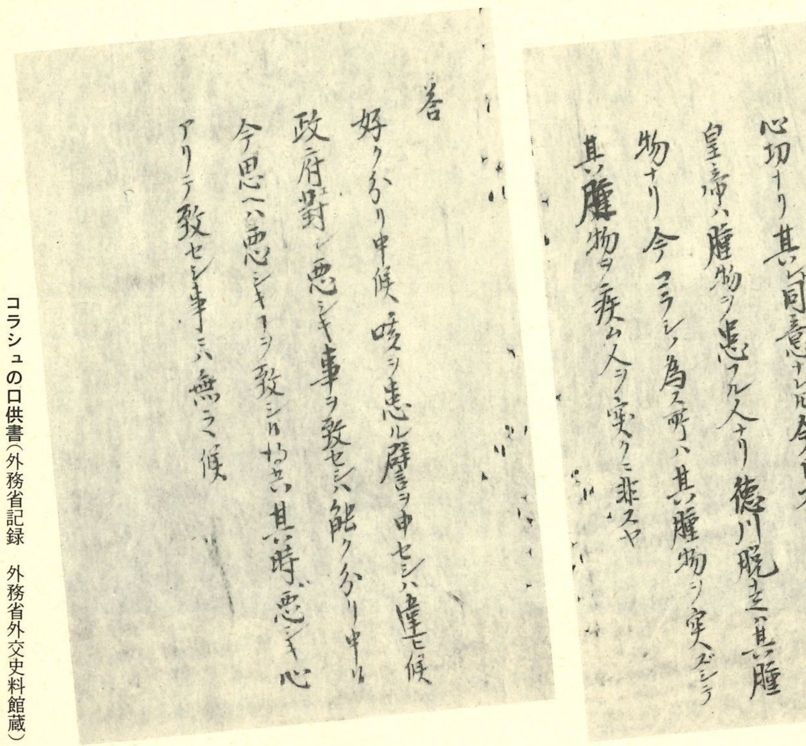
――ほう、そうですか。

渡部　今みたいに写真をパチッとやればいいわけではないですから、スパイやるにしろ何にしろ、全部目でとらえて描くということだったのでしょうね。ブリュネのスケッチでも、徳川慶喜をそうまじまじと見たとは思わないのですがよく描いていますね。薩摩屋敷の時もサッサと描いて、こうなるだろうとか……。これは言葉の障害も大きかったでしょうが、当時の習う人も武人ですから、ピンとくるところがあったのでしょうね。絵でちょっと描いて見せてもらえばね。

五稜郭開城、夢破れて……

五月十八日、五稜郭開城。一年半に及ぶ戊辰戦争は榎本の降伏をもって完全に終息した。五稜郭に立てこもっていた人々は捕らえられ江戸に送られた。だが、そこにはフランス人たちの姿はなかった。開城直前に十人のうち九人がフランス軍艦に救出され横浜に逃がれていた。残る一名は、コラシュであったが、大鳥圭介はひょんなところでその行方を知る。護送され東京で入牢したところ、その獄中に落書きがあったのである。大鳥圭介は『幕末実戦史』に次のように記している。

「この牢は元歩兵の罪人を入れ置きたりと見へて種々の楽書をなせり。其の中に仏人コラシ四月二十二日入牢と記しあるを見て大



コラシュの口供書(外務省記録　外務省外交史料館蔵)

に驚き小使に尋ねしにコラシはアシロット船の乗組員の人々と共に此処へ来り、十八日ばかり前出牢せりと。」

コラシュは、新政府側に捕らえられた唯一人のフランス人であった。コラシュの口供書は、現在、外交史料館に保存されているが、その供述の一部を引用すれば、

問「此度、日本官軍の船を奪わんとして出港せしアシュロット船に乗り、徳川脱走を助けしは何の次第なるや。」

答「仏国と英国とはもとより不和に付、日本を助けて英国を妨げたき仏国の情なり。英国、日本の土地を蚕食せん事を念とするを悪み、是を妨げ日本を助けんと計る。……唯日本の為につくしたき心底なり。……英国は金を貸すを好む。其の故は、金滞り返すを能はざれば土地を代りに取るに至る、是英国の悪計にして日本是に陥らんとす。」

問「皇帝と徳川脱走と軍(戦)をするを知るや。」

答「此事は承知なり。」

問「皇帝を打つ脱走は悪しきに非ずや。」

答「此事の悪きは承知なり。」

問「其悪をコラシ助ける悪しきに非ずや。」

答「此事の悪きは承知なるも脱走を助くれば英国手出し出来ぬ様になるべし、英国の手を出さぬ様になれば、日本の為と思い脱走を助けたり。」

あくまでイギリスとの対抗において、自己の立場を弁明するコラシュの供述によっても、この戊辰戦争の諸外国とのかかわりの深さの一端をうかがうことができる。

さて、外国軍人が反政府軍に加わったということは当然外交問題

に発展する。沢外務卿とウットレーフランス公使の間では抗議と応酬がいく度となく繰り返されたが、同じく外交史料館の文書からその一例を挙げれば、

日本側「（フランス軍人が）暴恣逞逆を助けることほとんど一年に近し、このため数千人命を損し、十余艘の船を失う……是、最初之を脱走せしむるも貴国政府の落度にして……追々、賊魁榎本釜次郎以下詰問の上、御掛合に及ぶ候儀もこれあるべしと存候……。」

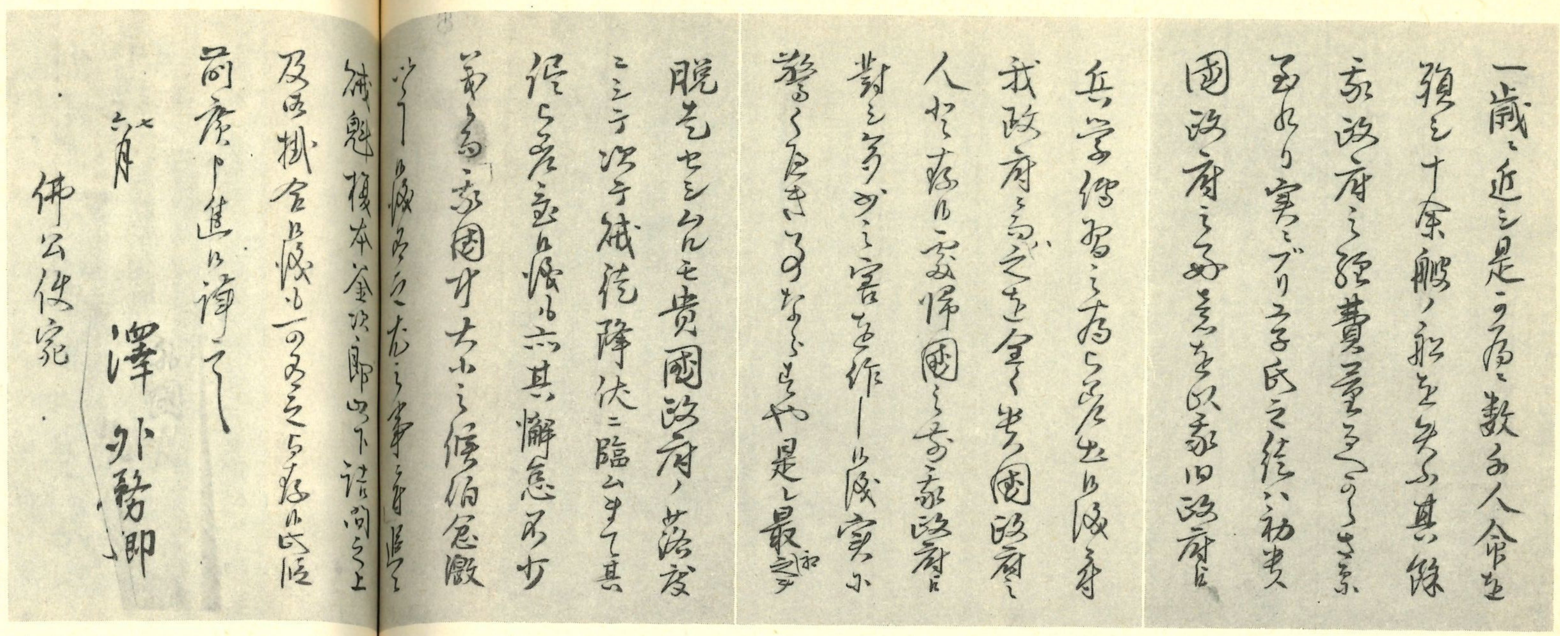
フランス側「戦乱の原因は彼ら（フランス人）にはなく、その原因こそは（日本の）新政府の実力不足にあるのであって、わずか二、三名のフランス軍人の力で日本の軍隊を撃破したり、日本国の存在が危くなったり、数千の兵が戦死したりするはずがない……。」

この調子のやりとりが延々と続くうちに、当のブリュネらはサイゴン方面に逃れてしまい、外人部隊参戦の外交的てん末は、結局うやむやのうちに自然消滅したのである。

ナポレオン軍が残したもの

—— 軍事顧問団は、陸軍総裁の勝海舟に対しても、訓練は十分やってあるから、戦えば必ず勝つのだからおやりなさいということを再々言っているわけです。それがどうしても採用されないんですね。

渡部 それは勤王派の側から見ればたいへんよかったことだけれども、幕府の側から見れば慶喜という人はダラ幹の極だし、勝海舟は裏切り密通者ですよ。ですから戦いにならなかったのですね。顧問団はそんなことを知りませんから、まじめにやって絶対勝てると思ったの



沢外務卿からフランス公使にあてた抗議文（外務省記録　外務省外交史料館蔵）

でしょう。ですから、上の方が倒産した方がいいと思っているときに、下の方の人ががんばったという感じで、ちょっと気の毒ですね。

—— なるほど。そういう残念な気持を彼らは持ったままフランスのそれぞれの所へ帰ってしまうわけですね。

ポラック 例えばブリュネの場合は、特に残念な気持でフランスに帰ったと思います。それは、フランス政府から裏切られたという印象もあるからです。フランス政府は一所懸命明治維新の前に幕府を援護して、やはり軍隊を送らなければいけないということを考えていたわけです。それをフランス政府はやらなかった。だから、ブリュネはとても残念だと思っていたと思います。

—— そうでしょうね。

ポラック ブリュネは榎本武揚を一所懸命応援すれば、そして幕府側の軍隊が内乱戦争に勝てば、フランスは極東におけるいちばん大き

幕末の軍制近代化と太田陣屋

戦後、野毛山から進駐軍のブルドーザーがうなりをあげて基地建設を進めている様子を見下ろしていると、不思議と野毛節が思い出され物悲しくなった。横浜中心部一面の焼野が原は、安政六年の新開港地の姿とオーバーラップしてくるのであった。

幕末に相次いだ外国人殺傷事件は外国軍隊の日本駐留の口実を与え、元治元年にイギリスの赤隊とフランスの青隊が山手に駐屯、そして慶応二年の大火は現在の横浜スタジアムのあたりを焼野が原と化し、その空地は外国兵の格好の調練場となって盛んに武力示威行動が行われたのである。

〽野毛の山からノーエ、〱
野毛のサイサイ山から異人館を見れば、
お鉄砲かついでノーエ、〱
お鉄砲サイサイかついで小隊進め、
オッピキヒヤラリコノーエ、〱〱

と、その当時の人は外国兵の調練の様子をうたったものだという。

その頃の日本は、「西欧へ追いつけ、追い越せ」と近代化路線を突っ走っており、兵制の西欧化もその例外ではなかった。だが、イギリス、フランス兵の調練をわきから垣間見て物真似するだけでは軍隊の近代化はなかなか達成されず、フランス公使ロッシュに相談し、陸軍はフランス式、海軍はイギリス式を採用、それぞれ軍事顧問団を招いて伝習を行うことになった。

陸軍の三兵（歩兵・騎兵・砲兵）伝習は横浜の太田陣屋で行うことになった。太田陣屋は現在の横浜市中区日ノ出町、宮川町付近にあったという。当時、太田村の一画であったことから陣屋の名が付いた。しかし、陣屋が最初に建設されたのは三兵伝習の為ではない。安政六年九月に福井藩士たちを収容するためであった。同年六月、福井藩主松平越前守茂昭は横浜陸上の警衛を命ぜられ、藩士を横浜に送った。その後、横浜警衛は姫路・松代二藩に引き継がれ太田陣屋へは松代藩士が入ったという。

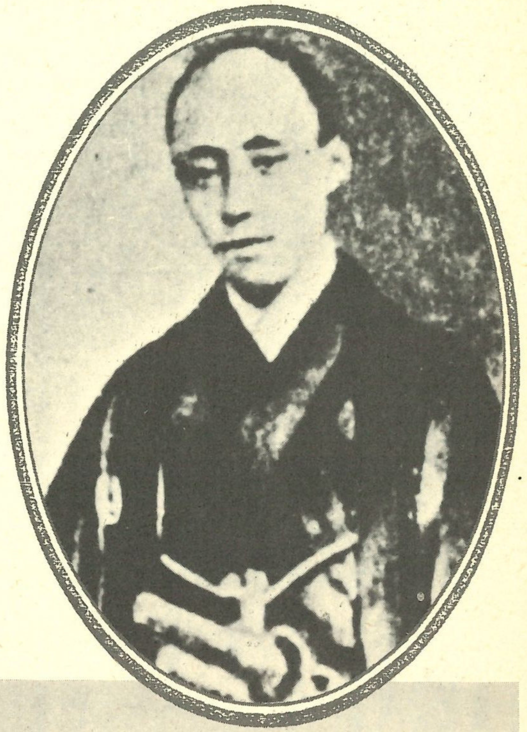
そして慶応元年十二月、三兵伝習の屯所として選ばれ、陣屋は神奈川奉行から陸軍奉行へ引き渡され、一万八千四百十四両の経費で修復された。

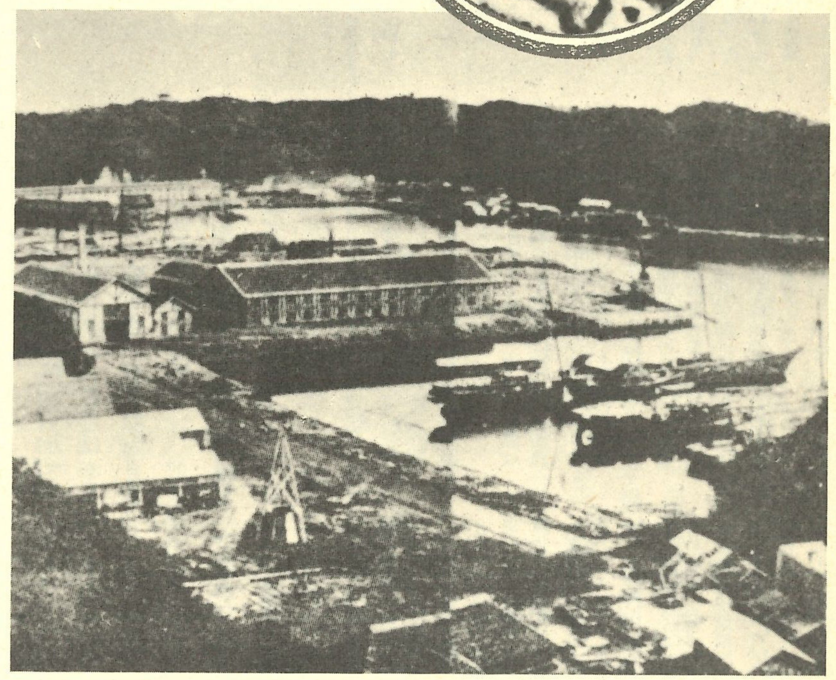
慶応二年十二月八日にフランス軍事顧問団のシャノワーヌ大尉らが横浜に到着、太田陣屋の教師館へ入営した。粗末な建物であったというが、フランスの士官らは不平もいわず、伝習にはげんだという。しかし、太田陣屋の設備の不完全と敷地の狭さはいかんともしがたく、慶応三年五月に江戸に移転していったのである。（半澤正時）

な影響力を持つことになるのではないかと思っていたと思います。

—— 国家と個人というのは、そう簡単に意見が合うものではないようですね。

渡部　フランスが助けようと思った方は、初めから計画倒産なんだからね（笑）。宙に浮いたのでしょう。しかし幕府がやったことは、維新後の政府がそのまま引き継ぐんですね。陸軍もフランスのままだし、海軍の方も小栗が始めた横須賀の造船所、それから横浜、両方ともそのまま使っておりますものね。ですから、基礎は維新政府が作ったのではなくて、ほんとうは幕府なんです。ところが、幕府でそれを作った人たちの意見は、もちろん彼らは主戦論者ですけれども、計画倒産社長のおかげで抹殺されてしまったわけです。





幕府のフランス接近策を押し進めた幕臣小栗上野介（上）とフランスの協力で建てられた横須賀造船所

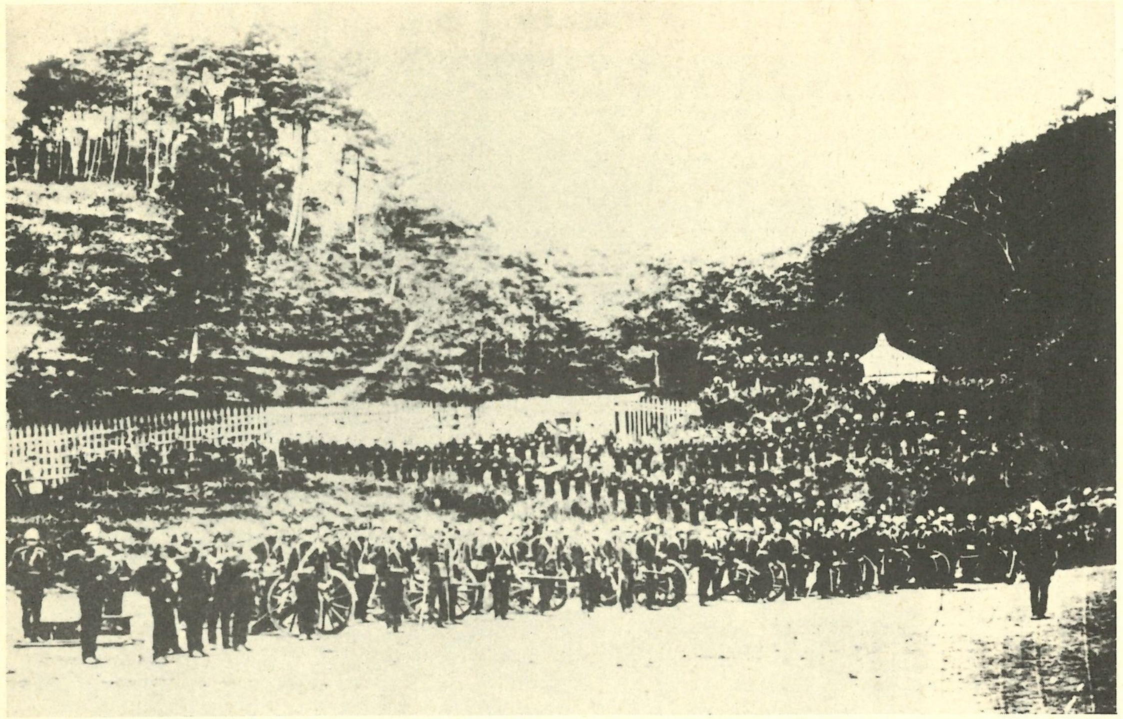
—— なるほど。確か明治四年十月の太政官布告でしたか、陸軍はフランス、海軍はイギリスにしようと決めておりますね。それは遺産をそのまま引き継いで行くという……。

渡部　海軍の場所は幕府の作った所を使い始めたけれど、イギリスに変えて、陸軍は依然としてフランスでしたね。普仏戦争でフランスが負けても、しばらくの間はフランスの負けた原因、プロシアの勝った理由というのはわからなくて、フランスの上流階級が腐敗したからとか、ずっと妙なところに理由をつけていましてね。そのうちだんだん事情がわかりまして、日本はドイツに切り替えるわけですけれどね。

—— 当時のフランス軍隊の戦い方というものは、ナポレオン一世から引き継いできたもので、こういうものが目新しいとか目立って違うとかいうところはあったのですか。

渡部　やはりナポレオン軍のいちばんの中心思想は師団編成によって各個単位が動けることにあります。そして、騎兵にしろ歩兵にしろ、整然として動く。ところが、日本ですとナポレオンが考えたような騎兵なんか戦う場所が大阪と東京の間にありませんね。まあ、富士の裾野で……と言ってもどうですかね。それから砲兵隊が並んで撃ち合うというのも、なかなか日本では適しない方法だと思うんですね。しかも、戦争というのは両方とも、ほぼ似たようなレベルで戦わなければいけないのですけれど。

—— ええ。で、その軍事顧問団ですが、彼らが向こうへ帰りますね。でも、後になりますと、団長のシャノワーヌは陸軍大臣になり、デシャルムは陸軍大将になったりします。しかしその途中でも、いろいろと日本のことをあの人たちは思い出していたのではないかなと思うのですが……。



明治初期フランス式日本陸軍（横浜市立図書館提供）

ポラック　例えば、ブリュネは当時は許されなかったけれども、その後でオーストリアで陸軍武官になってフランスの大使館では非常に偉いポストに入るわけです。後にフランス陸軍の将軍になり、そして一八九八年にシャノワーヌが防衛大臣になったとき、ブリュネはシャノワーヌの下で参謀部長として働いた。その彼の書いたものを見ると、ドイツ人と日本人との間の同じ気持、共通点をしきりに書いています。非常におもしろいと思います。

——　なるほど。すると、かなりこの訓練を通じて日本人というものを彼らは知ったのでしょうね。



慶応3年フランス軍事顧問団が上陸した横浜港は今……

渡部　その後、日本の軍隊の方針自体がドイツ式に変わったのですが、変わってからのドイツの先生であるメッケルと、その後の日本人との交流は親しかったようですが、どうもフランス人の先生との交流はあまり耳にしませんですね。ただ、彼らが残した一つの戦術といえば、砲台、鎮台ですね。要塞というのは非常にフランス的で、あれは五稜郭でも、それからその後もずっと残ったと思うんです。しかしそれもしだいに天下の大勢がドイツ式になるとすっかり消えてしまって、完全な師団編成になって、要塞はなくなるということになります。大きな歴史の流れを見ると、フランス人から訓練を受けた人たちのその後の運命——大部分は生きていたわけですが、それがだれだったかあまりわからないというのは、ちょっと哀感をそそりますね。

——　しかし、十五人の人々が日本へ来て教える。しかし、その結果は必ずしもあの人たちが考えていた通りにならなかったですね。

ポラック　そうでございます。

——　そういうことを考えると、今どんなお気持になられますか。

ポラック　やはり私もブリュネの考え方に賛成します。フランス政府が幕府側を応援するのであれば、最後まで力いっぱい応援しなければいけないのではないかと思います。それをやらなかった。非常に残念であったと思います。

日本を愛したフランス人

十五人のフランス人たちは、あるいは傷つき、あるいは職を失い、失意のうちに日本を去って行った。慶応三年、横浜に着いたときに比べ、あまりにも淋しい結末であった。

その中で、ただ一人日本に残ったフランス人がいた。歩兵中尉シ

三兵伝習後の太田陣屋

三兵伝習が横浜から江戸へ移された後の太田陣屋はどうなったのであろうか。

慶応四年一月に戊辰戦争が始まり、幕藩体制が崩壊していくなかで、旧幕府関係の資料の多くは失われてしまった。横浜は官軍の管理下におかれ、太田陣屋は肥前藩、紀州藩などの陣営となっていた。戊辰戦争の戦火がひろがるとともに官軍側にも多数の負傷者が出てきた。大総督府は治療のため、イギリス公使館付き医師ウィリアム・ウィリスを雇い、慶応四年閏四月に横浜の修文館を横浜病院として開設した。しかし患者は増加する一方で修文館の近くにあった元神奈川奉行の勘定役所の長屋、大聖院や林光寺などの寺院、広島屋や三浦屋といった旅館などに分散収容したが、それでも不足し、裁判所にかけあって太田陣屋の長屋を病院とすることとし、五月十九日までに過半数の患者をここに収容したという。太田陣屋病院が東京下谷の東京病院へ移ったのは明治元年十月のことであった。

明治になってから横浜港の警備にあたったのは神奈川府兵である。明治元年九月の記録に「府兵五百人程英式伝習ニテ取立置候」とあるが、この伝習は太田陣屋で行われたものであろう。下岡蓮杖撮影の太田陣屋の英式調練の写真は神奈川奉行支配用出役の調練より、神奈川府兵の調練と思われる。

明治元年十一月には県兵が編制され、金沢県から出張してきた県兵隊が太田陣屋に駐屯していたが、明治四年八月に県兵隊は廃止となり、太田陣屋は陸海軍屯所になったという。

明治二十五年には箕田長三郎氏に払い下げとなり三百間に桜を植え、桜の名所として有名であったが、関東大震災で滅失してしまった。

昭和になって太田陣屋のなごりといえるのは中区宮川町三丁目にあった横浜憲兵隊本部であろうが、戦後はマッカーサー劇場となり洋画が写されたが、いまではとり壊されて場外馬券場に変身、往事を物語るものはなにもなくなってしまった。

（半澤正時）

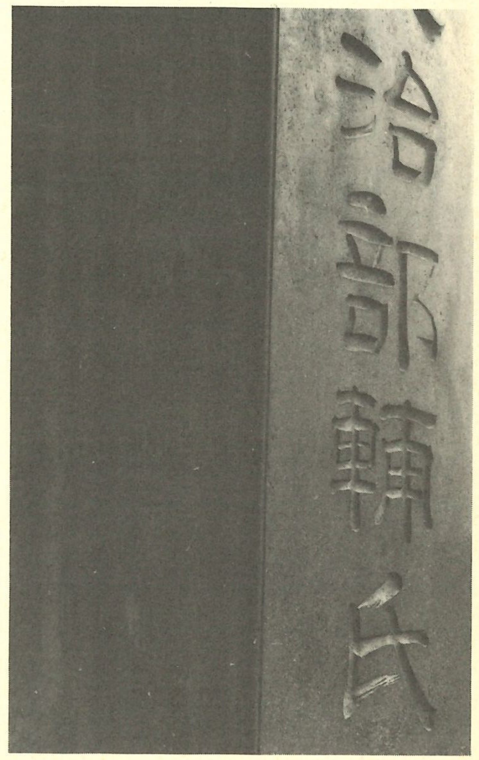
ャルル・デュ・ブスケである。青山墓地にある彼の墓には「治部（ジブ）輔（スケ）」と生前みずから漢字で記した名まえが刻まれている。

彼は徴兵制度を進言し、日本陸軍の基礎作りに力を尽くした。日本を愛した彼は、日本人花子を妻にめとり、四人の子供が生まれた。彼の孫は今も健在である。

デュ・ブスケが亡くなった翌年、明治十六年、日本陸軍は軍制をそれまでのフランス式から新しくドイツ式に切り替えることを決めた。

しかし、明治三十三年の「偕行社記事」には、次のように書かれている。

「日本軍は編成と訓練に関しては今日ドイツ軍の完全なる模型なり。しかしこの日本陸軍について当然名誉を受くべきは、ドイツよりもむしろフランスであることを忘るべからず。」



青山墓地にある治部輔の墓

ナポレオン三世と徳川慶喜

西堀 昭

日本がフランスと出会い、本格的に交流を始めたのは、シャルル・ルイ・ナポレオン・ボナパルト（一八〇八～一八七三）、つまりナポレオン三世の時代である。

特に十四代将軍家茂、十五代将軍慶喜の時代が日仏交流史上重要である。徳川幕府のパリ万国博覧会（一八六七）参加は、日本の初めてのヨーロッパ進出という画期的な意味を持つもので、とりわけ日本文化のフランスへの紹介は高く評価すべきである。初代フランス公使デュシェーヌ・ド・ベルクール（一八一七～一八八一）の時代には活発でなかった対日政策は、元治元年（一八六四）三月に赴任した二代目公使レオン・ロッシュ（一八〇九～一九〇一）によって早くも大きく開化した。ナポレオン三世治下の第二帝政時代は、フランスの世界戦略の一つである植民地主義がアフリカ、アジアにまで及んだ時代で、日本との修好通商条約（一八五八）もその延長線上にあると言えよう。

幕末期になると軍事力を誇るフランスは、日本とは目と鼻の先のインドシナ・中国に進出を始め、フランスの日本進出は時間の問題であった。

弘化元年（一八四四）に、フランスは那覇に軍艦を派遣し、さかんに日本に開国を求めて来た。それはロシアの開国要求（一八〇八）ほど強硬ではなかったが、力の外交であることに少しも変わりはなかった。薩長連合に対抗する幕府の末期的症状が、近代的軍備を持つフランスと結びついたのも自然の成りゆきであった。たとえ、そこに大きな危険がひそんでいるにしても。

しかし、フランスの日本進出は、アメリカ、イギリスなどとのからみや、幕府瓦解といった特殊な事情から、最も好ましい形で行われた。日本は、第二のアフリカ、インドシナとはならなかったのである。長い目で見て、そのことは日本とフランスにとって大いにプラスとなったといえる。

安政五年（一八五八）十月九日に日仏修好通商条約が結ばれるや、日本とフランスの友好関係は急速に発展した。日本の近代化をフランスの援助によって達成しようとする幕府親仏派の栗本鋤雲、小栗上野介、浅野美作守の演じた役割はことのほか大きい。

フランスの全面的なバックアップを得た陸軍三兵伝習、フランス語学所、横須賀製鉄所という幕府再建の決め手となる三大事業は、すべて三人が中心となって計画が練られたのである。

ゆえに、日仏交流史上、日本がこの時期ほどフランスに依存した時代もなかったといえる。フランス政府や幕府の真の意図がどこにあったにしても、新しい学問を吸収しようとする日本の青年と、それを教えるフランス人の意気ごみはおどろくほどであった。彼らのその意欲は、やがて来る明治時代へそっくり受け継がれて行ったのである。



フランス山下にあるクリーニング業の発祥地碑（横浜市）

国と国との交流は、人と人との交流でもある。法制のギュスターヴ・エミール・ボアソナード・ド・フォンタラビ（一八二五～一九一〇）、ジョルジュ・イレール・ブスケ（一八四六～一九三七）、ジョルジュ・ヴィクトル・アペール（一八五〇～一九三四）、ミシェル・ルヴォン（一八六七～一九四七）、技術のフランソア・レオンス・ヴェルニ（一八三七～一九〇八）、ルイ・エミール・ベルタン（一八四〇～一九二四）、ルイ・フェリックス・フロラン（一八三〇～一九〇〇）、軍事のシャルル・スュルピス・ジュール・シャノワーヌ（一八三五～一九一五）、教育のエマニュエル・ウジェーヌ・メルメ・カション（一八二八～?）、ルイ・エミール・エック（一八六六～一九四三）などいずれも得難い指導者であった。エックが


ナポレオン三世より贈られた軍服姿の徳川慶喜

「私は、半分フランス人で、半分日本人である」と言ったように、御雇いフランス人の多くは、心から日本を愛したのである。アルベール・シャルル・デュ・ブスケ（一八三七～一八八二）、プロスペル・フォルテュネ・フーク（一八四三～一九〇六）のように日本に骨を埋めたフランス人も少なくない。

幕府が力の衰弱に苦悩し、強い幕府の再建のために最も期待したフランス人による三兵伝習は、慶応二年（一八六六）に幕府がロッシュ公使に依頼したが、その裏にはオランダ、イギリス両国との交渉が不調に終わる経緯があった。アメリカ、イギリスにくらべて日本進出にやや遅れをとったこともあり、フランス政府は幕府の要請を即快諾した。さらに幕府は、海軍伝習の方もフランスへ協力を求めたが、ロッシュ公使から色よい返事をもらえなかった。それは、恐らく当時のフランスがイギリスに対して親交政策を積極的に推し進めていたからであろう。

早速、フランス政府は、団長に中国など東洋の事情に明るいシャノワーヌ参謀大尉を任命した。彼は、フランスのディジョン市の生まれで、フランスを二分するほどの大さわぎとなった明治二十七年（一八九四）のドレフュース事件発生の時には陸軍大臣の要職にあった。

ロッシュ公使が外務大臣エドアール・ドルーアン・ド・リュイス（一八〇五～一八八一）に要請した軍事顧問団の編成は三十五名であったが、慶応三年（一八六七）一月十三日に横浜に到着した軍事教官は、シャノワーヌ以下十五名であった。

フランス軍事顧問団は、到着後すぐ予定されていた太田陣屋（横浜市中区日の出町一丁目付近）で教練を開始した。もちろん必要な銃や大砲は、ほとんどフランスから取り寄せたものを使用した。伝習生のなかには沼間守一、荒井郁之助、大鳥圭介など後に名を残した者も多く、武士としての力も充分あったので教練は順調に進行した。間もなく横浜が狭いというシャノワーヌの意見により教練場を江戸に移すことになった。

不幸にして徳川絶対主義の崩壊というべき幕府瓦解が急速に迫って来ていた。この政変を力で乗り切ろうとするフランス人教官、伝習生の徹底抗戦論もあったが、勝安房とシャノワーヌの話し合いの結果、フランス軍事顧問団による軍事教練は中止されることに決まった。そして明治元年（一八六八）には、シャノワーヌをはじめとする教官の殆んどが帰国した。しかし、デュ・ブスケなど数名は、そのまま日本にとどまり、軍事・教育の分野で明治政府に協力を惜しまなかった。もし、フランス軍事顧問団が、あくまで抵抗し、戊辰戦争を戦っていたら、その後の日仏関係はかなり違って来たであろう。

明治政府も幕府と同様にフランスとの友好関係維持を望み、またフランスもそれを望んだ。その結果、第二次軍事顧問団派遣や軍事留学といった形で、日本は陸海軍ともにフランスから続いて援助を受けた。短期間ではあったが、第一次軍事顧問団によって行われた軍事教練、軍

制改革、陸軍刑法制定等は、明治陸軍形成にとくにはっきりとした足跡を残した。そのなかでも慶応三年の歩兵罰則がフランスの陸軍刑法を初めて日本に持ち込んだものとして学界の注目を集めている。

シャノワーヌは、明治三十一年（一八九八）に退役し、シャンパーニュ州のボードマンに余生を求めたが、殆んど失明に近く大正四年（一九一五）一月二十九日に八十歳の生命を終えた。今、シャノワーヌは、パリのペール・ラ・シェーズ墓地に眠っている。また、かつてシャノワーヌ将軍と一緒に過ごしたことのある孫娘の、ソランジュ・シャノワーヌ夫人（一九〇六～　）がオーブ県のプランシー・ラベイに健在である。

横浜のフランス語学所は、慶応元年（一八六五）に弁天社の隣接地（中区本町六丁目付近）に創設された。フランスとの関係は、まず言語の問題を解決することが必要であったので語学所の開設は当然かつ急務であった。

講師は、最初は日本語の話せるパリ外国宣教会のメルメ・カション神父一人であった。彼は、ジュラ県のラ・ペス村の農家の生まれで、来日してからロッシュ公使の懐刀といわれるまでの実力者となった。プロテスタンの宣教師であるジェームス・カーチス・ヘボン（一八一五～一九一一）などからその行動は警戒視されていた。日本を舞台とする両派の盛んな動きも興味深い歴史の一コマである。

生徒の増加に対応する為にフェルナン・プーセ、シャルル・ビュラン、レオン・ブラン、ルイ・サミなどの軍人や公使館員が教師陣に加わった。当時はまだ専門の教師が来日していなかったのでこの陣容で間に合わすほかはなかった。しかし、ビュランの文法の講義を見ると、彼らがきちんと授業していたことがわかる。語学所には厳格な学舎規則があったほか、カリキュラムは、仏語、世界史、地理、数学といったもので今日のそれとあまり変わっていない。授業は、フランス人による直接教授法を採用したので、数か月もすると結構会話のできる伝習生も出て来た。したがってフランス語学所は、江戸の開成所よりもプラティックな教育では数段まさっていた。

伝習生の中で、徳川慶喜の名代としてパリへ行った徳川昭武遣欧使節団の通訳をつとめ、ナポレオン三世の前で立派に職責を果たした保科俊太郎（正敬）、ニューカレドニアへ移民の総監督として出かけた小野彌一、ヴェネチアの高等商業学校で日本語を教えた緒方惟直（十郎）など、新しい幕臣の生き方を示したものとして評価したい。

フランス語学所は、メルメ・カションの帰国、幕府瓦解という二重のショックで数年間しか存在しなかったが、新しい教育の芽は明治時代に各方面で着実に開花、結実して行った。江戸の開成所と共に近代教育機関の原点に位置するフランス語学所の評価は今後ますます見直されるであろう。

日本の近代化、特に重工業の面で寄与した横須賀製鉄所は、慶応二年（一八六六）に所長ヴェルニの来日を待って本格的に動き出した。幕末という極めて不安定要素の多い時期だけに、幕府の製鉄所にかける期待も大きく、莫大な資本投資がなされた。幕府瓦解後もそのまま明治政府がそれを運営し、わが国でも有数な造船所となり、台頭する軍国主義とがっちり結びついた。

横須賀製鉄所からフランス人技師が引きあげるのは明治十年（一八七七）以降である。それは、財政問題もあるが、日本人技師の成長を物語るものでもあった。しかし、日本政府は、若い技術者をフランスに留学させベルタンなどから造船技術を学ばせた。明治十九年（一八八六）には、日本政府は、ベルタンを海軍省の技術顧問として破格の報酬で招聘し、艦船建造学はもとより海岸防御なども学び着々と日本海軍の強化に努めた。またフロランが完成した観音崎灯台（一八六九）などの一連の灯台建設も付帯事業の一つとして忘れてはならない。理科系の高等教育機関としての横須賀製鉄所の機能についても同じことが言える。

この他、ほぼ同時代にフランスの協力を得て行われた事業に富岡製糸場と生野鉱山がある。そこにも多くのお雇いフランス人が日本の産業の発展のために働いている。このように日本の近代化にフランス人の果たした役割はわれわれが今日考える以上に大きいものがある。それについては別の機会にゆずりたい。

（千葉商科大学教授）

十人の男たちの軌跡

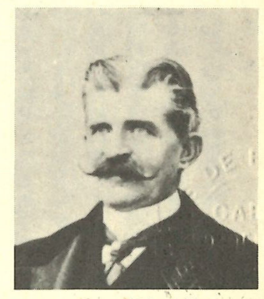
鈴木 明

「箱館の榎本脱走軍には、何人かのフランス軍人が加わっている」という情報が東京に伝えられたのは、明治元年（慶応四年）十月半ば頃のことである。「江戸」が東京と名前が変わってからまだ三か月しか経っていないし、丁度同じ頃、「明治天皇」となったばかりの若い皇帝——当時、一般的にそう呼ばれた——は、生まれて初めて「東京城」に着いたところであった。

榎本武揚は江戸を去る時と、箱館に着いてから二回、若き皇帝に宛てて、「自分たちは決して賊徒ではない」という主旨の手紙を書いたが、これは直接天皇の眼にふれることはなかった。新政府軍（官軍）幹部は、はじめからこの手紙を天皇に取り次ぐ気持はなく、一挙に榎本軍を討伐するつもりでいた。特に、「賊徒」の中に、フランス軍人が加わっているというのは、絶対に許せないことであった。

翌年五月、榎本軍が全面降伏したとき、箱館には一人のフランス人もいなかった。それだけに、捕らえられた榎本など脱走軍幹部に対して、新政府軍は鋭い追求を行った。彼等が事態の真相を知ろうとしたことは当然だが、もう一つ、「脱走フランス人」とフランス政府が結びついていたことを立証し、それによってフランス側から賠償金を取り立てようという目的もあったのである。

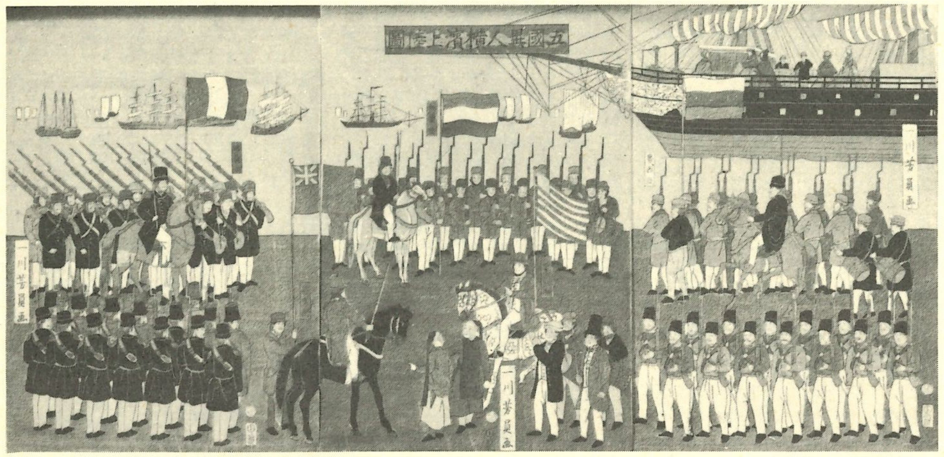
これらの資料は『降伏人 榎本釜次郎糺問書、箱館脱走党与仏人一件』などとして残されているが、実はこれらフランス軍人とフランス政府との関係は、大変あいまいにしか語られていない。それどころか、何という人物が、何人いたのかということも、正確にはつい最近までわかっていなかった。榎本は、隊長のブリュネのほかは、フランス人たちの経歴は無論のこと彼等の名前の正確な綴りも、何故フランス人が十人にもなってしまったか、ということも、本当に知らなかったらしい。いま考えてみればそれも無理からぬことで、榎本はわずか半年の間に戦争をやり、平和交渉をやり、箱館の行政をやり、数千人の部下を指揮していたのである。正確な書類などを残す余裕は、到底あり得なかった。



フランスに帰り出世したブリュネ（筆者提供）

僕が、これら「フランス脱走軍人」に興味をもったのは、函館図書館に残されている一枚の写真を見た時からであった。中心に腕を組んで坐っているブリュネは、自信ありげで聡明な顔つきである。一緒に並んでいる日本人も、フランス人も、よくよく見るとそれぞれに個性があり、ある時代の「一瞬」を反映していて、見ているうちに、彼等が話しかけてくるような幻想さえ抱いた。このためにフランス軍事資料館を訪れ、彼等がどのようないきさつで箱館にまで出かけて行ったのかを調べて歩いた。

一般に、「箱館にいたフランス人は十人」といわれているが、実は最初から榎本脱走軍に加わったのは、①「ブリュネ Jules Brunet」と②「カズヌーヴ Cazeneuve」の二人であった。ブリュネはベルフォールに生まれ、エコール・ポリテクニック、士官学校を卒業した超エリートである。ベルフォールは普仏戦争のときに、この町ばかりはプロシア軍の猛攻にも耐え抜いて、遂に陥落しなかったというフランス人なら誰もが「愛国」という文字とともに思い出す誇り高き土地柄であり、特に学歴の重んぜられるフランスの社会だから、このブリュネはフランス中でよく知られていたヒーローでもあった。



横浜に上陸した外国軍隊（神奈川県立博物館蔵）

このブリュネが、箱館行きの自分のアシスタントとして選んだのがカズヌーヴなのであった。

カズヌーヴはナポレオン三世から徳川慶喜に贈られたアラブ馬——日本最初のアラブ種馬——を持ってきた王室付馬丁で、いわゆる「お雇いフランス軍人」ではない。しかし、一八五五年にはクリミア戦争に参加し、四年後のマジェンタの戦いでは勇敢に戦って、負傷までした。「マジェンタ」といっても日本では余り知られていないが、一八五九年六月にイタリア・フランス同盟軍とオーストリア軍との間に行われた有名な戦闘で、イタリアはこれに勝って、初めて「イタリア統一」という歴史的な足がかりをつかむのである。いわばカズヌーヴは、外国の独立戦争に「助っ人」として出かけていった実績をもっていたわけである。無論ブリュネは、カブヌーヴの経験と同時に、その忠誠心をも買っていたに違いない。

この二人が仙台まで行ったところで、三人の男が横浜から船で追いかけてきた。③「マルラン Jean Marlin」④「ブッフィエ François Bouffier」⑤「フォルタン Arthur Fortant」の三人である。

この三人は正規の下士官で、日本にいるときブリュネの指揮下にあった。この三人の参加をあらかじめブリュネが強く求めたのか、或いは三人が自主的にやってきたのか、その辺はあいまいである。多分、その両方の理由があったと思われる。この辺が明らかでないのは、後に彼等が裁判となるとき、彼等に不利な記録が残らないように配慮されたためであろう。

彼等はフランス戦争省に脱隊届を出し、約二週間遅れて仙台で二人と合流した。ブリュネは箱館に着くと、榎本軍を四つの「レジマン」（連隊）に分け、それぞれの隊に四人を配属した。「レジマン」は僕がフランス風に表記したのではない。箱館の軍隊は、実際に「レジマン」という名前で呼ばれていたのである。

四人の所属は一度交替はしたが、結局ブッフィエは江差へ、カズヌーヴは松前へと、それぞれ最前線に配置されることになった。箱館への最も重要な要塞である矢不来の築城工事は、ブリュネ自身が出かけて行って設計図を作り、指揮をとった。五人のフランス軍人たちは、殆んど不眠不休で教練、築城、武器の補修などを行っていた。

ところが、ここに思わぬ「とび入り」がやってきたのである。⑥「ニコール Henri de Nicol」と⑦「コラシュ Eugène Collache」の二人である。この二人については、まだわからない部分は多いが、ニコールは一八六三年十月に「海軍士官学校」に入学した記録があり、それから「ミネルヴ号」という軍艦に二年間乗っていたというから、一応はエリート軍人だったのであろう。

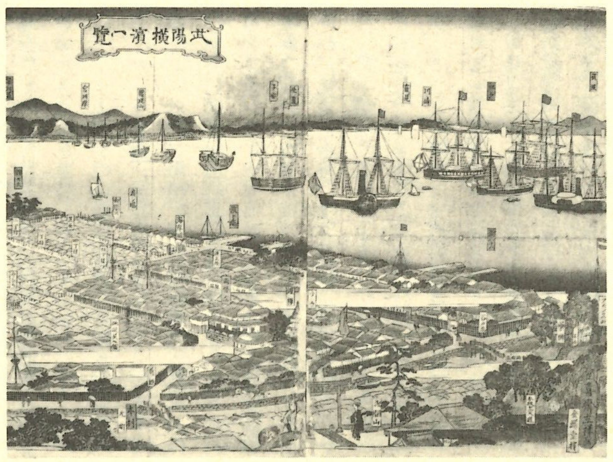
そのニコールが、何故勝手に軍隊をとび出してきて、ブリュネのところにやって来たのか、この辺ははっきりしていない。とにかく、ニコールは自分の部下であるコラシュを連れて、強

引に「おれを使ってくれ」とブリュネの許にやってきたのである。
　ブリュネは、自分は勝手に辞表を出してきたとはいえ、正規軍の陸軍大尉である。それが、海軍から勝手に脱出してきた男を採用するというわけにいかない。二人は入隊を拒絶され、仕方なく、箱館の日本人商人の家で働いていた。
　そこに、更に三人の男がやってきた。⑧「プラディエ　Pradier」⑨「クラトー　Clateau」⑩「トリボー　Tribout(Fribout?)」の三人である。このうち、プラディエの所在が一番はっきりしていて、この男は横浜のドイツ系商社「ジグリスト」というところに勤めていたが、エゾ地でブリュネが戦っているという話をきいて、横浜から船で箱館まで駈けつけたのである。彼は「スワーヴ兵の経験があった」と書かれているから、モロッコに派兵されていたもと軍人だったのであろう。
　同じ頃やってきたクラトーは、ホンコンからやってきた水夫でアルフェ号の船長であるベサの推せん状をもっていた。クラトーはもと海軍の下士官ではあったが、この時は引退していて民間人である。ニコールやコラシュは現役の軍人だから後に問題になるとうるさいが、プラディエやクラトーはいわば「市民」だから、契約の自由がある。この二人は、多分ニコールなどよりも簡単に、入隊できたものと思われる。
　トリボーはどこの何者か、いまのところ手がかりがない。もと陸軍下士官で、当時はやはり民間人であったらしい。彼等がやってくると、ブリュネもニコールやコラシュを放っておくことが出来なくなってきた。そして、三月の初め頃に「外人部隊五人」と「外人部隊の外人部隊」ともいうべき五人が加わって、遂に「十人」ということになってしまったのである。しかし、実際には「コラシュ」などは一か月ぐらいしか隊内にはいなかったので、同時に戦った同志でありながら、彼等のことを正確に記録に残した日本人はいなかったということになる。
　このうち、ニコール、コラシュ、クラトーの三人は海軍出身であったため、それぞれ「回天」「高雄」「蟠竜」に乗り込むことになった。旧暦明治二年三月二十五日に行われたドラマティックな海戦「宮古港の戦い」の作戦計画を作ったのは、海兵出身のニコールであった。この戦いでニコールは足に負傷をうけ、コラシュは新政府軍の捕虜になった。この様子は、後にさまざまな日本人の「回顧談」によって確認されている。
　陸軍で負傷を負ったのは、カズヌーヴとトリボーである。カズヌーヴは松前攻防戦のとき、折戸というところでかなりの重傷を負い、箱館戦のあと、ブリュネなどがサイゴンに強制送還されたとき、一人横浜の病院で治療を受けていたことが記録されている。トリボーもかなり重体であったことが、彼等を送ったコエトロゴン号からのブリュネの手紙でわかっているが、どこで負傷したのかは明らかではない。
　十人の「フランス外人部隊」は、五稜郭陥落寸前に、フランス艦「コエトロゴン」で箱館から脱出したが、この辺の細かい事情はわかっていない。しかし、前後の事情から考えて、榎本が国際紛争を考慮し、脱出させたと見るのが適当なようである。この中で、少なくともブリュネ、マルラン、ブッフィエ、フォルタン、ニコール、コラシュの六人は、直ちに日本国外に強制退去させられたことが記録に残っている。
　フランスに帰ってから、ブリュネは厳しい取り調べを受け、その「前線離脱」を追求された。他の五人についても同様であった。しかし、彼等の行動にはフランス市民の拍手もあったとみえ、約五か月後に「寛大な処置」がとられることになった。いま、フランス防衛省に残されている「一八六九年十月三日」付の資料によると、ニコールとコラシュは「脱走」の罪はあるが、そのまま平民になり、フォルタン、マルラン、ブッフィエは、それぞれ原隊復帰が許可されている。そして、ブリュネは「戒告処分」はうけたが、間もなくはじまった「普仏戦争」に参戦し「第三共和政」になってからトントン調子に出世し、ウィーン、ローマなどの各武官を歴任したあと、遂に「ジェネラル」にまで昇進するのである。
　彼等十人は日本でかなりひどい目に会ったはずだが、何故か日本を悪く思った者は一人もいなかった。それどころか、その中の七人は日本にそのままとどまったか再来日かして日本に親しみ、ブリュネは明治半ばに日本の勲章までもらったのである。これもまた興味あることではあるが、また別の物語である。
（作家）

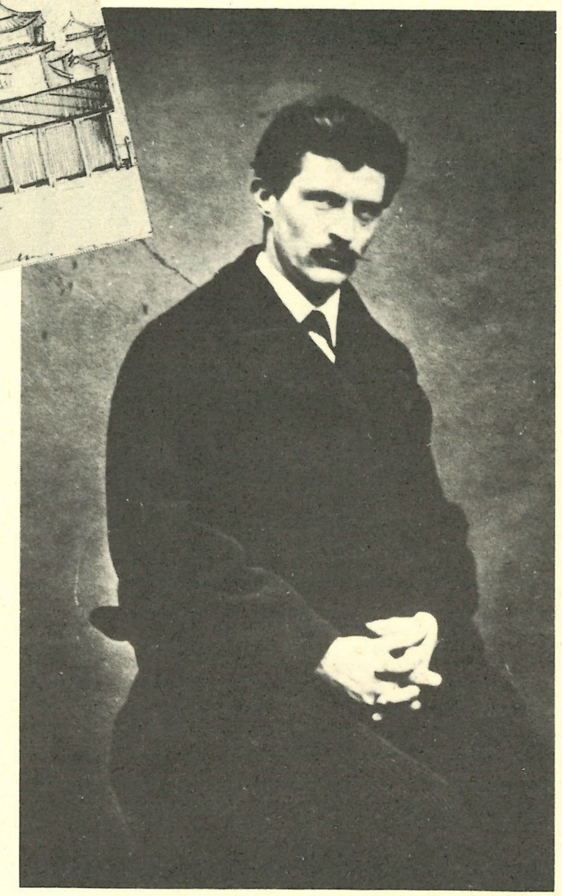
ブリュネとシャノワーヌの夢

クリスチャン・ポラック

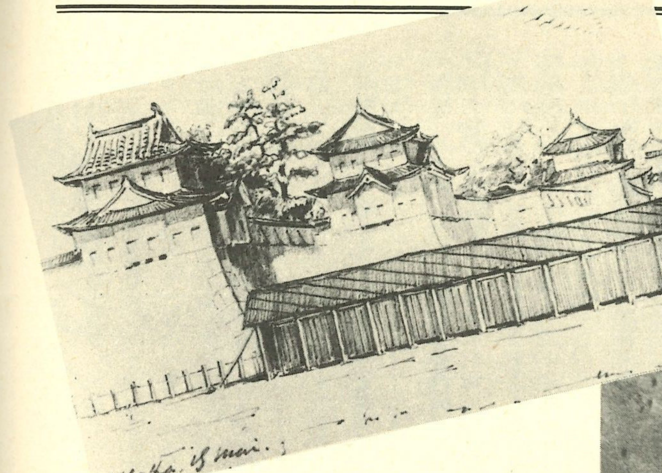
　函館戦争に参戦したブリュネの意図は何であったのか。
　昨秋、パリのフランス陸軍省資料館で「日本における軍事顧問団」、「ブリュネ」、「シャノワーヌ」の各資料を調査する機会をえた。これらの資料ファイルに基づいて、ブリュネの意図が何であったのか探ってみたい。
　戊辰戦争当時、ブリュネ砲兵大尉が、榎本武揚に従い、遠く函館の地で参戦しなければならなかったかについては諸説があり、これまで明確な答えは出されていなかった。
　今度、フランス陸軍省資料館の個人資料の中で、日記や手紙などを調べていくうちに、ブリュネ参戦の理由が明らかになってきた。
　これには少なくとも二つの大きな要素が働いていたと思う。すなわち、軍事教官のひとりとして訓練生の行動に大きな責任感を感じていたブリュネは、自分の教え子たちの懇願に答えざるをえなかったということ。そしてもうひとつは、ひとりの軍人としての職務を果たしていたという気骨にあふれた若き青年将校の意志が、上官のシャノワーヌの意気と、もうひとつ蝦夷の地にフランス勢力を伸ばそうという秘かな願望とに合致したということである。
　ブリュネは、シャノワーヌを団長とするフランス軍事顧問団の一員として、一八六六年十一月十九日にマルセイユ港を出帆し、翌年一月に日本に着いている。マルセイユ出発時には、三十歳に満たない若き下士官であったが、すでにレジオン・ドヌール勲章を受けていた。これはメキシコ戦役における勇気と献身を賞して与えられたものであったが、この若さでレジオン・ドヌール勲章を持つということは異例なことである。日本に着いてから大尉に昇格したブリュネは非常に正直な人柄で、軍人として国家に尽くすことが自分の義務であると強く感じていたようである。軍事教官としてまたフランスを代表する者として、ナポレオン三世の外交政策を良い意味で日本に紹介した人でもあった。
　幕府の若き兵士たちに、連日砲術を教練しているうちに、彼は日本の兵士の、のみこみの良さ、礼義正しさ、優れた才能などに強く魅かれていく。そこで教練にも力が入り、日本の訓練兵たちを立派な軍人に仕立てようと力を注いだ。こういったブリュネの態度は当然訓練兵たちにも通じ、彼の人気は非常に高まったのであった。
　戊辰戦争開始の当時、列強諸国の間では、日本に対して「中立の立場」を取るという約束がかわされていた。フランスとしては、特にイギリスの反目を懸念して、この取り決めを守る必要があった。そのため、情勢が思わしくなくなった段階で、横浜に顧問団を移動させ、フランスからの帰国命令を待たせたわけである。当時、フランス戦争省（現在の防衛省）が彼らに出した命令書は、遠征先の外国の内乱に参加す



賑わいをみせる横浜風景（都立中央図書館蔵）



ブリュネ(高橋邦太郎氏蔵)



ブリュネのスケッチ

ることは認めていなかったが、フランスの勢力を大きく浸透させるように命じていた。ここで少しふれておきたいことは、フランスが官軍側を応援したという説についてである。実は、フランスとしては、幕軍、官軍のどちら側に勝敗があっても良かったのである。問題は、いかにフランスの勢力を浸透させるかというところにあり、顧問団の使命もまた、これに集中していたのであった。これはニール戦争相からシャノワーヌに宛てた一八六七年十一月十九日付の書簡にも記されている。

従って、ブリュネと仲間の士官から参戦したことに対し、フランスの戦争省も外務省も全く、〃無関係(ノータッチ)〃の立場を取ったわけであり、参戦はまったくブリュネ個人の決定(イニシアチブ)によるものであった(この時すでにブリュネはフランスの戦争省に辞任状を出していた)。

当時、日本における仏軍事顧問団と駐日仏公使館との関係は良くなかった。ブリュネが幕軍に参加したことと、当時の駐日仏公使、レオン・ロッシュが幕府の再建に傾注したこととは関係があるように考えられているが、実はそうではない。実際、ブリュネが行動を起こした時はロッシュ公使は滞日の任期を終えており、二人の間には直接の接触はなかったのである。

ロッシュの後任にウットレー公使が着任した。横浜に碇泊していたブリュネらの行動に懸念を感じていた彼が再三、幕軍を援助するのを止めるようにと忠告したにもかかわらず、ついにブリュネとその仲間の士官は幕軍を、〃助ける〃という行動に出たのである。この決定には、ブリュネが教練していた幕軍の訓練兵からの幾度にも及ぶ強い要請があったからであった。ブリュネが十月一日、榎本の率いる艦隊で函館へ向かった後、ウットレーはムスティエ仏外相に宛てた書簡(一八六八年十二月十六日付)にも強調しているように、ブリュネの取った行動は、あくまでも〃個人的〃な行動であり、フランス政府は、何ら幕軍を援助するものではない旨を明言している。

ブリュネは、自分が二年間教練にあたった訓練兵たちの懇願に答えなければならなかったのである。碇泊中のフランス艦隊に忍んでやってくる自分の教え子たちの熱心な要請に対し、これを救うのが教官としての義務であると考えたのである。そして日本の訓練兵たちと運命を分かちあおうとする強い意志で戦争に臨む決意を固めた。これを証する例として、ブリュネが一八六九年三月、シャノワーヌ団長に宛てた手紙の中で、ブリュネは幕軍の兵士たちに対して、「彼ら」と呼ばずに「我々」という人称を用いているのが注目される。これはまさにブリュネの運命共同体の強い気持を表わしている。

次にブリュネの参戦理由の第二点である。ブリュネは函館につくと、覇気あふれるフランス軍人として榎本を勢力的に支援した。ブリュネは榎本軍に、フランスの勢力を浸透させねばならないと考え、またこうすることで自分の軍人としての使命を果たせるものと考えていたようである。榎本軍の勝利を信じて疑わず、官軍は自分たちの前で〃敗北する〃と考えていた。そして、勝利の後には和平が締結されようし、また和解が成立すれば新しい日本の建国にフランスの勢力が大きくものをいうに違いないと〃夢〃をみていた。仏外相をはじめ仏戦争相、駐日仏公使らすべての反対を押しきって決行したブリュネの参戦ではあったが、ここに唯一人、シャノワーヌ団長がブリュネの行動に賛意を示してくれたのだった。シャノワーヌはブリュネらに直接加わって参戦はしなかったものの、自らパリの戦争相宛てに「欧州と極東諸国との関係」について記した書簡を送り(一八六九年四月付)、ブリュネを擁護して、ブリュネの取った行動は、駐日仏公使のみならず、仏国自身にとっても大きな利益となろうと書いたのである。すなわち、フランスの極東における勢力というものは、それまでわずかでしかなく、従ってこの度のブリュネの取った行動は、フランスの勢力を極東に浸透させるまたとない大きなチャンスとなろうというものであった。加えて彼は、榎本軍と戦っているブリュネたちは日本の新しい大名になるだろうと述べる。そして、仏戦争省にブリュネに対し援軍をさし向けてくれるように要請したわけである。もちろん、これは聞き入れてもらえなかった。仏政府の返答は、「シャノワーヌの申し出は、仏政府が日本で取る態度、〃連帯〃と〃協力〃の精神に反するものである」として申し出を拒否し、「もしシャノワーヌの申し出を聴き入れれば、当然列強諸国、特に英国の反感を買うことになろうし、また一方ではこれはとりもなおさず、フランスがようやく達成できた天皇政府側との関係を断ち切ることを意味する」と記している。

ブリュネは九か月余り函館で参戦している間、フランス政府からの援軍を心待ちにしていたとも考えられるが、フランス政府が拒否した理由には、前述した英国に対する懸念の他に、駐日仏公使ウットレー自身がブリュネの行動にまったく反対していたこと、その上、フランスはメキシコ戦後で惨敗しており、またインドシナでも手ひどい打撃を受けていたことを数えることができる。

従って、当時フランスは、これ以上海外遠征に軍力を費す余裕がなかったのである。

しかし、フランスが日本を植民地化しようとする意図がなかったにしても、フランス政府に「勢力拡大」の意図がまったくなかったとは言い難い(それまでの歴史をみてもこの事実はうかがえよう)。ただ、明治維新の起こった当時、フランスの状況がブリュネの行動に答えるにはあまりにも不利であり、また力もなかったということなのである。もし好機に恵まれ、状況が許したなら、そしてもし駐日公使がブリュネに賛同していたなら、それからもし、榎本軍が勝利をおさめていたなら、それからまたもし、函館戦争が終結せずに「本州戦争」に発展していたなら……と様々な憶測をすることもできよう。しかし実はこれがまさに、歴史のなせる〃ワザ〃なのである。

緒戦当初は優勢を誇っていた榎本軍も、一八六九年五月ごろからは敗北の一途をたどり、ついに七月には開城せざるをえず、函館戦争は官軍の勝利で終わる。これに先立つ六月九日午後、ブリュネをはじめとするフランス人士官らは榎本軍を去り、当時、函館沖に碇泊していた仏艦コエトロゴン号に救援を求め、全員が収容されることになった。その後、この仏人士官らは横浜を経てサイゴンに送られ、そこからフランス本国へ送り戻されたわけである。

こうして、ブリュネとシャノワーヌの「拡大するフランス勢力」を意図した「夢」は、あえなくわずか一年余りで消え去ってしまったのであった。

(日仏会館研究員)

帰らなかったフランス人—デュ・ブスケとその子供たち

編集部

一枚の履歴書が残っている。デュ・ブスケのものなのだが、彼が書いたものではない。生まれて間もないころ父を失った息子が、おそらく母に問い、知人に尋ね聞いたことを書き記したものなのだろう。だからこれは履歴書というよりも、父を自らの記憶の中にとどめ、子孫に伝えようとした息子の覚え書といった方がいい。

履歴書

住所　東京市麻布区飯倉片町廿八番地寄留
出生地　ベルギー国リエーヂ府
　　　　仏国人亡アルベル・ジブスケ
　　　西暦一千八百三十七年生
　　日本暦天保八年生
慶応元年陸軍教師御雇トナル
明治六年三月十五日丁抹會社ト電信約定取結ノ談判委員ヲ命セラル（太政官）
同七年十月左院勤務
同八年七月九日左院被廃正院ノ傭トナル
同年同月東京府平民医師亡田中熊五郎養女花子ト結婚ス
同十年十二月八日叙勲四等賜旭日小綬章（賞勲局）
仏国公使書記官拝命セシニヨリ東京府ノ雇ヲ解カル同時ニ（明治十一年五月四日）在職中ノ勤労ニヨリ謝状并ニ物品ヲ受領ス
明治十三年九月仏国二等領事兼一等通訳官拝命
同十四年五月十八日東京市麻布区飯倉片町廿八番地ニ於テ死去行年四十五　　（原文のまま）

正確ではない。ところどころ間違いがあり、あとで思い出して付け加えた個所、あるいは書き直した部分もあるが、一行一行、父を、父の故郷フランスを思いながら記していった彼を思い浮かべることができる。

アルベル・シャルル・デュ・ブスケは慶応三年（一八六七）の正月に来日した十五人のフランス軍事顧問団のうちの一人である。

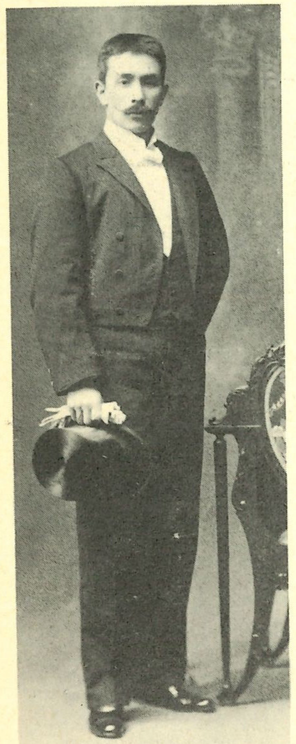
当時、長州港、薩摩藩は外国と実際に一戦を交えることによって、彼らとの力の差があまりにも大きいことを知り急速にイギリスに接近していたが、対する幕府は、文久二年（一八六二）以来、軍制をヨーロッパ式に改めようと苦心していた。そんな中で幕府に接近したいフランスと幕府の中の親仏派は手を結び、陸軍伝習の援助をフランスより受けることになったのである。これが慶応三年のフランス軍事顧問団の派遣、来日となった。

デュ・ブスケは一八三七年三月二十五日ベルギーのリエージュ生まれ。両親はフランス人で、のちフランスに帰ったデュ・ブスケは兵学校に入った。卒業後陸軍少尉となり、一八六〇年の北京占領に加わる。帰国後中尉となり、日本に派遣されるときには歩兵第三十一号抜隊竜司令官であった。

さて、この顧問団、慶応三年なかばから半年余り横浜、江戸で練兵を行う。しかし翌正月鳥羽・伏見の戦いが始まり、東北に広がる戦火の中で明治新政府は顧問団の廃止を決め、慶応四年七月顧問団は解散した。その後ブリュネら数名は榎本軍と合流し函館へと向かい、敗北ののち日本を離れるが、来日以来わずかの期間に日本語を身につけ、軍人としてだけではなく外交の才もあったデュ・ブスケは、通弁官としてフランス公使館にとどまり、その手腕を発揮することになる。

公使館時代は明治四年（一八七一）まで続き、この間、榎本軍に参加したニコールらが宮古沖で新政府軍と砲火を交えているころ、デュ・ブスケは横浜で凶漢に襲われている。幸いにも軽傷だったというが、戦争に加わらないからといって、平穏な生活からはほど遠い日々を過ごしていたに違いない。

明治四年から明治八年まで左院雇、左院廃止と共に正院にかわり、七月からは元老院に転じる。明治十三年の退職後は再びフランス公使館に復帰したが、明治十五年麻布鳥井坂の自宅で逝去した。四十五歳であった。彼の達者な日本語は『ジブスケ軍制建議』『万国陸軍取建之原則』『英吉利国陸軍之取調書』『仏国政法徴兵』『欧羅巴各国入兵規則比較』『西洋大国入兵概則』以下数多くの調査書、訳書をものにさせ、それは明治三年（一八七〇）九月に普仏戦争で敗れたにもかかわらず、その後フランス式が導入されていった日本の明治初期陸軍の軍制、兵制史上の大きな業績となって残っている。


デュ・ブスケの子息、林治信氏
（林邦宏氏提供）

デュ・ブスケが生きた時代は、明治政府がフランス人をはじめ外国人を不可欠とした時代であったが、その波は除々に引いていき、明治七年には百八人いたフランス人も、明治十二年には三十四人、デュ・ブスケの没した三年後の明治十八年にはわずかに十人になる。お雇い外国人の総数も明治五年二百十三人、明治七年五百三人、明治十二年には二百七十七人、そして明治十八年には百四十一人に減ってしまう。（参考『お雇い外国人』梅渓昇著）

デュ・ブスケは明治八年、黒田平之亟次女で平民医師田中熊五郎の養女となった花子と結婚した。明治八年といえば、明治初期に政府が雇った外国人が最も多くなった年に近いのだが、一般の日本人にとってはまだまだ珍しい存在の外国人と結婚した花子の心境はどうだったのだろうか。

「日本が外国へ西欧へと目を向け、各国から教師を求め、たくさんの外国人がやってきたといってもせいぜい五百人ほどのものですよね。居留しているところが限られているから外国人が珍しくない場所もあったでしょうけれど。明治の初めですからね。やはり普通の日本人は珍しく思っていたと思います。ましてや結婚ということになると……。ですからよく考えるんですよ、日本人と結婚しようと決心したデュ・ブスケ、それに曽祖母の心境を。今はもう外国といっても誰も驚かないでしょうが、当時のほとんどの人は知らない訳ですからね、外国、それもフランスなんていっても……。」

林邦宏氏は曽祖父、曽祖母の写真を見ながら語ってくれた。

彼らには四人の子供ができた。長女はカロリーヌと言う。彼女はまだ幼いころフランスに渡る。なぜ彼女を一人フランスに行かせたのかはわからないが、横須賀造船所を建設する総指揮者・ベルニーの部下として来日したフロラン兄弟が帰国するとき、デュ・ブスケは彼女を彼らに託したのだという。彼女はパリでスティベルトというが、彼女はバルトーリという男性と結婚、また娘が一人生まれた。クリスティーヌという。彼女は十六歳でパリ大学の入学の資格を取ったが、学問には向かないと陶芸家となる。しかしやがて、この陶芸に使ううわぐすりが彼女の命を奪ってしまう。これらのことは昭和四十三年NHKテレビで放映された『ドキュメンタリー明治百年』（日本放送出版協会刊）で明らかにされているが、当時このデュ・ブスケの孫にあたるマルグリットがパリの下町でひっそりと生活している写真も載っている。しかしこれ以後彼女の消息はわからない。

デュ・ブスケの二番目の子供は、長男ジョルジュ。彼はおよそ日本の中で生涯を終えようとする人間ではなかったらしい。旅好き、冒険、探険好き。それが高じてついにアメリカに渡ってしまう。その後の彼は世界中を歩き回ったというが、おそらくデュ・ブスケの血をいちばん



みちのくの奥羽は山深い

日本近代化の陣痛

「白河以北一山百文」と言われた東北。ここは、道の奥の政治が及ばぬ地域と考えられた、日本史の上での〝辺境〟であった。

しかし、鳥羽・伏見で端を発した戊辰戦争は、東北各地に、激烈な戦いを繰り広げる。実に、東北三十一藩が同盟を結んで、薩長の新政府に連合して対抗した戦いだった。

これはまた、東北が歴史の表舞台に立とうとした、初めての挑戦でもあった。

日本近代化の陣痛とも言える東北の戊辰戦争――それはどのようなものだったのか。

仙台藩に渡された錦旗（仙台市博物館蔵）

奥羽列藩同盟旗（宮坂考古館蔵）

林邦宏夫妻と子供たち



受け継いだ人物だったかも知れない。

三番目が次女のアリス。彼女もまたフランスに行く。絵の勉強のためだったが、のち日本に帰り修道院に入った。いまもなお彼女のいた修道院には彼女を知る人が残っているという。

そして四人目が履歴書を書いた子供である。父と同じくシャルル・デュ・ブスケという。そしてこの人の孫に当たる人が林邦宏氏であるが、

「結局祖父はフランスに行けなかったんです。曽祖母（花子）が頑強に反対したらしいんですね。四人の子供のうち、一人フランスに渡り、次がアメリカ、三人目もフランスへとみんな家から離れていってしまうでしょう。たった一人残った四人目は、どうしても自分のそばに置いておきたかったんだろうと思いますね。もちろん祖父だって父の国フランスに渡りたい気持は他の三人と変わらなかったでしょうし、だからこそ祖父はデュ・ブスケの履歴書とか、業績を記したりもしたんでしょうね」

と祖父を回想する。

一通の帰化願が出されたのは明治三十九年十一月のことである。宛名は内務大臣原敬。明治十四年に生まれたシャルル・デュ・ブスケが二十五歳の時である。これより彼は「林治信」と名を改めた。彼は「治」という文字の中に何を求めていたのだろうか。

仏人ジブスケ氏を父とした人
死去した一高講師林治信氏
父を失って独力仏語を研究した

大正七年十一月二十七日林治信氏は逝去した。右はその時の新聞記事の見出しである。

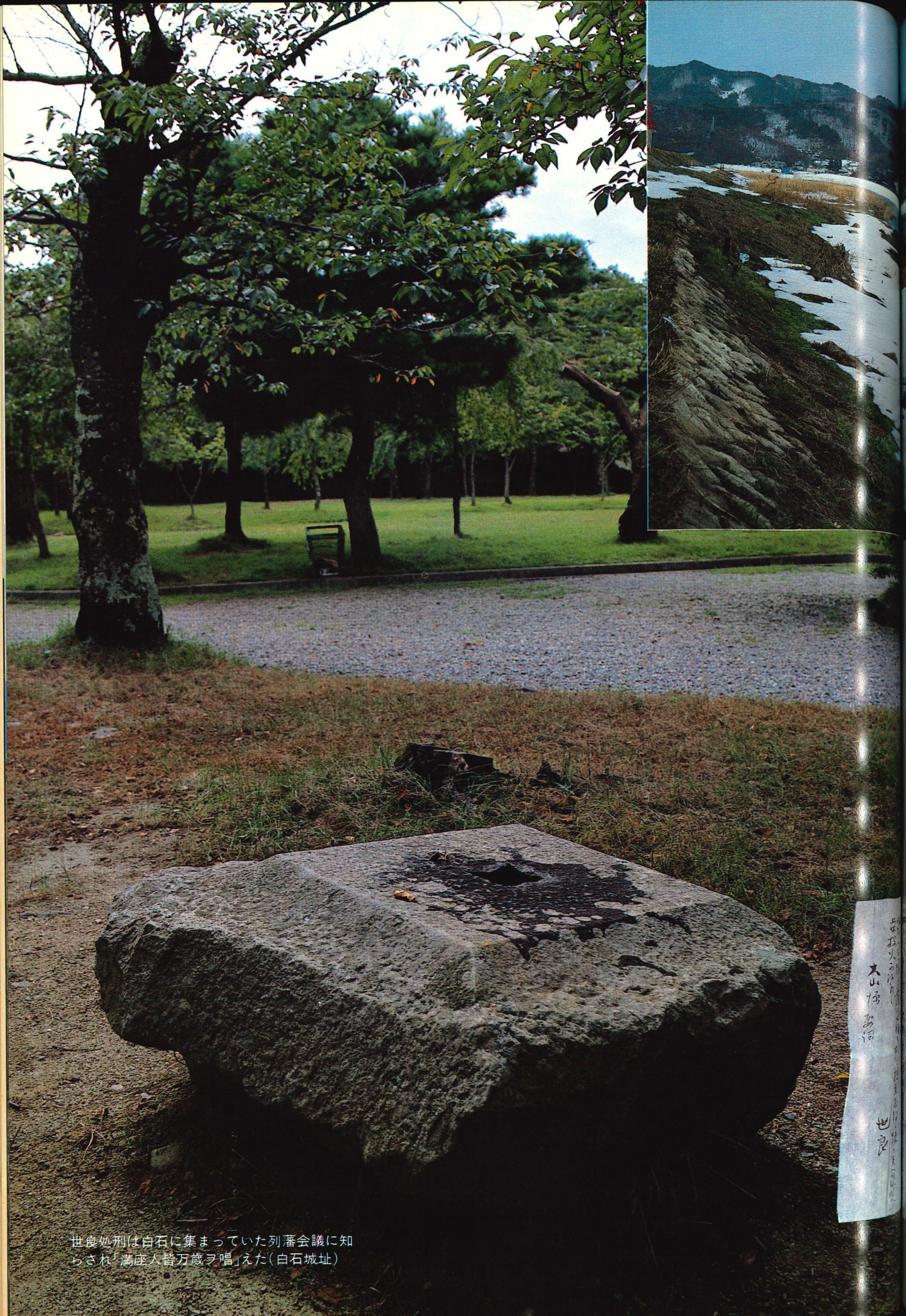
第一高等学校及び陸軍砲工学校に仏語を教え、現代青年の仏語知識向上のために尽くした林治信氏は二十七日、感冒がもとで逝去した。松平忠倶子の娘であるかね子未亡人は葬儀を終えたのち、自宅で語った。「夫はジブスケを父とし、日本婦人を母として今から三十八年前に生まれました。生まれるとすぐ父に逝かれ、暁星学校を出、フランスには一度も渡らず、独学でフランス語を勉強しました。十五年前に日本に帰化して母方の絶えた林家を継ぎました。猟と音楽、特に洋琴（ヴァイオリン）を好み熱心なキリスト教信者でした。学生たちのために調査研究する時は自ら注射して精力を維持して疲労を防いで勉強しました。残ったのは母と私と七歳の長女と二人の男子です」

と記事には書かれている。

長女とは笹子さん、長男は正治氏、次男は正信氏である。そして彼らの子供たちはまた現在デュ・ブスケの血を受け継いでいるのである。正治氏の長男である邦宏氏は語る。そういえば邦宏氏は猟をし、音楽を好み、熱心なキリスト教信者なのだが、

「おやじが生きているころ、よく言ったんです。もっと曽祖父や祖父について教えてほしい、祖先のことを書き残してくれと。おやじはほとんど話してくれなかったんですよ。祖父が死んでから相当いろんな意味で苦労したんです。戦前、戦争中、やはり外国人の血とが混じっているということでも、あまりいい思いはしていなかったでしょうし……。」

戦時中、デュ・ブスケの服、書物などの遺品はほとんど焼けてしまい、今は彼ら子孫の手もとにはデュ・ブスケの日本での生活をしるす物は何一つ残っていない。だが、幕末の日本に身を寄せたフランス人、デュ・ブスケの精神は百十四年の歳月を静かに流れ、彼らの心の中にいまもなお生き続けているのである。



世良処刑は白石に集まっていた列藩会議に知らされ「満座人皆万歳ヲ唱」えた（白石城址）

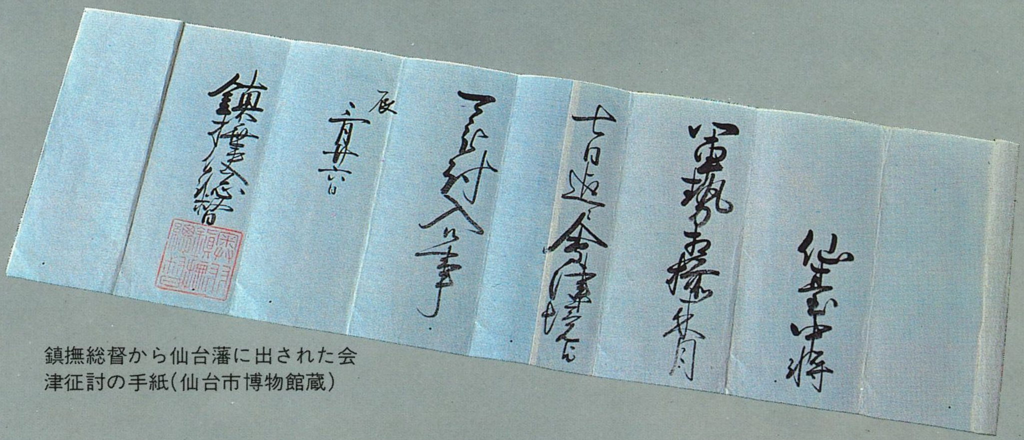


過激派・世良は仙台藩士らに襲われ、阿武隈河原で処刑された

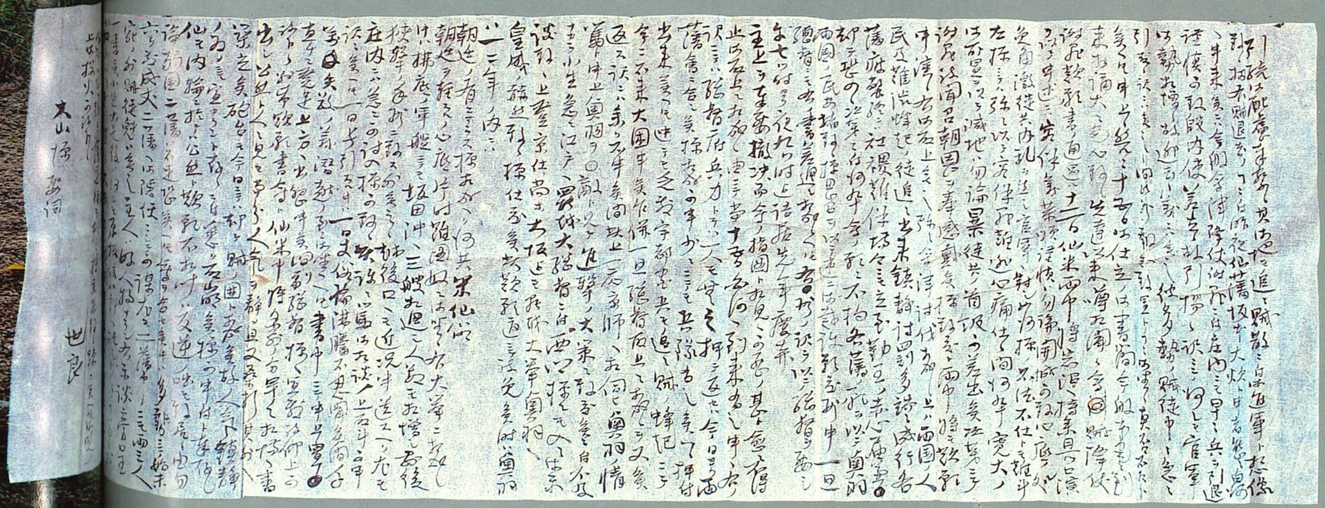
参謀・世良襲撃さる！

鳥羽・伏見の余燼も収まった一月二十日、仙台藩に対し朝敵会津征討の命令下る。三月、九条道孝を鎮撫総督とする一行が仙台に乗り込み、庄内藩征討の命令。しかし、朝廷に弓を引いたことのない庄内まで征討とは……。この強圧的な政策に、東北諸藩に疑惑が生じた。総督府の実権は薩長の参謀が握っているのではないのか。

時を同じくして、鎮撫軍参謀・世良修蔵の「奥羽皆敵」としたためた密書が暴露される。この密書に仙台藩士らは激昂、世良を襲撃し処刑。この一件がはずみとなり、奥羽越三十一藩による大同盟が作られた。薩長政府は万機公論に決していない！　後は力と力の激突あるのみ。



鎮撫総督から仙台藩に出された会津征討の手紙（仙台市博物館蔵）



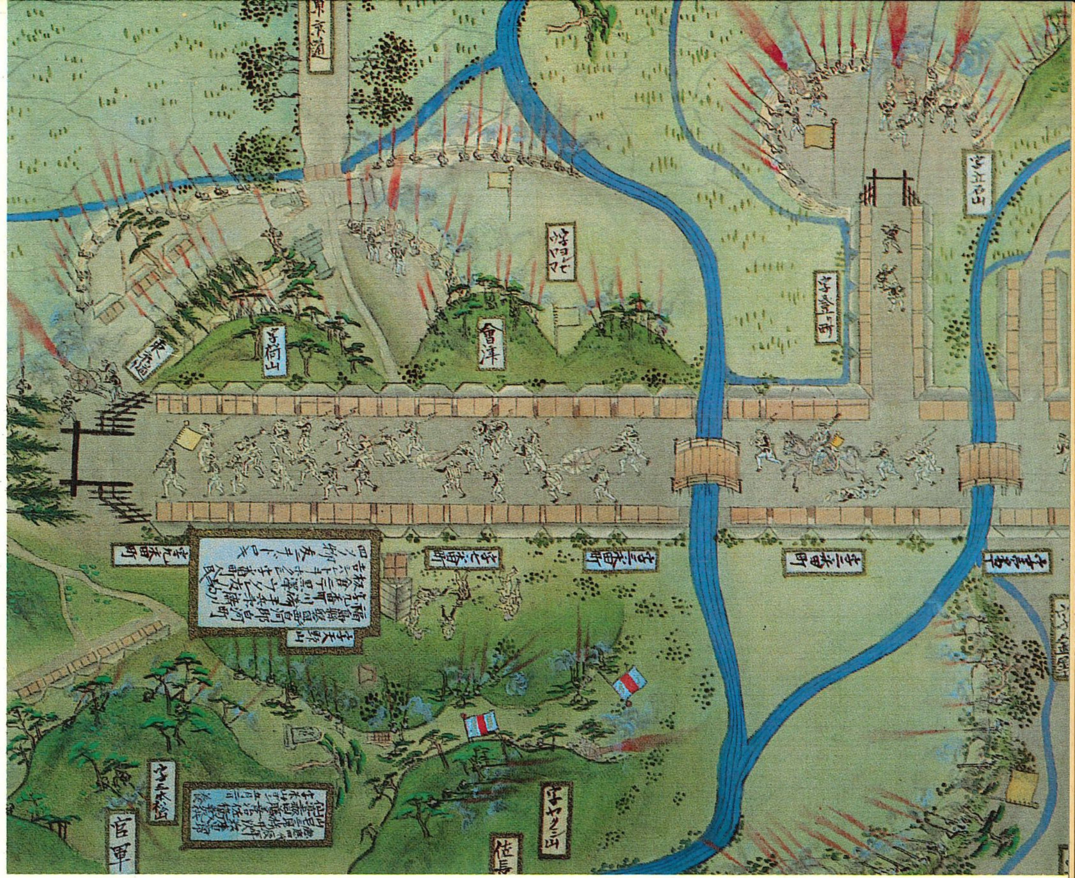
世にいう「奥羽皆敵」を述べた世良修蔵密書（斎藤友三氏蔵）



庄内藩は列藩の中で、孤軍奮闘した
（戊辰戦記絵巻より　致道博物館蔵）



庄内藩の「破軍星旗」（致道博物館蔵）



東北戦争はまず白河城で始まった
（白河口戦闘絵図　斎藤報恩会蔵）



ゆたかな穀倉地帯が続く庄内平野

〝破軍星旗〟の庄内藩善戦

〝みちのく〟への関門、白河城で戦端は切って落とされた。怒濤のごとく新政府軍が押し寄せる。白河落ち、福島南部もあっけなく新政府軍の手に。その圧倒的火力の前になすすべもない東北諸藩であった。しかも、秋田、新庄、弘前藩など同盟を離脱、錦旗に降る。早くも、同盟軍は力を合わせて戦う状態ではなかった。その中で、ひとり庄内藩だけが勝ち続けた。〝破軍星旗〟を掲げた庄内の精鋭部隊はゲリラ戦を展開、寝返った秋田にまで攻め入る。実に二十三戦全勝であった。庄内藩善戦の陰に、庄内の大庄屋本間家の財力があった。



庄内藩の軍用箱（致道博物館蔵）

ああ二本松少年隊哀れ

八月に入ると、列藩同盟各藩の敗勢は決定的となった。会津藩は籠城戦に入り、九月になると、同盟の推進役米沢藩、また盟主仙台藩も降伏。これを知った会津藩もついに城門を開き、庄内藩もまた秋田から兵を引いて降伏した。ここに、列藩同盟は結成以来わずか四か月にして崩壊したのだった。

敗北・自刃した会津の白虎隊の悲劇は有名である。これに劣らない悲話がある。板垣退助率いる新政府軍を迎え撃つ、福島二本松の少年隊。彼らは果敢に戦い十六名が死んだ。後、この悲話をもとに〝ああ二本松少年隊〟の映画が作られ、地元各地で人々の涙を誘った。





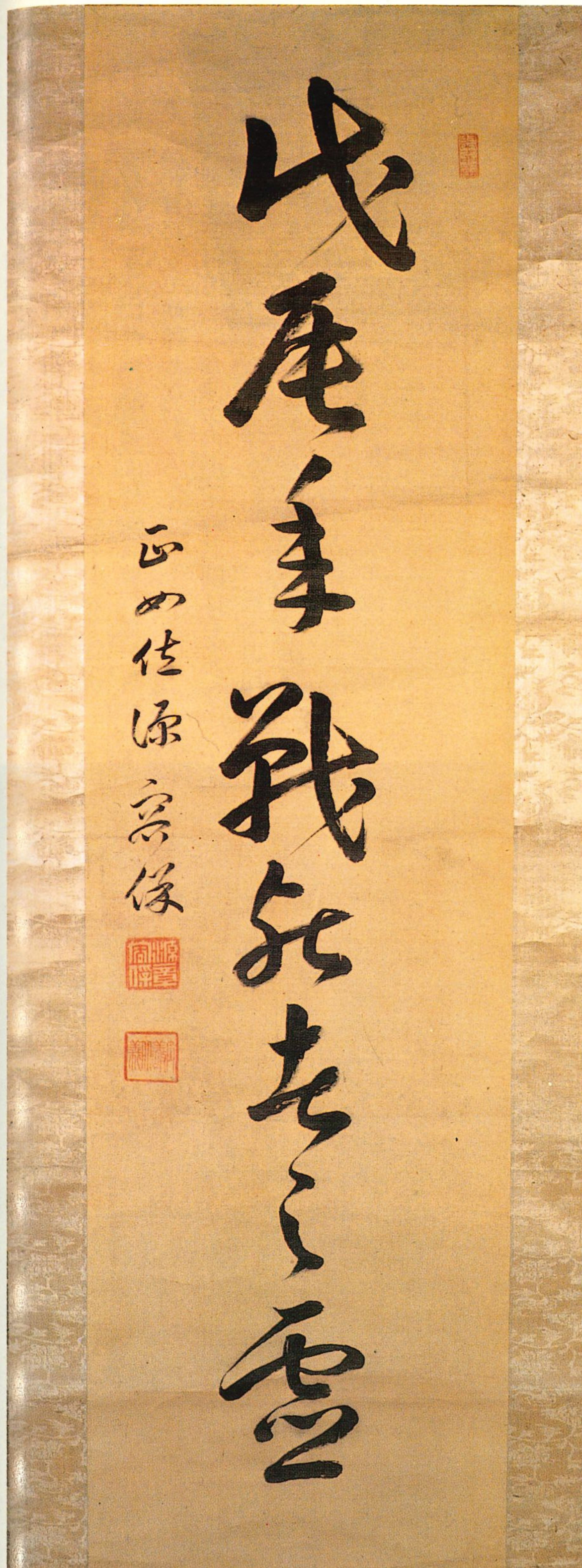
二本松少年隊悲話の映画フィルム
（霞が城の太刀風　渡辺弥氏蔵）



白虎隊自刃の図（会津武家屋敷蔵）



二本松少年隊士の墓は市内大隣寺にひっそりと眠る



松平容保書「戊辰年戦死者之霊」(会津武家屋敷蔵)

東北の回復力は早かった

列藩同盟の〝正義の戦い〟は、あっけなく敗北した。その後、明治政府の東北処分は過酷を極め、とりわけ旧会津藩は減封の上に酷寒の斗南(となみ)に移封された。東北の人たちは、賊軍の汚名を着せられたまま、裸一貫、無一文で近代に踏み出さねばならなかった。

戊辰戦後五十年。日本で最初の政党内閣を、東北出身の原敬が組織した。アメリカでは南北戦争後、南部選出大統領はカーターが初めてであったことを考えれば、近代に向かっての東北の回復力は早かったと言えるだろう。

維新以来の薩長閥政権に代わって登場した原敬



嵐の列藩同盟

安岡章太郎
高橋富雄

▩やすおかしょうたろう
作家　大正9年高知県生まれ　芸術院会員　短編小説『陰気な愉しみ』『悪い仲間』で芥川賞受賞　著書『海辺の光景』『花祭』『私説聊斎志異』『私のアメリカ紀行』

▩たかはしとみお
大正10年岩手県生まれ　東北大学教授　日本古代史　著書『みちのくの世界・文化史的考察』『義経伝説・歴史の虚実』『宮城県の歴史』『人物日本の歴史4』

NHK 松島直三

東北二十七藩の同盟結成



奥羽列藩同盟旗　白地に黒、黒地に白抜きした２種類がある（宮坂考古館蔵）

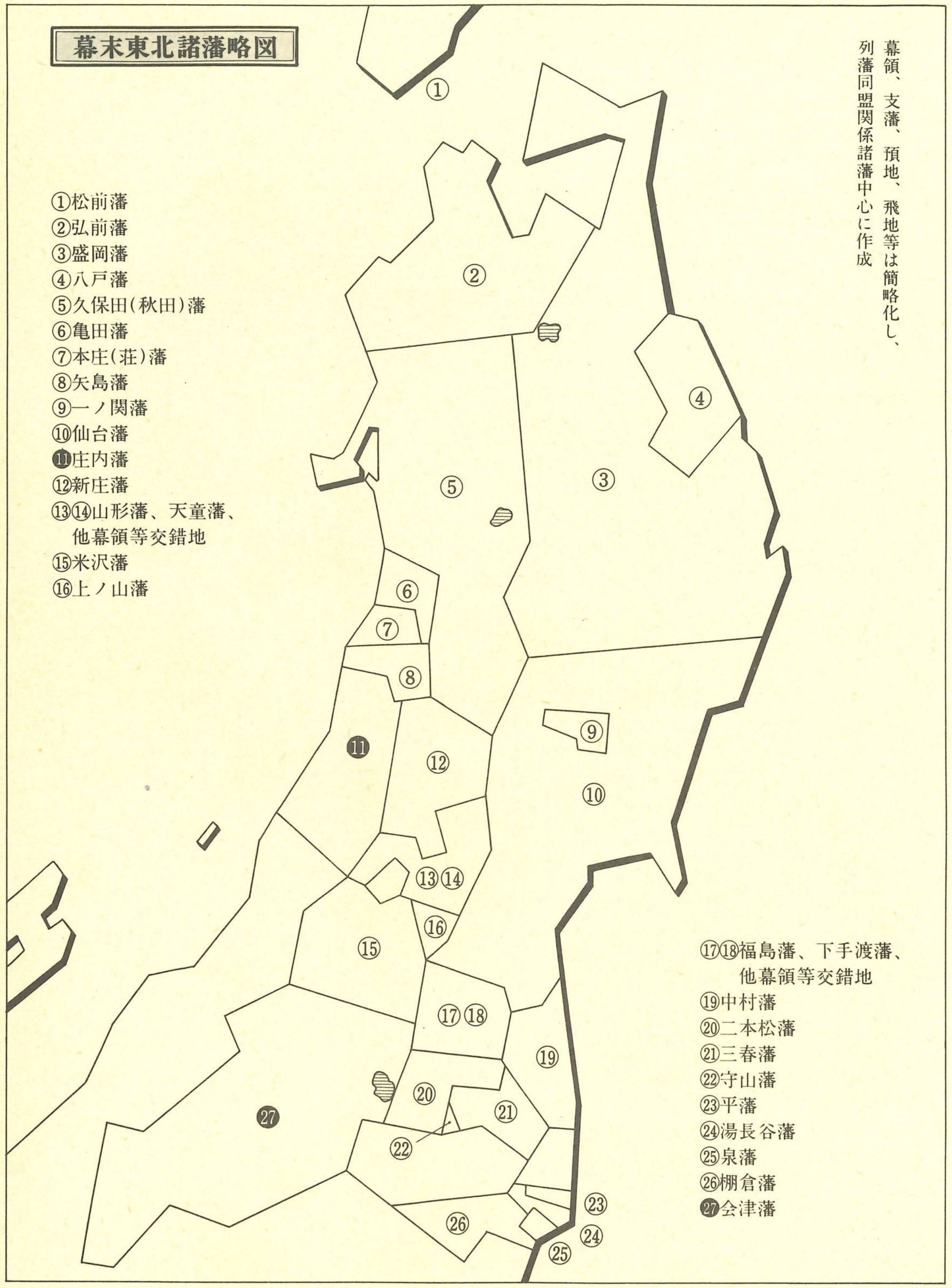
東北は長い間、日本史の上で「辺境」であった。道の奥の政治の及ばぬ地域と考えられていた。

しかし、今から百十三年前、東北を一つにまとめようとする政治的努力があった。戊辰戦争で薩摩・長州の勢力に対抗した東北・北越三十一藩による奥羽越列藩同盟である。

それは東北が歴史の表舞台に立とうとした初めての挑戦であり、東北日本が、その政治的主張のために大同団結して西南日本に全面戦争を挑むことは、史上初めてのことであった。

慶応四年（一八六八）一月、鳥羽・伏見の戦いに端を発した戊辰戦争は、江戸の無血開城で事実上決着したという見方があるが、実は東北各地で新政府軍と列藩同盟軍との戦いが五か月近く続いたのである。

奥羽越列藩同盟とは、どのような理念と構想を持っていたのか。また、日本近代化の陣痛とも言える東北の戊辰戦争とは、どのような戦いだったのだろうか。





江戸で市中警備にあたっていた庄内藩が、薩摩藩邸を焼き打ちする模様を描いた錦絵（都立中央図書館蔵）

まず、戊辰戦争当時の東北諸藩の勢力図を見てみよう（奥羽越列藩同盟には、このほか、北海道の松前藩三万石と新潟の長岡藩七万四千石なども参加する）。

全部で二十七の藩がひしめいているが、政治的な立場では、およそ四つのグループに分けられる。

①朝敵グループ

会津藩二十三万石（松平容保（かたもり））

庄内藩十七万石（酒井忠篤）

会津藩は幕末の文久二年（一八六二）京都守護職に就任している。

京都守護職は、幕末における幕政改革の中で設置された要職である。今で言えば、内閣官房長官と警察庁長官、それに検察庁長官まで兼ねた重要ポストである。会津藩は、ボロボロになった徳川政権の屋台骨を、吹き荒れる維新の嵐の中で必死に支えた。

戊辰戦争の幕開きとなった慶応四年一月三日の鳥羽・伏見の戦いで、会津藩は薩長軍に発砲、錦の御旗に背いたとして、仙台藩に会津征討令が下る。

庄内藩は、徳川譜代の名門として、江戸市中警備役をしていた。今で言えば警視総監である。庄内藩が、幕末の江戸市中で暗躍する勤王の志士たちを弾圧したのは、その役職からいって当然のことだった。

庄内藩は、初め朝敵の中に入っていなかったが、鳥羽・伏見の戦いのきっかけともなった庄内藩の薩摩藩邸焼き打ち事件（慶応三年十二月二十五日）は、薩摩藩の私怨として残り（薩摩藩の挑発によるものと言われているが）、秋田藩に庄内藩征討令が下る。

②東北のリーダー・大藩グループ

仙台藩六十二万五千石（伊達慶邦）

米沢藩十八万石（上杉斉憲）

仙台藩は、東北の雄藩として、米沢藩とともに会津・庄内両藩の謝罪嘆願を新政府に周旋した。仙台藩はやがて反薩長へと藩論を統一し、奥羽越列藩同盟の推進役としてリーダーシップを発揮する。

③優柔不断グループ

秋田藩二十万五千石（佐竹義堯）

弘前藩十万石（津軽承昭）

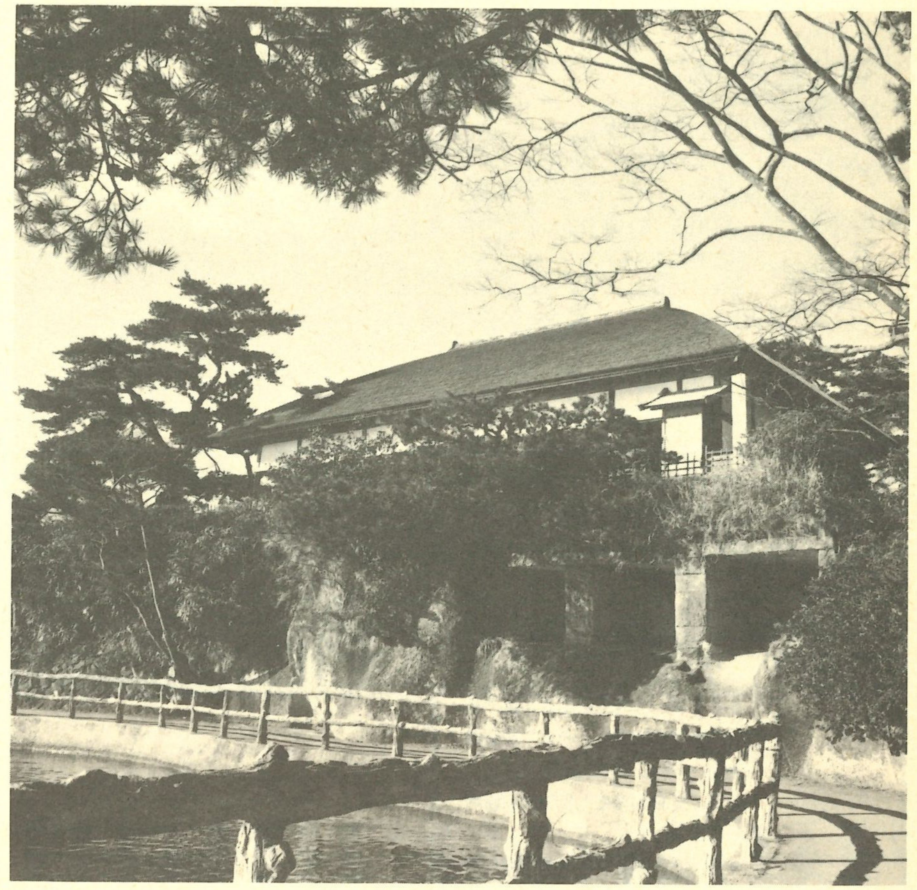
秋田藩と弘前藩は、勤王か佐幕かで藩論が対立、去就が定まらないまま列藩同盟に参加するが、やがて同盟から離脱して行く。

④弱小藩グループ

嵐の列藩同盟〈年表〉

文久2（1862）	会津藩藩主松平容保が京都守護職に就任
慶応1（1865）	アメリカの南北戦争終わる
慶応4（1868） **明治1**	鳥羽・伏見の戦い始まる 1月15日、王政復古宣言　16日、朝廷が秋田藩に奥羽諸藩をまとめ東征軍応援を内命する　17日、仙台藩に会津征討を命ずる 2月22日、容保が会津藩に戻る　26日、奥羽鎮撫総督に九条道孝、副総督に沢為量なる 3月13日、西郷・勝談判　18日、奥羽鎮撫軍が松島湾に到着 4月10日、会津・庄内同盟なる 閏4月11日、白石列藩会議開く　12日、仙台・米沢両藩主が九条総督に会津藩寛典処分の嘆願を行う　17日、これを却下　20日、鎮撫軍参謀世良修蔵殺される　22日、白石列藩同盟なる 5月2日、長岡藩家老河井継之助と鎮撫軍参謀岩村との小千谷会談決裂　3日、奥羽列藩同盟成立 6日、北越6藩を入れて奥羽越列藩同盟となる 6月16日、輪王寺宮が奥羽越列藩同盟の盟主となる 7月19日、二本松城・長岡城おつ 8月19日、榎本武揚ら東京を脱出　23日、新政府軍、会津若松城下に攻め入る 9月4日、米沢藩降伏　15日、仙台藩降伏　22日、会津若松城おつ 10月26日、榎本軍、五稜郭に入る
明治2（1869）	4月9日、新政府軍、蝦夷地上陸 5月18日、五稜郭おち、戊辰戦争終わる 6月2日、戊辰戦功の賞典を行う
明治3（1870）	5月、旧会津松平家が斗南に移封
大正7（1918）	政友会総裁原敬が、明治維新以来の薩長藩閥政権に代わって日本で最初の政党内閣をつくる

現在の福島県と山形県にかけては、小さな藩がひしめいていた。例えば二本松藩十万石、棚倉藩六万石、三春藩五万石、平藩三万石、山形藩五万石、天童藩二万石など。
これらの小藩は、大藩の論理に翻弄され、「東北は一つ」ということで列藩同盟に名を連ねるが、戊辰戦争では多くの小藩が本土決戦をし、「戦場の村」として新政府軍に蹂躙されて行く。
これら東北の二十七の藩は、一月三日の鳥羽・伏見の戦いの時点では、一言で言えば、いずれも消極的な「幕藩体制現状維持派」であった。



観瀾亭　奥羽鎮撫総督一行は東名浜に上陸、ここに宿陣した

〝陸奥に桜狩りして思ふかな……〟

古代国家の蝦夷征伐以来、源頼朝の平泉藤原氏殲滅、豊臣秀吉の奥州仕置など、日本の天下統一を目指す権力者は、最後に東北日本に攻め上る。
鳥羽・伏見の余燼も収まって、薩長新政府軍はその鉾先を東北日本に向けた。
まず仙台藩に対して、再三、朝敵会津征討の命令を下す。一月二十日太政官代から仙台藩家老但木土佐に渡された命令書。
「会津容保今度徳川慶喜ノ反謀ニ与シ、錦旗ニ砲発シ、大逆無道可被発征代軍候間、其藩（仙台藩）一手ヲ以テ本城（会津若松城）襲撃速ニ可奏追討之功旨御沙汰候事。」（藤原相之助著『仙台戊辰史』）
新政府軍としては、東北中に影響力をもつ仙台藩をまず抑えておこうという考えと、仙台藩の出方を見ようという思惑があった。
この後、太政官から仙台藩に対して錦旗が下されるが、仙台藩は会津藩と戦う気はまったくなかった。会津藩を説得して、新政府軍に対し恭順謝罪を願い出れば、寛大な沙汰があると思っていた。慶応四年二月の時点では、仙台藩をはじめ東北のどの藩も東北が戦場になるとは夢にも思っていなかった。
三月二十三日、左大臣九条道孝を総督とする奥羽鎮撫使一行が錦旗とともに仙台へ乗り込んで来た。参謀は長州藩士世良修蔵と薩摩藩士大山綱良。鎮撫軍の兵力は薩摩兵を中心にわずか四百人だった。仙台藩は鎮撫使一行を丁重にもてなす。三月二十六日、仙台の桜の名所榴ケ岡で総督と参謀を招いて花見の宴が行われた。
この時参謀の世良修蔵が詠んだ歌が残っている。

陸奥に桜狩りして思ふかな
花散らぬ間に軍せばやと

会津征討にいっこうに腰を上げようとしない仙台藩に対する、世良のいらだちがよく出ている。

―― 新政府は鎮撫使一行が錦の御旗を持って乗り込めば、東北は簡単に片がつくと考えていたのでしょうか。

安岡　まあそうでしょうね。それは京都から江戸へ攻めて来る途中、各藩とも官軍になびいたわけですから、そのことから考えて、東北の藩が同盟を結んで抵抗するなんてありえないと思ったでしょう。ですから、仙台に会津を攻めろと言えば、仙台は命令通りすぐ会津を攻めてしまうだろうというぐらいに考えていたと思います。
それともうひとつは、大ざっぱに言って、やはり東北という所は遅れているというふうに見ていたかも知れません。西に比べれば、開明的でないというような……。例えば、官軍が福島県のすぐ南の茨城県平潟に上陸したときに、その辺の子供にビスケットをやっているんですね。木村屋製のビスケットとなっていますよ（笑）。この子供が後に老人になったとき、いやうまかったと言ってますけどね。ちょっとそれは象徴的でしょう。アメリカの進駐軍がやって来たときみたいですね。

―― そう言えば、先生のご先祖は土佐の出身でいらっしゃいます



京都守護職だった会津藩の藩主松平容保　真っ先に朝敵にあげられた（鶴ケ城天主閣蔵）

安岡　だから、会津へ攻めて行った方ですよ（笑）。

――　戊辰戦争では、結局江戸は戦場になりませんでしたね、勝海舟と西郷隆盛の会談によって。なぜ東北は戦場になったのでしょうか。

安岡　それは勝海舟なんかが、江戸では絶対戦争しては困る。それから徳川慶喜、最後の将軍の命は絶対守らなくてはいけないということで、この二つさえ守られればいい。戦争をやるなら東北へ行ってやってくれと言っていたわけでしょう。そんなわけで徳川慶喜の首は、勝の外交手腕によって取れなかったから、官軍とすれば、せめて会津の京都守護職松平容保、これは特に長州にとっては恨み重なるものですから、この首を取らないことには兵を動かした意味がないという気持はあったでしょうね。

――　なるほど。そのあたりで、一連の戊辰戦争の決着をつけようと……。

安岡　ええ、だから慶喜の犠牲者としての代役が容保とも言えるのではないですか。とにかく東北は江戸で戦争をやる代わりにやられたのだと思います。江戸を戦火から避けるためにね。

〝奥羽皆敵〟の強硬派・世良修蔵〝天誅〟さる

仙台藩は三月二十七日、鎮撫総督府の命令に従うかたちで千余人の藩兵を会津藩境に出した。しかし、本気で会津と戦うつもりはなく、裏では米沢藩と連絡を取り、会津藩の恭順謝罪の周旋工作をしていた。

一方、秋田藩に対しても四月六日、庄内藩征討の命令が下る。朝廷に弓を引いたことのない庄内藩が、なぜ征討の対象になるのか。東北諸藩の中に、鎮撫総督府の政策に対しての疑惑がにわかに広がった。

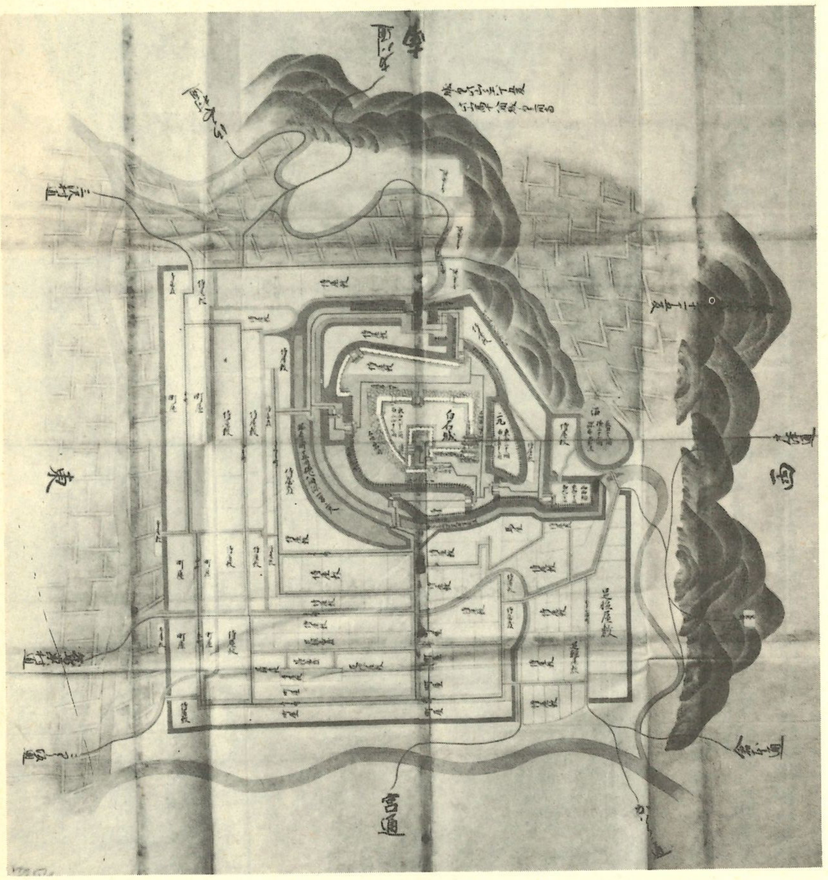
総督府の実権を握っているのは薩長両藩の参謀ではないのか。会津と庄内に対する強圧的な政策は、薩長両藩の私怨から出たものではないのか。

何とか戦争を回避したい――そのためには、東北が一つにまとまって総督府に会津の寛大な処置を嘆願しよう。

閏四月十一日、東北諸藩の重臣は、仙台・米沢両藩の呼びかけで仙台藩白石に集まる。



重い腰をあげ会津征伐に出兵する仙台藩（仙台市博物館蔵）



列藩会議の開かれた白石城の地図（仙台市博物館蔵）

閏四月二十日、奥羽越列藩同盟成立へのひとつのはずみとなった事件が起きる。奥羽鎮撫総督の参謀、世良修蔵襲撃である。

世良は、いっこうに進まない奥羽鎮撫にいらだっていた。抗戦の構えを見せる会津・庄内両藩はともかく、東北諸藩まで不穏な動きを見せている。閏四月十九日、福島にいた世良が、庄内征討の督促のため新庄に出向いていた同僚の参謀・大山格之助（綱良）にあてた密書といわれるものが、世良の襲われた福島の宿「金沢屋」の子孫の家に残っている。

「……此嘆願通ニテ（会津を）相免候時ハ、奥羽ハ、一、二年ノ内ニハ朝廷之為ニナラヌ様可相成、何共、米仙ノ俗（米沢と仙台）朝廷ヲ軽ンズルノ心底片時も難図奴ニ御座候……」

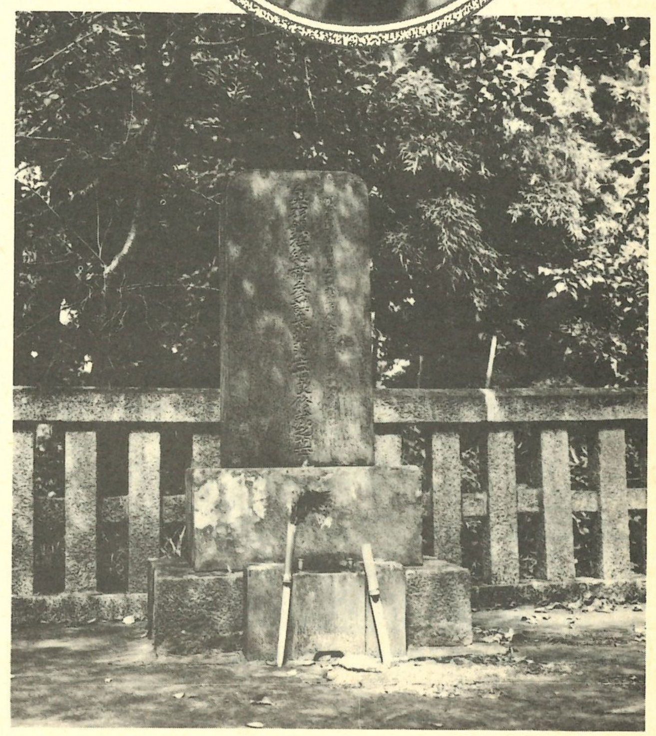
と米沢・仙台の動きを疑っている。さらに――

「……一応京都へ相伺、奥羽之情実篤ト申入、奥羽皆敵ト見テ逆撃之大策ニ致度候ニ付……」

世良は奥羽鎮撫に素直に従わない東北諸藩の実情を訴え、東北をすべて敵と考えて、大挙して攻めつぶすべきだと主張している。

この密書を福島藩士に託したのは、世良の失敗だった。密書は、前々から世良をつけ狙っていた仙台藩士の手に渡ってしまう。仙台藩士らは「奥羽皆敵」の文面に激昂する。





奥羽鎮撫軍の参謀・世良修蔵と白石市郊外の墓

閏四月二十日未明、世良修蔵襲撃は実行され、阿武隈河原で首は飛んだ。

世良暗殺の報は、直ちに白石で開かれていた列藩会議に知らされた。

「満座人皆万歳ヲ唱エ、悪逆天誅愉快々々ノ声一斉不止。」（米沢藩士・宮島誠一郎『戊辰日記』）

二日後の閏四月二十二日、列藩の重臣は白石盟約書に調印し、列藩同盟が成立する。さらに五月三日、長岡藩など北越六藩が加わり、ここに奥羽越三十一藩による一大軍事同盟が結成された。列藩同盟には、北海道の松前藩も参加していた。すなわち、日本の四十パーセントにも達する地域が、一つの政治目的のもとに結集し、薩長勢力に対抗しようとしたのである。

旧幕亡命官僚の描いた「北部連邦政府構想」

それでは、この奥羽越列藩同盟はどのような理念の上に成り立ち、どのような構想を持っていたのだろうか。

仙台藩家老但木土佐が、列藩同盟成立後、アメリカ公使ホルケンにあてた文書がある。

「大日本国北方の諸侯らは、謹んで書を合衆国公使法児健閣下に呈する。四海みな兄弟の精神にのっとって、日本は外国との交わりを開いた。徳川氏は、朝政、二門に出るを防ぎ、一大統に帰せしめ、内外諸侯が同心協力して、日本を万国と並ぶ一独立国たらしむべく、大政を奉還した。

この時、南方一、二の諸侯が、私怨を含んで、これを追及、害毒はその支族と世臣にも及ぼうとしている。これが忠臣であるか、はたまた国賊であるかは、論をまたず明らかである。

北方諸侯はこれと異なる。四海兄弟の大義を天下に述べること、これ、その願いである。これは、貴国の南北両部の戦いのような

会津、庄内、および列藩同盟結成27藩

藩名	石高（万石）	藩主
仙台	62	伊達陸奥守
米沢	15	上杉弾正
会津	23	松平容保
庄内	17	酒井忠篤
秋田（久保田）	20	佐竹右京太夫
盛岡	20	南部美濃守
二本松	10	丹羽左京太夫
守山	2	松平大学頭
棚倉	6	阿部美作守
相馬（中村）	5	相馬因幡守
三春	5	秋田万之助
山形	5	水野越前守
福島	3	板倉甲斐守
上ノ山	3	藤井伊豆守
亀田	2	岩城左京太夫
一ノ関	3	田村右京太夫
矢島	0.8	生駒大内蔵
新庄	6.8	戸沢中務大輔
平	2	安藤理三郎
本庄	2	六郷兵庫守
泉	2	本多能登守
湯長谷	1.5	内藤長寿丸
下手渡	1.5	立花出雲守
松前	3	松前志摩守
弘前	10	津軽越中守
八戸	2	南部遠江守
天童	2	織田兵部太夫

（仙台市博物館作成）

ものだ。日本南北の戦いでも、南方のなすところは不仁である。不義である。これに対して、北方のなすところは仁である、義である。ただ、林古倫（リンカーン）のような大勇、深仁の人がいないのをこれ憂える。よろしく仲介の労をおとりくださらんことを。

慶応四年七月十四日すなわち貴国千八百六十八年某月某日。」（高橋富雄著『東北の風土と歴史』より）

――このメッセージはどのように解釈したらよろしいものでしょうか。

高橋　奥羽越列藩同盟がどういう考えで結成されたか、ということがよく表れていると思います。列藩同盟と新政府軍との戦いは、ちょうど数年前にアメリカで終わった南北戦争（一八六五年）と同じような戦いである、南北戦争の日本版である、ということを訴えようとしております。ご承知のように、南北戦争というのはアメリカでは第二の独立革命と言われるもので、アメリカ合衆国が成り立ちを異にする南北二つのアメリカに分かれて、お互いに自分の正義を主張し合うという戦いであったわけです。もし奥羽越列藩同盟によって引き起こされた戦争が、日本の南北戦争だということになりますと、日本を代表する政権というのは、なにも明治政府だけでなくて、東北にもそれに対抗できるようなもうひとつの日本政府があるのだという主張になってまいります。明治政府は認めないでしょうけれども、列藩同盟の一部の人たちは、そういう考え方でこの戦争を受け止めていたのだと思います。

――このアメリカ公使ホルケンにあてた文書の起草者は、仙台藩の大槻磐渓（おおつきばんけい）とされている。磐渓は、蘭学者大槻玄沢（げんたく）の息子で、儒者として仙台藩の藩校・養賢堂の学頭をつとめた。磐渓の息子文彦は、国語学者として、国語を文法的に解説した最初の人で、大著『大言海』を著した。

大槻磐渓は列藩同盟のブレインの一人だったが、列藩同盟事務局には、旧幕府の有能な官僚が亡命していた。

「北部連邦政府」の構想は、そのような亡命官僚たちの描いた夢の政権構想だった。

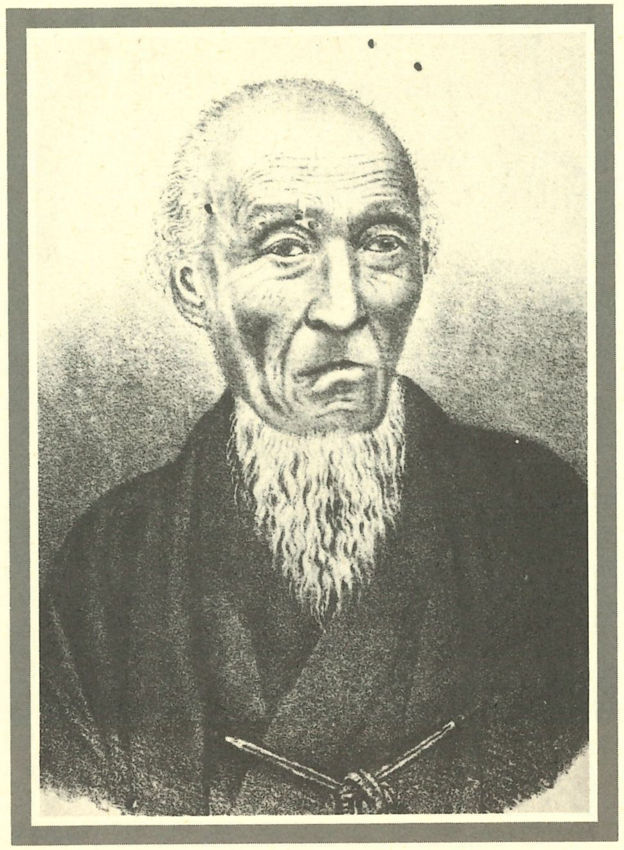
文部省史料館所蔵の『蜂須賀家文書』から北部連邦政府の組織を表してみる。

北部連邦政府の組織

東武皇帝	輪王寺宮
関白太政大臣	九条道孝（奥羽鎮撫総督）
執柄職	沢為量（同副総督）
	醍醐忠敬（同参謀）
〔権征夷大将軍〕	伊達慶邦（仙台藩主）
〔権征夷副将軍〕	松平容保（会津藩主）

★元号改正　慶応 ➡ 大政

――列藩同盟の基本的な考えは、「君側の奸」つまり新政府をあ



仙台藩の藩校・養賢堂の学頭をつとめた大槻磐渓（仙台市博物館蔵）

やつっている薩長を排除することにあったと思うのですが……。

高橋　そうですね。列藩同盟は、西南諸侯に対する東北諸侯の統一された意志と行動を表明する組織体なんですね。これははじめ、なるべく穏やかに事を収めようとする平和同盟だったのです。すべて公議公論でゆく公明正大の政治は力づくではいかぬということだったのです。それが薩長勢力の強硬策にあったために、薩長は口先でこそ勤王を唱えているが、これは「偽勤王」だ、これは天皇を擁して野望をたくましくし私怨を晴らそうとするものだ。それならわれわれは「真勤王」を東北から表して行こう。そういうことになって薩長の「偽勤王」に対抗する「もう一つの正義」を打ち立てなければならぬというように変わってきたんですね。そこで生まれたのが、白石の公議所を東北諸藩の統一した意志決定機関とする「北部連邦政府」構想なのです。

表に現れたのはそういうことだったのですが、一部の人たちの間は、これをいっそう尖鋭に「もう一つの天皇政府」に発展させ新政府に対抗しようという構想まであったのです。ちょうど上野戦争から逃れてきた輪王寺宮公現法親王（寛永寺宮、後の北白川宮能久親王）に、「真勤王」のシンボルになっていただく。これが東武皇帝。そして元号を「慶応」から「大政」に改元する。天皇の下には関白太政大臣が必要だから、鎮撫総督の九条道孝を据える。徳川幕府は不幸にし



激戦のあった白河小峰城址

てなくなり将軍が欠員だから、とりあえず伊達氏にその代行をしてもらう。それが権征夷大将軍。そして松平容保には、その補佐をしてもらう。ここまで具体的な構想を持っていた。征討軍の間でもこのことは未確認情報としてかなり広く流れていました。今日から見ると、ちょうど泡沫会社――バブル・カンパニーという言葉がありますけれども、それで言うとバブル・ガヴァメント、泡沫政府ということかも知れませんが……。

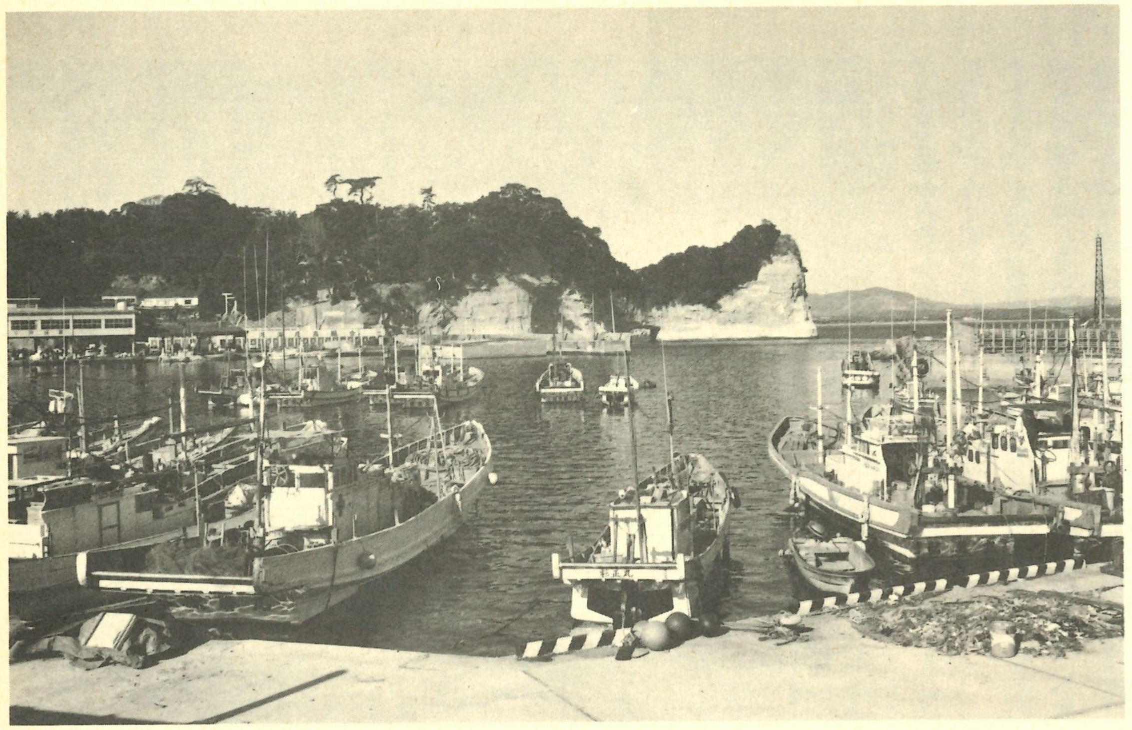
列藩同盟が短期間で、しかも何らなすところなく終わったために、結果から見ると、何だか笑い話のように感じられますが、これはただ、そういう歴史もあったのだということ、それだけでもかなり大切な意味を持つと思います。明治維新の過程というものは、そんなに単純なものではなかったということを、ここで確認しておく必要があるのではないでしょうか。

奥羽越列藩同盟は、しょせん保守的な封建領主の烏合(うごう)の衆にすぎなかったという歴史的な評価があるが、ここではそれはとらない。

列藩同盟の政治的立場、それは「五か条の御誓文」を守ろうということだった。「万機公論に決すべし」の主張だった。薩長の新政府は、万機公論に決していない、あれは権力政治であると考えた。

「二つの正義」の対立、あとは力と力の激突の道だけが残されていた。

新政府の火力の前になすすべもない東北諸藩



新政府軍が上陸した茨城県平潟

古来「みちのく」への第一関門である白河城で、列藩同盟軍と新政府軍の戦端が開かれた。五月一日、宇都宮、大田原から北上してきた新政府軍は、白河城攻撃に兵力を集中する。城を守る会津、仙台、棚倉の同盟軍よく戦うも、新政府軍の圧倒的火力の前に及ばず、白河落城。

この日の戦死者は新政府軍の十人、同盟軍七百人。東北戦争の先ゆきを象徴する数字であった。

白河城をめぐって、ほぼひと月の膠着状態が続くが、この間、六月十六日から二十日にかけて、新政府軍は茨城県平潟に上陸、海岸線の浜街道を北進する。六月二十四日、棚倉藩が落城、二十八日泉陥落、二十九日には湯長谷(ゆながや)藩が城を明け渡す。福島南部の小藩は、あっというまに席巻されていった。

七月に入って、北の方に異変が起きた。仙台で孤立していた鎮撫総督九条道孝は危険を感じ、錦の御旗とともに秋田へ移ってしまう。その七月一日、副総督の沢為量が薩長・筑前の兵千数百人とともに合流、これが秋田藩に離反の大義名分を与えて、七月四日、秋田は同盟を離脱する。十日には亀田藩、本庄藩、矢島藩、十一日には新庄藩、十五日には弘前藩が錦旗に降る。

奥羽越列藩同盟は、成立後二か月で早くも崩壊を始めた。

福島の戦線でも新政府軍は、じわじわと攻め上っていた。七月十三日、二週間にわたって防戦していた平藩が落城、二十六日、三春藩恭順。もはや、同盟軍は雲散霧消、力を合わせて戦う状態ではなかった。

北越・新潟の戦局はどうなっていたか。七月二十五日、新政府軍

は新発田藩の内通によって、阿賀野川河口に上陸、二十九日には新潟港を完全に制圧した。
そして、いくたびか激戦が繰り返された長岡城も、ついに陥落。
同じ日、福島の二本松城落城。この二本松城攻防戦では、会津の白虎隊の悲話に優るとも劣らない悲劇が起きたのである。

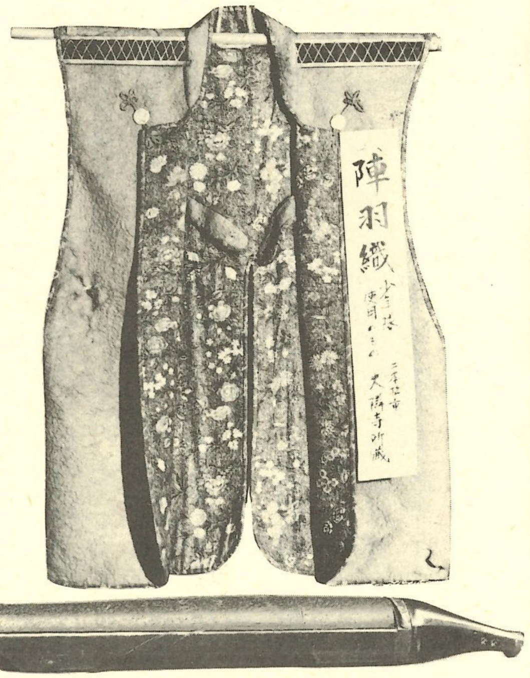


戦線は東北全土に広がっていった(清川合戦　清川八郎記念館蔵)


二本松少年隊の映画「霞が城の太刀風」より(渡辺弥氏蔵)

〃鬼神もむせび、人も泣く、ああ二本松少年隊〃
会津攻めよか　仙台とろか
ここが思案の二本松

福島県二本松市の歯科医、渡辺弥さんの家から、五十年前に作られた古いフィルムが見つかった。タイトルは「戊辰二本松少年隊勇戦映画、壮烈鬼神も泣かしむる――霞が城の太刀風」。
二本松霞が城の攻防戦で奮戦した少年隊の物語を描いたものである。
製作者は、弥さんのお父さん、渡辺喜七さん。当時の金で五千円ほどを出資し、松竹キネマ蒲田に製作させた。この無声映画は、二本松の各地で上映され、たいへんな評判を呼んだ。宣伝用のポスターに曰く「此の映画を見て泣かぬ者があろうか？　奮ひ立たぬがあろうか？　見よ光輝燦然たる我等の感情篇、あはれ清し純真無垢のそのまこと、鬼神もむせび、人も泣く、ああ二本松少年隊。」
七月二十六日、三春藩を恭順させた板垣退助率いる新政府軍は、一気に二本松へと向かった。この時二本松の正規軍は、列藩同盟軍として各地を転戦していた。留守の霞が城を守るのは老臣と農民兵、そしてまだ年端もいかない少年たちであった。
少年隊は十二歳から十七歳までの六十一名。隊長は砲術師範、二十二歳の木村銃太郎である。
二本松少年隊は正に奮戦した。少年隊の生き残りで、二本松の助役をしていた水野好之（当時の名まえは水野進、十四歳）が、大正六年に書いた『二本松戊辰少年隊隊記』によると、「大壇口に出陣して右手に陣を布く。杉の木の中間に大砲を据え付く。余等はその左右に位置を占む。多くは畑地にして、身を隠蔽する所なきを以って枠木を打込み、横に丸木を渡し、之に畳二枚ずつを併列し縄を以て括り付く。皆豪語して曰く『敵のヘロヘロ弾丸、此畳を貫通するものか、之にて大丈夫』と。」



少年隊の銃と陣羽織(大隣寺蔵)



少年隊隊長、木村銃太郎の戦死地に建つ碑



二本松で行われた戊辰戦没者追悼五十回忌の時の写真　うしろが少年隊の墓

結局、十六人の少年隊士が二本松の戦いで戦死している。そのひとり、上崎鉄蔵（十六歳）は、出陣の際、祖母と母が「いってらっしゃい」と見送ると「いってらっしゃいではないでしょう。僕は行くだけです。帰っては来ません。お父さまがお帰りになったら鉄蔵は立派に戦死したとお話し下さい。おばあさま、お母さま、いつまでもお達者で」と一礼して出て行ったという（紺野庫治著『二本松少年隊』より「母すまの追想談」）。

二本松の戦いでは女の戦死者が一人出ている。農民兵の女房が戦場の夫のところに、握り飯を持って行くとき撃たれたのである。少年たちにとっても、この農民兵の女房にしても、自分たちの住んでいた村が戦場になるとは、夢にも思っていなかったに違いない。これは、列藩同盟と新政府の二つの勢力のはざまで、玉砕せざるをえなかった小藩の悲劇を象徴するエピソードである。

二本松少年隊の悲話は、大正六年七月、二本松で行われた戊辰戦没者追悼五十回忌の折、少年隊士だった水野好之の書いた先述の『二本松戊辰少年隊隊記』によって、初めて広く世間に知れわたった。

戦死した十六人の少年たちの墓は、二本松市の大隣寺にある。会津の飯盛山で自害した白虎隊のように華やかに喧伝されることもなく、十六の墓は、ひっそりと眠っている。

戊辰戦争では、東北各地でこうした悲劇が数多く起きたのである。

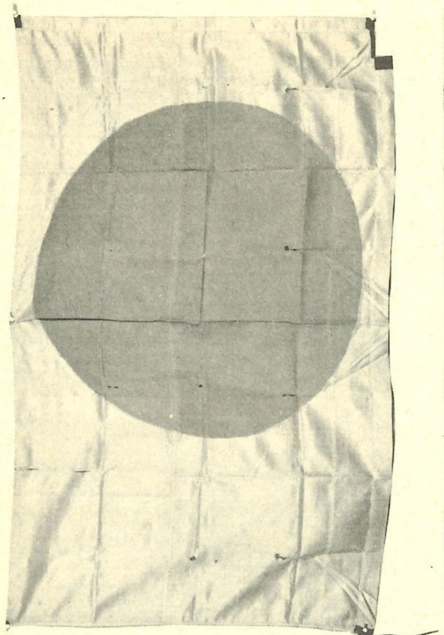
ひとり、二十三戦全勝の庄内藩

列藩同盟の各藩が惨めな敗北を重ねていくなかで、ひとり庄内藩だけは勝ち続ける。

七月十四日、新政府軍についた新庄を攻め落とし、矢島、本庄、亀田と、一路新政府軍の拠点、錦の御旗の翻る秋田は、久保田城へと攻め上った。

庄内軍の精鋭は二番大隊。その軍旗は、「破軍星旗（はぐんせいき）」。青地に北斗七星が描かれている。隊長は新政府軍から鬼玄蕃（げんば）と恐れられた酒井玄蕃。玄蕃の破軍星旗は神出鬼没、空をゆく雲のごとく、敵の実を避け虚に乗じて勝ち進んだ。今ふうに言えば、チェ・ゲバラのゲリラ戦である。

新庄を落とした玄蕃は、一番大隊と連繋をとりながら一気に秋田へと攻め入る。八月五日湯沢城を抜き、十一日横手城、十五日は



庄内藩の旗（朱の丸の旗　致道博物館蔵）

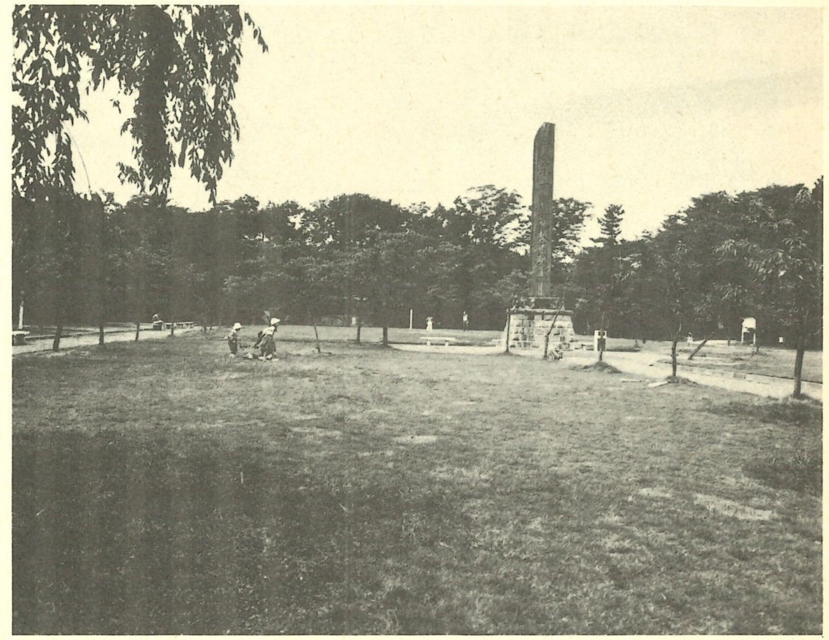


「破軍星旗」をかかげる二番大隊の活躍がみえる「戊辰戦記絵巻」（致道博物館蔵）

本間家の献金

	金　額	用　途
文久３年(1863)	10,000両	大殿様住居建築費
元治１年(1864)	30,000両	御進発御先手軍用金
慶応１年(1865)	9,000両	江戸府内取締り
２年(1866)	15,000両	軍用御備品
３年(1867)	18,900両	不　明
４年(1868)		
２月	12,500両	七発銃御求代
２月	15,000両	江戸表大変ノ模様ニ付
４月	93,400両	戊辰戦費
計	203,800両	

（『鶴岡市史』戊辰戦争と庄内藩財政より）



白石城址　戦後盛岡藩がここに移封され、白石の地を追われた旧仙台藩士は北海道に移住していった

大曲を占領、鎮撫総督のいる秋田久保田城は目前に迫っていた。実に三十余日間で二十三戦全勝、秋田領の半ばを攻略したのである。

庄内藩善戦の陰には、酒田の大庄屋、本間家の財力があった。

「本間様には及びもないが、せめてなりたや殿様に。」

大地主であり米問屋でもあった本間家は、庄内藩の大蔵大臣として、戊辰戦争前から庄内藩に莫大な献金をしている。その額は文久三年から慶応四年までの六年間で、二十万両にも上っている。

わずか四か月で崩壊した列藩同盟

八月に入って、庄内藩の孤軍奮戦をよそに、列藩同盟各藩の敗勢は決定的であった。

仙台藩は、国境（相馬藩境）の駒ケ嶺で新政府軍を食い止めるのが精いっぱいだった。会津若松城では八月二十三日以来、悲惨な籠城戦に入っていた。

そして九月四日、仙台藩とともに列藩同盟結成の推進役をつとめた米沢藩は、板垣退助の切り崩し工作によって降伏した。ついで十五日、米沢藩の働きかけで仙台藩も降伏。盟主仙台藩の降伏を知った会津藩は、籠城から一か月経った九月二十三日、ついに城門を開いた。翌二十四日、秋田領に攻め込んでいた盛岡藩も孤立を知って降伏。そして九月二十六日、華々しく勝ち戦さを続けていた庄内藩は、秋田領から兵を引き揚げ降伏を申し入れた。ここに、奥羽越列藩同盟は結成からわずか四か月余りで崩壊したのである。

――列藩同盟は、なぜこのように早く崩れ去ったのでしょうか。

安岡　これはいろいろな理由があって、簡単には言えないですけれども、先ほどのお話で、仙台藩の家老但木土佐が、アメリカの南北戦争の南軍が、戊辰戦争の西軍つまり薩長軍であるというように言ってましたけれども、アメリカの南北戦争の場合、どっちかと言えば、北軍は開明的、南軍は保守的なわけですよね。それでやっぱり開明的な方が勝ったわけでしょう。それと同じことが言えますね。東軍、つまり列藩同盟軍の方は、すべてについて保守的なんですね。例えば列藩同盟軍の中核である仙台兵は、東北最大の雄藩であるにもかかわらず、戦争になると弱かった。これは仙台藩が非常に保守的だった、つまり藩の中にいくつかの藩があるような、封建的な古い形態のままだった。それで軍隊を近代的な編成にするなんてことは、まったく不可能だったのですね。そういう仙台藩が、東北の中で発言力が大きかった。これが東北の不幸だったと思います。

高橋　私はね、まず奥羽越列藩同盟の成立過程そのものに敗因があったと思いますね。というのは、冒頭でお話がありましたように、この同盟は本来は戦争をしないための同盟だったのですね。それがいろいろな事情で、その意に反して戦争をする羽目になってしまった。

初めから、しゃにむに戦争でつぶすんだという新政府軍と、なるべくなら戦争はしないで穏便に処理したいという同盟軍と。そのスタートにおける考え方、意気込みの違いが最後までつきまとっていた――そういうことだと思います。

それともうひとつは、仙台藩を盟主とする列藩同盟においては、今でいう政治路線、政略というものが時期を逸していたのです。私、仙台ですので、こういうことを言うと具合が悪いのですが、六日の菖蒲、十日の菊、要するに季節はずれだったということになりますね。もう何か月か前に列藩同盟の意見が表明されていて、それからそれを裏づけるような政治行動が、仙台藩とか米沢藩などから中央政府に対し、列藩同盟に立ち上がるくらいの意気込みで押し出されていれば、例えば新政府の強行方針を決める小御所会議（京都御所内）などにおいて、平和収拾を強く主張していた土佐の山内容堂が孤立するような事

西郷南洲先生と庄内

戊辰戦争での庄内藩の強さは抜群であった。連戦連勝官軍を大いに破ったのであるが、仙台藩米沢藩等のすすめで、奥羽列藩同盟の最後の降伏者となった。官軍からの降伏条件は、極めて寛大仁慈なものであったが、これが西郷先生の強い指示によったものであることを知った庄内藩の人々は、心から深く感謝したのである。当時長岡藩の河井継之助を、田舎家老とその誠意を無視して怒らせた土佐の岩村軍監、会津藩の帰順を容れないで残酷な処置をとった長州の世良修蔵参謀等、深い恨みを残したものが少なくなかった中で、庄内藩はその王道的な処分に対して感動したのである。

世人は、庄内の人々が百年後の今日西郷先生を崇敬してやまぬのは、この恩義によるものであると思っているが、それのみではなくもっと根元的なものがあった。それは、庄内藩の家老で西郷先生と最も親交の深かった菅實秀翁（号臥牛）が門弟にいった言葉に現わされている。「人は皆、西郷先生の功績の感んなるを讃美するも、予は之と異なり、その氣韻の高尚にして克己の学を堅忍力行せられしを景慕するぞ」と。求道一途に精進する大徳者西郷先生に対する深い敬信景慕であった。

明治三年から八年迄と言う短い期間であったが、百数十人がそれぞれ、鹿児島に東京に、先生の膝下に参じては只管に教を仰ぎ、それを心底深く刻み込んだのであるが、先生が恩赦を受け賊名を除かれると直ちに着手して、明治二十三年一月に刊行したのが『南洲翁遺訓』である。この刊行は、西郷先生を景仰する至情の顕れであり、その大徳と真精神とを後世に正しく伝えたいという悲願を込められたものである。

当時の事情から正に懸命の出版であったと言う。序文に副島種臣翁が書いている。『南洲翁遺訓』一巻は区々たる小冊子なりといえども、今の時に当たりて故大将の威容の儼と声音の洪とを観るに足るあるは独り此篇の存するによる。「噫、西郷兄何を以て蚤く死せるか、茲書を著す者は誰ぞ、荘内賢七大夫某々」と。文は短いがこの刊行の真意を言いつくしている。

西郷先生を深く敬慕し、『南洲翁遺訓』を刊行し、その大徳の顕揚と、真精神の公布を念願した伝統は、現在も正しく継承されている。各目の事業の根本方針を西郷精神に求め教学の基盤を『南洲翁遺訓』に置き、あるいは南洲神社・南洲会館の創建、亦『南洲翁遺訓』の考究、公布に愈々精進を続けられている。　（長谷川信夫）



平和収拾を強く主張していた山内容堂

態はなかったかも知れないと思ったりするのです。

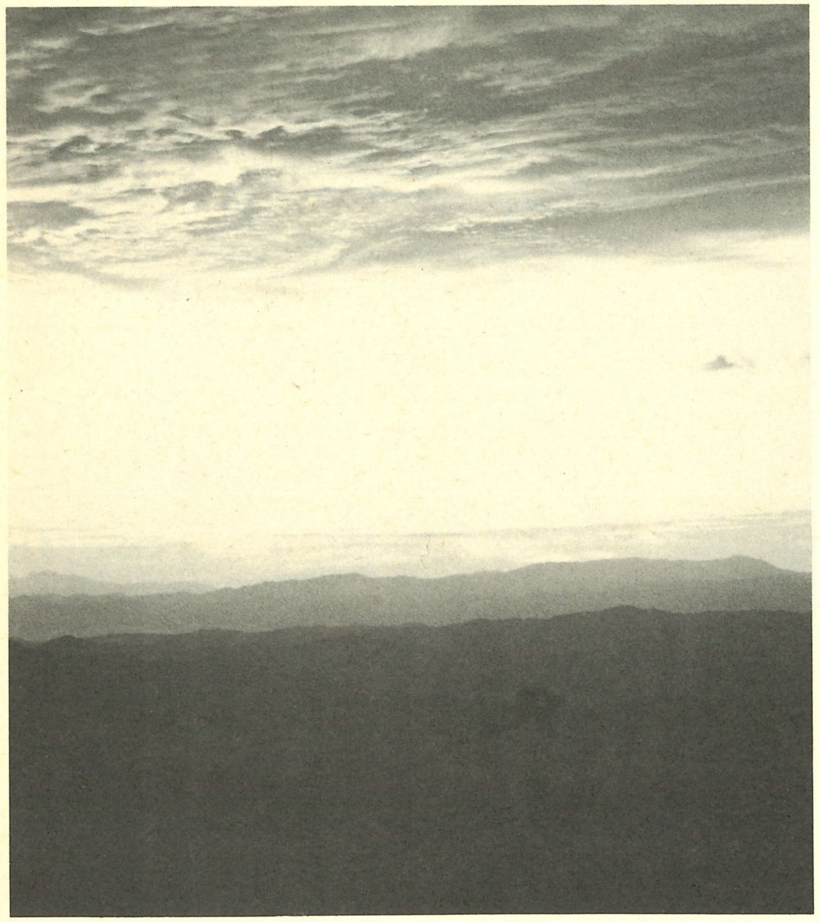
―― 具体的にはどういうことでしょうか。

高橋 こういうことがあったのです。慶応四年二月十二日に、仙台藩は建白書を朝廷に出そうとしたのですが、その内容は、「徳川氏をどうするかというようなことは諸大名の意見をよく聞いて決めるべきだ。そうすれば戦いなどしなくても自然に答えが出てくるのではないか。それを強引に戦争で解決しようという考えは、どうも天皇がお若いところを、二、三の藩が利用して事をすすめようとするものではないか。今、新政を始めるに当たっては、公明正大の方針でいかなければならぬ」といった意見が書かれているのです。この考え方は、前年十二月九日、王政復古大号令を出したのち、和戦の方針を決める小御所会議で土佐前藩主山内容堂などが強硬に主張していたことと同じなんですね。当時このような考え方は公議派と呼ばれて、有力諸侯の間で大勢を占めていました。会議でも土佐・越前など、かえって強かったのです。岩倉具視や大久保利通らが強引にこれを押し切ってしまったのです。もし仙台藩のような有力な大藩が早くこのような意志統一をして中立系諸藩とも共同して政府に働きかけていたら、山内容堂のような立場はいっそう強いものになっていたことは疑いありません。それなのに、それからまる二か月経ってこのような議論を持ち出しても、すでに大きな方向が、正式の会議で決定した後なんですね。そのため、この建白書の提出を命ぜられた藩士の三好監物さえ、遅すぎるとしてこの提出そのものさえ見合わせてしまったのです。やはり仙台藩、もしくはそれに率いられた奥羽越列藩同盟というのは、ひと回りもふた回りも、政治というもののおさえ方が遅れていたということは認めなければならないと思いますね。それならどうしてそう遅れたかということですが、仙台藩では有力な大身たちが、てんでに意見を述べてまとまらず、結局、慎重にいこうとまとまったときには、天下の方針は武力平定ということに決定してもう動き出していたときだったのです。

仙台藩ではなぜそんなにモタモタしていたのでしょうか。ここにもうひとつ問題があります。この藩では毎年のように冷害・凶作が続いて、六十二万石を十万石格に落としても、藩政の運営がむずかしくなっていました。それが藩から政治を奪い取ってしまっていました。それが現状維持の根本にあるものでした。何もできなかったのです。

裸一貫、無一文で近代に踏み出した東北人

―― では、この戊辰戦争は東北全体に、いったい何を残してしまったのでしょうか。



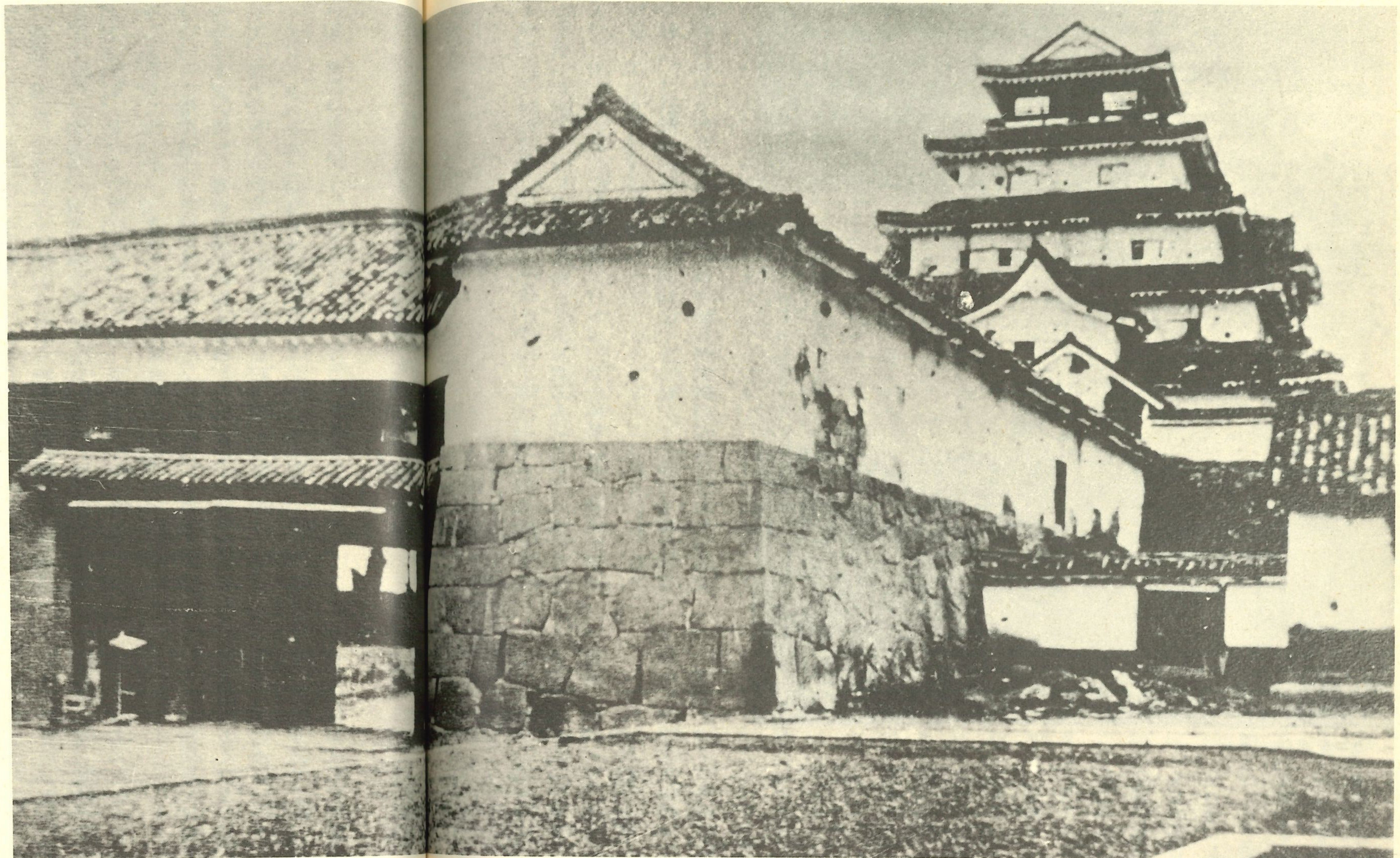
「陸奥の国」東北の山並み

安岡 そうですね。大きく言うと、やはり武士階級の没落というものを残したのではないでしょうか。それは何も東北だけではありませんけどね。あのような段階を経なければ、武士階級はそう簡単に滅びなかったと思いますよ。

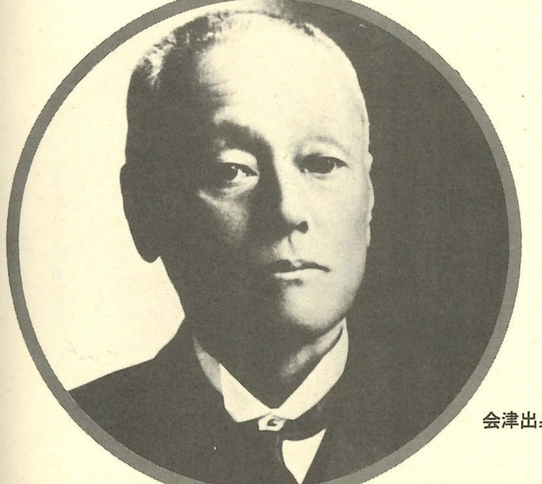
それと、戊辰戦争のほんとうの意味というのは、いわゆる官軍と賊軍に分かれて争ったことよりも、戊辰戦後史の問題なんですね。戦後史はよくわからないところが多いのですが、福島や会津を中心に、自由民権運動が起こりますね。そこに来るまでの間、戊辰戦争と自由民権運動との間には、密接な関係があると思いますね。

―― 戊辰戦争の敗北は、東北に後進性をもたらしたとよく言いますが、そうでしょうか。

高橋 すべてをそこに持っていくのは問題があると思います。第一



砲弾のあとも生々しい会津鶴ケ城(会津若松市役所観光課提供)



会津出身で東大総長となった山川健次郎

「みちのく」とか「陸奥の国」という言葉自体が、後進地という意味ですから、東北の後進性は歴史的にもっと古いもの、戊辰戦争の前からあった事実だと思います。しかし近代に入って東北の後進性を決定的にしたのは、やはりこの戦争だったと言えます。ご承知のように、戊辰戦争の後、東北以外の人たちが東北を評するときの言葉に「白河以北一山百文」という言葉があるんですね。白河の関を越えて、そこから北の地域というのは、もう二束三文だという考え方です。これは敗れた「賊軍」の東北に対する軽蔑の心が根底にあるのはもちろんですが、うちのめされて動きのとれない現実があったことも確かです。まず、この戦争によって決定的な打撃を受けて、近代を作っていく上で中心になる士族がプライドをなくしてしまったこと、これが第一。それに加えて、会津藩などは二十三万石が三万石に減封されて、斗南(となみ)(青森県下北方面)に島流しのような状況になってしまう。大藩仙台藩などもズタズタにされて辛うじて二十八万石を保ち、各々の武士たちは帰農するか、新天地を求めて北海道に渡るかしなければならなくなります。東北の人たちは、裸一貫、無一文で近代へ向かって踏み出すことになります。意地悪く冷評すると「白河以北一山百文」ということになるわけです。

安岡　ただね、この戦争で東北が負けるでしょう。負けたということで初めて目が覚めて、会津藩なんか三万石に減ったけれども、山川大蔵というような人が新政府の陸軍に入ったり、あるいは山川大蔵の弟、健次郎は東大総長になりますからね。そういう方面で、科学の振興であるとか、学問の振興であるとかいうことは、ものすごいエネルギーで始まるんですね、だいたい会津を中心に。こういうことは、やはり戊辰戦争の残したものの一つでしょう。

—— 戊辰戦争の影響が薄れてきたと感じさせるような事がらとか現象は、いつごろ出てくるのでしょうか。

安岡　薩長藩閥政府が倒れるというか、その勢いがなくなるという

戊辰戦争、諸藩没収地一覧

総計880,800石

藩主・藩名	旧高(石)	削封高(石)	新高(石)
伊達慶邦(仙　台)	625,600	345,600	280,000
松平容保(会　津)	230,000	200,000	30,000
南部利剛(盛　岡)	200,000	70,000	130,000
丹羽長国(二本松)	100,700	50,700	50,000
酒井忠篤(庄　内)	170,000	50,000	120,000
牧野忠訓(長　岡)	74,000	50,000	24,000
阿部正静(白　河)	100,000	40,000	60,000
上杉斉憲(米　沢)	180,000	40,000	140,000
久世広文(関　宿)	58,000	5,000	53,000
松平信庸(上ノ山)	30,000	3,000	27,000
田村邦栄(一ノ関)	30,000	3,000	27,000
酒井忠良(松　山)	25,000	2,500	22,500
板倉勝尚(福　島)	30,000	2,000	28,000
本多忠紀(　泉　)	20,000	2,000	18,000
織田信敏(天　童)	20,000	2,000	18,000
岩城隆邦(亀　田)	20,000	2,000	18,000
内藤政養(湯長谷)	15,000	1,000	14,000
南部信民(八　戸)	20,000	1,000	19,000
水野勝知(結　城)	18,000	1,000	17,000
林　忠崇(請　西)	10,000	10,000	

（佐々木克著『戊辰戦争』より）

奥羽越諸藩の戦死者数

弘前藩	36(青森)
秋田藩	361(秋田)
本庄藩	13(〃)
亀田藩	15(〃)
矢島藩	4(〃)
仁賀保(天領)	1(〃)
盛岡藩	112(岩手)
仙台藩	1,260(宮城)
庄内藩	283(山形)
米沢藩	283(〃)
会津藩	2,847(福島)
二本松藩	337(〃)
長岡藩	309(新潟)
高田藩	89(〃)
新発田藩	48(〃)
村松藩	1(〃)
草莽隊	11(〃)

このほかの藩の戦死者を加えれば、東北7県だけで、6,500人くらいの犠牲者があったと推定される（仙台市博物館作成）

のは、大正七年の原敬内閣の成立、このあたりだと思いますね。

―― それは、割合早い方ですか。

安岡　僕は、日本人というのはそういう回復力を持っていると思うな。アメリカの場合、南北戦争で南軍が負けて以来、南部から大統領が出るのは、カーターが初めてでしょう。その前にジョンソンなんかがいたけど、これは一種のピンチヒッターですからね。そうすると、カーターが出るまで百十年ぐらい経っているでしょう。戊辰戦争と南北戦争を比べると、規模は確かに南北戦争の方が大きいと言えますけれど、それでも決定的な争いをした点では匹敵するわけですよ。それでいて、日本の南北戦争の方は融和の仕方がかなりうまいというか……。

―― 日本的というか（笑）。

安岡　ええ。しかし、それは必ずしも東北人に主体性がないというようなことではない。融和せざるをえない条件があった。それと、アメリカの南部は歴史的にも文化的にも北部とじゅうぶん割り合える王国のごときものという意識があった。だから戦後の融和もむずかしいのですね。

―― 高橋さんは戊辰戦争の歴史的意味をどうとらえますか。

高橋　なんとなく戊辰戦争で東北は向こうみずのことをやって、ほんとうに馬鹿げたことをしたという考え方になるかも知れませんが、それは結果論ですね。日本の歴史の中でこれを大きく見ると、西の方は西南のはずれにある薩長、東の方は東北のはずれにある奥羽越列藩同盟、東西の辺境同士の対決という形で国家の大きい方向が決められています。これは、結果がどうなろうと、日本史の発展というものを考える上で大事な意味を持つものと思います。過去の日本史にこういうことはありませんでした。日本史のエネルギーが、西と東のはずれにおいても最も強烈な燃焼を見せたということになりますね。それから、会津や庄内の戦いの意味ですが、武家時代というのは七百年続いたわけです。そして武家時代というのは、何はさておき自分の仕える主君に絶対忠誠を尽くすということを最高の道徳として教えてきた時代であるわけです。そういう時に、自分の仕える主君というものを、歴史的な使命が終わったのだから、ハイさようならというわけで、みんな薩長のように天皇の方に鞍がえしてしまって、ほんとうにこれで武士の時代と言えるのかどうか。これは武士道の信義をためす重大な問題です。みんながみんな会津や庄内のようになってしまうのもどうかと思うのですけれど、しかし、七百年の武士の時代を終了するにあたって、やはり会津とか庄内のような藩が一つか二つぐらいはあって、世の中がどう変わろうと武士は武士なんだということをちゃんと見せてくれるのでないと、武士の時代というものが何か淋しい、空々しい感じのものになってしまうように私には思われるのです。「鎮魂」ということになりましょうかね。でもやっぱり、そういう見方もあっていいと思いますね。

戊辰戦争後、列藩同盟の各藩は、たいへん苦労して近代を生き抜くことになります。せめて、歴史の評価だけでも、その程度のことを手向けの言葉としてあげてやるというようなことは、あってもいいのではないでしょうか。

明治政府の東北処分は過酷を極めた。会津二十三万石は、三万石

〝藩〟を背負った男たち

同盟は半年ももたずに崩壊した。六十二万五千石の仙台藩から一万石に満たぬ小藩までの一大同盟。ある藩は徹底抗戦、またある藩は早々と離脱と、結成したものの各藩はそれぞれの思惑の中で苦悩し揺れ動いた。そんな中で藩の方向を定めようと、その運命を一身に背負い山野を駆けめぐった男たち。戦火が消えたとき、ある者は切腹、またある者は裏切りの汚名を着ることになる。

例えば、幼い藩主にかわり、実質上の天童藩の代表者であった中老吉田大八の悲劇は動乱に巻き込まれた小藩の苦悩を如実に物語る。官軍に突き上げられ、いやいや庄内に出兵したが、そのうち列藩同盟に囲まれ動きがとれなくなった天童藩は、吉田大八一人を切腹させ逆に同盟に加わる。官軍と同盟の板ばさみの中で吉田は「二万石の小藩が、私のとった道以外できることがあるならお示し願いたい」と言い残したという。

またタカ派と言われた仙台藩。錦旗を持ち帰った執政坂本大炊、鎮撫使と行を共にした三好監物は仙台藩が同盟の方向に政策を転じるにつれ役を免ぜられる。坂本は白河の戦いで死に、三好は自刃する。といって同盟を結成させた家老但木土佐・坂英力が生を全うできたわけではない。彼らが官軍に処刑されたのは函館で榎本が降伏したその翌日のことである。

八月二十八日降伏した米沢藩。その家老千坂太郎左衛門は白石列藩会議で但木らと共に主導権を握った男である。降伏のあと、奥羽追討軍の先鋒の「御沙汰書」までもらった米沢藩、その討伐軍の中には名を変えた千坂らが混っていたという。

盛岡藩家老楢山佐渡は同盟を離反した秋田藩との開戦を決めた。しかしわずか数週間で敗れ、藩は削・移封。彼自身は反逆主謀により処刑される。一番貧乏くじを引いたのは盛岡藩だったという人もいる。相手の秋田藩家老は戸村十太夫。同盟に加わった張本人として蟄居を命じられていたが、彼は明治十三年まで生きたという。

有名な長岡藩河井継之助。そして会津では藩主の守護職辞任を迫り免職された西郷頼母。彼はのち函館戦争に参加。彼の一族の悲劇は広く伝えられるところである。また明治十年西南戦争で死んだ佐川官兵衛もいる。大藩、小藩の区別なく藩をあずかる重臣たちの苦しみは枚挙にいとまがないが、彼らが守ろうとした藩は明治四年消えてゆく。

に減封の上、酷寒の地、青森県下北半島へ移封。

仙台六十二万石は、二十八万石に減封。藩士たちの多くは、新天地を求めて北海道へ移住する。

東北の人たちは、賊軍の汚名を着せられたまま、近代へ飛び出していったのである。

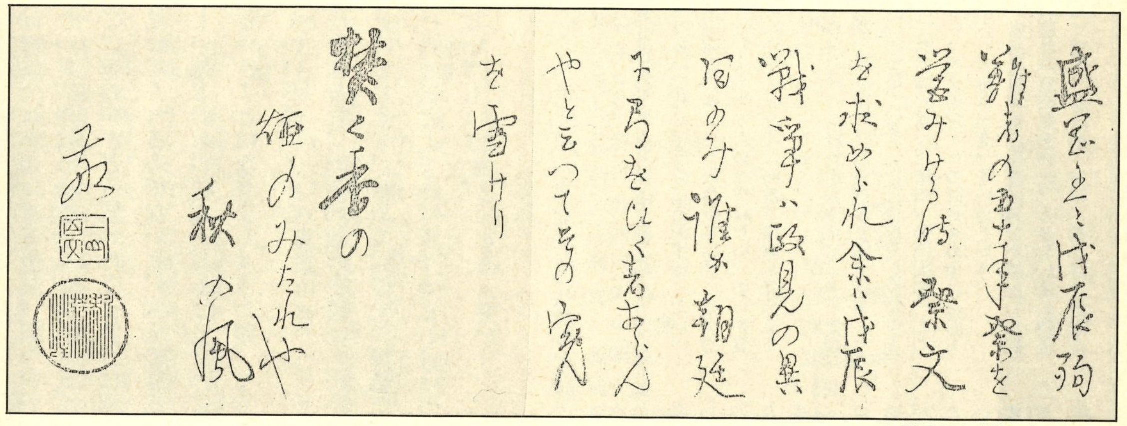
大正六年九月、盛岡市の報恩寺で戊辰戦争殉難五十年祭が行われた。

時の政友会総裁原敬は、郷里のこの式典に出席し、次のような祭文を読む。

「戊辰戦争に官軍も賊軍もない。政見の違いがあっただけである。このことはすでに天下に明らかであり、諸士もって瞑すべし。」

賊軍の汚名を着せられた東北の無念の思いが、旧盛岡藩士原敬の胸中にあったと思われる。

翌大正七年、原敬は、明治維新以来続いた薩長藩閥政権に代わり、日本で最初の政党内閣を組織する。



原敬遺墨（原敬記念館提供）

日本史の中の「みちのく」

高橋富雄

一　みちのく以前

日本史上の東北は、はじめから「みちのく」である。遠い遠いさいはての国。「蝦夷」のすむところ。「あらぶるひとたち」「まつろわぬものたち」の世界。日本史の幕があいたとき、東北はもう、そういう特別世界で登場するのである。

しかし、その歴史の幕あけというのは、『古事記』『日本書紀』にはじまる大和朝廷の日本史のことである。せいぜい千五、六百年このかたの歴史時代のはじまりについていうのである。大和朝廷というのは、弥生時代の米つくりと鉄器使用の文明を政治的に組織して、その支配を全国に広げた政権である。だから、大和朝廷のもとに組織だてられる歴史的諸状況は、さかのぼれば弥生時代あたりからととのえられていたということになるかもしれない。それでも、やっと二千年そこそこの歴史である。

東北が「みちのく」であり「蝦夷の国」である上限は、そこで切れる。それ以前には、「みちのく」というところはなかったのである。「蝦夷」と呼ばるべき人たちもいなかったのである。

それなら「みちのく以前」、元始東北は何であったか、どうなっていたのであろうか。

そこには「みちのく東北」「蝦夷東北」に数倍する長さの東北があった。しかもそれは歴史時代の東北とは異質の文化的使命をおびたところの東北である。「縄文東北」である。「元始、東北は文化であった」のである。

縄文日本は、弥生以降の日本とは全く別の、もう一つの日本である。米つくりも鉄器もなければ、階級も国家もない時代であった。しかし縄文土器は、日本列島全域にわたりムラのない分布を見せ、ほとんど七千年、切れ目のない発展を段階的に経過する。

これは一つの完結した文化体系である。日本列島にはじめて一つの統一をもたらしたところの、最初の日本文化なのである。

この縄文文化は、明瞭に東日本型、わけても東北日本型の文化であった。遺跡の多いこと、土器の出土と器種が豊富で、美術的にもすぐれている点で、縄文文化が東主導型文化であることは疑いなかった。その中でさらに東北が中心をなしていたことも、遺跡・遺物に徴して明らかである。

亀岡土器（青森県西津軽郡木造町）が、縄文末期、近畿以東の全東日本に君臨するような見事な文化の指導性を果たしていることを、ここに思い合わせるだけで十分であろう。

歴史は西南から東北に流れる。歴史時代の日本がそういう国家になって、東北はさいはてのくに「みちのく」になったのである。縄文東北は、その逆に、日本が最初に日本になるときに、その統一への道を「東型」に開くところの「原日本（プロト）」を意味していたのである。

二　蝦夷統一戦争

「みちのく」は「蝦夷」の故国である。ここでは、現在の東北地方のほかに、新潟県の北部から北海道までが「広域蝦夷国」を形成していたから、その範域は、日本列島のおよそ四十パーセントにあたる。それだけでない。日本武尊伝説などでわかるように、「東国」（あずま）と呼ばれた中部・関東地方も、広い意味の「蝦夷の

国」であった。というより、「蝦夷」(えみし)という観念は、はじめ東国についておこり、東国を「あずま」と呼んだのも、「蝦夷の国」の意味で「あずま」(辺鄙の国)だったのである。「みちのく」は、その「あずまの奥」の意味で「道の奥」つまり蝦夷本国とされたのである。「みちのく」が特に「日高見国」と呼ばれたのは、ここが蝦夷中央の国という考えからきたものであった。

これは、中世にはいり、「みちのく」が陸奥国(奥州)というふうに、あまり未知の楽しみがなくなってからのはなしであるが、それでも『太平記』などには「奥州五十四郡、日本の半国」ということばさえあるのである。「みちのく」は日本国の半分もある、ということばが、政治の場で具体的な意味をもって語られていたのである。


藤原三衡画像(毛越寺蔵)

これは大変なことである。日本の国家ができるかどうかの基本にかかわる広さである。そこがいちおう、国家の内に編成されてからのちのことであれば、「道の奥」というのも、「後進的」というぐらいの評価に甘んずることも、あるいはやむをえなかったかもしれない。しかし、これから国家というものの枠組をつくるという国家形成の段階にあって、これだけの地域が、実際に「道の奥」(政治の外)にあり、その人たちが「蝦夷」(まつろわぬ民)としてあって、それで、日本列島に統一国家が成立したとはいえないであろう。

わたしはそのようにして、従来の日本古代国家成立史学は、北日本を国家の外に切り捨てて見切り発車したところの六割国家成立史学だったと思っている。日本列島国家の成立ということを考えていなかったと思うのである。いわゆる蝦夷征伐史観と表裏をなしていた古代国家史観が、そのような古代史学を定説化していたのである。

蝦夷の地域と人々を、どう国家の中に組織するかの問題を、日本史ではこれまで「蝦夷征伐」という形で扱ってきた。これは、すでにできあがっている国家の中に、例外としてまだ残っている辺境の異分子を、付録としてつけ加えるところの悪者退治という発想である。しかし、蝦夷経営は、そのような事大思想で処理できる問題ではなかったのである。

それは、西日本に第一次的に成立を見た古代国家が、残された半分の日本の統一を求めておこしているところの第二次の、そして最後の国家統一戦争である。「蝦夷征伐」は「蝦夷戦争」というふうにとらえ直されねばならない。列島国家がそうしてはじめて成立するという民族的視点を持たねばならないのである。

日本古代国家形成の最終章。「みちのく」「蝦夷の国」は、日本史の中で、そういう問題を提起し続けていたのである。

三　古代と中世の間

みちのく古代末期一世紀半、安倍・清原・藤原の時代は、日本史上、古代から中世への転換を、北の奥から仲立ちしているところの「古代地方の時代」であった。

古代東北はこれまで組織政治を持たないために「みちのく」であり「蝦夷の国」であった。安倍氏は奥六郡、清原氏は山北三郡を支配する現地政治領主となり、源氏にひきいられる武士団と、前九年・後三年の役を、堂々互角にたたかうところまで成長してきている。これが藤原氏になると、みちのく現地勢力をすべて結集・統合して、平泉に一つの独立した地方政権を樹立、一世紀近くのブロック政治を実現するのである。古代みちのく、蝦夷世界には政治はないという基礎構造に、一つの変革がおとずれてきているのである。

地方の独立した政治。それが中世である。藤原氏がその政治を平泉という政治都市に組織することによって、ここに奈良・京都の畿内朝廷政都のほかに、純然たる地方豪族政都が出現することになる。これは、源頼朝が「あずまの国」(東の田舎の世界)に鎌倉幕府を組織して、古代公家の都に代わる中世武家の都の政治をおこすための歴史の地ならしをするものであった。

平泉は政治都市である以上に文化都市であった。武人が持った一流文化の都として、それは、摂関・院政に次ぐ第三の公家でもあったところの平氏の栄華を先がける武家文化の場でもあった。

いろいろな意味で「古代と中世の間」にあって、日本史全体の構造的転換のために、古代末期みちのくの果たした役割はすくなくない。

四　太閤検地と奥州仕置

太閤検地令というと、人はすぐあの「一郷・二郷もことごとくなでぎり仕るべく候」の命令を思い浮かべる。戦国百年の分裂を終結せしめる天下人の専制意志として、これ以上のことばはないと考えられているのである。しかし、太閤検地令というものを、分裂日本を統一日本に再編するための、強権による天下政治と考えるならば、この検地令においてもっと重視しなければならないのは、その次にくる個所であるとおもう。

「六十余州堅く仰せつけられ、出羽・奥州まで粗相にはさせらるまじく候。たとえ亡所になり候ても苦しからず候」。なぜか。いったいこの検地令は、小田原平定ののち、残された最後の未組織日本を支配するという意気ごみで東北に乗りこんできた秀吉が、その東北政治、いわゆる奥州仕置の過程で発令したものである。秀吉には、みちのくを徹底支配すれば、それで例外のない統一政治が完成する、という考えがあった。ここにかつて、天下政治がいきわたったことがないということも、十分知っていた。そこで、日本の統一をなしとげるために、東北に例外を認めることができないということになって、この検地令になったのであった。

日本史の中の「みちのく」ということを、的確に自覚していた政治の実例といってよい。

五　南北戦争

幕末維新の東北史は、「裏の日本史」を一身にになった歴史として、みちのく日本史をいたましく象徴する。

まず、保科正之以来、一度も歴史の表に出されたことのない会津藩が、幕府も斜陽に向かい、だれも火中の栗を拾うのをいやがって尻ごみするときに、しゃにむにくどきおとされて、京都守護職というとんでもないにくまれ役にまつりあげられる。そしてにくしみを一身に負って、あの武力征討にあうのである。

同じように分の悪い立ちまわりに庄内藩も置かれる。まるで無政府状態になった江戸の市中取締役という貧乏くじを引いてしまう。薩摩藩邸を焼き打ちして、天下がそこに見えてきているこの藩の正面の敵に仕立てられて、これも会津と並ぶ二大朝敵にされてしまう。

会津と庄内にはそれでもまだ男らしいところがあった。あわれをきわめたのは、それ以外の東北諸藩であった。仙台藩・米沢藩中心に、北越・松前まで含めて三十一藩が、奥羽越列藩同盟に結集して、反政府戦争をたたかうのであるが、これはもとはといえば、たたかわないための不戦同盟であった。それがその意に反して軍事同盟になってしまうのである。自分たちこそ真勤王で、薩長は偽勤王である、その偽勤王を打倒するというのが、そのスローガンであった。しかしそれが一言の弁解も許されない賊軍として敗れ去ったのである。

積極的に何かであろうとして敗れたというよりも、まわりから余儀なくされて立ち上がり、することなすこと、裏目裏目と出て、敵役・悪役となって敗れ去る。古代以来、みちのくというところの政治的風土はそういうところがらであった。戊辰戦争は、みちのくのそのような千年の政治に最後の決着をつけるところの南北戦争だったのである。

(東北大学教授)

仙台藩タカ派の事情

佐々木 克

「沿海の大藩五国」の藩主を「五大老」として、国政の運営をになわせよう、という意見が、幕末の文久二年（一八六二）にあった。

ここでいう「大藩五国」とは、薩摩藩島津・長州藩毛利・土佐藩山内・加賀藩前田そして仙台藩伊達の五大名をさしている。いずれも、当時における外様有力大名と目されていたもので、この時点における五大雄藩といっても過言でない。

仙台藩伊達氏は表高六十二万五千石、内高は百万石をこえる巨大大名であるとともに、鎌倉以来の名門外様大名たる家柄である。もちろん、東北地方では傑出した大大名であることはいうまでもなく、全国的にみても雄藩たるにふさわしい伝統と実力を備えていた。ちなみに、奥羽越列藩同盟に加盟した藩で、仙台藩につぐ石高を持っていたのは、出羽秋田藩の表高二十万五千石である。

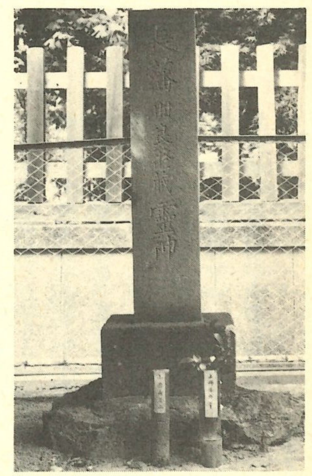
「五大老」の構想は、徳川家の独裁政治に根底からゆさぶりをかけようとするもので、萌芽的ではあるが、外様雄藩による連合政権構想ともいえる性格をつつみもっているものであったが、じつは、これは朝権の伸張をこいねがう朝廷側と、中央政局への政治的進出を企望する薩摩藩との合作による幕政改革意見なのであった。

戊辰戦争が終わったあと、薩長をはじめとする勝者の側は、仙台藩などの東北の地を、そしてそこに住む人びとを、「白河以北一山百文」とあざけりさげすんだのであったが、その数年前の現実の歴史の上では、彼らはこのように、自らの盟友として仙台藩の力にたのむところがあったのである。

以上のような、幕末段階における仙台藩に対する一般的な評価と大大名たる歴史的条件や伝統などが、戊辰戦争期における仙台藩士の思考や行動を、強く規定づけていたことはいうまでもない。つまり仙台藩は、この大藩意識を支えにして、戊辰戦争に一貫して強気の姿勢を固持しつつ、奥羽越諸藩の盟主たることを主張しつづけ、ひとくちでいえば、タカ派の論理と行動をつらぬき通そうとしたのだった。

たしかに、戊辰戦争の初期の段階では、平和的解決のチャンスがいく度かあった。また薩長を主体とする奥羽鎮撫使との応接にあたっても、いまひとつ仙台藩に妥協あるいは協調性があらわれてさえいたならば、戦争はもう一つ別の局面をむかえていたのではなかったかとも思われる。また奥羽越列藩同盟の内部にも、仙台藩の攻撃的な姿勢に批判的な藩も少なくなかった。そうしたハト派の主張が、もっと同盟内で力を得ることが出来ていたら、戦争はどう展開していたであろうか。

結論を先まわりしていえば、多少極論する気味もないではないが、東北地方を戦乱の巷にまきこんだのは、仙台藩の強硬派が、その責任のかなりの部分を負っている、といってよいのではないかと思われる。


福島稲荷神社にある世良修蔵霊神

会津藩の処分問題をめぐって、仙台藩がどのように動くか、諸方面から注視されていたが、この藩の対会津藩交渉の場における姿勢は、一貫して、会津藩に恭順・謝罪を勧める強硬なものだった。


仙台藩主伊達慶邦（仙台市博物館蔵）

この仙台藩の態度の背後にあるものは、会津藩を威圧的に屈伏させることによって、当面の戦争をさけようとする計算であり、またそうした強圧的姿勢の効力を信ずる、大藩としての自意識であった。

この段階での仙台藩は、反政府・反薩長的意識がとくに強かったわけではなかった。会津藩問題を解決にみちびくことが、国家の趨勢を決する立場に参画することであることを自覚し、従ってむしろ、政府方針にそった方向で動いていたのである。そしてそのような仙台藩の動向に、東北の諸藩さえも、当初は決して批判の目を向けてはいなかったのである。

仙台藩全体がおかしくなってくるのは、薩長兵を主体とする政府の奥羽鎮撫軍が仙台に入ってきてからである。鎮撫軍の参謀長州藩士世良修蔵らの薩長兵の暴慢さや、仙台藩士の感情をさかなでするような態度は、後世に至るまで語りつがれているが、そのような世良らの態度は、奥羽の大藩を意のままに御そうとした軽輩出身の世良の、気負いが裏目に出たという面もあるけれども、仙台藩士が世良らを軽視した、挑発的な姿勢も無視できない。

結局、仙台藩は政府の参謀世良修蔵を暗殺してしまうという大失策をやってしまった。たとえ仙台藩側が、世良は天皇の意志を代弁する真の王師とはいえず、私意をもって会津処分にあたろうとするものである、というアピールをしても、それはあくまでも失策をとりつくろう詭弁でしかなかった。結果として、この仙台藩の論理は、奥羽諸藩を結集する、表向きの論理にはなったけれども、同盟諸藩のそれぞれは、決して心から、その理屈を信じていたわけではなかった。

秋田藩の場合、同盟結成の前提となる諸藩重臣会議に出席する際に、すでに仙台藩のタカ派への傾斜に警戒の色をあらわしてさえいた。

慶応四年（一八六八）閏四月二十日、仙台藩士が世良修蔵を暗殺する。そして、二十二日、仙台領白石において、東北諸藩の連合が成立する。奥羽越列藩同盟の前身である白石同盟である。この時、五か条の盟約書が作られた。そのなかの一か条に次のような文言があった。

一、大事件は列藩衆議を尽し、公平の旨に帰すべし、軍事の機会、細微の節目等は、集議に及ばず、大国の号令に随うべき事。

この盟約書は仙台藩で作られたものであったが、同盟の運営は列藩の協議を原則としながらも、明らかに大国すなわち仙台藩の強い指導性を主張するものとなっていた。

また同じ頃、東北諸藩連名による太政官への建白書も起草された。原案を作ったのが仙台藩であるが、その建白書は、薩長兵を非難弾劾して、彼らを「国賊」とまできめつけて、朝廷から「国賊追討」の綸旨を受けたいとまで要望する厳しい内容のものであった。仙台藩内部にも穏健派がいたが、すでにこの頃は排斥されて発言力を失い、強硬派が藩論を牛耳っていた。世良暗殺の頃から、仙台藩は硬派の主張と行動がかもしだす、一種の異様なタカ派のムードに酔

っていたともいえよう。
　このような仙台藩の姿勢にたいして、ハト派を代表する米沢藩と秋田藩がまず抵抗した。太政官への建白書は、仙台案ではあまりにも過激すぎると主張し、「国賊」云々は削除される。全体として建白書は、朝敵の寛典処分を歎願する穏和な調子に改められた。また盟約書の「大国の号令」云々も除かれ、列藩衆議による同盟運営の原則がより強くうたわれた綱領となる。少なくとも、仙台藩タカ派の独走にはブレーキがかけられたかたちで、五月三日、仙台で奥羽列藩同盟が正式に結成されたのであった。そして翌日から越後の長岡藩他が加盟して、奥羽越列藩同盟となる。

＊　＊

　好むと好まざるとにかかわらず、奥羽越列藩同盟の結成を期に、諸藩をとりまく状況は切迫し、戦闘へと突入してゆく。五月末には同盟結成を主導した仙台・米沢の両藩が朝敵あつかいとなり、政府は会津・庄内両藩とともに、奥羽越列藩同盟を反政府的敵対勢力とみなして、全面的攻撃に移ったのであった。
　戦況の切迫とともに、同盟も必然的に性格がかわった。政府軍の攻撃をくいとめるためにも、初期の平和的な同盟から攻守軍事同盟へと性格をかえざるをえなかった。そして皇統をつぐ上野輪王寺宮を同盟の盟主にむかえて、仙台・米沢両藩主が同盟の総督となり、旧幕府閣老が参謀や軍事総裁に就任するなど、軍事同盟としての組織が急速に整備されていった。そして同盟の本拠を白石城において、同盟諸藩の代表が詰めて、日々軍議や同盟運営のための列藩会議を開いていた。
　しかしここに至るまでにも、仙台藩は独自な動きをみせていた。はじめ仙台藩は、鎮撫総督九条道孝を仙台城下に足どめして、なかば拘禁状態におき、九条を手中にしている事実を背景にして、東北諸藩に対する指導権発揮のテコとしていた。しかし、同盟結成を期に、九条が盛岡から秋田方面に転陣することになると、九条の代わりに輪王寺宮を仙台に連れてこようと計画したのであった。
　また仙台藩は、同盟の作戦基地である軍務局を、前線に近い白河に移そうという要望が同盟諸藩からもちあがったとき、強い不満をもらしたといわれているが、輪王寺宮の件とあわせて、この仙台藩の動きは、同盟内におけるリーダーシップの独占を主張してのものであったことは明らかであった。
　このような仙台藩にたいして、当然のごとく列藩から不満の声があがった。そもそも、同盟結成の精神は、すべて同盟にかかわることは列藩の衆評で決しようということであったはずである。にもかかわらず、仙台藩の動きは、そうした原則をふみにじる自己中心的な主張と行動であった。この頃から、「仙台藩の陰謀」というような批判の声があがり、また同盟内の様子も「仙台盟主の義、諸藩物議の次第あり」といわれる状況が生まれつつあったのであった。
　このように同盟は、その結成まもなくから、結束にヒビを生じるようなゴタゴタをかかえていた。くり返すが、その一番の原因は、仙台藩のタカ派の主張によるものであった。そして同盟を結びながらも、二大リーダーであるべき米沢藩とは、ハト派の米沢とタカ派の仙台として対立傾向を最後まで持ちつづけたのである。それゆえにこそ、同盟は、まもなく秋田藩や津軽藩等の要地にある同盟有力藩の離反を生んでしまい、また南部藩なども、必ずしも同盟の軍事行動に当初から積極的な協力体制をとらなかった、という事態をひきおこしていたのである。
　すでにふれたことであるが、仙台藩の大藩意識が、自意識過剰となり、同盟のリーダーたること及びそのメンツにこだわりすぎて、同盟の運営にブレーキをかけることになっていた。また軍事的にも、仙台藩の軍団は、統一的な訓練をかいていて、戦線の各所で惰兵とまでいわれて評判を落としていたのであった。
　戦時に、軍事面で弱体とみられる者が、伝統的権威のみで同盟の主導権を維持・主張できるような時代ではなかった。同盟は、たしかにさまざまな利害の対立と多様な権力意志をもった諸藩の集合体で、かつ切迫した戦時下にあわただしく結成されたという特殊な事情にあったけれども、同盟を維持強化してゆこうとする強い意志があったならば、同盟列藩の協調関係をより強化してゆこうとする努力以外に生き残る途はなかったのである。その意味でも、同盟が解体し、敗北してゆくのは、時間の問題でもあったということが出来る。

（京都大学助教授）

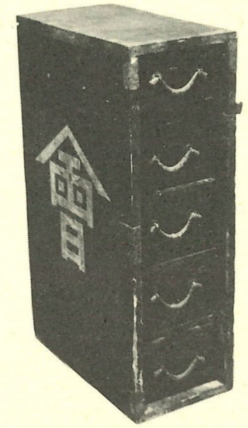
戊辰戦後処理秘話

北　篤

奸軍無道

「西軍の芋侍どもめ！　成り上がりには〝武士の情け〟ということすらわからんのか！」
　伴百悦といい、旧会津藩士で、塩川の謹慎所にあった。落城後、城内兵は猪苗代に、城外兵は塩川に謹慎の身であった。しかし鶴ケ城内や領内の至る所に、東軍戦死者の遺体が累々と放置されていた。占領軍の命で埋葬が禁じられ、手を触れることも許されなかった。これら遺体に野良犬が食らいつき、残りを鳶がねらった。戦争は終結したのに、次の暴虐が始まったのである。
　たちまち腐乱がすすんで、目をおおうばかりになり、悪臭が鼻をつく。軍政役人もやりきれなくなった。
——悉く薬師川原の罪人塚へ運べ！
　情報は謹慎所にほど、いち早く伝わってしまう。伴は会津人らしく一本気で、熱血漢だけに身を震わした。
「もう許せん、愚弄するにも程がある！　孝明帝から奴らは〝奸賊〟とされながら、卑劣にもすりかえて我らを朝敵とぬかし……そのうえ国に捧げた者達まで、罪人塚（旧刑場）にとは何たることぞ！」
「貴殿……だからとて、どうする気か。」
　同輩がその剣幕をみて、とらわれの身を案じた。
「斬る！　忠勇の霊が浮かばれん、監察めを斬って捨てる。」
　制止をきかず、夜陰にまぎれて謹慎所をぬけ出した。民政局の宿舎に忍びこみ、怪音を出しておびき出した。成敗する理由を告げると、ほぼ一太刀であった。越後へ逃れたが、住民達も伴をかくまってくれた。西軍の追及をかわし、彼は転々と居所をかえた。やがて新津郊外、大安寺村の慶雲庵に身を寄せる。
　さて戦後処理の全貌となれば、この枚数では至難になる。また会津戦争が最も苛烈、戦死者数をみても、一藩で他の奥羽越諸藩全体に匹敵する。従って焦点を絞り、主に会津藩を追わせていただきたい。
「もし官軍さま……それはあのう、御先祖の仏壇でおざいやす。そればかりはどうか……御勘弁お願いしやす。」
　或る商家の主人で、西軍士卒が運び出そうとするのを、地面に坐って哀願した。西軍は「分捕り」と称し、目ぼしいものがあれば、民家の財貨を勝手に処分した。ただし公式には許されず、新政府も禁止令を出したものの、名目だけで放置していた。
「会津漆器は逸品と聞いたが、なるほど塗りのつやと言い、高く売れそうだわい。」
「御先祖様に申し訳が立たんことで……。」
「町人のくせに、つけ上がるな！　てめえらは占領されているんだぞ！」
　土足で額を蹴った。商人は転倒し、額には血が滲んだ。たまたま近隣の農家から、この商家に若者が用事で来ていた。
「じべた（地面）に坐った者まで足蹴りして、それでも官軍さまかよ！　おら家は昔からお世話になってるで……これ、聞いてみんなんねえ（伺い立てる）。」
「無礼者！」と言うや、白刃が閃めき、若い農民は袈裟ぎりであった。軍監名を以て——抵抗する者は身分を問わず、切り捨て勝手、と通達


斗南に向かう会津藩士(会津武家屋敷蔵)


会津藩の火薬箱(会津武家屋敷蔵)

されていた。そこで商人は屋内へ追いたてられ、自分の仏壇を背中へ載せられ、荷車まで運ばねばならなかった。これら盗品を駄馬で郷里へ送り、または城下で露店を開き、他国の仲買人らに売り飛ばした。

町家は三分の二が焼け残ったから、「薩州分捕」「長州分捕」と記し、公然と貼札した。そこで呉服商森田七郎右衛門の土蔵を巡り、薩摩と肥前で奪い合いになる。薩摩側の旗色が悪く、その腹いせに、焼玉を土蔵に投げつけて破壊してしまった。

城下を戦場にして、敗れた後ほどむごたらしいものはない。まして藩士らは囚われの身とて、西軍士卒の欲するままだった。婦女暴行もその一つ、籠城戦の時からで、軍政下ではもっとひどくなる。

「おっ、来たぞ、来たぞ……うまくやれ。」

「なんだ、ありゃ……まだ小さいでねぇか。」

彼らは一軒屋に闖入したり、農作業中まで襲ったりしている。ただ望むは町家の娘や、藩士の妻女らである。だが警戒しており、機会は滅多にない。ところで会津戦争では城下を急撃され、混乱から一家四散も多かった。戦いやむや、家族の行方を求めて、屋敷に立ち寄る者があった。士卒らはこれを知ると、空家に隠れて待った。

数え十四歳の少女で、暗くなってから忍んで行ってみた。そこに思わぬ人影……驚いて逃げ出すと、兵士は「違うよ」と笑いかけた。

「お家の人の行先だろう?」

少女がうなずくと、「あそこに知っている人がいるから」と空家に誘導した。三人の兵士がおり、「ふん、役に立つわ」とにやりとした。

少女が案内兵を振り向くや、態度は一変した。哀願し泣き叫ぶのを、奴らは次々におかすのである。少女は失神してしまい、それでも輪姦を続けた。四人が終わると、焼跡に放って逃げている。

しかし堂々と陣所に、会津女性を何人も囲った士官らがあった。生活苦につけ込んだり、時に力ずくで、部下達が集めてきた。

「何たる傲慢、非道!……会津への侮辱を、拙者はこれ以上忍び難い。」

「さよう、これを捨て置いて、会津武士の面目は立たん。どうせ生ける屍同然、天に代わって裁いてやろうでないか。」

謹慎所で騒ぎ出し、何人かで計画をねった。たびたび襲撃事件が起こっており、占領軍士卒が惨殺された。会津藩士も銃弾に斃れたが、占領軍は会津士魂の凄まじさを知る。暗殺に脅え、治安責任を案じて、かなり会津女性を手放したとか。

美名に隠れ

初岡敬治は秋田藩士で、だから奥羽越側に立つべきなのに、

「会津・庄内は乱賊の巨魁でございまして」

と旧禄高の十分の一を主張し、

「次に米沢は近隣の小藩を扇動し……。」

処分に関し、意見を求められた際である。厳罰論と寛典論に分かれたが、同盟側はこんな内部分裂が多く、自滅への道を辿る。

新政府は逆に寛大さをアピールし、御一新を美化しようとした。だが実情は宣伝と裏腹で、処分基準は西軍への忠誠度で測られた。会津に最も苛酷で、実質二十八万石から三万石に落とされた。同盟主の仙台でさえ、六十三万石から二十八万石へ、半分以下程度である。逆に米沢は途中から寝返ったので、僅か四万石減、軽すぎると言われた。また秋田、津軽、三春、新庄……など、同盟脱退、征討軍協力から、なんと「賞典録」が与えられている。

世に政治裁判と言い、「勝てば官軍」の警句をうんだ。会津は「謝罪」のため、家老萱野権兵衛が藩主に代わり、主謀者の名で切腹した。藩士らは謹慎所から、東京や高田に移されて「永御預」となる。だが政府は高田に扶助料を出すと明言したのに、財政難とはいえ、約束を守らず嘆願も却下した。盛岡藩など白石に移封、人々は家や家財を売って移転費にした。しかし翌年は旧領に復帰、しかも奪われた地を、七十万両で買い戻せという。

新天地の夢

——家名再興を認められ、同志と一緒に新天地へ行けりゃ言うことない。

——然り、三万石だろうと、北の果てだろうが、高田の頃とは違うぞ。

斗南藩と言い、会津藩士に青森、岩手の一部が与えられた。高田では脱走者が相つぎ、捕まって斬首されたのもいる。また栄養失調から、発病、死亡が続出した。それだけに北辺に夢を求め、士族四千三百余世帯から、二千八百戸が移住した。先発隊が田名部に着くと、町民達は軒提灯で歓迎し、一行は感激し勇気を与えられる。

明治三年春から十月まで、約一万七千人が入植し、本州北端の冬が訪れた。

「この子等を思うと……これ以上こんな所におるわけには参りませぬ」

島崎家では十二月に、老母が急に弱って他界、一月には九歳の子が高熱で死んだ。

「これしきでとり乱し、会津武門の妻として恥かしくないか。城下戦に留守の妻子はどうしたか、自決したのを忘れてはいまいぞ!」

「武士の片意地など、もう真平でございます!だから会津藩はこんなざまになって……。」

〝新建〟の掘立長屋に、海風が荒れて戸を破られた。代わりに筵を下げても、炉端で零下十度になる。粥を湯でといてすすり、米俵の中に潜って寝る。四合の給米こそあったが、必需品入手のため、浮かして売った。だがこの冬さえ越せば、と直澄は開拓に賭けた。

斗南は公称三万石、実収七千五百石という。火山灰の不毛地か、泥炭地に葦の群がる低湿地帯である。それに水の便悪く、春おそく冬は早く、冷害が瀕発した。稗、大根、大豆ぐらいしか出来ず、米は正月だけ、他藩の回米に頼る。

百姓さえ捨てた原野に、素人の武士がどうして成功しよう。髪を乱し、痩せこけ、疲れ果てながら、発芽さえしない畑を、恨めしくみつめる。それに現地人と言葉が通ぜず、彼らも二本差しを敬遠した。

——あれ、〝鳩ザムライ〟がおるぞ。

——しっ!聞えて怒らせたら、何されるかわからんよ。

鳩と呼ぶほど、食に窮して馬の飼料大豆さえ食ったからである。さらに野のアサズキ、オンバコから、海藻の根、松の白皮まで何んでも漁った。「ゲダカ(毛虫)武士」とも陰口され、脚気がふえ頭髪も抜け落ちた。

「こうなりましては体でも売る他には……。」

「狂ったのか、叩っ斬るぞ!」

救いを求め、息子が近くの柴家へ走った。柴氏が駆けつけ宥め諭すが、遂に島崎家は一家離散となってしまう。その柴家も窮地にたち、飢えと寒さに苦しむ。幸い犬の死骸を手に入れ、塩茹でして連日それが主食だった。五郎少年は鼻につき、呑み込めなくなる。

「武士の子たるを、五郎は忘れたか!戦場にあれば、犬猫とて食うて戦うものぞ。ここは戦場なり。賊軍に追われ、辺地に来たるも、会津の国辱を雪ぐに、何と忍耐の無いことか!」叱責しながら、目尻に涙が宿った。

発病は月を追ってふえ、合計二千三百人を越えた。

斗南移住とは別に、北米に新天地を求めた一行もあったが、壮大な夢も潰れてしまう。斗南の死者は数知れず、多く無縁墓地に葬られた。その霊達は成仏も出来ず、鬼哭啾々、今なお斗南の荒地をさ迷っている。開墾地に闇が迫ると、それらの声が湧き上がってくるようであった。

(作家)

戊辰戦争と南北問題

加瀬俊一

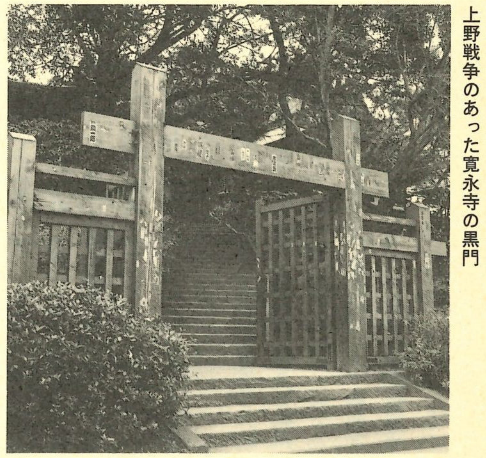
一

米国史に南北戦争と俗称される内戦は、一八六一年四月から六五年四月まで四年も続き、『風とともに去りぬ』――いまでも聖書に次ぐ万年ベストセラーである――に描写されているように凄惨を極めた。破壊の規模において、数か月たらずの戊辰の東北戦争とは同日の談ではない。だが、南北戦争が終わって僅か三年後に、この戦争が起こったので両戦争を比較すると色々と面白い。

南北戦争は北が二十三州、人口二千二百万に対し、南は十一州九百万、その三分の一は奴隷だった。北軍は二百八十万、南軍は百三十万の兵を投入したのであって、数のうえでは北が圧倒的に優勢だった。戦死は北軍三十五万、南軍二十五万、合計六十万であるが、戦傷者はその数倍にのぼり、非戦闘員の犠牲も多かった。戦場が南部だったから、南部諸州が大きな損害を受けた。戦費は両軍あわせて五十億ドルだが、戦後の再建には三十億ドルも必要だった。南部の所有していた奴隷財産は四十億ドルといわれたから、戦費と再建費はそれよりも遙かに大きかったわけである。

南北衝突の主因は、一般に信ぜられているのとはちがって、奴隷解放問題ではない。由来、北部とくにニューイングランド地方には清教徒(ピューリタン)的伝統が強く、理想主義的な改革運動に共鳴する精神的風土があって、現に禁酒運動なども活発に推進されていた。折しも、ヨーロッパ各地において反奴隷制度気勢が盛んにあがったので、これがニューイングランドに感情移入され奴隷解放運動も熱心に支持されたが、つぶさに実情をみると、北部諸州の態度は必ずしも奴隷制度廃止に固まってはいなかった。リンカーンが大統領に就任したのは一八六一年四月だが、彼にしても当初は南部諸州に既に存在する奴隷には手をふれる意思はなく、北側は奴隷制度が新しく開拓されるテリトリイ（新領土）に持ちこまれるのを阻止することを主眼にしていた。これは、南北の経済力のバランスが南部に有利になるのを防止するためだった。

もともと、南部の植民者は北部と性格がちがう。北の植民者は新天地に信仰の自由を求めて渡来したのだが、南の入植者は、むしろ、財貨の獲得を目的にしていた。そして、綿花栽培が発達するに従って奴隷労働は南部経済の基盤になり、これを廃止すれば経済システムは崩壊をまぬがれなかった。わずか三十万の大地主――プランティング・アリストクラシィ（植民貴族）と呼ばれた――が三百万の奴隷を所有しており、彼等の勢力は中央政界に隠然たるインフルエンスを行使していたのである。彼等にしても奴隷制度が人間平等の倫理観に矛盾することは知っていたが、制度を死守する必要から種々の理論を唱え、ついには、ディヴァイン（神聖な）システムだと強弁するに至った。もっとも、アンクル・トムス・ケビンのような物語とはちがって、親身(しんみ)になって奴隷の面倒をみる温情的なマスターも多かったのである。それに貧


上野戦争のあった寛永寺の黒門

しい白人階級――プーア・ホワイトたち――は奴隷の存在によって僅かだが誇りを保っていたという事実もある。

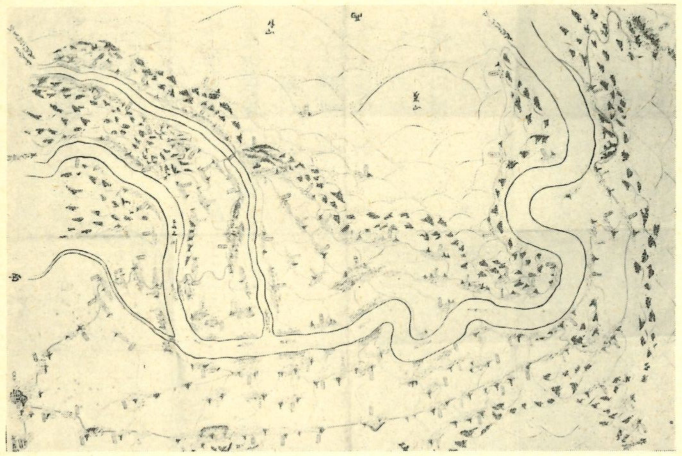
二

ところが、年とともに北部の工業化が進むに従って、南部との間に経済的利害が鋭く対立し始めた。北部の新興産業は保護関税の設定、各種の企業優遇措置（例えば政府補助金）の拡充、銀行制度（各州が独立した紙幣を発行していたのをやめて連邦銀行だけの権限にする）改革などを主張していたが、綿花などの農産原料を輸出し工業製品を輸入する南部諸州は強くこれに反対した。パシフィック・レイルウェイ（大陸横断鉄道）の建設をめぐっても、南北の意見は衝突する状況になった。つまり、先進タイプの北部と後進タイプの南部の反目であり、進歩と保守の対立だった。多くの史家は南北戦争は北が奴隷解放を強行したために起こったとか、また南がステイト・ライト（州権）を擁護するために挑戦したとか説くが、それも一側面であったにしても、真相は北の工業と南の農業の経済システムの宿命的対決だった。仮りに、南部の指導者が北部の保護関税その他の要求を容認したら戦争は避け得たかといえば、終局的には恐らく衝突は避け得なかったろう。ここに、戊辰戦争と共通するものがあるように思う。西軍（薩長）は進歩、東軍（東北列藩）は保守、西軍は明日の勢力であり、東軍は昨日の勢力である。

とはいえ、北部も南部も内部分裂になやまされたのであって、リンカーン大統領にしても有権者の三分の一の支持で当選したマイノリティ（少数）プレシデントであり、与党の派閥抗争に苦しんでいた。南部のコンフェデラシイの大統領に推されたジェファソン・ディヴィスも南部連合の分裂を防止するのに苦心を重ねた。現に、南軍の根城に当たるヴァージニア州――その首都リッチモンドに南軍大本営がおかれた――の一部は分離してウエスト・ヴァージニアになって行動を共にしなかった。だが、概していえば、コンフェデラシイは奥羽列藩同盟よりは強固に団結していた。それは同様に生存権を脅威されていたからだろう。いずれにしても、リンカーンは農民的直感をもって、また、ディヴィスは貴族的感覚によって時局に対応したのであって、ある時期までは、共に妥協を模索したのである。前記のように、明らかに劣勢な南部が決起したのは、敵を軽視したからであり、また、南部アリストクラシイには騎士的自負があって、ヤンキイごときに屈伏するのを潔(いさぎよ)しとせぬ心情を抑え得なかった。この辺は会津が薩長に対して抱いた反感に似たものであろう。別しては、南部はイギリス、フランスの支援に期待していた。事実、英仏の上流階級は南部公債を大量に買った。グラッドストーンは南部の勝利を希望すると公言（一八六二年）したし、ナポレオン三世は南北平和の仲介を申し出た（一八六三年）ほどである。こういう情勢にもかかわらず、南軍が敗北したのは資金に劣り、装備に劣り、北軍の海上封鎖によって補給に窮したからである。

南北が破局回避の努力を続けている間に、サウス・キャロライナ州が暴走し、チャーレストン港の政府要塞フォート・サムナーを攻撃したので、ついに全面戦争に突入した。世良参謀の斬殺が東北戦争に点火したのに、やや似ている。

戦争は南軍の惨敗に終わった。その結果、南のプランティング・アリストクラシイは滅亡


維新戦乱両軍配備図（今田信一氏蔵）

し、代わって北のキャピタリストが国政の支配権を握り、ここに米国の一大社会革命が始まった。北軍は南部を占領して苛烈に弾圧したので、南の北に対する反感は今日も残っている。南部は「白河以北ひと山百文」よりもヒドい差別待遇に長く堪えねばならなかった。南北戦争終了後七年たって恩赦令が出たが、それでも、南部の復権は一八九八年まで、さらに四半世紀も待たねばならなかった。この年、米国はスペインと開戦したのである。だが、南部からカーター大統領が選出されたのは、その八十年後のことである。日本では戊辰戦役の五十年後に東北出身の原敬が組閣している。

三

戊辰・南北戦争はともに先進対後進地域の抗争としてとらえ得るが、実は広い意味の両者の対立こそ現代世界の当面する重大難問なのである。ある点では、東西（米対ソ）の緊張よりも南北（先進対後進）のマサツのほうが世界平和にとって険悪な脅威になりつつある。いまや、世界政局の重点は東西問題から南北問題に移ろうとしているのである。

消息通は一九八〇年代は不確定要素に満ちていると分析するが、その最も不透明なのが南北問題だともいえよう。

歴史は戦争が国内的にも国際的にも水平運動を起こすことを教える。両次の世界大戦の結果、多くの王室が倒れ貴族が亡びたのは国内的水平運動のためであり、また、多数の植民地が独立して新興国家が群生したのは国際的水平運動のためである。新興国家は、いま、国際連合に加盟する百五十四か国の圧倒的多数を占めている。なかには人口百万以下の小国も少なくない。セイシエル（六万）、サントブリンシベ（八万）ジプチ（十万）、カタール（十万）などは通称ミニ・ステイト（微小国）というが、これが中国（八億五千万）、米国（二億一千五百万）、日本（一億一千万）などと同じく一票を行使するのは非合理的である。いずれにせよ、新興国が結束すると容易に国連総会の多勢を制するので、ややもすると数の暴力を許す結果になりやすい。その新興国の大部分は南の貧しい開発途上国なのである。また、彼等は非同盟七十七国グループなるものを組織しており、国際政局に大きな影響を及ぼすが、そのリーダー格のキューバはソ連の利益代表のような行動をとることが多いので、事態は複雑である。

一九七四年以来、南の開発途上国群はメキシコの提唱した「新国際経済秩序」の樹立を要求し、露骨な資源ナショナリズムを強調している。彼等は資金、技術のみならず政策決定権までも獲得したいのであって、北すなわち先進資本主義国が「過去の搾取の代償として」早急にこの要求に応ずることを期待する。だが、余りにも性急なので、北としても効果的対応に苦しんでいるのが現状である。

現在、開発途上国の人口は三十億で世界総人口の四分の三を占めるが、そのうち十億は石油を産出せぬ最貧国群に属する。これらは石油・食糧の価格上昇に悩んでおり食糧不足は一千百万トンに達し、毎日多数が餓死している。途上国でも産油国は巨額のオイル・ダラーを持っており、一九八一年の累積資産は四千億ドルにも達しそうだが、同年の最貧国の累積赤字はほぼ同額と推定される。しかも、四十年後には世界総人口は倍増して八十億になるが、その大多数は南の貧窮国に集中するはずである。彼等は職と食を求めて大量に国外に移動し、それだけでも世界経済を攪乱するにちがいない。だから、速やかに南北格差を調整せぬと由々敷い事態を招こう。南北問題を検討するブラント前西独首相は戦争を誘発する危険があると警告している。南は北にとっては原料の供給源であると同時に製品市場でもあるのだから、南が窮乏しては北は立ち行かぬ。つまり、南北は村落共同体のようなものであって、共存せねば共亡するほかない。だから、南の運命に対して冷酷に構えるのは、北の自殺行為になる。海洋海底開発、森林保全、環境保護、食糧増産等の協力ばかりでなく、南が荒廃すれば気象条件まで悪化するのだから、人類が生き残るためには北は犠牲を忍んで南を援助せねばならぬ。

日本は米国に次ぐ世界第二位の経済大国になったが、米国の国際的指導力が大きく減退した今日、進んで南北調整に積極的役割をはたすべきである。今夏のオタワ・サミットにおいては南北問題が重要課題になるから、まさに、日本外交の正念場になる。

（評論家）






闇に紛れて，忍びの者が……

忍者のエリートになる法

「忍者」たる者、三十分間に水三升、酒三升を飲み干し逆立ちして三町を歩く。また、百間離れた所から針が砥石に落ちる音を聞き分け、十間向こうの行灯の火を吹き消すこともできる、など——と『上忍定本忍秘帖』に描かれている。さながらスーパーマンである。また、忍者の養成には、厳しい鍛錬のほか、難しい試験も行われたという。現代の受験競争なみだったらしい。



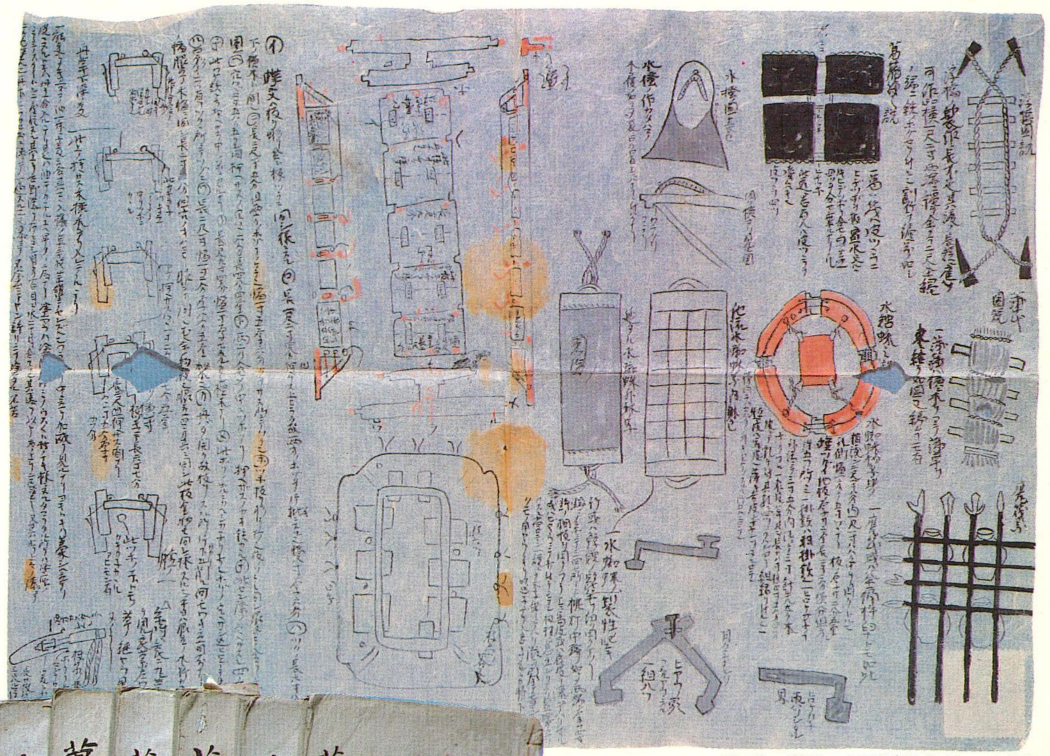
忍びの者は情報化時代の尖兵

古来、伊賀の国は「忍びの里」と言われ隠れ国である。重畳と連なる山並みに囲まれた盆地は、長く権力の支配下に入らず、無数の豪族が割拠して抗争を繰り返す日々だったというが、忍びの術は、こうした背景のもとで、情報収集のプロフェッションとして生まれたのである。伊賀国高山の忍者高山太郎次郎ゆかりの民家を移し、上野公園のなかにいわゆる忍者屋敷として残っている。外観内装は他の農家とまったく変わらないが、屋敷の処々に自衛のために仕掛けた特殊装備がある。

伊賀上野忍者屋敷



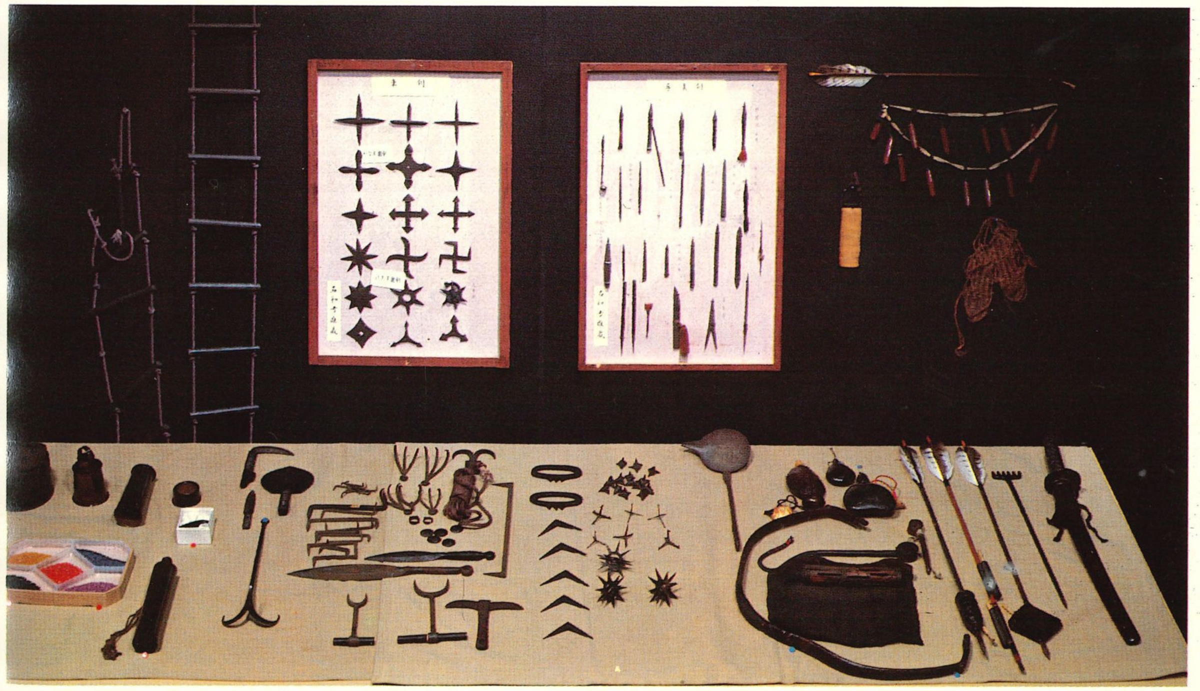
忍者屋敷ではくノ一が忍びを実演



忍びの道具の図解(勝井景一氏蔵)



忍術の書『万川集海』
(勝井景一氏蔵)



忍者が使う忍びの道具は数多い(名和弓雄氏蔵)

他藩へ技術流出

伊賀の国とともに、「忍者の里」として名高いのは、近江の国、甲賀である。

伊賀と同じく京都から八十キロばかりの道のりだが奥深い山々に閉ざされたところが、忍者に似合う風土である。

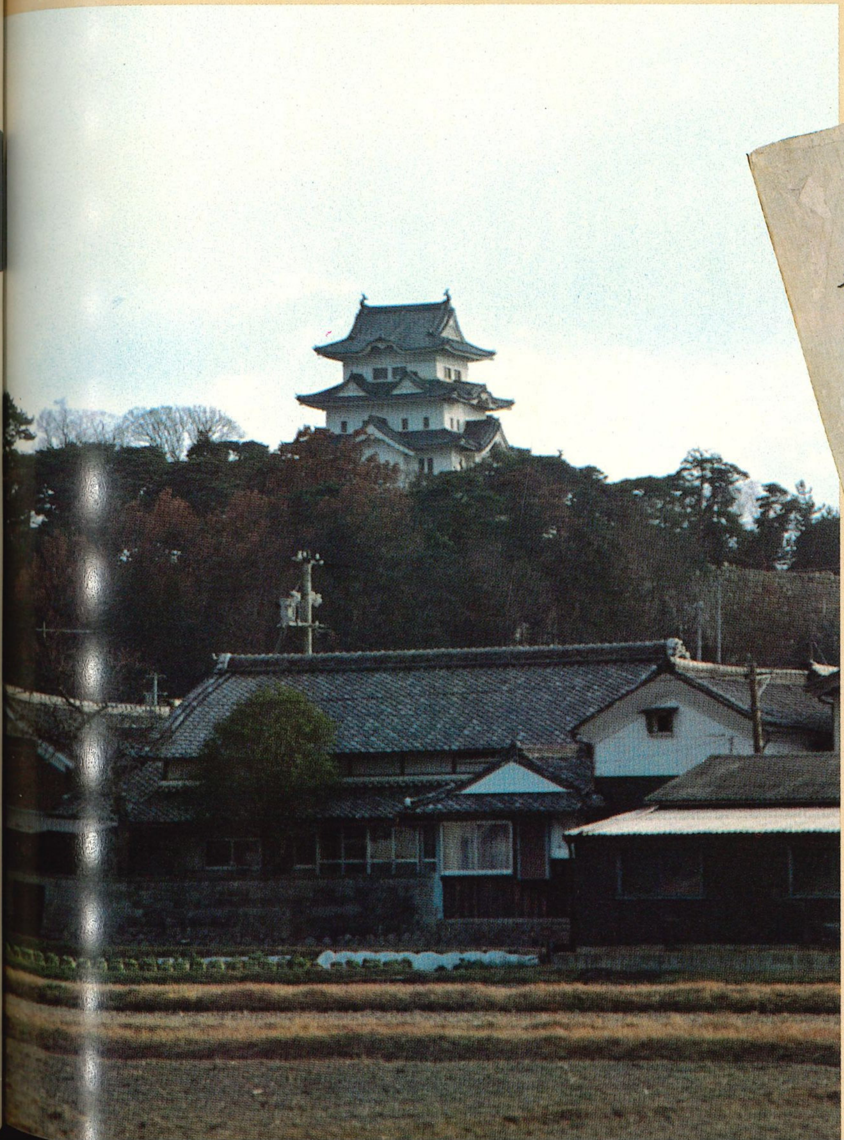
忍びのプロフェッショナルたちは、主として山地に適するゲリラ戦略を得意とした。彼らは戦国時代にもっとも活躍し、これらの術を売り込んで他国の領主に召し抱えられるようになった。

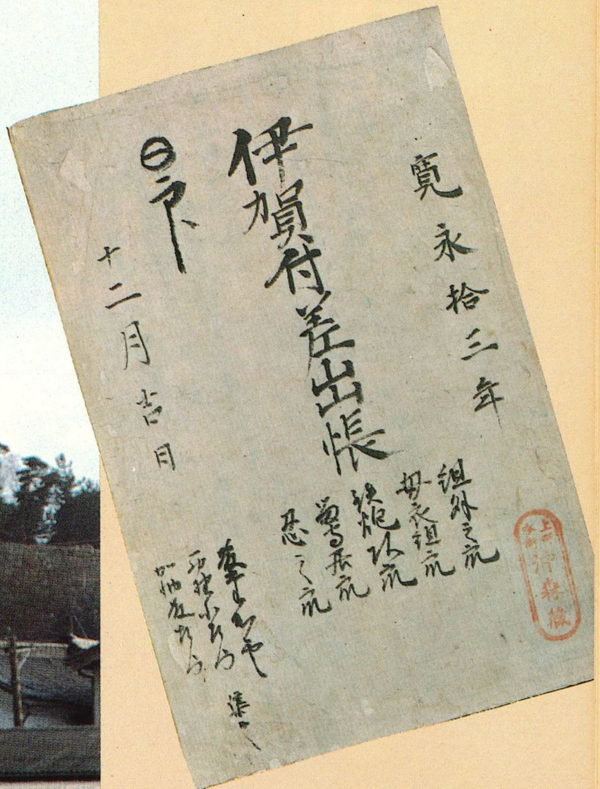
忍術の秘伝は、ひたすら体得するものであるとされ、従ってもっぱら訓練と口伝（口述による伝達）の方法がとられ、筆録による秘伝の盗難を恐れたものらしい。



織田信長は子の信雄に丸山城を築かせ、伊賀攻略の火ぶたを切った

伊賀上野城

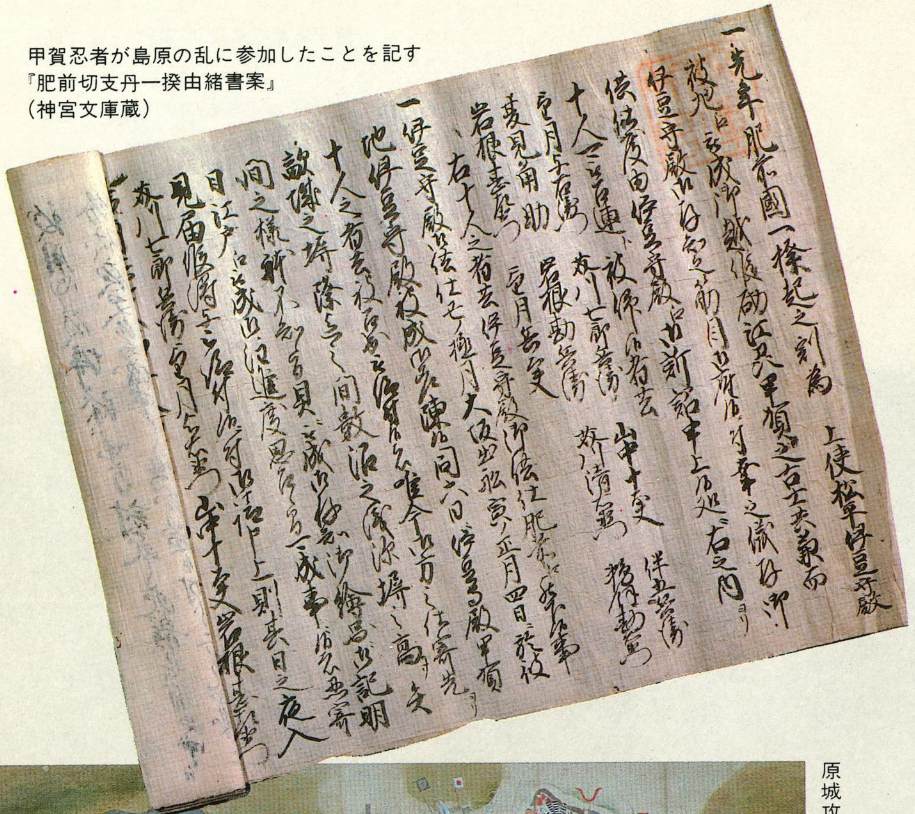



寛永拾三年
伊賀付差出帳
十二月吉日

藤堂藩直臣の名簿『伊賀付差出帳』には、家臣団として「忍之衆」とある（沖森直三郎氏蔵）


甲賀忍者屋敷（望月出雲守旧宅）


忍者の服は甲賀地方のクレ染めの野良着だった……（柚木俊一郎氏蔵）



甲賀忍者が島原の乱に参加したことを記す
『肥前切支丹一揆由緒書案』
（神宮文庫蔵）



原城攻囲の図（松浦史料博物館蔵）



『藩譜採要』（国立国会図書館蔵）



本能寺の変で身が危くなった徳川家康を，服部半蔵は御斎峠を越えて無事三河に導いた（御斎峠付近）



服部半蔵正成（徳川十六将図より　致道博物館蔵）

栄光の伊賀者の末路

忍者の実在人物として実在が確認されているのは、家康に仕えた服部半蔵正成。伊賀のエースとして徳川家にれっきとした武士として雇われた。

記録によると、「正成十六歳にして伊賀の忍びのもの六、七十人を率いて城内に忍び入り戦功をはげます」とあって、頭領的存在だったようだ。

しかし、伊賀者の栄光の時代もそう長くは続かず、天正九年（一五八一）、織田信長による伊賀征伐によって、伊賀の忍者組織は壊滅的な打撃を受け、流亡の生活を余儀なくされ、諸国に散ったのである。

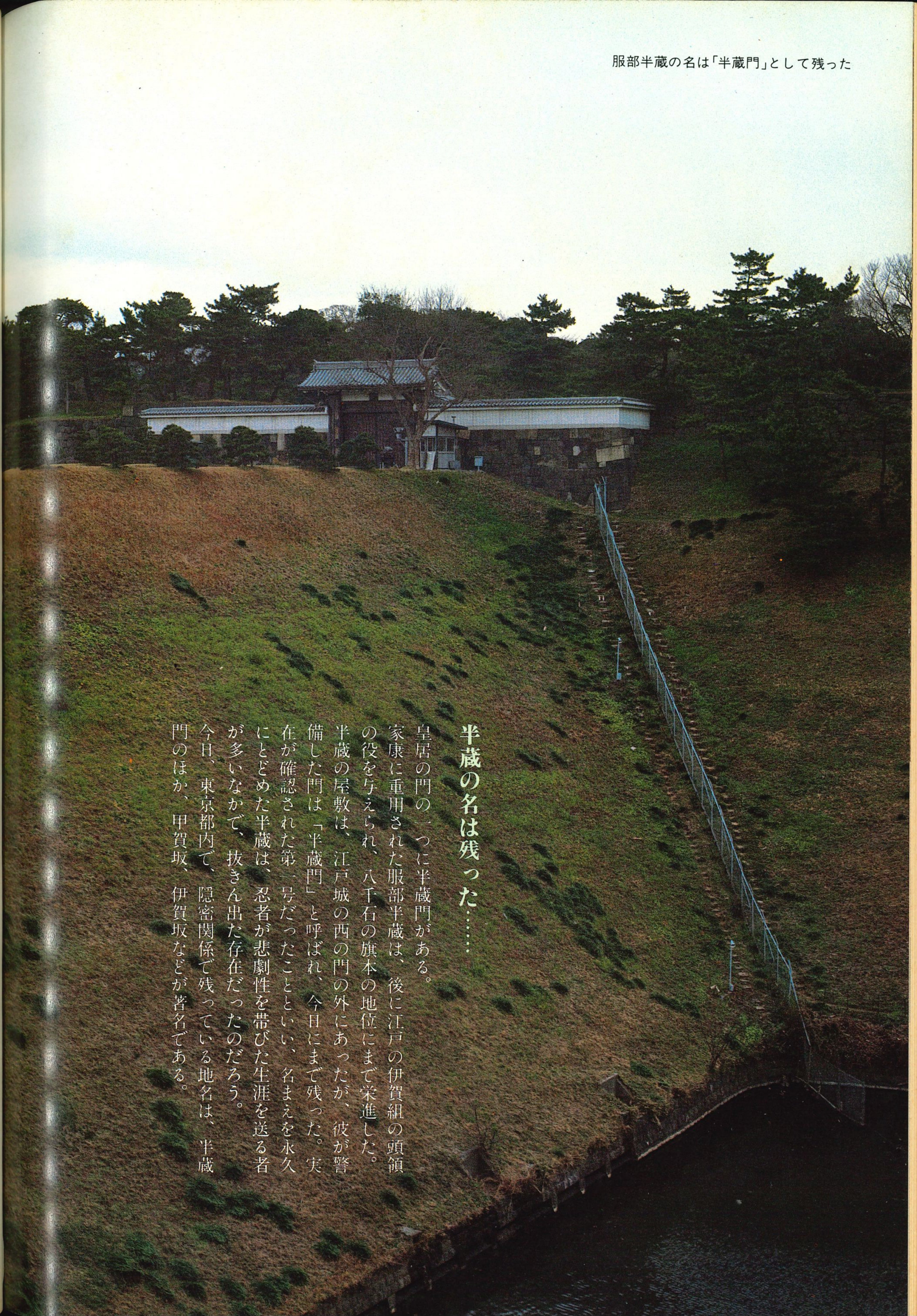
真説・忍びの者

邦光史郎
名和弓雄

▩くにみつしろう
作家　大正11年東京都生まれ　推理作家協会会員　著書『社外極秘』『小説楠木正成』『邪馬台国の謎』(共編)『幕末創世紀』『幻の騎馬王朝』『背広の忍者』

▩なわゆみお
作家　時代考証家　明治45年福岡県生まれ　正木流古武術宗家　著書『拷問刑罰史』『十手取縄の研究』『忍術の研究』『隠し武器百科』『現代語訳万川集海』

NHK 黒木隆男



服部半蔵の名は「半蔵門」として残った

半蔵の名は残った……

皇居の門の一つに半蔵門がある。家康に重用された服部半蔵は、後に江戸の伊賀組の頭領の役を与えられ、八千石の旗本の地位にまで栄進した。半蔵の屋敷は、江戸城の西の門の外にあったが、彼が警備した門は「半蔵門」と呼ばれ、今日にまで残った。実在が確認された第一号だったことといい、名まえを永久にとどめた半蔵は、忍者が悲劇性を帯びた生涯を送る者が多いなかで、抜きん出た存在だったのだろう。今日、東京都内で、隠密関係で残っている地名は、半蔵門のほか、甲賀坂、伊賀坂などが著名である。

精力絶倫も〝忍者の条件〟

戦国の世に歴史の裏側でうごめく陰の軍団があった。「忍びの者」と呼ばれたその集団は、歴史の正史の中にはごく断片的にしか登場していない。しかし、後世、彼らの伝説的な活躍の姿を書き記した、いわゆる「忍術本」と呼ばれる書物が数多く流布するに至って、「忍びの者」は不思議な超能力の持ち主として、人々の興味と関心を呼ぶようになった。



忍びの者に扮した名和弓雄氏

「水鳥の往くも帰るも跡たえてされども道を忘れざりけりと言うは秘伝なり。誌しのこすこと法度なれども、よくよく道のたえ果てんことの無念さに、……灰に埋め壁にぬりこめ後日の為にものするなり。」

このような序で始まる忍術本『上忍定本奥忍秘帖』には、スーパーマン的な忍者像が鮮やかに描かれている。

すなわち、忍者たる者は、

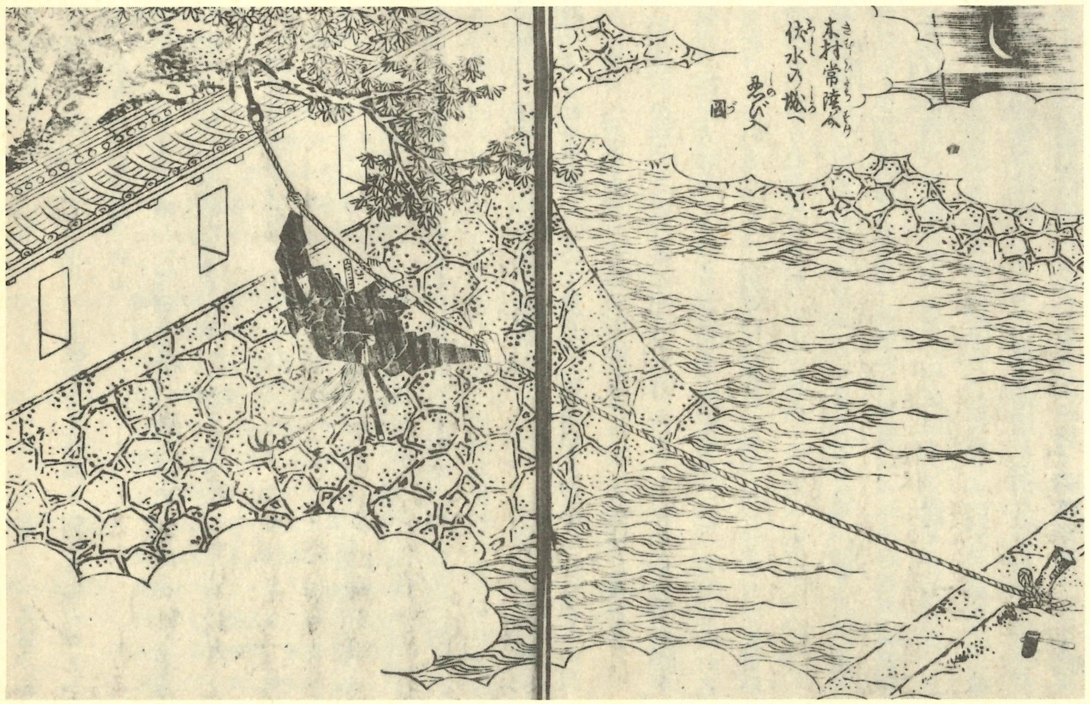
「四半刻に水三升、酒三升、手歩き三町。一刻に七京里、七度漏、くせまい勘行。百間を隔てて針の砥石に落つる音を算し鳴子板を割る。十間の長廊に端居して行灯の針跡を算え灯火を吹き消す。鱗型に積んだ米俵十俵、二間柄鑓に刺し通し片側に移し替える。三日断食行、忍定一日心経十一念」

が可能であるという。つまり、三十分間に水三升、酒三升を飲み干し、逆立ちして三百三十メートル歩く。二時間で二十七キロを走り、精力絶倫で踊りを舞う。百八十メートル離れた所から針が砥石に落ちる音を聞き分け、十八メートル向こうの行灯の火を吹き消すこともできるという。また、積み上げられた米俵十俵を三・六メートル柄の槍で突き刺し、片側に移し替えることも容易であるというから話はますます大きくなる。さらに、三日断食をし、自分を仮死状態にして一日を過ごし（「忍定一日」）、常に心の中に経を念じて置くこと（「心経十一念」）が、忍者の必要にして十分な条件とされているのである。まことに忍術本の世界の忍者像は、私たちの想像力を刺激して興味深いが、実像とはあまりにかけ離れた感が強い。真の忍者像は後に触れることにして、もうしばらく伝説の中に現れた忍者たちの足跡に目を向けてみよう。

『上忍定本奥忍秘帖』には、忍者の教育に言及した項がある。

「上忍仕立つるに法あり。顔容すぐれ、手指、足指の細やかに長く伸びたるは上、額白く広きに過ぐるは避くべし。生年十二、三歳衆智万人にまさり力よく山を抜くとも色好みはげしきは取らず、虫いろみたり才幹夭折する事多し。十七、八歳脛に毛うすきは油断あるべからず。嬰児を選ぶを第一関之を捨と言い、十二、三歳を拾と称え、十七、八歳を忘と言う。忘関を経て自然稽古のことあれば達位につく事左程難からず。」

優れた忍者を養成するのには、鍛錬のほかに綿密な試験が行われ



城に忍び込む忍者（絵本太閤記より）



忍者のスターたちが並ぶ「豪傑奇術競」（沖森直三郎氏蔵）

たらしい。長年の経験と知恵から、適者不適者が厳しく選別され、容赦なくふるい落とされたことがうかがえる。その真偽のほどは別として、何やら現代の受験教育を彷彿とさせるものがあって、おもしろい記述である。

さて、このような厳しい習練を経て、後に歴史の中で大いに活躍したとされる代表的な忍者を拾い上げてみることにしよう。

忍者のスーパー・スターたち

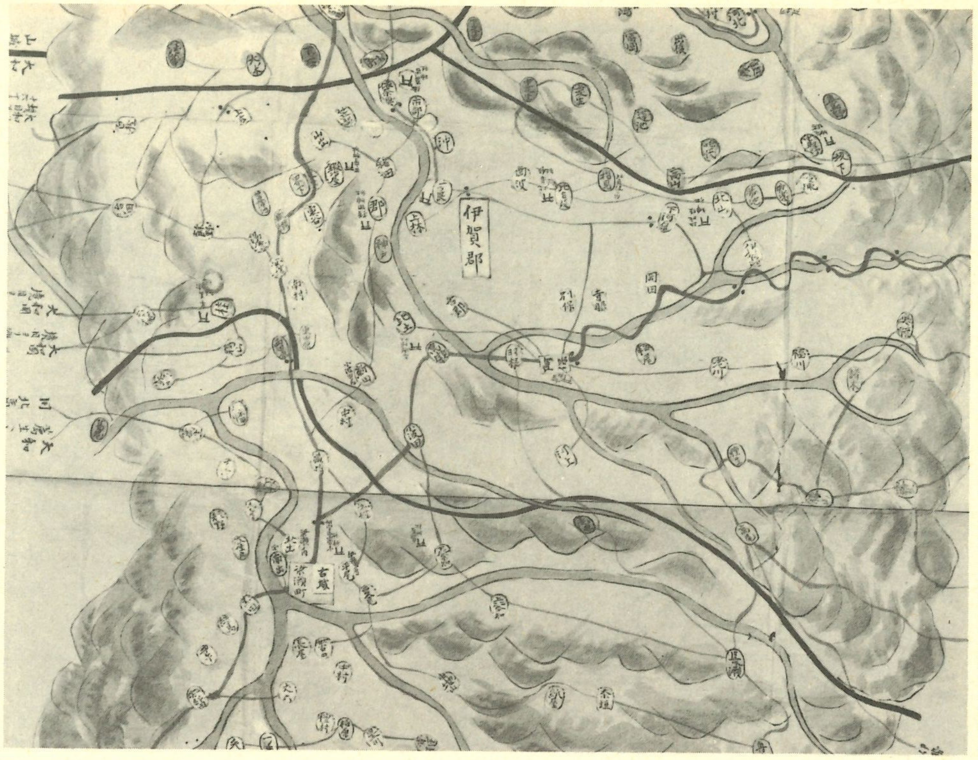
まず、真田十勇士のひとり、猿飛佐助であるが、彼が実在の人物でないことは言うまでもない。猿飛佐助は、明治の末から大正にかけて大阪の立川文明堂から出版された講談豆本「立川文庫」の中で爆発的人気を呼んだ忍者である。信州鳥居峠の山中で戸沢白雲斎について忍術の荒修行を積んだあとに、ライバルの霧隠才蔵と共に勧善懲悪のため千変万化の活躍をして少年たちのアイドルとなったのである。しかし奇妙なことに、大阪城に保存されている江戸後期、文政八年（一八二五）の書き入れのある「新撰実録泰平楽記大坂備」という大坂夏ノ陣配備図には、猿飛佐助の名が記されているという。あるいは佐助のモデルとなるべき忍者が実在していたのであろうか。

戦国の梟雄、松永弾正久秀に仕えた果心居士は、幻術、いわゆる目くらましの達人であった。果心の事績は、江戸時代の随筆集『虚実雑談集』（寛延二年）などの中にいくつか残されている。また、ラフカディオ・ハーンの随筆にも登場している。例えば、織田信長に小栗宗湛描くところの地獄絵図を強引に奪われたが、たちまちその絵を白紙にしてしまったとか、明智光秀に召し出され、八曲の大屏風に描かれている近江八景を眼前に現し、その絵の中に小船で消え去ったとかの逸話がある。果心の主君、松永弾正久秀は大和国信貴山城城主であったが、もとは足利幕府を牛耳る三好氏の執事から身をおこし、主人長慶が年老いたのにつけ入って、その子義興を毒殺、長慶が死するにおよんで事実上三好家を簒奪したうえ、永禄八年（一五六五）二条第に将軍足利義輝を囲んで殺した経歴を持つ。まるで謀略と謀殺のみで生き抜いてきたような男である。この松永久秀の「国盗り」を手伝い、暗躍したと伝えられるのが果心居士であった。

上杉謙信、武田信玄双方に仕えた二重スパイともいえる加藤段蔵は、別名「飛び加藤（鳶加当）」の異名を持つ忍者であった。文字通りジャンプの名人で、ある時、塀を飛び越そうとすると内側にいばらが敷いてあった。途端に彼は空中で一回転して再び塀の

真説・忍びの者〈年表〉

天正9（1581）	甲斐の武田勝頼、伊豆の北条氏直を攻めたが、この時氏直、徳川家康と結んで迎撃、風魔小太郎率いる風魔乱波200人を動員、奇襲をかける 織田信長、4万6000の軍勢で伊賀平定の戦いをしかける　天正伊賀の乱　この時伊賀の忍びの者大活躍
天正10（1582）	本能寺の変の急をきき、家康、忍者服部半蔵を供に伊賀越えを行う　これより家康、半蔵指揮下の忍者に身辺の護衛にあたらせる
天正18（1590）	家康、江戸城へ入る　本格的な忍者の組織として、「伊賀組」「甲賀組」を作る
慶長10（1605）	「伊賀組」の同心、頭領である半蔵の子正就に待遇上のことで不満を持ちストライキを行う　ようやく鎮圧したが、正就は以後役職をうばわれ、閉門を命ぜられる
慶長13（1608）	藤堂高虎、伊賀上野の城主となり役職制を打ち出したが忍者は107の役職中、89位にランク　忍者の値打ちは大幅に下落
寛永14（639）	島原の乱起こる　天草四郎に率いられたキリシタン信者大いに抵抗　幕府、松平伊豆守を島原に派遣したが、松平はこの戦いに甲賀忍者を雇いことにあたらせた　記録によると、忍者たちは臆病風に吹きつけられ、さっぱり活躍しなかったという
延宝4（1676）	藤林保義、忍者奥義の集大成の書物『万川集海』をあらわし、忍術の極意などを絵入りで紹介
寛延2（1749）	『虚術雑談集』に、幻術の名人果心居士のことを記録　居士は謀略家松永弾正に仕え、忍術のエッセンスを披露したという
文政8（1825）	「新撰実録泰平楽記大坂備」に、猿飛佐助の名、記録される
明治44（1911）	講談本のシリーズ「立川文庫」創刊され、以後大正にかけ、架空の人物、猿飛佐助、霧隠才蔵など、忍者が大人気を博す



伊賀は四方を山に囲まれているが、京・大坂に近かった（神宮文庫蔵）

外へ飛んでいったという逸話がある。段蔵の話は『甲越軍記』『近江輿地志略』『明全記』などに出ている。初め上杉謙信に仕官し、忍びの腕を試されて家来の邸に長刀を盗みに忍び込むが、その手口のあまりの鮮やかさに謙信に怪しまれ、かえって凶を招くとして殺されそうになる。次に武田信玄に仕官、信玄また怪しんでこれを殺したと伝えられている。

北条氏に仕えた風魔（別名風摩、風間）一族は、関東を代表する忍びの者「乱波」である。首領は代々、風魔小太郎と称し、北条早雲以来、五代にわたって扶持されていた。記録に残っている最も華々しい活躍は、五代目風魔小太郎とその一党のものである。

「それ風魔小太郎は二百人の中にありてかくれなき大男、身長七尺二寸、手足の筋骨荒々しく、ここかしこにむら瘤ありて眼は逆さまに裂け、黒髭にて口両脇へ広く裂け、牙四つ外へ出たり。頭は福禄寿に似て鼻高し、声を高くだせば五十町聞え、低くいたせば、かわいたる声にて幽なり。」（『北条五代記』）

天正九年（一五八一）、甲斐の武田勝頼が甲斐、信濃、駿河三か国の軍勢をもって伊豆へ侵攻して来たとき、五代北条氏直は、徳川家康と結んで武田軍を迎撃した。この時の浮島が原の戦いで、風魔小太郎（五代目）率いる風魔乱波二百人は、毎夜四手に分かれて武田陣に奇襲をかけ、陣馬を盗んで追い立て随所に放火するなど、甲斐勢をさんざんに悩ましたという。このようなゲリラ攻撃は、忍者が最も得意とする所であった。

実在が確認されているのは、徳川家康に仕えた服部半蔵正成である。

「徳川殿はよい人持よ



御斎峠から伊賀上野市をのぞむ

服部半蔵　鬼半蔵
渡辺半蔵　槍半蔵
渥美源吾は首切源吾」（『三河物語』）

「鬼半蔵」の異名のとおり、服部半蔵正成は、どこか不気味、厳粛なイメージを持つ忍者であり、いわゆる「上忍」——本物の忍者の親玉として知られている。しかし記録を探っていくと、服部氏は父、半三保長以来の徳川家の譜代の士という方が正しいようである。『寛政重修諸家譜』によれば、半蔵正成は、

「父に継いで東照宮につかえたてまつり、三河国西郡宇土城夜討の時、正成十六歳にして伊賀の忍びのもの六、七十人を率いて城内に忍び入り、戦功をはげます」

とある。この記事自体の信憑性については諸説あるが、概して半蔵正成は忍びの者を使うところが尋常ではないものの、れっきとした武士として徳川家に仕えている。自分自身で忍者的な仕事をすることはほとんどなかったといってよい。彼は後に江戸の伊賀組の頭領の役を与えられ（後述）、八千石の旗本の地位にまでのし上がった。彼が住んでいた屋敷は江戸城の西の門の外にあったが、彼が警備した門は「半蔵門」と呼ばれ、今日までその名が残っている。

このように有名・無名や実在したか否かを問わず、忍びの者と呼ばれる異能の集団が最も活躍したのは戦国の世であった。そして彼らを数多く輩出した地が、伊賀と甲賀であったのである。

伊賀の国と近江・甲賀は、古来、「忍びの里」と呼ばれている。京からの道のりわずかに八十キロ、だが奥深い山々に閉ざされたこの地方は、長く権力の支配下には入らなかった。

応仁の乱の後、この地域には無数の土豪が割拠し、果てしない抗争の日々を繰り返していた。忍びの術はここから生まれた。忍者、すなわち情報収集のプロフェッショナルである。
伊賀と甲賀の郷士たちは、いつしか、忍びの術をもって他国の領主たちに召し抱えられるようになっていた。

〝暗殺〟は勢力均衡を保つための戦術

忍者が使っていた道具類、いわゆる「忍器・忍具」の類は、今日、数多く残っている。本物もあれば、忍術書などを参考に後世の人々が復元して作った物もある。こうした「忍器」を手がかりにして、「忍術」なるものの実体を推測することはできないだろうか。

―― 今日残っている忍器の種類はたいへんな数に上ると思いますが、なぜこのようにたくさんの道具を必要としたのでしょうか。

名和　まず戦闘の様式が源平時代に比べるとずっと変わってきたということでしょうね。何よりもゲリラ戦というものが相当重要な位置を占めてくる。それからもうひとつは、夜間の戦闘も行われるようになったということですね。そのための武器や携帯道具などがどんどん進歩していくんですね。

―― それぞれの戦術にふさわしい道具にはどのような物があげられますか。

名和　まず夜間の戦闘に使うものでは、放火用や照明用に「火矢」というものを使います。普通、先の方に結び付けた木筒等の中に黒色の火薬が入っておりますが、そこに火をつけますと、ロケットのような噴射で進んで行くわけですね。急を要するときは、矢の中央部を手で支え持ち、角度を調節しながら噴射と同時に敵の方に向けて投げ上げることもあります。そして向こうに着いて火薬が燃え尽きるころになると、ドカーンと最後に爆発を起こすわけです。放火プラス威嚇という用途もあるわけです。当時は火術というものが一般には普及しておりませんでした。しかし、忍者、特に甲賀の忍者は薬学というものにたいへん目覚めておりましたから、火薬をうまく利用したのです。それで、鉄砲の使用とか火攻めなどで大いにその強さを発揮しています。驚くべきことに、水銀をも利用して、盛んに灯火に使っております。現代でも水銀に光を照射して発光させることは利用されていますが、当時すでにそのように進んだこともやっていたのですね。

次にゲリラ戦に関係して、暗殺ということが盛んに行われるようになってくる。そのために最もよく使われたのが、「手裏剣」です。これは、刃先にトリカブトの毒を塗り付けて投げつけます。そして、相手の体のどこでもいいから傷をつけると、トリカブトの毒が血液の中に入って体がしびれ長く苦しむ、量が多ければ死ぬということにもなります。手裏剣の形は、「十字手裏剣」や「棒状手裏剣」など四、五十種類以上もありますが、投げ方は自由奔放、その場その場で最も適した姿勢で投げられるという特徴があります。

―― 暗殺がよく行われた理由というのは、どういうことでしょうか。

名和　暗殺というのは、結局、勢力の均衡を保つための戦術です。小の虫を殺して大の虫を生かす。大きな戦闘に移行しないようにひとりを殺す。主戦論者なんかを殺して有事を抑える。そういう感覚だと思うんですよ。


手裏剣ほか忍者の道具が多数（名和弓雄氏蔵）

それから、忍者たちに課せられた重要な仕事は情報収集ということだったと思います。その情報というのも単に軍事面だけではなくて、当時は新しい産業が次々と起こってくる時代ですから、他の藩、他の国が硝石を作ればその秘密を盗みたい、また質のいい製塩法を盗みたいというような、産業面の要求もあったと思うんです。堺などには鉄砲のいろいろな製造法が入ってきますから、それを盗みに入るとか、そういう産業スパイの起源もだいたいそのころではないかと思われます。そこで情報収集のためには、まず目指す邸に忍び込むための道具が必要になってくるわけです。例えば、「しころ」と呼ばれる携帯用のこぎりや、「くない」という刃のついた土掘り用スコップなどがその類です。これらは扉などを破壊し開くための「壊器（かいき）」と呼ばれています。また、鉄製の鉤（かぎ）に細いじょうぶな縄を結び付けた「鉤縄（かぎなわ）」やコの字形の「かすがい」などは、主に城門や高い塀などを登るときに使われます。「忍び」は本来「窃盗術（しのび）」と書かれていたそうですが、「壊器」や「登器」の役割はまったく泥棒の忍び込み道具と同じですね。しかし、いい忍者というのは、数限りない忍具をみんな持って歩くなどというばかなことはしない。結局、この中の何個かを持って行って、それを巧みに使う。例えばかすがいひとつとっても、何種類もの


『万川集海』より
巻火矢図説（勝井景一氏蔵）


『万川集海』より
打鈎図説と蜘蛛梯之図説（同右）

利用方法があります。普通は石垣を登るときなどに使います。また、それを打って高い所に止まっていることもできる。とがった方を上にして置けば、ひしの代わりに敵に踏ませることもできる。この方法は「手違いかすがい」を使います。それから、敵を屋外に逃さないように扉を固定する打ち方もできます。というように、ひとつの道具を数器に使い分けることができる。それがいい忍者であると言われております。

忍術は科学的に編み出された知恵

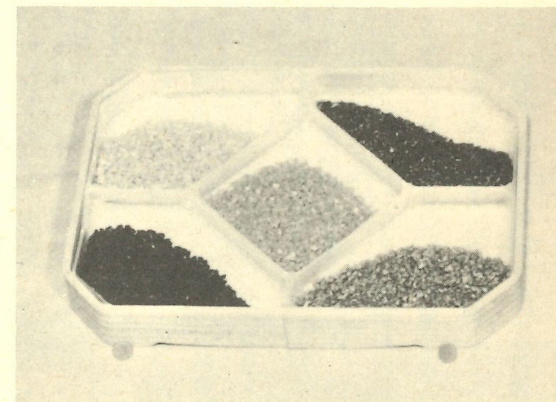
—— 情報収集のための道具は、このほかにもございますか。

名和 そうですね。例えば「聞き筒」というものがあります。金属製の筒で、壁や戸の節穴に一方の口を当て、もう一方の口に耳をあてがって音を聞く携帯盗聴器です。かすかな音も金属製の筒の内部に響いて共鳴し、外部の音をさえぎるので、隣室の密談などもよく聞くことができるのです。

つかんだ情報を仲間に伝達する際に用いるのが「五色米」と呼ばれる道具です。これは、米粒を黒、赤、黄、青、紫の五色に染め、それぞれの色の米を竹筒五本に入れて懐中にしまっておくもので、忍びの者必携の暗号連絡道具といったところなんですね。五色の色分けとその組み合わせによって百種類以上の暗号ができます。何色はこの意味、何色を置けば危険だから逃げろとか、いろいろな用語ができるわけです。

—— たくさんの忍具の中には、私たちが見ていったいどうやって使ったのだろうかと思うようなものもありますね。

名和 そうですね。よくみなさんが興味を持たれるものの中に「水蜘蛛」という道具がございます。これは、延宝四年（一六七六）に藤林保義、あるいは藤林保武が著した忍術の集大成の書物『万川集海』の中に絵入りで出てまいります。それによると、水蜘蛛というのは、直径二尺一寸八分（約六十六センチ）程度の円型の道具になっています。甲賀に流布されている説では、これをふたつ足に履きまして、下駄のようにして水の上を歩いて渡ると言われております。水上歩行器のように解釈されているわけですが、実際はとても歩けるものではありません。決してインチキなものではないと思いますが、『万川集海』の解釈の仕方が違うと思うんです。『万川集海』にはふたつ使うということはどこにも書いていないですし、水の上を歩いて進むなどということは一行も書いてない。ですから、私はこれは携帯ボートのようなものではないかと思うんです。ただ、携帯ボートにしましても、こういうものをわざわざ持って歩かなくても、畳二枚を重ねると平気で水の上を渡れますし、たらいをひとつ盗んで来ても渡れますから、実用にはほど遠い道具だと思いますね。



忍者同士の情報伝達に使われた五色米（名和弓雄氏蔵）



『万川集海』の水蜘蛛之図説（上　勝井景一氏蔵）と復元した水蜘蛛（伊賀忍者屋敷蔵）

—— 結局、忍具から推測すると、忍術とはいったいどのようなものだったのでしょうか。

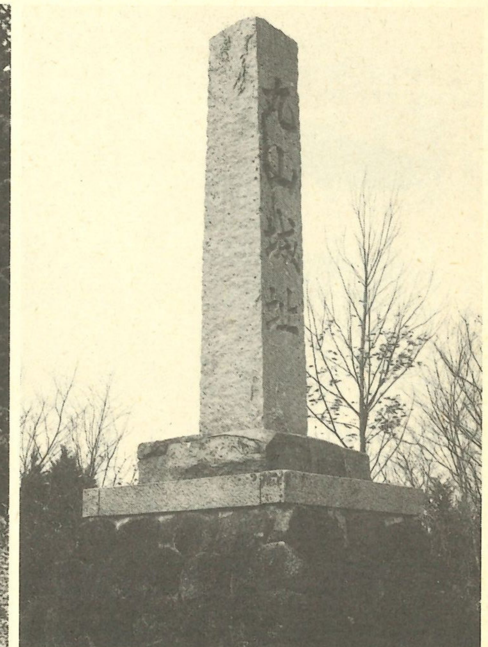
名和 初めにもお話ししましたように、戦国時代になって戦闘の様式が変化したことによって、たくさんの忍具類がそれぞれの目的に応じて発達したわけです。忍具はすべて科学的、合理的に作られたわけです。ですから、忍術というものも何も特別な術ではなくて、科学的、経験的に編み出された知恵だと思います。忍者も映画やテレビほどかっこよくはなく、日ごろの厳しい訓練があって初めて活動できたのではないかと思うんですよ。

忍者の里を揺るがした天正伊賀の乱

戦国の動乱は忍びの里にも押し寄せてきた。

尾張の城主織田信長も、伊賀征服の野望を抱くひとりであった。永禄十一年（一五六八）、信長は伊勢国の北畠氏を攻めこれを降し、自分の子の信雄を北畠家の養子に迎えさせた。信雄は、養父北畠具教を天正四年（一五七六）謀殺すると、南伊勢から大和の宇多郡に至る領主として、伊賀への侵略を開始した。天正七年（一五七九）、信雄は伊賀国名張郡下神戸の丸山に城を築かせ、伊賀攻略の火ぶたを切った。忍者の里を揺るがす天正伊賀の乱の幕開けである。同年九月、信雄はみずから八千余騎を率いて伊勢松ケ島城を出発、伊賀へ侵入した。伊賀の土豪たちは、上忍・百地丹波の指揮のもと、得意のゲリラ戦を展開して信雄の軍勢を撃退

した。
　織田信長一代の合戦のうち、伊賀平定の戦いほど奇妙なものはなかった。永禄十一年（一五六八）、伊勢伊賀を攻略するために国司北畠具教を討ったときから数えると、十年という長期戦になっている。織田軍は大軍を送り込みながら一度も勝ったことがなかったのである。
「伊賀には人外の化生が住むのか。伊賀の者一人も生かすべからず。」
　天正九年（一五八一）、怒り狂った信長はついに大軍を差し向けた。丹羽長秀、滝川一益、蒲生氏郷、浅野長政、筒井順慶ら信長麾下の歴戦の勇将に率いられた四万六千人の大軍勢がなだれのごとく攻め込んだのである。
　百地丹波をはじめとする伊賀忍者たちは、たびたび織田陣営に夜襲をかけて、大いに活躍したという。
「ただならぬ伊賀者のならいにて、忍の術を得たる者数十人ありしが、城外ところどころのたきかがりの暗きをうかがい、夜々幾度かしのび出て寄手をなやますこと多かりき。丹羽長秀の陣屋は数度の夜討ちに、その従兵どもが陣屋において夜々殺害せらるる者数百人におよびければ、寄手大いに恐懼して気力を落し、諸人安堵せざりしていにぞ見えたりける。」（『伊乱記』）
　しかし、このゲリラ戦法も、伊賀軍の劣勢を挽回するまでには至らなかった。兵糧、弾薬が尽き、籠城した柏原城が落ちたのは十月二十八日のことであった。
　伊賀全土を焼野原と化した天正伊賀の乱は、織田軍の勝利のうちに終わったのである。



織田軍は丸山城を伊賀攻略の拠点とした



丸山城址にある天正兵乱織田方将士横死者の供養塔

―― 当時の信長の力からすれば、伊賀などというのは鎧袖一触にも値しないと思いますが、なぜ信長はあれほど執拗に伊賀を攻撃したのでしょうか。

邦光　信長にとって、伊賀という所はまず第一に相性が悪かったのでしょうね。信長という人は非常に独裁的な天才ですから、自分の命令に従わない者に対してはたいへん過酷な人なんです。また当時としては珍しい合理主義者なんですね。そのために日本的な神道であるとか、あるいは仏教であるとか、さらにいろいろな宗教的迷信がありますが、このようなたたりであるとか呪われるとかいった理屈で説明できないことを極端に嫌いましてね。一方の伊賀はどうかと申しますと、これは信長とはまったく逆の性格の土地柄と言えましょうね。元来、忍びというのは密教や修験道の中から発達してきた面がありますから、猿飛佐助や霧隠才蔵に象徴されるように非現実的なところがある。だから、信長はほとんど彼らを信用しなかったと思う。特に伊賀とは相性が悪くて、伊賀へ行こうとすると病気になったり、馬から落



天正伊賀の乱では百地丹波をはじめとする忍者がゲリラ戦を展開した（伊賀喰代　百地丹波砦跡）



藤堂藩藩主の藤堂高虎（藤堂高正氏蔵）

ちたりしまして、伊賀に対する生理的な嫌悪感があったと思われます。ですから、あそこには化け者が住んでいるというふうに言いまして、伊賀の者は全部殺せと過酷な命令を出しているわけです。もうひとつ、信長の天下統一の戦略にとっても、伊賀という所は邪魔な存在だったと思います。伊賀国はもともと東大寺の所有地で強い武将はいないわけですから、小さい土豪がひしめきあって暮らしていたわけです。群雄割拠の時代に入って、そこから忍びの者たちが各地の領主に雇われていくようになったのですが、彼らは昨日はAのために働き、今日はBのために働くというように、主君に対する忠誠心の少ない人間たちなんですね。おまけに京都や奈良・大坂に近くて、東へ抜けるとすぐ伊勢から尾張に通じているわけですから、伊賀という所はいろいろな情報を得やすかったと思います。また信長が京・大坂へ行く途中でもあった。そこで、彼らに暴れられたら厄介だと信長は考えたのではないでしょうか。

――伊賀の乱というのは、時代の大きな流れから見て、忍者たちにとってはどのような意味を持ったのでしょうか。

邦光　伊賀の乱の背景には、世の中が群雄割拠の時代から次第に天下統一に向かっていく過程で、群小の勢力はすでに吸収されて大勢力同士のぶつかり合いになりつつあるという状況がありますね。大軍団の戦いになりますと、その中に忍者が五人や十人忍び込んだところでどうしようもないわけです。これが小国同士の戦いですと、砦へ忍び込んで、例えば敵の馬を放してやるとたちまち戦力が低下して負け戦さになるということもあったでしょうが、何万の大軍ですと馬を十頭や二十頭放したところで大勢に影響がないわけですね。そういう戦国末期の状況が次第に忍者たちから活躍の場を奪っていき、彼らを失業させていったのではないでしょうか。忍者たちが生きにくくなっていく中で、信長が伊賀を焼いた。そのために伊賀の人たちは諸国に流浪するわけですが、これも忍者の力を弱めたひとつだろうと思います。戦国の忍者集団にとって、最後の砦がなくなったような感じですね。

戦塵の嵐がおさまった慶長十三年（一六〇八）、伊賀上野の城主となった藤堂高虎は「無足人（むそくにん）の制」を設け、多数の忍者を召し抱えて上野城下に住まわせた。「無足人」とは、知行地を持たない、いわば武士の予備軍である。

ここで忍者たちはいかなる処遇を受けたであろうか。

寛永十三年（一六三六）に書かれた『伊賀付差出帳』は、藤堂藩直臣の名簿である。それによると家臣は五つの職務に分かれ、「組外」「母衣組」「鉄砲組」「留守居」と続いて、その最後に「忍之衆」の文字がある。そして、二十人の氏名、俸禄、仕官年が記入されている。俸禄では三十石十二人扶持というのが最高で一人、二十石三人、十八石と十七石がそれぞれ二人ずつ、十五石が十二人で過半数、禄高から言えば総じて小身に属していた。また、藩の役人の席順も百七の職種中、八十九位という軽輩ぶりであったのである。

服部半蔵家の栄光と没落

忍びの者を最も活用したのは、徳川家康であったという。

天正十年（一五八二）六月二日、織田信長は明智光秀の謀叛にあって本能寺で自殺した。この時、家康は泉州堺にあったが、わずかな家臣たちを引き連れているだけであった。変の報に接したのは、堺を出て京へ帰ろうとする途上のことである。すでに明智兵は街道に迫り、山野には落武者狩りの野盗やそれに呼応する百姓一揆の危険が充満していた。進退窮まった家康は、ついに最短コースの伊賀を越えて領国三河へ帰ることを決意した。この時家康の供をしたのが、先に述べた伊賀者服部半蔵正成であったという。

「これを伊賀越えとて、御生涯御艱難（かんなん）の第一とす。」（『徳川実紀』）

半蔵の号令で多数の伊賀・甲賀の忍者たちが家康の護衛に当たっ



徳川家康は服部半蔵に導かれて御斎峠を越へ三河に帰った

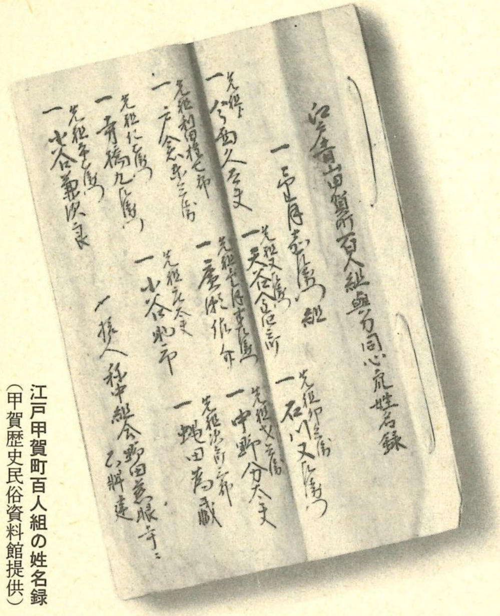


東照大権現尊像ならびに十六将図（致道博物館蔵）

た。家康が忍びの者の必要性を痛感したのは、正にこの時であった。後世、特に伊賀忍者が家康以下歴代将軍の身辺警固と秘密情報の役をまかされたのも、この時の因縁による。

天正十八年（一五九〇）、家康は江戸城に入ると、与力三十騎、伊賀同心二百人を召し抱えて「伊賀組」を組織した。これを支配したのが服部半蔵正成である。同じように「甲賀組」が組織された。甲賀組のおこりは、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いに始まる。西軍の将石田三成は機先を制して、東軍の関西における拠点伏見城を攻めた。急を知った家康は、江州瀬田の城主山岡景隆の弟道阿弥に訓令して甲賀武士の蹶起を促した。それに呼応して多数の甲賀忍者が伏見城の救援にかけつけたが、西軍諸大名の連合軍によって孤立させられていた伏見城はついに陥落、忍者たちもまた多く戦死したという。家康はここでも、甲賀忍者の功績をたたえ、戦死者の子孫を任用して甲賀組を編成した。

伊賀組と甲賀組は、後に「根来組」「二十五騎組」とともに「御鉄砲百人組」の中に組み入れられた。百人組は与力二十騎、同心


江戸甲賀町百人組の姓名録（甲賀歴史民俗資料館提供）



江戸城内にあった百人番所跡

百人で構成され、平時は江戸城大手三門の警備にあたり、戦時は鉄砲隊として活動することになっていた。

しかし、伊賀組も甲賀組も、江戸の初期にはまだ忍者として任務を与えられていたらしいが、次第にそうした仕事から遠ざかるようになるのである。江戸城の城郭設備が整うころには、百人組のほかに「〇〇伊賀者」と呼ばれる人間たちが勤務するようになっている。彼らはまったく忍者としての任務からはずれ、ただ伊賀者という名を留めるだけの城勤めのサラリーマンと化していた。その仕事の内容をみると、

(イ)「明屋敷番伊賀者」――屋敷替えや改易になった大名、旗本の空き家の管理

(ロ)「御広敷伊賀者」――大奥の警備や御側女中の付き添い

(ハ)「山里伊賀者」――西丸山里門の警備

(ニ)「小普請方伊賀者」――将軍の御霊屋や増上寺などの営繕修理の事務

などとなっている。彼らはいずれも三十俵三人扶持程度の最下級の身分であった。つまり、忍び本来の仕事から離れ、幕府の政治のいちばん末端のところに関与して、官僚的、世襲的な地位に甘んずるようになったのである。

このように、江戸に入ってからの忍者たちの末路は惨めなものであった。

慶長十年（一六〇五）、伊賀組の同心たちが反乱を起こした。乱の直接の原因は、頭領に対する不満であった。当時伊賀組の支配は、服部半蔵正成の没後（慶長元年）、その子半蔵正就に受け継

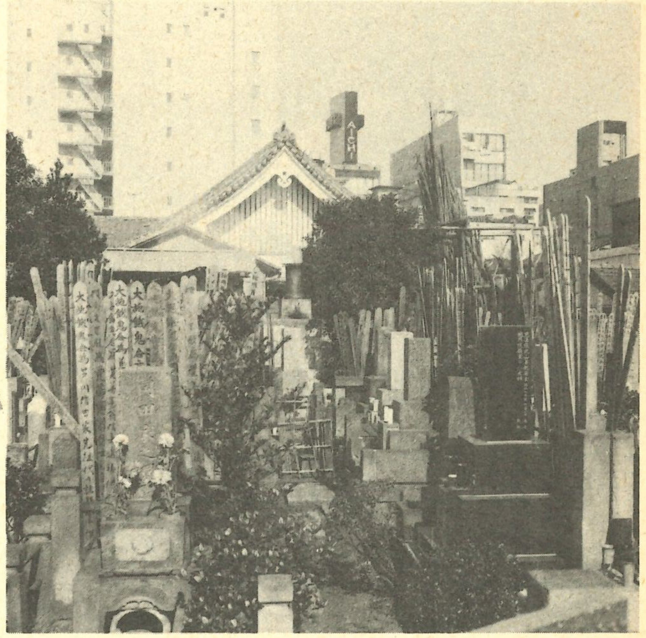
がれていたが、正就は短気で横暴な性質で、部下を私の使用人のように使っていた。そのため、同心たちは正就の罷免と待遇の改善を要求して、四谷長善寺（通称「ささ寺」）に一斉に立てこもったのである。

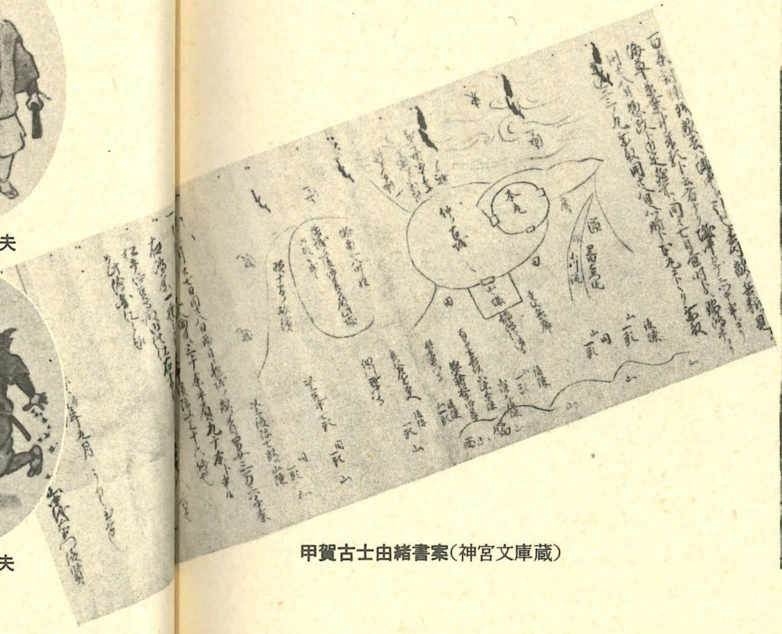
あわてた幕府は、正就を叱責しその鎮圧をはからせたが、事態はいっこうに終息しなかった。逆に、江戸市中に辻斬りや怪盗が跋扈して治安は大いに乱れたという。そこで彼らの要求を入れて、正就を御役御免にするとともに、若干の待遇改善を与えることでこのストライキをようやく鎮圧したのであった。

しかし、役職を奪われ閉門を命ぜられた正就は、乱の首謀者を恨むことはなはだしかったが、慶長十年（一六〇五）秋、首謀者らしき者の後姿を見かけ、生来の短気にまかせて追いかけて、その人物を斬り殺したと伝えられている。ところが、それが人違いであったため問題は大きくなり、幕府に取り上げられる破目に陥ってしまった。裁定の結果、彼は改易を申し渡され、服部家は分家だけを残すかたちで取りつぶされてしまったという。

江戸の忍者たちの哀れな境遇を物語るエピソードが、もうひとつ残っている。

正月、雪が降ると江戸城の大奥では女中たちの雪合戦が行われる。将軍、御台所、中老たちが居並んで観戦するならわしであった。この時、大奥勤めの伊賀者は紅白両軍の陣地に後向きに立って、人柱で境界線を作った。女中たちは、この物言わぬ「無人格の影」に対してわざと雪玉を投げつけて喜んだという。はるか戦国の世に自由に跳梁した先祖の足跡を思うと、じっと雪のつぶてに耐えて立っている彼らの気持は、どのようなものであっただろうか。


伊賀組の同心たちが反乱を起こし立てこもった四谷長善寺


甲賀古士由緒書案（神宮文庫蔵）

島原の乱——忍者、失地回復の大チャンス来たる！

忍者たちがあれほどに待ち望んだ時節が再びめぐってきた。寛永十四年（一六三七）、九州肥前島原に起こった島原の乱である。天草四郎時貞に率いられたキリシタン信者たちは激しく抵抗し、幕府は急拠老中松平伊豆守信綱を島原に派遣した。

甲賀の古文書『肥前切支丹一揆由緒書案』には、この戦いに十人の甲賀忍者が伊豆守に雇われて参加したことを記している。十人の忍者はいずれも甲賀の名門であった。文書は、彼らの島原での活躍を詳しく記している。

島原の乱に参加した忍びの者十人は、次のような顔ぶれであった。

望月兵太夫、芥川清右衛門、岩根甚左衛門、鵜飼勘右衛門、伴五兵衛、岩根勘兵衛、夏見角介、望月与右衛門、芥川七郎兵衛、山中十太夫。

この一団は、中高年パワーの軍団であったと思われる。中でも、望月兵太夫と芥川清右衛門の二人は、三十七年前の慶長五年（一六〇〇）、先に述べた関ケ原の戦いの前哨戦、伏見城攻防戦に参加した甲賀忍者の生き残りであった。また、岩根甚左衛門と岩根勘兵衛、夏見角介の三人は、寛永十一年（一六三四）、将軍家光の上洛の際、老中松平伊豆守信綱を通じて御機嫌を伺い、つぐみ五竿を献上するという光栄に浴した、甲賀忍者としては華やかな経歴を持つ忍者であった。

さて、平均年齢四十五・四歳のこのグループは、寛永十五年（一


望月兵太夫


芥川清右衛門


岩根甚左衛門


鵜飼勘右衛門

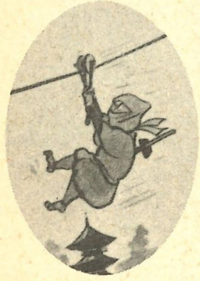

伴五兵衛


山中十太夫


芥川七郎兵衛


望月与右衛門


夏見角介

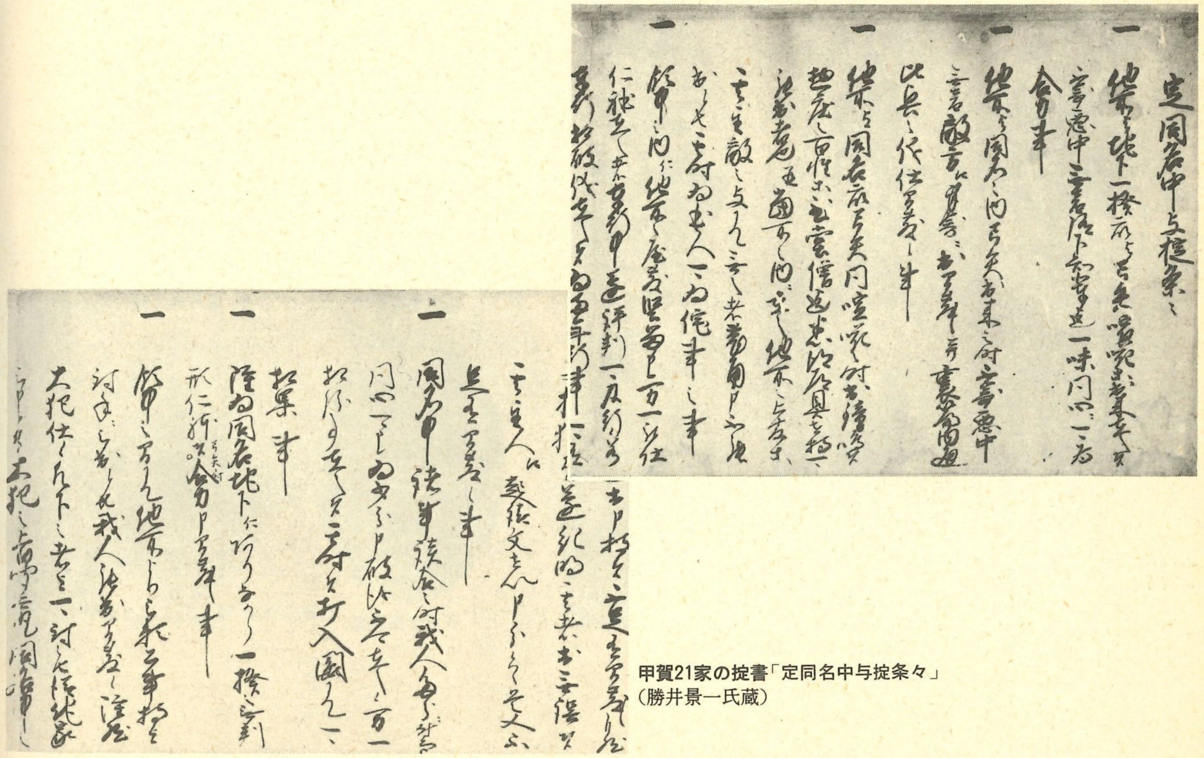

岩根勘兵衛

六三八）一月四日、島原に到着した。到着二日後の一月六日、早速総司令官の松平伊豆守から原城の基本偵察を命ぜられて、有馬陣の防濠から二の丸までの距離、濠の深さ、道路の状況、城壁の高さ、矢挾間（やざま）の形状を測定する。その結果は、詳細な実測図面となって江戸に送られ、一月十九日将軍家光の上覧に供したという。

一月二十一日、「原城攻撃は兵糧攻めである」とする信綱の命によって、西の浜手の黒田陣から侵入して敵の兵糧十三俵を盗み出すことに成功。この夜、また敵城に潜入して秘密用語（唱言）の盗聴に努めた。

原城内の決死偵察を敢行したのは一月二十七日のことであった。その夜は望月、芥川、夏見、山中、伴の五人が先発隊となって行動し、東口の細川陣から城内に忍び込んだのである。しかし、不覚にも芥川が敵の仕掛けた落し穴に落ち込んでしまった。そのうちに物音を聞きつけた城兵が「忍びだ、夜討ちだ」と騒ぎ始めた。そこで、望月があわてて穴に落ちた芥川を引き上げ、そばにあった敵の旗一本を分捕って逃げようとしたが、雨あられと飛んでくる敵のつぶてに当たって、二人は全治四十日間の重傷を負ってしまった。残りの三人がこれを助けて本陣まで戻って来たのであるが、結局、この十人はさしたる効果もあげられなかったのである。その証拠には、島原の乱が終わった後、この十人に対しては何の恩賞の沙汰もなかったのである。

さて、もうひとつ、島原の乱の時に肥後細川家も忍びの者を使っていたという記録がある。細川家の家記『藩譜採要』の寛永十五年二月の記事である。



甲賀21家の掟書「定同名中与掟条々」（勝井景一氏蔵）

「城内の様子見分の為、諸手より忍を被用候得共、差て仕出したる事も無之由。御当家にても名高き伊賀甲賀の忍の者数十人有之候間式部寄之、毎夜城中に入様子を伺せんと彼等に命し候得共一度も其験し無かりければ式部怪敷思ひ、家士原兵助を密に遣し様子伺せけるに、兵助先に進み矢玉を不厭塀近く至り、虎口の様子伺ひ城内の半鐘を聞、夜番の交代迄も察し返り候得者、忍の者は壱人も城内に入たる者無之上、原が見咎めん事を恥恐れ竹把（たけたば）の陰に身を隠しふるひ居候——此事に付忠利君兼て忍の者定め置事無用也、時に従て其人を撰み厚く賞し用る事可然とて、忍の者皆被召放候、惣而（そうじて）彼等が所行、敵味方に有て内約し双方の事を聞合せ、楽に武具を盗んで帰るなど致し其利を貪り候得共城内にかかる忍の者無之、賊徒の方に可入術を失ひ候と也。」（傍点引用者）

つまり、細川家でも伊賀・甲賀の忍者を多数雇いあげ、毎夜原城の偵察にやった。ところが彼らは夜が明けるまでに帰ってきて一応の復命はするが、どうも言うことが判で押したように決まりきったことばかりであった。そこで、家来の原某という者に命じてある晩彼らの行動を監視させてみたところ、忍びの者たちは城に忍び込むどころか城際の物陰にブルブル震えながら時間の経つのを待っていた。そこで連れ帰って吟味をし、本来ならば首を斬るところだが、特に命を助けて追放処分にしたというのである。本来、忍びの者というのは戦い場で同じ仲間が敵味方双方に入り込み、お互いに情報を交換しあい、武具などは楽に盗んで帰るなど要領がいいが、島原の乱の場合には原城にこもったキリシタン農民の側にひとりも忍者がいなかったために、ついに城に入ることができなかったのだとしている。この記事を読むと、戦乱の中で華々しい活躍をした往年の忍びの者の姿はどこにも現れず、むし

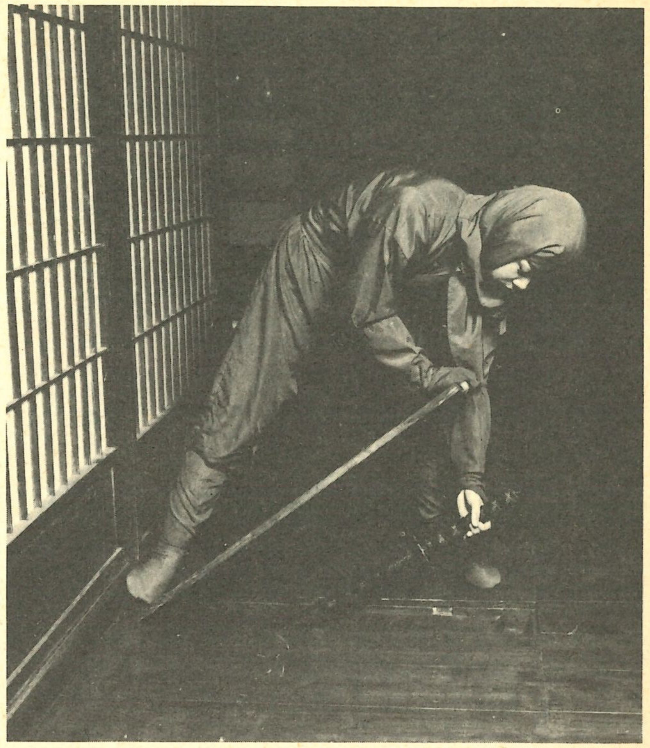
甲賀流忍者の虚像と実像

甲賀は「こうか」と呼んで下さい。甲賀に生まれ育った私は、小説・映画・TVの忍の世界と、実際の甲賀地方の先祖とが、どこでどう違っているのか、又合っているのか、その接点を探し歩いてきた。『万川集海』をはじめ多くの忍術秘伝書が残っている事や、甲賀の地名があたかも忍者の代名詞のごとく使われ全国的に有名である事から考えると、「確かに忍者はいたのだ」と答えを出すのは容易である。しかし、甲賀地方の史実としては忍者はあまり登場していない。現在の甲賀郡内には、甲賀流忍者の実体とされる「甲賀五十三家」を先祖とする家は約二千五百家ほどあり、ほとんどが平安、鎌倉時代から続く家柄である。さらに甲賀出身武将織田信長の四天王の一人瀧川一益、大坂町奉行山岡道阿弥、岸和田藩主中村一氏、高山右近などは大身であっても、甲賀五十三家の亜流であり、甲賀五十三家からは同輩としての格しかあたえていない。江戸時代でも旗本として天領を領った家も多く、小説の世界の足軽以下の忍者を、史実と結びつける事は不可能である。

だが、忍者としての活躍を思わせる史料も出てくるから、不可思議なものとなる。大原勝井家には、妻へ二通、母へ一通の離縁状があり、家を出る都度渡しているが、どのような活動をしていたかは不明である。もっとも忍者の活動は、失敗をした時にわかることで、成功した忍者は、跡があってはならないのが仕事であるのがあたりまえの事である。

だから、忍者の活動は別として、甲賀武士団は、五十三家を中心に、戦国時代に甲賀共和制といえる多数決原理をもつ「甲賀郡中惣―地域連合惣―同名中惣」という組織をもつ武士集団であるため、他の地方から謎の集団、忍者と呼ばれ、自称でなく他称であったと私は考える。この多数決原理をもつ共和制をフランス革命より百年も以前に甲賀の地に築いたために、戦国大名は生まれず、甲賀郡内二百余の城で城砦化して自衛していたのである。鎌倉時代から江戸幕府への封建制の確立する途中に、甲賀地方は、共和制へと全く違った政治形態を進みだしたのであるが、武将三千、兵力五万では、天下への号令の旗を上げる信長の大軍の焼打ちによって崩壊してしまうのであり、江戸時代にはわずかに甲賀組という隠密の仕事が残るのみであった。

（柚木俊一郎）



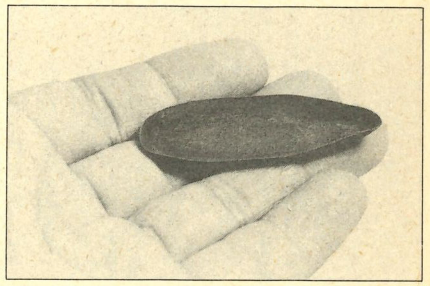
床の下に刀を隠してある（伊賀忍者屋敷）

ろ術を失い途方に暮れているみすぼらしい姿しか浮かび上がって来ないのである。

サラリーマン化していた徳川時代の忍者たち

——この島原の乱というのは、忍びの者にとっては失地回復の大チャンスだったと思うのですが、結局だめでしたね。なぜでしょうか。

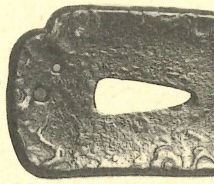
邦光　すでにこのころの忍びの者たちは、技術が低下して、そのうえ能力もなく訓練もまた足りない、未熟者ばかりになっていたからでしょうね。それに島原の乱というのは特殊なケースだったこともわざわいしてます。原城という所は非常に狭い場所なんです。後方は海になっていましてね。この小城に四万人を超える男女がひしめいているわけでしょう。その中へ忍者が入って行ったわけですが、これはすぐ発見されますね。また、島原地方は江戸や上方とはまったく言葉が違いますからね。いわゆる九州弁でしょう。忍者の方は恐らく関西なまりの言葉だったと思いますので、これが相手の一揆軍に出会って声をかけますと、いっぺんに正体がわかってしまうわけですね（笑）。昔はいざ知らず、徳川時代になってからの忍者は半ばサラリーマン化して野生味を失っておりますし、家光時代に忍者が九州で活躍したという話を聞きませんしね。九州に対する、特に島原に対する勉強不足があったのではありませんか。



著者（名和弓雄氏蔵）



「伊賀国住忍者」の銘のある乗越槍の穂先（同上）



皮でできた鐔（同上）



剛盗提灯（伊賀忍者屋敷）

——なるほど。しかし忍びの者のひとつの役目の中に、方言をいろいろ覚えておくということがあったようですが……。

名和　忍者が盛んに利用された時代には、忍者たちはふだんから各地の方言を必須条件で研究しているわけです。これを「奪口忍（だっこうにん）」と言っています。ひとりの忍者がすべての方言を話せるというわけにはいかないものですから、だれだれは北九州の方言、だれだれは南九州の方言というように、分担して日ごろから研究していたんですよ。だいたい、「奪口忍」というのは、かつては忍術の基本だったのです。ところがそれを知らない。本来、忍術には「始計（しけい）六か条」と呼ばれる、初めの計略というものがあるのです。この「始計」によれば、戦争の始まる少なくとも三年か五年前には、もう戦乱が起こりそうだという気配を察して、仲間の忍者を敵方に送り込んでいなければならない。島原の場合でも十人くらい城内に入れておけば、自由に情報が取れるし、内乱を起こさせることもできるわけですね。これをやらないで、ただ急に思いたってのこのこついて行くというのは、ちょっと忍者のたしなみに欠けていたのではないかと思います。

——また切支丹は言葉の中によくポルトガル語なども使いましたね。

邦光　初期の忍者と違って、だんだん忍者も堕落してきたと思うんですね。技の点においても随分劣ってきたと思います。かつては個人技を磨いて、たとえ親兄弟といえどもいったん敵にまわると容赦しないという厳しさを持っていた。ところが、幕府から俸給をもらってサラリーマン化してから後は、いわば忍者組の一員であって、個人技を磨く機会もなかった。山野にこもって修業するなどということをだんだんしなくなってきたのでしょうね。本来、忍者というのは一回ご

猿飛佐助の生みの親

架空のスーパー・ヒーローとして、猿飛佐助の人気はかなり浸透しているが、その生みの親は、「立川文庫」である。大正期に少年時代を送った人にとってはその時代のシンボルのような存在だった。

創刊されたのは、明治四十四年十月、大阪の立川文明堂が、玉田玉秀斎口演の講談本を袖珍本（縦十三センチ、横九センチの小型本）のシリーズとして売り出した。第一回配本は『諸国漫画・一休禅師』、最盛期はベスト・セラーを続けたというが、大正期の終わり、モダンなものが求められる時代になると、立川文庫の語り口はいかにも大仰すぎ、読者にあきられてしまい、大正十四年に休刊となった。

立川文庫以前、忍者は妖怪変化的なとらえられ方が多く、典型的な悪、敵役となっていたものが、ここでは忍術自体も武芸十八般のうちとされ、佐助は正義派のスーパーマンになっているのだから、子どもたちのアイドルにたちまちなった。

また、警句などがついていて、子どもたちはそれらを声に出して覚えたものだという。

例えば、

——婦女は己れを愛する者のために粧い飾り、勇士は己れを愛する者のため生命を捨つ

——山高しといえども尊からず、木あるをもって尊しとなす

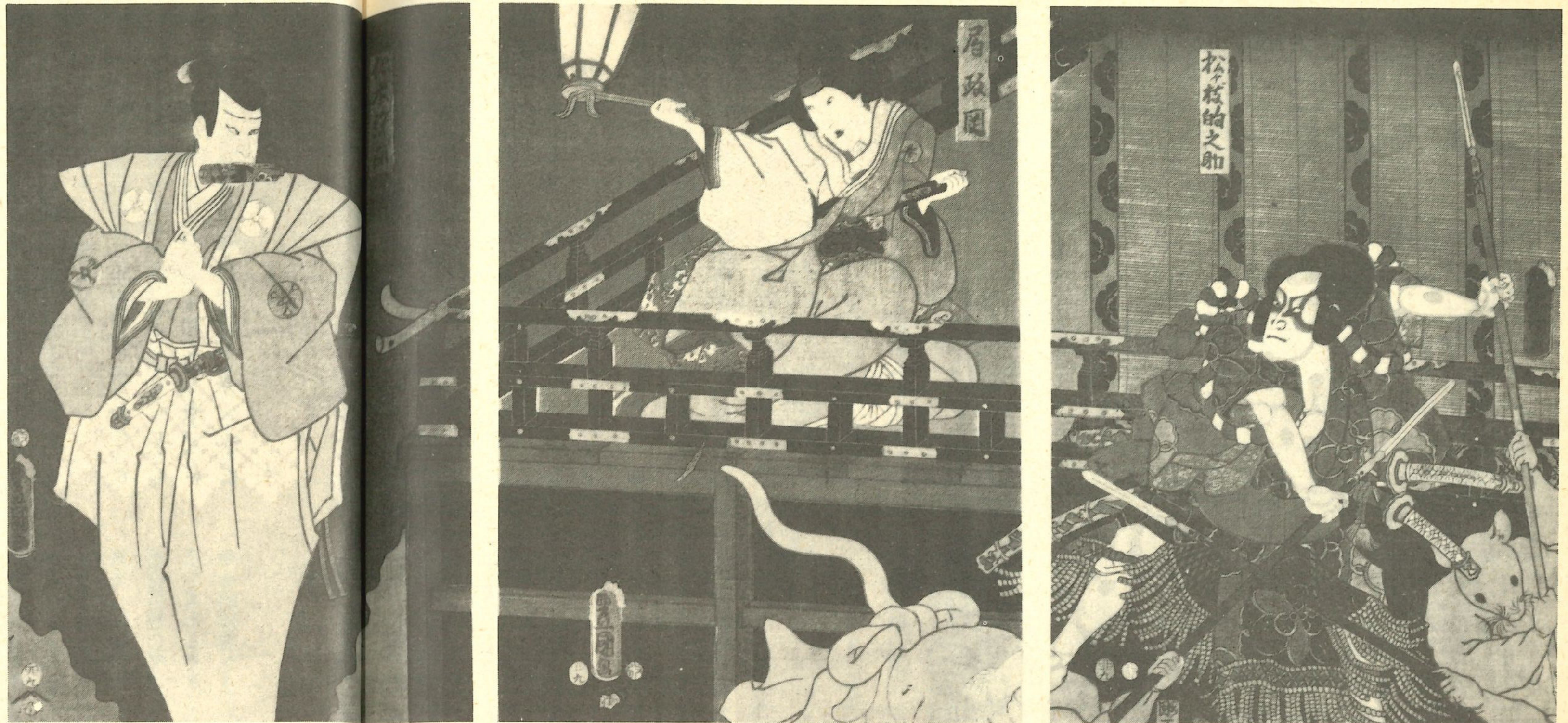
などなど。

立川文庫誕生のいきさつについては創刊者の縁戚・池田蘭子氏が書いているが、猿飛の誕生についてもふれている。

「西遊記そのままはもう古い。あの猿を人間にして、大活躍させるんです。空に飛び上ったり、思うまま雲といっしょに姿を消す。これを正義のために使うのです。きっとあたりますぜ。」

主人公は、なるべく変わった名まえで、覚えやすい名ということで、苦心の末『猿飛佐助』が生まれたという。猿飛は新手すぎて、読者がつかぬのではないかと心配されたが、たちまち版を重ね、続々と架空の忍者を売り出し、おまけに当時絶頂の人気俳優尾上松之助によって忍術映画が作られてブームとなったという。

いま、一般に徳川家康についてのイメージは「狸おやじ」として定着しているが、このイメージづくりは、立川文庫によってなされたという。



芝居の伊達騒動の仁木弾正（沖森直三郎氏蔵）

と、例えば後方攪乱のためとかで仕事を請け負っていたもので、いわば今日は甲に仕え、明日は乙のために働くというように、渡り歩いたわけでしょう。それが固定した主人に仕えると完全な給料生活者になってしまいますね。そうしますと、ついやはり安心してしまう。人間というのは生活が安定してしまうと、あまり苦しい修業はしなくなる。つまり忍術はもっともハードな、ハングリー・スポーツだったわけで、それがサラリーマン化してのんびりしてしまってはもうだめですね。先ほど申しあげた忍者の時代でなくなったというのは、つまりそのためで、忍者として堕落してしまった。忍者自身の内部的崩壊をきたしておったということでしょうね。

――ただ、もはや彼らの時代ではなくなったにもかかわらず、なぜ忍者たちは戦さに出て行ったのでしょうか。

名和　私は甲賀・伊賀の、いわゆる民族性だと思うのです。甲賀人にしても、伊賀人にしても、彼らの頭は明晰です。そして団結力があって、尚武の気風が強いと言いますか、悪く言えば好戦的と言いますか、そういう面がとてもありますね。それで何か事が起こると、やはりやむにやまれぬ血が騒ぐというようなことで、自分たちに不利な状況の中にも同調して行ってみたいというような気風が多分にありますね。

――また、彼らを利用しようとした人間たちがいたことも事実ですからね。今、私どもが問題にしております伊賀の者にしましても、甲賀の者にしましても、それは忍者のいちばん下の下忍です。そうすると、ほんとうの上忍というのはいったいだれなのだということになりますね。

邦光　忍者を操る人ですね。服部半蔵なども上忍のひとりでしょうね。本人自身はあまり術はやらないが、すぐれた術の使い手を見つけてきて、おだててうまく使う。まあ、その半蔵を操っている家康というのは、スーパー上忍ということになりましょうね（笑）。

名和　私は、現代でも上忍もいれば下忍もいると思いますよ。例えば、大きな組織の中に警察がメスを入れますと、必ず自殺者が何人か出ますね。これは忍者の言葉で言えば、初めから死ぬべく定められた「死間（しかん）」という忍者に当たります。ちょっと恐い話ですが、私は現代にも裏返しにした忍者たちは生きていると思うんですよ。これはもう忍者の精神が日本の民族性の中に脈々と流れている証拠だと思います。忍者の魂というのはまったく滅びていないような気がするんですね。

忍者たちはその後も、徳川の世を細々ながら幕末まで生き抜いていった。享保年間、将軍吉宗は新たに紀州流の流れをくむ忍者たちを、幕府御庭番（おにわばん）として登用した。しかし多くの忍者たちの生活は困窮の一途をたどるのみであった。幕末、彼らの多くは、家々に伝わる技術を活かして、花火師や薬屋に転向する者も多かったという。

忍者の組織

石田善人

私が忍者、ないし忍術に興味をもつようになったのは、大学院在籍当時、柴田實教授のもとで滋賀県甲賀郡の水口町史の編纂にかかわったためである。水口町には「甲賀古士」の名門山中家があって、その伝来した『山中文書』は、同家がもと神宮領柏木御厨の惣荘検断職や祭主保々司職などの所職や所領名田をもっていた関係から、神宮文庫に寄進されたかたちで納められており、私は何回も神宮文庫に通って、その調査をした。その結果は、『水口町志』で叙述したほか、その後の知見をも加えて数篇の論文として発表している。

甲賀が伊賀とならぶ忍者の里になるのは戦国乱世の時代であって、忍者は甲賀と伊賀の特殊な武士団構造のなかから生みだされてくる（伊賀についてはこの時期の史料がきわめて少ないので、甲賀の例からの類推が多いのだが、ほぼ同様の構造と考えて誤りはない）。

さて、甲賀郡には、甲賀五十三家と総称される小武士団があり、そのなかの有力なものが甲賀二十一家と呼ばれた。それらの各家ごとに「甲賀古士之事」と題する由緒書を伝えているが、転写にあたってそれぞれ自家につごうのよいように部分的改変を加えていて、そのために五十三家や二十一家の数え方には少しずつ相違がある。二十一家というときは、柏木御厨を中心とする柏木三家、杣荘を中心とする荘内三家、南山六家・北山九家を数えることが多いが、また柏木三家・杣五家・山南七家・山北六家と数えたりもする。これが五十三家ともなると、ほぼ甲賀郡全域の地侍家を網羅することになる。

甲賀ではそれらの小武士団が団結しあって、全体として甲賀武士団を組織していたのだが、その最小単位は各氏ごとの同名中惣で、それが地域的に連合して、例えば柏木三家の場合では、柏木三方と呼ぶ連合体をつくっており、さらにそれが甲賀全部に拡大される場合には郡中惣と呼ばれていたのである。

ここでこれらの結合を意味する「惣」とは、元来、全体を表す言葉であるが、中世では村落結合が惣と呼ばれており、荘園が一荘として結合しているときこれを惣荘といい（一荘結合の中心的親郷をさして惣荘と呼ぶ場合もある）、



忍者の組屋敷があった伊賀上野市忍町

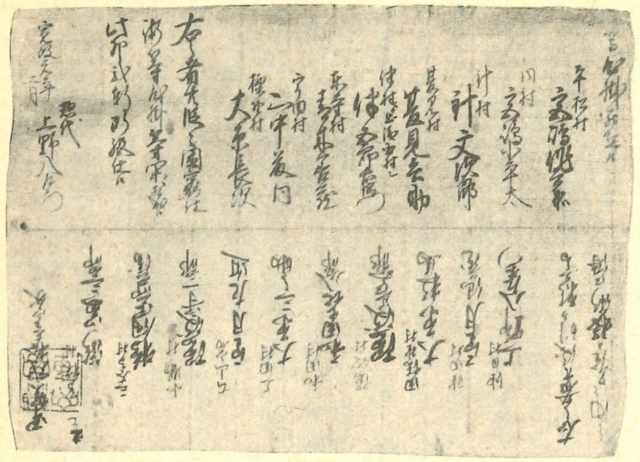
また荘園を構成する各村が村ごとに団結しているときこれを惣村と呼んだ。

惣荘や惣村は地侍と名主のほかに小百姓をも含みこんだ地縁的結合であるのがその特徴であるが、甲賀の同名中惣は、文字どおりに同一の氏を名乗るものたちの血縁的結合（擬制的血縁をも含む）であるところに特徴があり、それだけに甲賀郡の後進性を示すものといえる。

伝承によれば、甲賀の小武士団のおこりはさまざまである。柏木三家の筆頭山中氏は、敏達天皇から出た左大臣橘諸兄の後裔と称し、その末裔従五位下修理亮義清がこの地に土着して鈴鹿峠の西麓山中村に居館を構えて山中氏と名乗ったのに始まるという。その孫盛宗は柏木郷宇田尼の婿となって清俊と改名して柏木郷へ進出する足がかりを築き、やがて山中村の地理的条件から鈴鹿関警固役を握り、建久五年（一一九四）には山中村地頭職に補せられて鈴鹿山盗賊

追補の任を兼ねるようになる。のちに柏木御厨内の祭主保々司職その他の所職名田を獲得して以後、その居館を柏木本郷の宇田に移し、次第に勢力を蓄えて柏木三家の筆頭にのし上がるのである。

南山六家の筆頭大原氏は、大納言伴善男の末裔と称する。善男の子員助の母は三河幡豆郡司の娘で、その縁を頼って員助は幡豆郡に土着し、その子孫は三河半国の総追捕使になった。のちに故あって牢籠して甲賀郡大原郷に来住し、大原氏を名乗るようになったという。さきの山中氏とともに柏木三家のひとつに数えられる伴氏はこの伴一族の宗家で、大原・上野・多喜三家（いずれも南山六家に数えられる）を分家として派出して「伴の四家」と称し、それぞれ助・資・祐・兼の字を名乗りの通字としたという。



時代がかわり甲賀者の窮状を訴えた書状（神宮文庫）

柏木御厨の東にある美濃部郷には菅原姓の美濃部氏がおり、さらにその東の儀俄荘には蒲生郡の雄族蒲生氏の庶流が惣領家から儀俄荘下司職を譲られて移り住み、儀俄氏を名乗っていた。儀俄荘は藤原氏の勧学院領荘園で、儀俄氏も蒲生氏も藤原姓を名乗っている。のちに蒲生氏嫡流に氏郷があらわれて、蒲生郡日野城主から伊勢松が島（のちの松阪）城主となり、さらに会津若松城主として奥羽百万石の大守となるが、儀俄氏は氏郷に従って甲賀郡を離れてしまった。

このように甲賀武士は、都からのまたは他国他郡からの移住土着を伝えるものが多く、その本姓も源平藤橘の四姓はもちろん、菅原・伴・惟宗などさまざまな来歴を称しているが、それらが山深い甲賀郡各地に割拠してそれぞれ小武士団を形成し、いわゆる甲賀忍者の家柄となってゆくのである。

さて、最小単位の同名中惣とは、同じ氏を名乗る血縁者を核にし、その氏の名を称することを許された一部の非血縁者と、他の氏の名を称しながらも同族と見なされていた縁類者とを抱きこんだ構造をもつ。その規模は山中氏の場合で十九名、大原氏の場合で二十名で、おおむね二十名内外だったらしい。大原氏の場合では永禄十三年（一五七〇）三月二十四日の日付をもつ「定同名中与掟条々」三十二か条がのこっており、起請文を書いて固い団結を誓いあったことがわかる（『大原勝井文書』）。

それらの同名中惣が小地域連合体をつくるのが、柏木三方や石部三郷の場合によって知られる。柏木三家の伴・山中・美濃部三氏は、永禄九年（一五六六）十二月十五日に「三方以起請文申合条々」という八か条を連判で誓いあった（『山中文書』）。現在のこされているのは案文（手控えの写し）であるが、署名は伴同名中惣・山中同名中惣・美濃部同名中惣となっている。

同名中惣は、文字どおりに全員の惣寄合（全体会議）による多数決原理によって運営される建前であるが、その煩雑さを避けるために、執行機関として複数の奉行を選出した。選出方法を明記した史料はないが、談合によるかまたは投票によったと思われる。奉行たちも奉行中惣と呼ぶ執行委員会を構成していた。奉行のほかに、年行事または年預と呼ぶ一年任期の総代らしいものがおり、同名中惣の執行機関としての奉行中惣とは別に、主として寺社の管理運営に当たっていたらしい。

さて、柏木三方や石部三郷のような地域連合がさらに甲賀郡全体に拡大されて、甲賀郡中惣が結成される。郡中惣はその執行機関として十名の奉行を選出していた。興味深いことには、隣国伊賀の地侍も甲賀地侍と類似の同名中惣

と、その連合体である伊賀惣国一揆の組織をもっており、伊賀惣国一揆の奉行も同じく十名で構成されていたのである。『山中文書』には十一条からなる伊賀惣国一揆の掟書がのこされており、その最後の一条は、

一、当国之儀ハ無恙相調候、甲賀より合力之儀専一ニ候間、惣国出張として伊賀甲賀境目ニは近日野寄合あるへく候

とあって、伊賀惣国一揆と甲賀郡中惣が協力し合って、問題解決のために国境で野寄合（野外での総会）を開催すると定めているのである。甲賀武士と伊賀武士、ひいては甲賀と伊賀の忍者たちの団結は、以上みてきたような強固な惣の結合の上になりたっており、それらがいずれも起請文をともなった惣掟によって強制されていたのである。

さて、伊賀・甲賀共通の忍術書に『万川集海』という書物がある。その末尾に「延宝四年辰仲夏日、江州甲賀郡隠士藤林保義（武）序」とあって、将軍家綱の延宝四年（一六七六）丙辰の歳の仲夏（五月）に藤林保義（武）の著であることがわかる。甲賀五十三家のうちには藤林氏はなく、これは明らかに百地・服部とならぶ伊賀忍者の名家である藤林氏のことで、伊賀に伝えられた『万川集海』では「伊陽隠士」となっている。『万川集海』の冒頭には「忍術問答」と題する問答体の忍術史の概説があり、そこには十一名の陰忍の上手の名があげられているが、そのすべてが伊賀忍者である。そのひとり楯岡の道順が召連れた伊賀者四十四人・甲賀者四人の計四十八名はいずれもおのおのが一流を号して四十八流の流派が生じたという説明でも、甲賀忍法にはわずか四流しか与えられておらず、さらに「斯ル故ヲ以テ伊賀ヲ忍ノ本トスル也」という断定まであって、これは明らかに伊賀を甲賀より優位において叙述されている。それにもかかわらず『万川集海』が藤林保義（武）を甲賀郡隠士とする理由は、この書が寛政元年（一七八九）四月に、甲賀から江戸に下った大原数馬・上野八左衛門・隠岐守一郎の三名によって寺社奉行松平右京亮（輝延）を通じて幕府に献上されたためであって、現にその完本が内閣文庫に所蔵されている。では何故、幕末の寛政元年に甲賀古士の代表三名が江戸に下って、この書を献上するに至ったのか。

伊賀惣国一揆は反信長の態度を崩さず、最後には織田信雄の攻撃によって壊滅したが、なお再起の機会を狙って徳川家康の伊賀越えを援助したことから、幕府の隠密機構や江戸城の警備を担当するお庭番や伊賀同心となった。甲賀郡中惣の場合は、

一、早くから信長麾下に属した和田惟政・惟長兄弟、山岡景隆・景友（道阿弥）兄弟などのグループ

二、六角承禎父子を最後まで支持した三雲・望月氏などのグループ

三、永年の旧誼から六角氏に同情的だが、反信長に徹しきれなかった中間グループ

に三分解し、大部分が信長・秀吉二代の間に没落して、郷士となって甲賀郡に残った。当初は諸大名の召抱えた甲賀者の補給源としての役割を果たしていたが、泰平の時代が続くとともに伊賀者・甲賀者の活躍する場がなくなり、寛文七年（一六六七）閏二月に江州甲賀古士共惣代として上野又左衛門秀影が江戸に下り、老中松平信綱にその窮状を訴えた。訴状には「先御訴訟人芥川甚五兵衛」の名がみえ、これは二度目の訴状であった。さきにあげた「甲賀古士之事」は正徳二年（一七一二）に芥川氏によって書かれている。

さきに島原の乱にあたっても、甲賀郷士たちは従軍を願い出て仕官の機会をつかもうとして、失敗した。江戸の泰平が異国船の来航でようやく騒然としはじめた寛政元年に、古士たちは寺社奉行松平輝延を頼って訴状を提出し、『万川集海』を献上したのであるが、要するにこれは就職運動であって、『万川集海』は古士たちが困窮にもめげずに、いかに忍びの術を忘れずに習練をつんでいるかを示す証拠物件であったのである。しかし、わずかの涙金が支払われただけで、体よく追い帰されて、またも失敗した。幕末維新のころに甲賀隊が結成されるのは最後の古士たちの運動であった。甲賀隊と同じく、丹波山国の山国隊、摂津多田の多田隊、大和十津川の十津川隊は、すべて郷士による勤王隊であるが、それらは郷士から武士への転身を賭けた就職運動であった点で共通している。

近世を通じて甲賀古士たちは困窮のなかで武士への復権を夢みつつ、ついにそれを果たせなかったのだといってよい。

（岡山大学教授）

武将たちは忍者をどう使ったか

戸部新十郎

忍者は、戦争の必要から生まれた存在だが、だいたい日本の戦争というものは、戦史を眺めてわかる通り、堂々と陣構えして雌雄を決したためしは、ほとんどない。騙し討ちや裏切りによって勝負がつく。

戦国の武将はだから、常日頃の諜報収集や素早い連絡、あるいは謀略工作をたいそう重要に考えていた。それ自体、戦争といえないことはなく、忍者はその戦場以外の部分で、大いに働いたわけだった。

甲斐の武田信玄は、俗に〝三ツ者〟といわれる忍者の一群を抱えていた。三ツ者とは、間見・見方・目付の総称で、信玄はそれらを諸方に放って、たえず遠近の国情を探っていた。

いながらにして、足長く（遠方まで）なんでも知っていたので、

〈甲州の足長坊主〉

という異名さえあった。

かれの領土の甲州・信州は、四辺山岳に囲まれた地形なので、峰々に狼煙台を設け、あっというまに情報を伝達できた。火薬を使う狼煙術も、むろん忍者の職分である。

かれはまた、同盟者である加賀一向一揆との連絡のため、白山山系越えに中部山岳地帯を通ずる忍者道を作ったといわれている。主として、越後の上杉謙信牽制のため、健脚の忍者たちがその忍者道を疾駆したことだろう。

ところで、一口に忍者を放つというが、これがじつはたいへんなことで、どこでもそんな危険な者を、やすやすと受け入れてくれるはずがない。

忍者にはおよそ、〝陽忍〟と〝陰忍〟ということがある。

「陽術ト言ウハ、謀略、知略ヲ以テ、形ヲ顕ワシテ忍ビ入ルヲ言イ、陰術トハ人ノ目ニ会ワザルヨウニ、陰形ノ術ヲ以テ忍ビ入ルナリ」

（『万川集海』）

というわけで、変装したり、伝手を求めたりして入り込むのが陽術、こっそり忍び込むのが陰術である。

戦国武将は、必要に応じ、陰陽を使い分けたものだが、ごく安易な方法は、行商人や廻国僧から諜報を仕入れることだった。



米沢の上杉謙信銅像

上杉謙信は、〝軒猿〟とよばれる忍者を使っていた。中国で忍術を使いはじめたのが軒轅帝だという説があるので、それを日本読みにしたものである。

かれはその軒猿を薬の行商人にして、諸国を廻らせた。有名な越中富山の売薬人の制度は、このあたりが起源である。

密教信者のかれはまた、出羽三山の修験僧や、能登石動山の衆徒を諜者として使った形跡がある。当時、石動山の衆徒は、北越七国を縄張りにしており、自由な往来が認められていたのである。

北条早雲には、盲の諜者を巧みに諸国に放ったという話がある。あるとき早雲は、

「盲人は世の中にとって無用のものであるから、すべてからめとって、海に棄てよ」

という触れを領内に出した。盲人たちは、怖れおののき、ことごとく小田原を去り、四方に散った。

その中に、早雲の秘命を受けた者がまじって

いた。もし、他国で素姓を怪しまれても、冷酷な触れのため、やむなく出国したといえば、名分が立つというしだいである。

家来を偽って追放し、敵中に送り込んで忍者的働きをさせる話（〝山彦の術〟という）は、ずいぶん伝わっているが、これはその一つである。

備前岡山の宇喜多直家は、龍口山城の最所修理亮を討とうと思い、家来の岡郷介を偽って追放した。郷介はまず、見も知らぬ流浪の乞食婆さんを引き取り、母親としてもてなした。

やがて、めざす龍口城にほど近い船山城の須々木豊前という者に、かの老婆を人質にして仕えた。ときに豊前は、東国から駿馬を買い入れて得意になっていたが、郷介はその駿馬を奪って、龍口城へ逃げ込んだ。豊前は怒って、人質にとってあった老婆を引き出し、城の下で張り付けにした。


伊達政宗銅像（青葉城址）

はじめ怪しみながらかくまっていた龍口山城の最所修理亮は、母親を殺された郷介を不憫に思い、しだいに重用した。機会を見はからい、郷介は修理介を討ち果たした。同時に宇喜多直家の軍勢が攻め込んできたのはいうまでもない。

なかなか手のこんだ手段で、敵地に潜入しているが、潜入した者を逆用する場合もある。

厳島合戦の直前、陶晴賢は天野慶安という諜者を、毛利元就のもとへ送り込んだ。元就は心得ていて、信用する態度をとり、晴賢の重臣江良丹後守と通じていることを明かした。

慶安はすぐそのことを知らせたので、晴賢は江良一族を殺してしまった。まず反間策にひっかかったわけである。

元就はかねがね、晴賢と戦う場合、厳島へ相手を上陸させて戦う方策を考えていたので、慶安にくどいほど、

「晴賢が厳島へ渡って、海上を封鎖するのが一番怖い」

といっていた。これも晴賢の耳に伝わった。まもなく、晴賢は元就の待ち受ける厳島上陸を行い、そこで全滅させられた。

なお、このように潜入してきた忍者を逆用するのを〝天唾術〟という。天に唾するというくらいの意味だろう。

徳川家康はこの種謀略の達人だが、旧武田浪人で、のち甲州流軍学の祖になる小幡勘兵衛を大坂城に入れ、逐一、大坂方の軍機を探っていたのは有名な話である。

忍者の直接の働きは、戦場においてより示されるから、戦国武将の多くはかれらを召し抱えていたり、あるいは契約を交わしたりしていた。

たとえば、奥州伊達家では〝黒脛巾組〟といい、前田利家は〝偸組〟と称して、それぞれ忍

者を抱えていた。〝偸組〟は、五十人の伊賀者で編成されており、天正十年（一五八二）の荒山合戦で活躍した記録がある。

なかでも、江州佐々木（六角）家と甲賀衆との結びつきは、注目されていい。

甲賀郡は守護佐々木家の支配下にあったが、一種独立の体制にあった。険阻の地域内で、忍術を含む独特の風俗を伝えてきた土豪たちは、連合勢力による自治制を保った。

佐々木家はそれを認めた。自治に介入しないかわり、いざというとき、甲賀衆はあげて佐々木家のために尽力するというものだった。

長享元年（一四八七）のこと、足利九代将軍義尚は、佐々木高頼が幕権を無視し、寺社荘園を横領したというので、大軍を率い、討伐にやってきた。

佐々木勢は、いち早く本拠観音寺城を焼き、甲賀の山中にこもった。これが佐々木家の戦法なのだが、幕府勢は意気揚々と、本陣を栗太郡鈎の庄においた。

甲賀衆は、突然、その鈎の本陣に奇襲を仕掛けた。甲賀三郎の子孫と伝えられる望月出雲守などは、朝霧に乗じて攻め立てたので、魔法をもって霞を使う、と怖れられたほどだった。

幕府勢はあわてふためき、逃げ去った。佐々木勢は悠々と戻ってきたし、甲賀衆も名をあげた。

「世上あまねく、伊賀・甲賀の忍者と称することは、足利将軍の鈎御陣のとき、神変奇異の働きありしを、日本国中の大軍眼前に見聞するゆえに、それ以来、名高し」（『近江輿地志略』）

とある。

延徳三年（一四九一）には、将軍義材が攻めてきた。高頼は例によって、甲賀にこもった。こんどは敵も用心しているので、甲賀衆の奇襲は成功しなかったものの、それ以上攻めようとはせず、まもなく引き揚げて行った。

よほど甲賀衆や甲賀郡という土地が気味悪かったのだろう。そんな不気味さを抱えているということ自体、戦国武将の強味である。

二代あとの義賢（承禎）のとき、佐和山城の百々某が浅井方に寝返った。そこで義賢は、伊賀忍者の楯岡道順に依頼して、攻撃の手助けをさせている。

もともと甲賀郡と伊賀国は、〝甲伊一国〟とよばれるほど密接なつながりがあり、土豪たちが自治制をとっているところも似ていた。忍術にしても、俗に〝甲賀流〟〝伊賀流〟と別個のように称しているが、実態は変わらない。

このさいはしかし、佐和山城にも甲賀衆がいたかして、伊賀衆に依頼するほうが都合がよかったのだろう。

道順は配下の忍者四十八人を率い、百々家の紋をつけた提灯をかざして、城にやすやすと入り込み、夜陰に乗じ、火をつけたり夜回りを刺殺などして、義賢勢の攻撃路を作った。このように潜入するのを〝妖者術〟という。

なお、この道順は出陣にあたり、陰陽師の宮杉という者に吉凶を占ってもらったところ、吉と出たので、

沢山（佐和山）に百々となる雷も
いがさき入れば落ちにけるかな

という歌を詠んだという。いがさき（伊賀崎）は、道順の苗字と伝えられる。

暗殺もまた忍者の仕事だが、この義賢は甲賀衆の杉谷善住坊に命じて、千草峠で織田信長を鉄砲で狙わせた話が知られている。ただし、二発撃ったが、いずれも信長の帷子の袖を貫いただけで、失敗に終わった。

相州の北条家では、風魔一党を使った。首領の小太郎は、身の丈七尺、眼はさかさまに裂け、牙四本がむき出ていた（『北条五代記』）という。

一党は山賊・海賊・強盗・竊盗（ほそりぬすと）の四手に組織され、それぞれの立場で闘った。もっぱら、甲州武田家をずいぶんなやましている。

徳川家康のもとには、有名な服部半蔵がいる。かれの初陣は十六歳のときで、三河宇土城の夜討を命ぜられ、伊賀忍者六、七十人を引き連れて城内に潜入し、戦功をあげた。

以来、家康の戦うところ、常に夜討、奇襲を行い、功を立てているが、天正十年、家康の伊賀越えを助けた伊賀衆が同心にとり立てられると、その伊賀組の取締りになった。

島原の乱のとき、幕府に仕えなかった在地の甲賀衆が、松平伊豆守に従って参加した。敵城に忍び込んで、放火したり食糧事情を探ったりして働いた。そして、これが忍者の戦場における最後の活躍になったのである。

（作家）

妖術・幻術使いの顔ぶれ

綿谷 雪

妖術の淵源

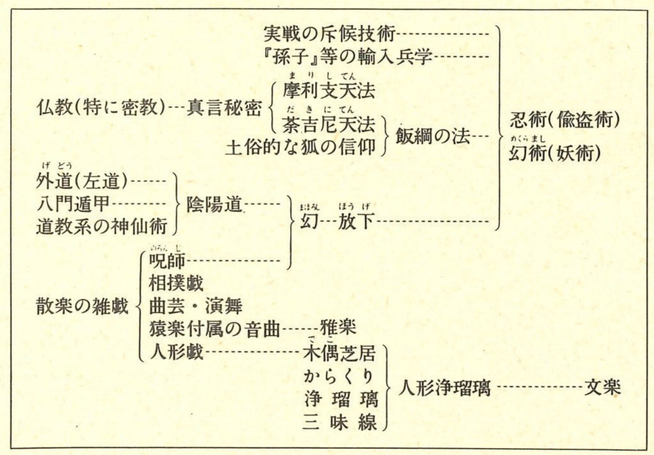
魔術や妖術は、もと印度西域の漂泊民族に発した。彼らは中国へ流入し、漢の武帝のころ散楽の雑戯（一に百戯）と称して盛んに演じたが、後に朝鮮半島に移って広大族・白丁族となり、一部はさらに海をわたって日本へ渡航した。このとき百済から百二十余県の民をつれて帰化した統率者が、秦の弓月である（『日本書紀』応神天皇十四年、十六年の条）。

秦氏のもってきた散楽は後に猿楽・能楽となり、その部民たちが散楽の前芸として演じた奇術や曲芸や人形戯や角力の雑芸は、後に族長（秦氏）の保護を解かれて四方へ放浪し、辻芸となって世間へ流れ出た。その部族の名が傀儡であった。

散楽の雑戯が後世、どんな技芸の基礎になったか、下の一覧表を見て下さい。

『万葉集』巻二に、燃える火を袋に包む魔術を詠んだ歌が出ているが、そういった魔術師を当時はおしなべて呪師といい、仏教や道教神仙術、または陰陽道では左道・外道などという。

修験道の妖術使いの大物は何といっても役の行者で、仙人のほうでは播州の法道、加賀の泰澄、女の脛に見とれて墜落した久米仙人もある。



左道では山階寺の基真が道鏡とコンビで悪事をはたらき（『続日本紀』）、陰陽師では安倍晴明が芦屋道満と外術をたたかわせた（『中右記』『今昔物語』『宇治拾遺物語』）。外術の例は特に鎌倉時代に多い。『今昔物語』におもしろい話が数条出ているし、奥州松島にいたすばらしい外術の使い手のことは『吾妻鏡』（正治二年十二月三日の条）に見えている。

真言秘密の荼吉尼天の法を修した人に関白藤原忠実（『古今著聞集』）、鹿が谷の謀議で平家にクーデターをかけようとした新大納言成親（『平家物語』）がある。平清盛もこの魔法を修していたが、成就すると子孫が不幸になると知り、一方では清水観音に千日詣でをして御きげんとりをしたというから（『源平盛衰記』）、ずいぶんずる賢い人だ。後世だが鎌倉の志一上人が荼吉尼天の魔法で、足利将軍義詮を祈り殺そうとしたことが『太平記』に出ている。

荼吉尼天と狐の信仰が結びいったのが飯綱の魔法で、北条泰時の執権時代、信州荻原城主伊藤兵部大夫がその神通力で二百歳の寿を保ったのが起源、と信州飯綱権現の社伝に説く。この

魔法で有名なのは応仁の乱ごろの管領細川勝元の子の政元で、空中飛翔その他の怪事をおこなった（『公方両将記』『応仁後記』）。

おなじ真言秘密でも、摩利支天の魔法による怪事談は余り残っていない。私の知っているのは寛永年代、最上藩士の尾関忠吉（『老媼茶話』）ぐらいである。

忍術はスパイ兵学

室町時代から戦国へ――いよいよ忍術と幻術の時代がやってきた。

忍術の祖についいては信用できそうな確説はない。『甲賀流忍術秘巻』由来之巻には、恵美押勝……伊賀の覚法（伊賀流）……楠木正成……芥川兵部（甲賀流）の伝統を説くが、楠木正成が忍術の伝統のなかに取り込まれたのは正にありそうなことで、『南朝太平記』などの俗史書などにも、楠木正成が板持という名の忍者をつかったと書いてある。

『近江輿地志略』には、ばくぜんと甲賀・伊賀四十九家ありといって約三十家の名を挙げ、永禄年中の六角攻めの鈎の陣のとき、伊賀の河合安芸守の一族が忍びの術で功を立てて以来、甲賀・伊賀郷士の評価が高くなったといい、又、甲賀流は伊賀流からの分かれであるとも書いてある。伊賀流服部党の『忍術秘巻』忍祖之記の条には、伊賀流の祖を服部半蔵の先祖の伊賀平内左衛門家長（平内兵衛保清から十七代後）としている。

いま残る両流忍術の総合伝書は、延宝四年に藤林佐武治が編集した写本『万川集海』で（甲賀本は二十二巻、伊賀本は二十五巻）、その秘伝として説く内容は主として忍器の製作と使用法が中心で、他に取り立てて奇怪な方技は包含されていない。要するに忍術は戦陣の斥候・スパイ兵術であり、印度伝統の変幻魔法につながる幻術とは全く異質のものであるのにかかわらず、常識的には大きく誤られて、奇怪な妖術と思われるようになった。

甲賀者・伊賀者はじめ透波・突波・乱波の名で雑書に記録された者は、私のメモでも二百名を越えているけれど、そのほとんどは牒者・早足・変装・偸盗・放馬・放火・暗殺などの事績に限られている。ごく少数の忍術家――例えば伊賀流の石川五右衛門、津軽藩中川流忍術祖の中川小隼人、松本藩芥川流忍術四代目芥川九郎右衛門義矩らに、妖術の話題が付随しているのは、その忍術家が印度系の幻術を併用したか、あるいは単なるフィクションに過ぎなかったと推察せざるを得ない。

幻術とバテレン妖術

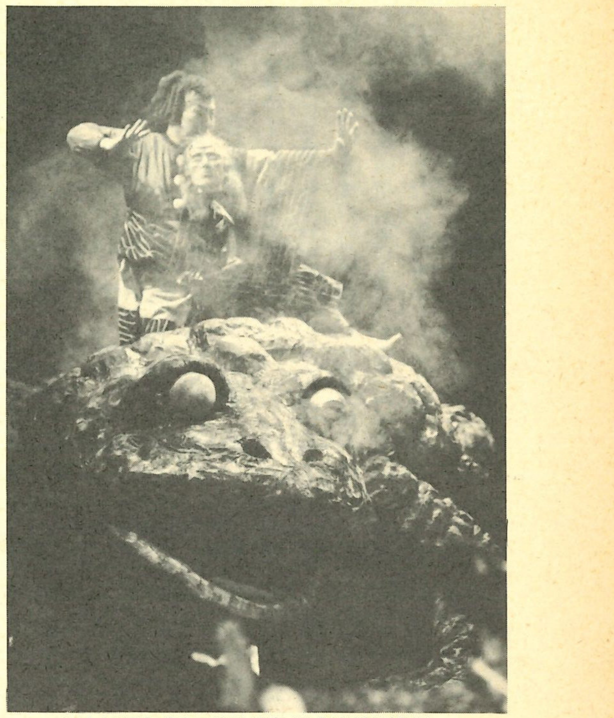
戦国時代の幻術師でもっとも傑出したのは南都の果心居士だ。彼は武田信玄・織田信長・松永久秀らを背景に、多くの怪事をおこなって世人をおどろかせた（『醍醐随筆』『玉箒木』『虚実雑談集』他）。果心は筑紫の人と『義残後覚』にあるが、じつは近江出身の因果居士の小説化でないかと私は思う。因果居士は実在した八宗兼学の僧で、有名な安土宗論の判者であり、慶長十七年に駿府で徳川家康に面会したとき八十八歳というから（『古老茶話』）、松永久秀が多門城にいた永禄年中には三十歳代であっただろう。

なお『老媼茶話』に見える妖術使い現世居士と未来居士は、共に前記の果心居士のリライトと思われ、それをさらに書きなおしたのが『妖幻夜話』に火遁の術の名人と書かれた魔法長兵衛である。

飛加藤こと加当段蔵は、ほぼ果心居士と同じころの人物だ。彼の事績は寛文六年版『伽婢子』に始めて小説化され、さらに文政年代の『烈戦功記』に、中国の『捜神記』などを取り入れて脚色された。実在の人物だったことは史籍集覧本『紀伊国物語』に「軽業の名人」と書かれているので知られるが、妖術話はフィクションだろう。

右のほか幻術で有名なのは毛利元就の侍大将杉原播磨守に属した忍組の佐田彦四郎・甚五郎・小鼠の三兄弟（『義残後覚』『芸州三家誌』『陰徳太平記』）、および村上周防守の家来相部次郎右衛門で、相部はあまり奇怪な術を使ったため、キリシタン・バテレンに誤られて切腹を命じられた（『関ケ原軍記大成』巻七）。

キリシタンの妖術といえば、島原の乱の天草四郎は奇々怪々の術をおこない（岡田章雄氏『キリシタン・バテレン』）、またその叛乱の参謀だった森宗意軒や、由比正雪の生家の下男山下与茂作もバテレンの術者で（『南島変乱記』）、由比正雪自身も宗意軒から妖術を習ったという



尾上松緑演ずる天竺徳兵衛(演劇出版社提供)

(『草賊記』)。

幻術の巧者は民間にもあらわれた。江戸ではメクラマシと称して舞台で演じられ、延宝八年四月、橘右近が千代田城二の丸で四代将軍の上覧に入り(『玉露叢』)、元禄時代には塩屋長次郎の呑馬術が三都の興行場をアッといわせた(『昼夜用心記』)。明和年中、京都二条河端の幻術師生田中務が、バテレン妖術と認定されて死罪になり、つづいて大坂の与力大塩平八郎が、バテレンの妖術師豊田貢を検挙している。

地方でも宝暦ごろ金沢城下に高田大林坊、高岡瑞龍寺の僧天説、医者の若林信子、京都の薬売り兵部など幻術で知られたが(『三州奇談』)、これは、バテレンではない。

演劇や小説の妖術使い

芝居でもっとも早く誕生した妖術使いは伊達騒動の仁木弾正で、特に安永七年七月江戸中村座で初演された初世桜田治助の『伊達競阿国戯場』以来、仁木弾正は鼠の術を使い、床下で踏みつけられて眉間を割られると決まった。弾正の家来の鳶の嘉藤太も妖術使いで、これは戦国の飛加藤の名の盗用。実録本『実録伊達騒動』には芦原小助という忍術家が登場する。

蟇蛙の術を使う天竺徳兵衛は寛永年代に実在した大航海者で、早く宝暦七年に並木正三が浄瑠璃『天竺徳兵衛聞書往来』を作ったが、後に四世鶴屋南北(大南北という)の『天竺徳兵衛韓噺』が文化元年に初演され、ドロドロ仕掛けの妖術で観衆をおったまげさせた。

つづいて妖術芝居のピークを作ったのが自来也である。中国の小説、宋沈俶の『諧史』から我来也の一条を借りて読本にしたのは御家人作家の感和亭鬼武で、十二冊本で刊行されたのが文化三年。翌四年九月に近松徳三脚色『柵自来也談』と題し、大坂の角座で三代目市川団蔵の自来也で大当たりに当たった。

そこで江戸の美図垣笑顔が大潤色をして、天保十年から『児雷也豪傑譚』(初編)と題して刊行。書き継ぐこと全五十四編、その間、作者も柳下亭種員、さらに柳水亭種清と替って慶応二年に終了した。児雷也の蟇蛙に対して蛇使いの大蛇丸、なめくじ術の綱手姫と取り合わされた虫拳の趣向である。この小説も河竹黙阿弥が脚色して嘉永五年に初演、好評に気を好くして後編も上演された。

享保九年近松門左衛門作『関八州繋馬』で小蝶という名の平将門の娘が、山東京伝の小説『善知鳥安方忠義伝』で始めて滝夜叉の名に創り出され、これが脚色されて『世善知鳥相馬旧殿』の題で江戸の市村座で初演されたのが天保七年七月。この滝夜叉は兄の良門と共に蟇蝦の術を使った。

もう一人書きおとせないのが火遁の術の犬山道節で、原作は曲亭馬琴『南総里見八犬伝』、脚色は大坂若太夫芝居『金花山雪曙』以来数種ある。

他に蜘蛛の術の若菜姫、犬神使いの犬若、胡蝶の術の藤浪由縁之助、鼠の術の清水冠者義高、虎の術の虎王丸……他は略す。(作家)

歴史をゆるがせたスパイたち——ヒーローからピエロへ

権田萬治

スパイの歴史が人類の歴史とともに始まるといったら少々いい過ぎになるかも知れないが、スパイが売春とともに人間の職業の中で最も古い職業の一つであることはまず間違いないだろう。

ジョック・ハスウェルは『陰謀と諜報の歴史』の中で、最も古いスパイの記録として紀元前二〇〇〇年ころに瓦板に焼き込まれた砂漠パトロール隊長の報告書を挙げている。発見場所はユーフラテスの河畔のマリ。瓦板は領主に当てたもので、「ベンジャミテス地方の国境の村々は、狼火で通信し合っていることはわかったが、合図の意味がまだわからず、今後、精力的に解読法を探るつもり」と書かれ、城壁の警備強化の必要性を進言しているという。

しかし、歴史をゆるがせた史上初のスパイといえば、まず「トロイの木馬」で有名なシノンを挙げねばなるまい。

難攻不落を誇るトロイの城壁の周囲から、ある日、こつぜんとそれまで包囲していたギリシャ軍が姿を消し、そのあとに大きな木馬が置き去りにされていた。

木馬の周囲に集まったトロイの人々は、「この木馬が敵の武器なのかあるいは神への捧げ物なのか」と口々に議論していたが、ちょうどそのころ、羊飼たちが一人の若者をプリアム王の前に引ったてて来た。

この若者はシノンといい、ギリシャ軍が帰国に際し航海の無事を祈って生贄にしようとしたので脱走したと告白する。そして木馬については「ギリシャ人は女神の像を盗んだ償いに、この馬を作りました。トロイの人がこの馬を街の中に入れて守護神にしないように大きなものにしたのです。この木馬に乱暴を働くとトロイに災難がふりかかるでしょう」というのだった。

そこで人々は「木馬をアテネ神殿に運べ」と叫び、狭い城壁をこわして街の中に入れた。それからあとは、飲めや歌えの大騒ぎ。やがて街中が眠りについたとき、シノンが木馬のかたわらに忍び寄り、中に入っていた二十人ほどのギリシャ人を外に出し、松明でテオドス島の陰に隠れていたギリシャ艦隊に信号を送った。こうして、ギリシャ軍はひそかにトロイに再上陸、さしも難攻不落を誇ったトロイもついに壊滅してしまったのである。

トロイ攻略は、紀元前一二〇〇年に起こったとされているが、『スパイの歴史』を書いたロナルド・セスは、このシノンのスパイの方法は二十世紀のものと根本的にはほとんど変わっていないと指摘している。

このようにスパイの歴史は古く、歴史の背後で数知れぬスパイが活躍したことは事実だが、このトロイの木馬のように面白い話となるとそうざらにはない。

たとえば、第二次世界大戦の末期にドイツのスパイとして活躍した『わが名はキケロ』で有名なエリザ・パズナにしても、金ほしさからトルコのイギリス大使邸に下僕として住み込むかたわら、機密書類をひそかに複写してドイツに渡していただけのことである。確かに入手した情報の価値は高かったが、ドイツ情報部が信じられないくらい簡単に手に入れたものだし、そのエリザ・パズナという人物そのものが知性の一かけらもなく、ただ金目当ての人間だけに何の魅力もないのである。

一般的に、スパイになる人間には二つのタイプがある。一つは金とスリルを求める醜悪な俗物であり、もう一つはその反対に、あえて裏切り者の汚名を着せられるのもかえり見ず一つの



マタ・ハリ（Ph. © Harlingue/Violet）



アゼフとマダムN（Aseff–The Russian Judas, Hurst & Blackett, London）

理想に殉じようとするリヒアルト・ゾルゲのような確信犯スパイである。

しかし、醜悪な俗物スパイもロシア革命におけるアゼフのようにスケールが大きくなると人間学的興味をかき立てずに置かない。

円顔で鼻が低い上に首が短く、厚い唇でいかにも好色家らしいアゼフは、一八六九年ドン地方のリュスコフの町に生まれた。家は洋服屋だったが貧しく、中学卒業後はさまざまな職業についたが、やがて雇い主の金を横領してドイツに逃げ、カールスルーエ工芸学校の電気科に籍を置いた。現地にはロシア人学生もおり、社会主義運動の組織も作っていた。金もつきたアゼフは、ロシアの秘密警察に手紙を出し、仲間を売ることを申し出てスパイになった。やがて秘密警察長官ズバドフの信頼を受けたアゼフはモスクワに電機会社の技師というふれ込みで戻り、エス・エル党の革命運動に参加し、テロリストのリーダーとなった。

アゼフという人間の奇怪さは警察のスパイとして、次々と同志を官憲に売り渡しながら、同時に、自ら政治首脳のテロを指導、実行するという恐るべき二重人格性にある。たとえば、他の革命団体が企てたプレーグ警察長官の暗殺計画を事前につかんで一味を逮捕させたかと思うと、今度は自ら一九〇四年に同じ長官の暗殺を計画して成功しているし、皇帝の叔父セルジ大公も暗殺しているのだ。

つまり、アゼフは警察と革命家の双方の信頼をかちうるため、双方を血の犠牲にすることもかえりみない文字どおりの残忍な二重スパイだったのである。有名なスパイ摘発者ブルツェフによって仮面をはがれ、一九〇八年末にパリで革命裁判にかけられてからは、すっかり落ちぶれ、ヨーロッパを転々としたが、それでもその後十年も生き延びたのだから、その罪に比べれば幸せだとしかいいようがない。

こういう人物の心の奥底に潜む魂の劇は、まことに文学的主題にふさわしい。大仏次郎の『地霊』、グーリの『アゼフ』などの小説に取り上げられたのも当然で、荒畑寒村は『ロシア革命の曙』の中で、そのアゼフとロマン・マリノフスキーをロシア革命のスパイの代表としている。さまざまなスパイが現れたが、結局アゼフ以上に暗く、奇怪な肖像のスパイはいないといってよいだろう。

日本でも女という字を分解して、女忍者のことを「くノ一」などというが、昔から性的魅力を武器にした女スパイはどこにもいたようである。ゾルゲは女はスパイに向かないと述べているが、それはそれとして女スパイはどこか華やかなものが感じられる。そういう女スパイの中ではやはり、〝暁の瞳〟ことマタ・ハリが何といっても代表的存在だろう。

一八七六年オランダに生まれたマタ・ハリは、本名をゲルトルート・マルガレーテ・ツェレといい、一九〇五年二十九歳のときパリのムーラン・ルージュに初めて姿を現した。エキゾチックな美貌と悩ましい妖艶な肢体を武器に、このストリッパーは、やがてヨーロッパ中の上流社会の人間と親しくつき合うようになったが、第一次大戦の前後からドイツのスパイとして連合国の作戦計画や基地に関する軍機を流していたのである。

一九一七年のフランスは一度マタ・ハリに国外退去を命じたが、どうしたわけか彼女はまたパリに舞い戻った。その理由は明らかでないが、浪費家で金もかかる上、すでに疑惑を持たれている女スパイをドイツ情報部がわざとフランス当局に売り渡したという説もある。とにかく、逮捕され、死刑の判決を受けたマタ・ハリは、この年の十月十五日、目かくしもせずに平然と銃殺された。

これらのスパイがいいにつけ悪しきにつけ一つのヒーローであるのに対し、第二次世界大戦以後は、スパイ戦の組織化が進み、特定のスパイがクローズアップされることが少なくなって来る。たとえば、ナチス・ドイツの史上空前のにせ札作戦にしても、アンソニー・ピリーの『ベルンハルト作戦』によればきわめて組織的である。

日本では余り知られていないようだが、第二次世界大戦で英国が展開した「切り刻み作戦」などもヒーローなきスパイ作戦としては下手なスパイ・スリラーよりよほど面白い。

一九四三年の初め連合軍は北アフリカ戦線で圧勝し、次の作戦として、シチリア島からイタリア本土に大攻撃をかけることを決定していた。それはだれでも予想できる地点なので連合軍側は、ドイツ最高司令部に他に目を向けさせることが必要だった。そこでイギリス海軍諜報部隊のイーウェン・モンテーギュ少佐による作戦が実行に移されることになった。つまり、死体を手に入れ、それを連合軍参謀本部の一員であるように装って、身につけた偽の機密文書で、連合軍がシチリア以外の地点から攻撃すると思わせるというものだ。

溺死者と思わせるため、肺炎で死んだ若い男の死体が調達され、偽手紙や海兵隊ウイリアム・マーチン少佐の身分証明書などをそえてすっかりもっともらしく整えられた〝存在しない男〟マーチン少佐は、潜水艦でスペインのウェルバ港の付近まで運ばれて、岸につくように海に捨てられた。この死体をドイツ情報機関が入手したことは、のちにドイツ側の暗号文書を解読した結果明らかになっているが、ドイツ側はこのため連合軍のシチリア進攻は陽動作戦と判断することになった。

こうして、七月七日の連合軍のシチリア進攻作戦は大成功に終わったのである。

さて、このほか、日本のゾルゲ事件などもあるが、最近伊藤律の帰国とからめて話題になっているので、省略することにして、戦後に限って見ても、ソ連の新型ミサイルなど五千件もの機密文書を英国情報部に流し、ブタペストで逮捕、処刑された、ソ連陸軍情報部ペンコフスキー大佐、あるいは、英国海外情報部MI6の中枢にいて二十数年間もソ連に情報を提供していたことが発覚、ソ連に亡命したダブル・スパイ、キム・フィルビィなど世界に衝撃を与えたスパイ事件は数知れないくらいある。とくに、キム・フィルビィは、例のロナルド・セスも『スパイ百科』の中で、その剛胆さを賞讃しているほどの大物スパイで、ル・カレの『ティンカー、テイラー、ソルジャー・スパイ』、グレアム・グリーンの『ヒューマン・ファクター』という二つの対照的なスパイ・スリラーのモデルになっているほどである。

しかし、これらのスパイは衝撃を与えた割りには、どうもまとも過ぎて面白味が乏しいのである。そして、こういう傾向は、スパイ衛星や盗聴技術の発達を背景に、ますます強まって来ているような気がしてならない。つまり、スパイから強烈な人間味が失われ、無味乾燥な卑小な存在に変わりつつあるということである。冒険に満ちたヒーローからわびしいピエロへとスパイの肖像も変わりつつあるのではないか。

最近のフリーマントルの『消されかけた男』やガーフィールドの『ホップスコッチ』、あるいはコルトレーンの『雲の死角』などの一連の新しいスパイ・スリラーにはそういう現実が明らかに反映している。そこにはスパイの窓際族といった人間や年中スパイ衛星の情報処理に追われている人間が出て来るのだ。D・コーエンが『スパイの科学』の中でいっているように、現代の写真偵察と電子諜報によるスパイ戦が直面しているのは、得た膨大な情報をどう処理するかにあるのである。どうやら、スパイにつきまとうロマンチックな夢と神話は終わりつつあるようである。

（評論家）

歴史への〃招待〃

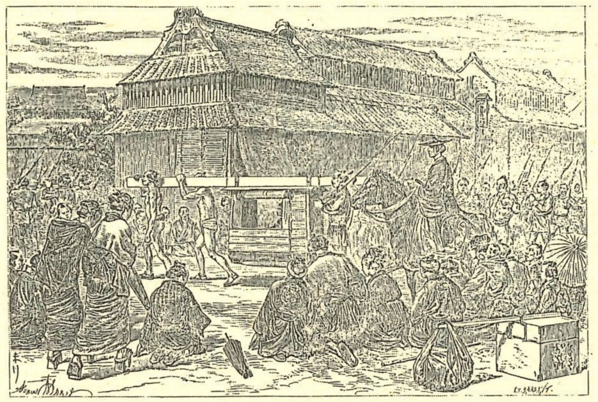
こんにちは。「歴史への招待」の放送・出版、毎回楽しく見たり読んだりしています。
ぼくは、昭和四十五年生まれで、その年放送された『日本史探訪』の本を祖父からもらい、読みました。なかなか難しかったです。
「歴史への招待」を初めて見たのは、「日吉丸出世街道を行く」で、ふとしたきっかけで見ました。これからもがんばって下さい。

（札幌市北区　高倉　純さん）

TVと本、両方で「歴史への招待」を楽しんでいます。
『日本史探訪』以来、もうほとんど話題は出尽くしたかと思われるのに、次々と興味をよぶものが出てきて、製作の方々の御苦労もさぞかしと思われます。これからも楽しい企画を見せて下さるよう願っております。
『歴史への招待』第十二集で、「血闘鍵屋の辻」の二二七ページ「人気血闘映画史」に、「静かなる血闘」が出ていますが、これは菊田一夫原作の現代劇で、医者の話です。また「雪の丞変化」は、「雪之丞変化」です。
ベストテン（キネマ旬報による）に入った決闘映画としては、「七人の侍」「切腹」「上意討ち」「竜馬暗殺」なども数えることができると思います。
愛読している『歴史への招待』だけに、一言述べさせていただきました。

（東京都町田市　南沢純三さん）

毎週楽しみに拝見いたしし、関係者のご努力に深甚なる敬意を表する次第です。
さて、「外人部隊戊辰をゆく」に「コラシュ」の名まえが出てきましたが、小生二十余年前パリ在住の折、入手した古雑誌に、コラシュの帰仏後の手記と共に絵が掲載されておりましたのでお送りいたします。



江戸に護送されるコラシュ（ル・ツール・デュ・モンドより　1874）

（東京都千代田区　柳井乃武夫さん）

この間、「龍馬暗殺」の出ている第二集を久し振りに読み返してみました。ぼくは坂本龍馬が大好きで、特に龍馬暗殺の謎には興味があります。
こういう歴史を彩る謎を扱った放送は、三十分がすぐに過ぎてしまいます。ぜひこれからも、〃歴史の謎〃を紹介・放送して下さい。
『歴史への招待』は、第十四集で二期も終わりですが、第三期はどうなるのでしょうか。

（静岡県熱海市　杉山正和さん）

○『歴史への招待』をご愛読頂き、ありがとうございます。お尋ねの第三期（五十五年度放送分）は、現在、発行準備作業を進めているところです。もう暫くお待ちいただきたいと存じます。　（編集部）

※投書のおねがい

『歴史への招待』発刊以来、続々とお手紙をいただき、担当者一同、深く感謝いたしております。これからもより多くのご投書をお待ち致します。ご投書の中より毎月数点を採用させて頂き、この欄を充実させて行きたいと考えております。そのために、一応の目安を左記し、皆様のご便宜をはかりたいと思います。

○通信文は、お葉書一枚に要領よくお書き下さい
○お手許にある日本の歴史に関する素材
○放送又は本書に対する感想やご意見等
採用の場合は、掲載誌を一部贈呈致します。

●表紙

幕末日本。迫り来る動乱を予期して各藩は争って銃を買い求める。そんな賑わいの横浜に現われた一人の男が手に入れたもの、それはのち、長岡城攻防戦でベールを脱ぐ新兵器・ガトリング砲であった。（表紙の砲は模型）

撮影　表　鈴木昭男
　　　裏　毛利寿夫
構成　　　荒田秀也

●資料提供・協力者

NHK
函館市立図書館
靖国神社宝物遺品館
所　荘吉
市立函館博物館五稜郭分館
江差町教育委員会
仙台市博物館
斎藤報恩会
都立中央図書館
本間美術館
国立国会図書館
致道博物館
会津武家屋敷
名和弓雄
外務省外交史料館
横浜市立図書館
小千谷市慈眼寺
長岡市立互尊文庫
長岡市郷土史料館
西福寺
栄涼寺
河井記念館
医王寺
矢澤大二
長楽寺
ワイド・ワールド・フォトス
松前町教育委員会
大隣寺
福井静夫
横浜市史編纂室
藤島一巳
馬川政紀
林　邦宏
神奈川県立博物館
鵜飼幸子
渡辺　弥
長崎県立図書館
清川八郎記念館
高橋邦太郎
石黒敬章
佐賀県立博物館
斎藤友三
藤堂高正
長谷川信夫
鶴ケ城天守閣
会津若松市役所観光課
演劇出版社
若駒プロ
鈴木　明
東大明治新聞雑誌文庫
今田信一
上野市観光協会
柚木俊一郎
梅沢ふみ子
雄松堂書店
平凡社
甲賀町立甲賀歴史民俗資料館
勝井景一
鍋島報效会
神宮文庫
松浦史料博物館
荘内南洲会
横浜外人墓地管理事務所
沖森直三郎
原敬記念館
宮坂考古館
柳井乃武夫
毛越寺
Hurst & Blackett, London
Nimatallah
Harlingue／Viollet

（順不同・敬称略）

●NHKスタッフ

北山章之助
佐久間　宏
原口卓也
菊地正浩
田中泉哉
松島直三
黒木隆男

●カメラ

首藤将夫
鈴木昭男
土田ヒロミ
村井吉直
毛利寿夫

●アート

荒田秀也
中島敏夫

●製作・進行

渡辺謙二

●編集

田口　汎
竹田俊明
エーピーエル企画
佐藤　實
山内直樹
高橋　純
犬塚せつ子（事務）
川口重雄　（事務）

歴史への招待　⑭

昭和五十六年四月一日　第一刷発行

編集・発行人　藤根井和夫
印刷・製本　凸版印刷株式会社
発行所　日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町四一－一
郵便番号一五〇　振替東京一－四九七〇一